

一九八四年

ジョージ・オーウェル



山形浩生 訳

Nineteen Eighty-Four

By George Orwell

一九八四年
Nineteen Eighty-Four

ジョージ・オーウェル*¹ 訳：山形浩生*^{2*3}

2024年1月27日

*¹ 著作権消失済

*² <https://cruel.org/hiyoril3@alum.mit.edu>

*³ ©2023 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 - 継承 4.0 国際

目次

| | |
|--------|-----|
| 第 I 部 | 1 |
| 第 1 章 | 3 |
| 第 2 章 | 13 |
| 第 3 章 | 19 |
| 第 4 章 | 25 |
| 第 5 章 | 31 |
| 第 6 章 | 41 |
| 第 7 章 | 45 |
| 第 8 章 | 53 |
| 第 II 部 | 67 |
| 第 1 章 | 69 |
| 第 2 章 | 77 |
| 第 3 章 | 83 |
| 第 4 章 | 89 |
| 第 5 章 | 97 |
| 第 6 章 | 103 |
| 第 7 章 | 105 |
| 第 8 章 | 111 |
| 第 9 章 | 119 |

| | |
|---------------|-----|
| 第 III 部 | 143 |
| 第 1 章 | 145 |
| 第 2 章 | 153 |
| 第 3 章 | 165 |
| 第 4 章 | 173 |
| 第 5 章 | 179 |
| 第 6 章 | 183 |
| 補遺 ニュースピークの原理 | 191 |
| 訳者あとがき | 199 |

第 I 部

第1章

四月の晴れた寒い日で、時計がどれも13時を打っていた。ウィンストン・スミスは、嫌な風を逃れようとしてあごを胸に埋めたまま、勝利マンションのガラス戸を急いですべりぬけたが、ほこりっぽいむじ風がいっしょに入ってくるのを防げるほどは素早くなかった。

廊下は茹でキャベツと古いぼろマットのようなにおいがした。片方のつきあたりに画鋏で張られたカラーポスターは、屋内用には大きすぎた。描かれているのは、幅一メートル以上ある巨大な顔だけ。四十五歳くらいの男の顔で、濃く黒い口ひげと、頑強そうでハンサムな顔立ちだ。ウィンストンは階段に向かった。エレベータを使おうとしても無駄だ。調子がいいときでも滅多に動かなかったし、今は昼間には電気が切られていた。憎悪週間に向けた準備のために経済キャンペーンの一環だ。アパートは七階にあったので、三十九歳で右のかかとの上に静脈瘤の潰瘍があるウィンストンは、ゆっくりと階段をのぼり、途中で何度か休憩した。エレベータシャフトの向かいにある踊り場ごとに、あの巨大な顔のポスターが壁から見つめていた。実に作り物めいていて、こちらが動くとその視線が追いかけてくるような気がする類の絵だ。「ビッグ・ブラザーは見ています」とポスター下の標語に書かれている。

アパートの中では甘ったるい声が、鑄鉄の生産がらみの一連の数字を読み上げていた。その声は、曇った鏡のような長方形の金属板から流れている。右手の壁面の一部となっている金属板だ。ウィンストンがスイッチをひねると、声は多少小さくなったが、まだことばは聞き取れた。その装置（テレスクリーンと呼ばれる）は暗くはできても、完全に切ることはできなかった。窓に近寄る。小柄で弱々しい姿、肉体の貧弱さは党の制服である青いオーバーオールでかえって強調されている。髪は薄い金色で、顔は生まれつき血色がよく、粗悪なせっけん^{ソープ}と切れ味の悪いカミソリと、終わったばかりの冬の寒さのために肌は荒れている。

外を見ると、閉じた窓越しでも世界は寒そうだった。眼下の通りでは、小さな風の渦がほこりや紙の切れ端をくるくると舞い上げ、日が照って空は濃い青だというのに、すべては色彩がなかった。ただそこらじゅうにべたべた貼られたポスターだけが例外だった。黒い口ひげ顔は、街角に面したあらゆる位置から見下ろしていた。真向かいの建物の正面にも貼られている。「ビッグ・ブラザーは見ています」と標語が書かれ、黒い目がウィンストンの目を深く見抜いている。通りの高さに貼られた別のポスターは隅が破け、風の中で気ぜわしくはためいて、それがたった一語「英社主義」^{イングリッシュ}を隠したり見せたりしている。はるか彼方ではヘリコプターが屋根の間を降下し、一瞬デンキクラゲのように漂ったかと思うと、曲線の軌跡を描いて飛び去っていった。警察のパトロールが人々の窓をのぞき込んでいるのだ。でもパトロールはどうでもよかった。重要なのは思考警察だけだった。

ウィンストンの背後では、テレスクリーンからの声が相変わらず鋳鉄や第九次三カ年計画の前倒し達成についてしゃべりまくっていた。テレスクリーンは受信と同時に送信を行う。ウィンストンのたてる音はすべて、小さなささやき声以上なら補足される。さらに金属板の視界にいる限り、音が聞かれるだけでなく姿も見られる。もちろん、いつの時点でも自分が見られているかどうかは知りようがなかった。思考警察がある個人の回路にどのくらいの頻度で、どういう規則でプラグを差し込むのかは憶測するしかなかった。全員を常時見張っていることだって考えられなくはない。だがいずれにしても、思考警察は好きなきにこちらの回路に接続できるのだった。自分のたてるすべての音が聞かれ、暗闇の中でない限りすべての動きが検分されているという想定のもとに生きるしかなかった——そして実際にそう生きるのだった、というのもその習慣はもはや本能の一部となったからだ。

ウィンストンはテレスクリーンに背を向けたままだった。そのほうが安全だからだ。とはいえ、背中も口ほどにものを言うことがあるのは、ウィンストンもよく知っていた。勤め先の真実省は一キロ先にあり、陰気な風景の上に巨大な白い姿でそびえている。これがロンドンなのだ、とウィンストンはばくぜんとした嫌悪とともに考えた。そのロンドンを首都とするエアストリップ・ワンは、オセアニアの最も人口の多い地方でもある。ロンドンが昔からこんな様子だったか、子供時代の記憶をしばらくさそうとしてみた。前からこんな、腐りかけた19世紀の家屋の眺めだったろうか、そしてその壁面が材木でつかい棒を張られ、窓は段ボールで継ぎがあてられ、屋根は波打ちトタンの継ぎ、そして荒れ果てた庭の塀があちこちに垂れ下がっていただろうか？　そして爆撃跡にはしっくい粉が宙に舞い、ヤナギランが瓦礫の上に生い茂っていただろうか。そして爆撃がもっと大きな穴を開けたところには、ニワトリ小屋じみた貧相な木造家屋が群生していただろうか？

だが無駄だった、思い出せなかった。子供時代については一連の明るく照らされたタブロー画が思い出せるだけで、それも背景はまったくなく、ほとんど細部は思い出せない。

真実省——ニュースピーク^{*1}では真省——は視界の中の他のどんな建物とも驚くほどちがっていた。ギラつく白いコンクリートの巨大なピラミッド構造であり、次々にテラスが後退する形で空中三百メートルにまでそびえている。ウィンストンの立ち位置からだ、その白い壁面に優美な文字できざまれている、党の三つのスローガンがかろうじて読み取れた：

戦争は平和
自由は隷属
無知は力

真実省の地上部分には三千室あると言われており、地下にはそれに対応した分岐構造があるはずだった。ロンドン中の他の部分には、似たような外見と大きさの建物があと三つだけあった。それらは完全に周囲の建物を威圧しきっていて、このヴィクトリーマンションの屋上からだとその四つを同時に見ることができた。それは政府機構すべてを分割している四つの省の建物だった。真実省、これはニュース、娯楽、教育、芸術を担当する。平和省は戦争を担当している。愛情省は法と秩序を維持した。そして豊富省は経済関連を担当していた。これらをニュースピークで言うと、真省、平省、愛省、豊省だ。

^{*1} ニュースピークはオセアニアの公式言語である。その構造と語源については補遺を参照。

本当におっかないのは愛情省だった。窓は一切ない。ウィンストンは愛情省に入ったことがないどころか、半径五百メートル以内に近づいたこともなかった。公用以外では絶対に中に入れない建物で、その場合でも鉄条網のからんだ柵や鉄のドアや隠れた機関銃の銃座の迷路を通過しなくてはならなかった。その外壁に向かう通りですら、ジョイント式棍棒で武装した黒い制服姿のゴリラ顔の警備員だらけだった。

ウィンストンはいきなり振り向いた。顔は、テレスクリーンに面するときに望ましいとされる、静かな楽観の表情に設定しておいた。部屋を横切って小さな台所に入る。こんな時間に退省したことで、食堂での昼食を逃してしまい、そして台所には明日の朝食用に残しておくべき黒パンのかたまり以外には食べ物が無いのも知っていた。柵から透明な液体のボトルを取った。無地の白いラベルに「勝利ジン」と書かれている。中国の米の酒めいた、胸の悪くなる油っぽいにおいを放っている。ウィンストンはほとんどティーカップ一杯分それを注ぐと、ショックに備えて心の準備を整えて、薬のように一気に飲み干した。

一瞬で顔が紅潮し、目からは水気がほとぼした。ブツは硫酸まがいで、さらにそれを飲み干すのは後頭部をゴムの棍棒でぶん殴られたような感じをもたらした。でも次の瞬間、腹の中の炎上はおさまって、世界はもっと楽しげに見えてきた。「勝利タバコ」と書かれたくしゃくしゃの箱からタバコを取り出して、注意散漫なままそれを縦に持つと、タバコが床に落ちてしまった。次の一本ではもっとうまかった。居間に戻ると、テレスクリーンの左に置かれた小さなテーブルにすわった。テーブルの引き出しからはペン立てとインキ、そして分厚い四つ折り版の白紙の本を取り出した。背は赤くて、表紙は大理石模様だ。

どういうわけか、居間のテレスクリーンは変わった位置にあった。通常なら部屋の奥の壁に取り付けられて部屋全体を見渡せるようになっていたのに、ここでは窓の向かいの長い壁に取り付けられていた。その片側には浅いアルコーブがあって、いまウィンストンがすわっているのもそこだ。たぶんこのアパートが建てられたときには、本棚を作る場所だったのだろう。アルコーブにすわってずっと奥に身を寄せると、テレスクリーンの視界から逃れることができた。もちろん音は聞かれるが、いまの位置にいる限り、見られることはない。これからやろうとしていることを思いつかせたのは、一部にはこの部屋の変った形なのだった。

でも、いま引き出しから取り出した本もまたそれをうながしたのだった。それは異様に美しい本だった。なめらかでクリーム入りの紙は、少し古びて黄ばんでいたが、過去少なくとも四〇年間は作られていないような紙だった。でも、その本は四〇年よりずっと古いことが推測できた。街のスラムじみた一角（どの一角だったかはいまや思い出せなかった）にあった、薄汚い小さな古物屋のウィンドウに転がっていて、すぐさまそれを所有したいという圧倒的な欲望にとらわれてしまったのだった。党员たちは通常の店に入っただけとはいけなかった（「自由市場での取引」と言われていた）、この規則はあまり厳守されていなかった。靴のひもやカミソリなど、それ以外の方法では手に入らないものがいろいろあったからだ。通りを急いできょろきょろと見渡すと、店にすべりこんで本を二ドル五〇で買った。その時点では、何か特に用途があっただけではなかった。後ろめたい思いでそれをブリーフケースに入れて持ち帰った。なにも書かれていなくても、それは危険な所有物だった。

これからやろうとしていたのは、日記を始めることだ。これは違法ではなかった（違法なことなどなかった。というのも法律がもうなかったからだ）が、もし見つければ、罰と

して死刑になるか、二十五年の強制労働キャンプに送られるのはほぼ確実だった。ウィンストンはペン先を軸につけると、なめて油気を取った。ペンは古めかしい道具であり、もはや署名にすらほとんど使われず、ウィンストンがそれをこっそりとかなり苦勞して入手したのは、この美しいクリーム色の紙がインク鉛筆で殴り書かれるよりも、本物のペン先で書かれるべきものだという気がしたからというだけのこと。実は、手書きにはあまり慣れていなかった。短いメモを除けば、話筆ですべて口述するのが通例だったからだが、これはもちろん目下の目的のためには不可能だった。ペンをインキにつけて、一瞬ためらった。下腹部に震えが走る。紙にしるしをつけるのは、決定的な行動となる。小さいへたくそな字で、かれはこう書いた：

1984年4月4日

そして身を引いた。まったくの心細さにとらわれてしまったのだ。そもそも、いまが本当に1984年だということさえ、まるで確実にはわかっていなかったのだ。たぶんそのくらいの年代のはずだ。自分が三十九歳なのはかなり自信があったし、自分が1944年か1945年に生まれたと思っていたからだ。でも最近では、一年か二年の範囲内ではどんな日も特定できないのだった。

急に思いついた疑問として、自分はいったい誰のためにこの日記を書いているのだろうか？ 未来のために、未だ生まれぬ者たちのために。心はしばらく、ページ上のあやしいげな日付のまわりをさまよひ、それからニュースピーク用語「^{ダブルシンク}二重思考」にどしんとぶちあたった。初めて、自分のやったことがどれほどのものが腑に落ちた。未来とどうやって対話できるというのか。それは本質的に不可能なことだ。未来は現在と同じかちがうかで、同じなら自分の書くことに耳を貸したりはしないだろうし、もしちがっていれば、自分の窮地などは無意味になる。

しばらくかれは、呆けたように紙を見つめたまますわっていた。テレスクリーンは勇ましい軍楽に変わっていた。自分自身を表現する力を失ったというだけでなく、自分がもともと何を言おうとしていたのかも忘れたというのは不思議なことだった。過去何週間も、この瞬間のために準備を整えてきたし、勇氣以外の何かが必要になるとは思いもしなかった。実際に書くのは簡単だろうと思っていた。文字通り何年にもわたり、頭の中を駆けめぐり続けていた止まらない落ち着かない独白を、紙に写せばいいだけのことだ。でもこの瞬間、その独白すら干上がってしまった。さらに静脈瘤の潰瘍が我慢できないほどかゆくなった。絶対にかいたりしないようにはしていた。かけば必ず炎症を起こすからだ。カチカチと秒が過ぎていく。目にはいるのは、目の前のページの白さと、足首の上の皮膚のかゆみ、けたたましく鳴り響く音楽、そしてジーンが引き起こした軽い酔いだけ。

突然、パニックにとらわれたように書き出したが、自分が何を書いているのか半分くらいしか認識していない状態だった。小さいが子供じみた手書き文字はページを上下に波打ち、最初は太文字をすつとぼし、さらには読点すらなくなっていった。

1984年4月4日。昨夜は映画へ。全部戦争映画。すごくよかったのが難民だらけの船が地中海のどこかで爆撃されてるやつ。でかい巨大なでぶ男が泳いで逃げようとしているのをヘリコプターが追いかけるショットで観客は大受け、最初はイルカみたいに水の中をよたよた泳いでたのが、次にヘリコプターの銃の照準ごしになって、それから穴だらけになってまわりの海がピンク色になって穴から水が入った見

たいにいきなり沈んで、観客は沈んだときに大笑いして叫び、それから子供でいっぱい救命ボートの上空にヘリコプターが滞空してるのが見えて、触先では中年女がユダヤ女だったかもしれないけど身を起こしてすわって腕には三歳くらいの男の子と抱いて、男の子は怖がって泣き叫び女の胸の間に頭を隠してまるで女にそのまま穴をほってもぐろうとしているかのようで女はその子に腕をまわしてなぐさめながらも自分だって恐怖で真っ青で、ずっと子供をできるだけかばって腕が銃弾を防げるとでも思っているみたいで、そこでヘリコプターがそいつらに二〇キロ爆弾をくらわしてすごいせん光でボートはマッチ棒くらいこなごなになって、子供の腕がぐんぐんと空にとばされるすばらしいショットがあって鼻面にカメラをつけたヘリコプターが後を追ったようで党のシートからは大喝采だったがプロレ席の女がいきなりなんくせつけはじめてこんな子供たちの前で見せんなんてよくねえの子どもたちの前ってなダメだのとわめきだしたんだけど警察がきて外に追い出してあの女には何もおきなかっただろうなプロレの言うことなんてだれもきにしないまったくプロレらしいものいいあのれんちゅうときたらけっして――

ウィンストンは書くのをやめたが、それは一部はこむらがえりが起きたせいだった。なぜ自分がこんなクズの羅列を吐き出したのかはわからなかった。でも不思議なことに、これを書いているうちにまったくちがう記憶が心のなかではっきりしてきたので、ほとんどそれを書き留めているような気になったことだった。今日帰宅して日記をはじめようといきなり決心したのも、このもう一つのできごとのせいだったということに思い当たった。

それはその朝に省で起きたことだった。こんなあいまいなことが起きたと言えるのであればの話だが。

ほぼ 1100 時で、ウィンストンの働く記録部では作業仕切りの中から椅子を引っ張り出して、通路の真ん中の大きなテレ画面の向かいに集合し、二分憎悪の準備をしているところだった。ウィンストンはちょうど中央の列にすわろうとしていたが、そのときこれまで見覚えはあっても口をきいたことはなかった人物二人が、不意に部屋に入ってきた。一人は廊下でよくすれちがう女子だ、名前は知らなかったが、創作部で働いているのは知っていた。おそらく――ときどき油だらけの手をしてスパナを持っていたから――小説執筆装置のどれかで機械関係の仕事をしているのだろう。くっきりした印象の女子で、二十七歳くらい、濃い黒髪をしていてそばかす顔、すばやく活発な動きをしている。青年反セックス連盟の紋章である細い深紅の腰帯をオーバーオールウェストに何度か巻いており、そのきつさはヒップの形のよさがちょうど出るくらいだった。ウィンストンは一目見て彼女が嫌いになった。理由はわかっていた。彼女が漂わせているホッケー場や水風呂やコミュニティハイキングや全般的なおきれいさ加減の雰囲気のためだ。女はほとんどみんな嫌いだったし、若くてきれいな女は特に嫌いだった。党の最も頑迷な支持者、スローガンの鵜呑み屋、非正統行動の素人スパイや嗅ぎ出し屋を勤めるのはいつだって女、特に若い女だった。でもこの女は他のみんなよりもっと危険だという印象を与えた。一度、廊下ですれちがったときに、彼女は脇目でちらりとこちらを見たが、それはかれを突き刺すようで、一瞬真っ黒な恐怖でいっぱいになってしまったほどだ。彼女が思考警察の手先かもしれないとさえ思ったこともあった。確かにそれはきわめてあり得ないことだった。でも、彼女が近くにいるときには、敵意と恐怖が混ざり合ったような、奇妙な居心地の悪さを感じ続けていたのだった。

もう一人はオブライエンという名前の男で、党中央の一員で、きわめて重要かつ上層の地位にあるために、ウィンストンはそれがどんなものか漠然としか理解していなかった。党中央の一員の黒いオーバーオールが近づいてくるのを見て、椅子のまわりの人々は一瞬だまりこんだ。オブライエンは大柄でがっしりした男で、首は太く、顔は荒々しくユーモラスで険しかった。立派な外見とは裏腹に、その振る舞いにはちょっとした魅力があった。鼻のメガネをずらすという小技が、不思議なくらい警戒をとく——いわく言い難いかたちで、不思議に洗練されているのだ。それは、未だにこういう発想をする人がいるなら、18世紀の貴族が嗅ぎタバコの箱を差し出す様子を思わせるものとも言えるかもしれない。ウィンストンはこの十二年ほどで、オブライエンを十二回くらい見たのだろうか。深く惹かれていたが、それは単にオブライエンの都会的な身のこなしとボクサー的な体つきとのコントラストに魅了されたからというだけではない。それよりずっと大きいのは、オブライエンの政治的な正当性が完全ではないという秘密の信念——いや信念ですらなく、ただの希望——のためだった。オブライエンの顔の何かが、どうしようもなくそれを示唆していた。そして一方で、かれの顔に書かれているのは非正統性ですらなく、単なる知性なのかもしれない。でもいずれにしても、オブライエンは何とかテレスクリーンを出し抜いて二人きりになれば、話ができそうな相手に見えたのだった。ウィンストンはこの憶測を確認しようという努力は一切したことがなかった。いや、それをする方法がなかったのだ。この瞬間、オブライエンは腕時計を見て、ほとんど1100時なのを見ると、二分憎悪が終わるまで記録部にいようと明らかに決めたようだ。ウィンストンと同じ列の、数個離れた椅子にすわった。二人の間には、ウィンストンのとなりの区画で働く小柄で砂色の髪をした女がすわった。黒髪の女はすぐ後ろにすわっている。

次の瞬間、部屋の奥にある大テレスクリーンから、醜悪でひっかくようなきしり音が、まるでオイル無しで巨大な機械が動いているかのように飛び出してきた。人々の歯をくいしばらせて、首の後ろの毛を逆立てるような音だった。憎悪がはじまったのだ。

いつもながら、人民の敵エマニュエル・ゴールドスタインの顔が画面に映し出された。観客のあちこちからシッシッとヤジがきこえた。小さな砂色の髪の女は、恐怖と嫌悪のいりまじった悲鳴をあげた。ゴールドスタインは、裏切り者の反動主義者で、かつてはるか昔に（どのくらい昔かは、だれもまともに覚えてはいなかった）党の主要人物の一人ではほとんどビッグ・ブラザー自身と肩を並べるくらいだったのに、反革命活動に手を染めて、死刑を宣告されたが、謎の脱出をとげて姿を消したのだった。二分憎悪の番組は毎日ちがったが、ゴールドスタインが主要登場人物でないものは一つもなかった。ゴールドスタインは第一の裏切り者であり、党の純粋性を最もはやく汚した人物だった。それ以降の党に対する犯罪、すべての裏切り、妨害行為、邪説、逸脱行為は直接的にゴールドスタインの教えから生じたものだった。かれはどこかしらでまだ生きており、陰謀を生み出している。たぶんどこか海の向こうで、外国の出資者に保護をされているのか、あるいは——ときに噂されるように——このオセアニア自身のどこかにある隠れ家だ。

ウィンストンは胸がしめつけられた。ゴールドスタインの顔を見るたびに、どうしても痛々しい感情が入り交じってしまう。その顔はやせたユダヤ人顔で、大量のもじゃもじゃした白髪をさかだたせ、小さな山羊ヒゲをはやしている——賢そうな顔だが、なぜか本質的に嫌悪をもよおさせ、メガネが端にのっかっている長細い鼻には年寄りじみたまぬけさがあった。ヒツジの顔に似ていて、声もヒツジめいたところがあった。ゴールドスタインはいつもながら党の政策に対して悪意に満ちた攻撃を加えているところだった——あまり

に大げさな攻撃なので、子供でも見抜けるほどのものだが、でも多少はもってもらしいので、自分ほど冷静でない他の連中ならこれを真に受けるのではないかという警戒感で胸がいっぱいになる。かれはビッグ・ブラザーを罵倒し、党の独裁を糾弾し、ユーラシアとの即時平和締結を要求し、言論の自由や報道の自由、集会の自由、思想の自由を支持し、革命は裏切られたとヒステリックに叫んでいた――そしてこのすべては、党の弁舌家たちの一般的なスタイルをある意味でパロディ仕立てにした、早口で長い単語を多用する演説形式で行われており、ニュースピーク用語さえ使われていた。それもどんな黨員だろうと現実生活では普通使わないと思われるほど大量に使っていたのだ。そしてその間ずっと、ゴールドスタインのまことしやかなご託が隠蔽しようとしている現実を疑う者がないように、テレスクリーン上のゴールドスタインの頭の後ろには、無数のユーラシア軍の行列が行進していた――何列も何列も、無表情なアジア敵顔立ちのがっしりした男たちが次々に、画面に浮かび上がっては消え、まったく同じような別の者にとってかわられる。兵たちの軍靴による鈍いリズムカルな足音が、ゴールドスタインのメエメエとした声の背景となっていた。

憎悪が三十秒も続かないうちに、部屋の半数の人々からは抑えようのない激怒の叫びが起こっていた。スクリーン上の自足しきったヒツジのような顔と、その背後のユーラシア軍のおそろべき勢力は、あまりに耐え難かった。それに、ゴールドスタインの姿やかれについての考えだけでも、自動的に恐怖と怒りを引き起こす。ゴールドスタインは、ユーラシアやイースタシアにもまして一貫した憎悪の対象となっていた。これらの二国であれば、片方と戦争状態のときにはもう片方とは平和を保っているのがふつうだったからだ。でも奇妙なことに、ゴールドスタインはだれからも憎まれ、軽蔑されているのに、そして毎日、それも日に何千回も、演台やテレスクリーン、新聞、本でかれの理論は反駁され、たたきつぶされ、バカにされ、惨めなゴミクズとして万人の目にさらされているのに――これだけのことがあるにもかかわらず、その影響力は決して弱まらないようだった。いつもかれに誘惑されるのを待っている新しいまぬけがいる。毎日のように、かれの命令で活動しているスパイや妨害工作員が思考警察に暴かれていた。かれは広大な陰のような軍隊、国家を転覆させることだけに専念する陰謀家たちの地下ネットワークの司令官なのだ。その名は友愛団だといわれていた。またささやかれる話としては、ゴールドスタインが書いた、あらゆる邪説を集めた恐るべき本があって、それがあちこちで密かに流通しているのだとか。題名のない本だった。人々は、それに万が一が一言及することがあっても、単に「あの本」と呼んでいた。でもそういう話は漠然とした噂でしか伝わってこなかった。友愛団もあの本も、口にのぼらせずにすませられるなら、通常の黨員はだれでも口にしないようにしていた。

二分目に入ると憎悪は狂乱状態に高まった。人々は席でぴょんぴょん飛びはね、スクリーンからくるメエメエとした気の狂いそうな声をかき消そうと思いつき絶叫していた。砂色の髪をした女は明るいピンク色になって、口は陸に上がった魚のようにばくばくしている。オブライエンの重たい顔ですら紅潮していた。椅子にまっすぐすわり、強そうな胸は襲い来る波に立ち向かっているかのように、ふくれては震えていた。ウィンストンのすぐ後ろの黒髪女は「ブタ！　ブタ！　ブタ！」と叫びだして、いきなり重たいニュースピーク辞典を手にとると、スクリーンに投げつけた。それはゴールドスタインの鼻に当たってはねかえった。声は止めようもなく続いていた。一瞬頭がはっきりすると、ウィンストンは自分自身もほかのみんなといっしょに怒鳴り、椅子の横木を激しくかかどでけと

ばしているのに気がついた。二分憎悪のひどいところは、参加が義務づけられているということではなく、つい参加せずにはいられなくなってしまうということだった。ものの三十秒で、どんな気取りも必ずまるで不要になる。恐怖と復讐心の醜悪なエクスタシー、殺意、拷問欲、大ハンマーで顔をたたきつぶしたい欲望が、集団の人々すべての間を電流のように走り抜けるようで、それが人を己自身の意志にすらそむかせて、顔をゆがめた叫ぶキチガイにしてしまう。それでありながら、そこで感じられる怒りは抽象的で方向性のない感情であり、溶接トーチの炎のように、ある対象から別の対象へと切り替えられる。だからある瞬間にはウィンストンの憎悪はまったくゴールドスタインに向かわず、正反対のビッグ・ブラザーと党と思考警察に向いていた。そしてそうした瞬間には、かれの心はスクリーンに映りバカにされている孤独な邪説者、ウソまみれの世界における、たった一人の真実と正気の守護者のほうに向かうのだった。でもその次の瞬間には、まわりの人々と一つになって、ゴールドスタインについて言われていることはすべて本当に思える。そういう瞬間には、ビッグ・ブラザーに対する密かな嫌悪は崇拜にかわり、ビッグ・ブラザーは無敵の恐れをしらぬ守護者としてそびえあがるようで、それがアジアの群衆や、孤立や無力さやその存在自体をめぐる疑念にもかかわらず、なにやら悪意ある詐術師として声の力だけで文明の構造を破壊できるゴールドスタインに対して岩のように立ちはだかる。

ときには、自分の憎悪を自発的にこちらやあちらの対象へと切り替えることさえできた。いきなり、悪夢の途中で頭を枕からもぎはなすときのような荒々しい努力によって、ウィンストンは自分の憎悪をスクリーンの顔から背後の黒髪女子に転移させるのに成功した。鮮明で美しい幻覚が頭の中を走る。ゴム警棒で殴り殺してやる。裸にして杭にしぼりつけて、聖セバスチアンのように無数の矢を打ち込んでやる。陵辱して絶頂の瞬間にのどをかき切ってやる。それ以上に、前よりよかったのは、自分がなぜ彼女を憎んでいるのかに気がついたことだった。嫌いなのは、彼女が若くてきれいでセックス拒否だったからだ。彼女とベッドにいきたいのに決してそれはかなわない。なぜならその甘いしなやかな腰は、こちらに腕をまわしてくれと頼んでいるようでありながら、そこにあるのは唯一、あの不愉快な深紅のサッシュ、貞操の強烈なシンボルだけなのだ。

憎悪はクライマックスを迎えた。ゴールドスタインの声は本物のヒツジの鳴き声となり、その顔も一瞬だけ本当にヒツジになった。それからヒツジの顔がとけてユーラシア兵の姿となり、前進しつつあるようで巨大でおそろしげで、軽機関銃をとどろかせ、スクリーンから飛びだしてくるように見えたので、最前列の何人かは椅子の中で本当に身をすくめていた。でもその瞬間、みんながほっとして深い溜息をついたのは、その敵意に満ちた姿がとけて、ビッグ・ブラザーの顔になったからだ。黒髪、黒い口ひげ、力に満ちて謎めいた平穏さを見せ、あまりに大きくてほとんどスクリーンいっぱいになっている。だれもビッグ・ブラザーが何を言っているのか聞いていなかった。単に勇気づけの数語、先頭のとどろきの中で発せられ、個別に意味はないが、単にそれが言われたというだけで落ち着きを取り戻させてくれるようなことばだ。そしてビッグ・ブラザーの顔はまたとけ去り、かわりに党の三つのスローガンが、太字で

戦争は平和

自由は隷属

無知は力

だがビッグ・ブラザーの顔はスクリーン上に何秒か残っているかのようで、まるでそれ

がみんなの目玉に与えたインパクトは、すぐに消え去るには鮮明すぎたともいうようだった。小さな砂色の髪の子は、前の椅子の背にしがみついた。「我が救世主よ！」とおぼしき震えるようなつぶやきとともに、彼女はスクリーンのほうに腕をのぼした。それから顔を手にうずめた。お祈りを唱えているのは明らかだ。

この瞬間、そこにいる集団の全員が、深くゆっくりしたリズムカルな「B-B!……B-B!……B-B!」という詠唱を始めた——何度も何度も、非常にゆっくり、最初のBと二番目のBの間に長い間をおいて——思いつぶやくような音だが、なぜか不思議と野蛮で、その背後にははだしの足踏みやトムトムの鼓動が聞こえるような感じがする。それをおそらくは三十秒ほども続けただろう。それは圧倒的な感情の瞬間にしばしば聞かれる繰り返された。部分的には、ビッグ・ブラザーの叡智と威厳に対する賛歌のようなものだが、それ以上に自己催眠行動であり、リズムカルな騒音で意識を意図的におぼれさせようとするものだ。ウィンストンは内臓が冷え込むように感じた。二分憎悪ではどうしても全般的な興奮状態は共有してしまうが、この人間以下の「B-B!……B-B!」の詠唱にはいつも恐怖でいっぱいさせられる。もちろん、ほかのみんなにあわせて詠唱はした。他にどうしようもなかった。感情を解体し、表情をコントロールし、他のみんなにあわせるのは、本能的な反応だった。でも、目にあらわれた表情が、ひょっとしてそのコントロールを裏切ったかもしれない期間がもの数秒ほどあった。そしてまさにその瞬間に、その重大なことが起きたのだ——もし本当にそれが起きたのだとすればの話だが。

一瞬、かれはオブライエンの視線をとらえた。オブライエンは立ち上がっていた。メガネをはずしており、あの特有の仕草でそれを鼻にのせなおすところだった。でも二人の目がほんの一瞬だけ出会い、そしてそれが起こっている間、ウィンストンにはオブライエンも自分と同じことを考えているとわかった——そう、確信できた！ まちがいないメッセージがかわされた。二人の心が開いてお互いの思考が目を通じて流れ込んでいるようだった。オブライエンはこう言っているようだった：「私は君の味方だ。君がずばり何を感じているか知っている。その軽蔑、その憎悪、その嫌悪もすべてわかる。でも心配するな。私は君の味方だ！」そこで情報の一閃は消え、オブライエンの顔は他のみんなと同じくとらえどころがなくなった。

それだけのことであり、それが実際に起こったのかもはや確信がなくなっていた。こうした出来事には決して続編がない。それは単に、自分以外にもだれかは党の敵なのだという信念、または希望を維持し続けるだけのものだった。巨大な地下の陰謀組織の噂は、実は本当なのかもしれない——友愛団は実在するのかもしれない！ 果てしない逮捕や告白や処刑にもかかわらず、友愛団が単なる神話ではないと断言するのは不可能だった。それを信じる日もあれば信じられない日もあった。証拠はなく、どうとでも解釈できる、あるいは何の意味も持たないような、かすかなほのめかしがあるだけだ。ちょっと耳に入った会話の断片、便所の壁のかすかな落書き——あるときは、見知らぬ人物二人が出会ったときに、ちょっとした手の動きがまるでお互いを認め合ったかのような印に思えたこともあった。どれも憶測でしかない。すべて自分の妄想だという公算も強い。二度とオブライエンのほうを見ないままウィンストンは自分の区画に戻った。その一瞬の接触をさらに進めようという発想はほとんど思いもよらなかった。どう進めればいいのか知っていたとしても、考えられないほど危険な行為だ。一秒、二秒ほど、二人はあいまいな視線をかわし、それっきりだ。でもそれだけでも、ここで強いられた閉塞した孤独の中では特筆すべきできごとなのだった。

ウィンストンは気を取り直すと身を起こしてすわりなおした。そしてゲップをした。ジンが腹からのぼってきている。

ページに視線の焦点をあわせた。よるべなく回想するうちに、自動書記のように筆記もしていたのがわかった。そしてそれは、前のようなぐしゃぐしゃのへたくそな手書きではなかった。ペンは自在になめらかな紙の上をすべり、大きくきれいな大文字でこう書いていた。

打倒ビッグ・ブラザー

打倒ビッグ・ブラザー

打倒ビッグ・ブラザー

これが何度も何度も繰り返され、ページ半分を埋め尽くしていた。

軽いパニックを抑えられなかった。バカげた話だ。こんなことばを書いたからといって、そもそもこの日記帳を開いたという最初の行動より危険というわけではなかったのだから。でも一瞬、この汚れたページを破り捨てて日記自体をやめてしまおうという誘惑にかられた。

でもそうはしなかった。無駄だというのを知っていたからだ。打倒ビッグ・ブラザーと書こうと書くのをやめようと、何のちがいもない。日記を続けようと続けまいと何のちがいもない。どのみち思考警察につかまる。自分はほかのすべての犯罪を包含する、基本的な犯罪を犯したのだ——そして紙にペンを走らせずとも、やはり犯していただろう。それは思考犯罪と呼ばれる。思考犯罪は永遠に隠しおおせられるものではない。しばらくはうまくかわせるだろうし、それを何年も続けることだってできるが、いずれは連中につかまる。

それはいつも夜のことであった——逮捕は必ず夜に起こる。いきなり眠りから引きずりだされ、荒っぽい手が肩をつかんで揺すり、電灯が目に照らされ、怖い顔がベッドを取り巻いている。大半の場合、裁判もなければ逮捕の報道もない。人々は夜のうちに、あっさり消える。名前は住民登録から消され、これまで行ったことのあらゆる記録も消され、その人の一回限りの存在が否定されて、そしてわすれられる。破壊され、消し去られる。蒸発、というのが通常の表現だ。

一瞬、かれはヒステリーのようなものに捕らわれた。慌てた乱雑な殴り書きを始めた。

射殺されるかまわない首の後ろを撃たれるかまわない打倒ビッグ・ブラザーいつも
首の後ろを撃つかまわない打倒ビッグ・ブラザー——

椅子の背にからだを預けて、ちょっと自分を恥ずかしく思い、ペンを置いた。次の瞬間、かれは飛び上がった。ドアにノックがしたのだ。

もう来たのか！　かれはネズミのようにじっとして、ノックの主がだれであれ、一回であきらめて帰ってくれないかという無駄な希望を抱いていた。だがそうはいかない。ノックは繰り返された。これ以上グズグズするのは最悪だ。心臓は太鼓のように高鳴っていたが、顔は、長い習慣のために、たぶん無表情だっただろう。立ち上がると、足取り重くドアに向かった。

第2章

ドアノブに手をかけたとき、日記がテーブルで開いたままになっているのが目に入った。一面に「打倒ビッグ・ブラザー」と書かれており、その時はほとんど部屋の向こうから読めそうなくらい大きい。考えられないくらいバカな行為だった。でも、これほどのパニックの中でも、インクが乾かないうちに本を閉じてクリーム状の紙にしみを作りたくなかったのだ、とウィンストンは悟った。

息を吸い込むとドアを開けた。すぐに全身を暖かい安堵の波が走り抜ける。外に立っているのは生氣のない、粉碎されたような様子の女で、髪はまばら、顔はしわだらけだった。

「ああ同志」と彼女は陰気で泣き言めいた声で口を開いた。「帰ってらしたのが聞こえたと思ったもので。ちょっときて、うちの台所の流しを見て頂けませんか。詰まっています——」

同じ階のご近所の奥さん、パーソンズ夫人だった（「夫人」は党があまりいい顔をしない用語だった——だれでも「同志」と呼ぶことになっていた——が、一部の女性に対しては本能的にこの用語が使われてしまうのだった）。三〇歳くらいだが、ずっと歳を取って見えた。顔のしわにはほこりが詰まって異様な印象を受ける。ウィンストンは彼女について廊下を下った。こうした素人修理作業はほとんど毎日のように起こる悩みの種だった。勝利マンションは古いアパートで、竣工は一九三〇年かそこらだから崩壊寸前だった。壁や天井のしっくいはずれがれ落ち、配管は霜が厚くなればすぐに破裂し、雪がふれば雨漏りし、暖房も経済性のために完全に止められていなくても、スチーム半量でしか動かない。自分ではできない修理はどこか遠くの委員会に委ねられており、かれらは窓ガラスの修理ですら二年も待たせるのだった。

「もちろんトムが家にいればこんなお願いはしないんですけど」とパーソンズ夫人は上の空で言った。

パーソンズ一家のアパートはウィンストンのものより大きかったが、ちがった形でみずばらしかった。すべてがいためつけられたような、踏みつけられたような、まるで何か凶暴な巨獣がついさき訪れたかのような様子をしていた。邪魔なスポーツ用品——ホッケースティック、ボクシングのグローブ、破れたサッカーボール、裏返しの汗だらけのトランク——が床中に散らばり、テーブルの上には汚れた皿とページの端を折った練習問題帳が散在していた。壁には若人連盟とスパイ団の赤い旗と、ビッグ・ブラザーの大型ポスターがあった。このビル全体でどこでもありがちな茹でキャベツのにおいがしたが、その間からもっと鋭い汗の悪臭がして、それは——嗅ぎでわかるのだが、なぜわかるかはわからない——いまここにいない人物の汗なのだった。別の部屋では、くしとトイレトペーパー製の即席楽器を持っただれかが、テレスクリーンからまだ流れ続ける軍楽にあわせて演奏しようとしていた。

「子どもたちですよ」とパーソンズ夫人はドアに向かって半分上の空の視線を投げた。「今日はずっと家におりましてね。だからもちろん――」

彼女はいつもこのように文を途中で止めてしまうのだった。

流しはほとんどふちいっぱいまで、汚らしい緑がかった水がたまっていて、それがすすまじいキャベツ臭を放っている。ウィンストンはひざをついて、配管の曲げ部分を調べた。手を使うのは大嫌いだったし、身をかがめるのもいやだった。かがむといつも咳がはじまってしまうのだ。パーソンズ夫人はなすすべもなく見守っていた。

「もちろんトムが家にいたら、すぐに直してくれるんですが。あの人、その手のことは大好きですから。手作業は本当に上手でしてね、トムは」

パーソンズは真実省でのウィンストンの同僚だった。小太りで、活発だがあぜんとするほどバカで、まぬけな熱意でいっぱい――何一つまったく疑問に思わない、献身的なドタ作業要員で、党の安定は思考警察よりもずっとこうした人々のおかげなのだ。三十五歳でちょうどいやいやながら青年連盟から追い出されたところで、そして青年連盟へと卒業する以前は、スパイ団に規定年齢を一年超えて在籍し続けていた。省では、知性を必要としない下働き職に雇われていたが、スポーツ委員会やその他コミュニティ旅行や自発でも、節約キャンペーンやボランティア活動全般では大活躍だった。パイプを吹かすあいまに、静かな誇りをもって、自分が過去四年にわたり毎晩コミュニティセンターに顔を出したのだと話してくれたものだ。どこへ行くにも、圧倒的な汗臭さ――それはかれの人生の奮闘ぶりを無意識に証言しているともいえる――がついてまわり、立ち去ったあともそれがしばらく残っているような人物だった。

「スパナはありますか」とウィンストンは、曲げ配管のねじと格闘しながら言った。

「スパナですか」とパーソンズ夫人はすぐさまうろたえはじめた。「いや、ちょっとわかりかねます。子どもたちなら――」

ブーツの足音とくし笛の一吹きとともに、子どもたちが居間に突進してきた。パーソンズ夫人はスパナを持ってきた。ウィンストンは水を抜いて、パイプをつまらせていた髪の毛のかたまりを嫌悪と共に取り除いた。蛇口からの冷水でできる限り指をきれいにすると、部屋を移った。

「手を挙げろ！」と粗野な声が叫んだ。

見栄えのいい、頑丈そうな九歳の少年がテーブルの向こうから顔を出し、おもちゃの自動拳銃でこちらを脅かしている。その妹は二歳ほど年下だが、木のかけらで同じ動作をしている。どちらも青のショート灰色のシャツと赤いネッカチーフをしている。スパイ団の制服だ。ウィンストンは両手を頭上にあげたが、穏やかならぬ気分がした。少年の態度があまりに凶悪で、それがただのお遊びには思えなかったからだ。

少年は叫んだ。「この裏切り者め！ 思考犯罪者め！ ユーラシアのスパイめ！ 撃ち殺してやる！ 蒸発させてやる！ 塩鉱山送りにしてやる！」

いきなり二人はウィンストンのまわりを飛びはね、「裏切り者！」「思考犯罪者！」と叫び、少女は兄のあらゆる動きを真似していた。なぜかちょっとこわい感じがした。いずれは人食いトラになるはずの子供のトラがじゃれているのを見るような思いだった。少年の目には計算高いどう猛さがあって、明らかにウィンストンを殴るか蹴るかしたいと思っており、そしてあと少し大きくなればそれができることを認識しているのうかがえた。こいつの手にしているのが本物の拳銃でなくてよかった、とウィンストンは思った。

パーソンズ夫人の目は不安そうにウィンストンから子供たちへと移り、そしてウィンス

トンへと戻った。居間のもっと明るい照明の下で見ると、夫人の顔のしわには本当にほこりが詰まっているのが見えて、ウィンストンはおもしろがった。

「この子たちも騒々しくて。二人とも絞首刑を見に行けないのでおかんむりなんですよ、この様子は。わたしは忙しすぎて連れて行けませんし、トムも間に合うように仕事から帰ってこれないもので」

「なんで絞首刑を見に行けないの？」と少年はその大声で吠えた。

「絞首刑見たい！ 絞首刑見たい！」と少女は、相変わらず飛びまわりながら唱えた。

そういえば今晚、戦争犯罪で有罪になったユーラシアの囚人たちが公園で絞首刑になるのだった。これは月に一度行われ、人気の高い見せ物だった。子どもたちはいつも、連れて行けとせがみたおす。ウィンストンはパーソンズ夫人に失礼すると告げて、戸口に向かった。でも通路を六歩もいかないうちに、何かが首のうしろに当たって悶絶しそうな痛みをもたらした。灼熱した針金で突き刺されたかのような。振り返ると、ちょうどパーソンズ夫人が息子を戸口にひきずりこむところで、その少年はパチンコをポケットにしまっていた。

「ゴールドスタインめ！」と少年は、ドアの閉まりがけにこちらに怒鳴った。でもウィンストンがもっとも衝撃を受けたのは、夫人の灰色っぽい顔に浮かんだ、無力な恐怖の色だった。

自分の家に戻ると、ウィンストンは足早にテレスクリーンの前を通ってまたテーブルについたが、まだ首はさすり続けていた。テレスクリーンからの音楽は止まった。かわりに事務的な軍隊調の音が、ちょっと荒々しい声色で、アイスランドとフェロー諸島の間に停泊したばかりの浮体要塞の装備に関する説明を読み上げていた。

あんな子どもたちをもって、あのあわれな女性は恐怖の人生を送っているにちがいない、とウィンストンは思った。あと一年、二年もすれば、子供二人は日夜、非服従のしるしを探して母親を監視するようになる。最近の子供はほとんど例外なくひどいものだった。最悪なのは、スパイ団のような組織を通じて、子どもたちが系統的に手のつけられない小野蛮人に変えられてしまっているのに、それが党の規律に反抗しようという傾向にはまったくつながらないということだった。それどころか、子どもたちは党やそれと関係したものすべてを敬愛していた。歌や行進、旗、ハイキング、模擬小銃での訓練、スローガンの斉唱、ビッグ・ブラザー崇拜——子どもたちにしてみれば、これはみんな輝かしいゲームでしかない。その兇暴さはすべて外に、国家の敵に、外国人、裏切り者、妨害工作員、思考犯罪者に向けられた。三十歳以上の人々は、自分の子どもたちを怖がっているのが通例だった。無理もない。「タイムズ」紙には毎週のように、盗み聞きをした子ネズミ——一般には「英雄児童」と呼ばれていた——がよからぬ発言を耳にして、思考警察に自分の両親を告発したというニュースが出ていたのだから。

パチンコ弾からの痛みはおさまった。半ばうわの空でペンを取り上げると、日記にこれ以上書くことがあるかどうかを考えた。突然、かれはまたオプライエンのことを考えはじめた。

何年も前——どのくらいになるか？ もう七年になるはずだ——真っ暗な部屋を歩いている夢を見た。そして片側にすわった人が、通りすがりにこう言ったのだ：「いつか暗闇のない場所で会おう」これはとても静かに、ほとんどさりげなく言われた——単なる発話で、命令ではなかった。ウィンストンは足を止めることもなく歩き続けた。不思議なのはそのときの夢の中では、そのことばはあまり印象に残らなかったということだ。それ

が重要に思えてきたのは、後になってのことで、それも徐々にそう思えてきたのだ。オブライエンを初めて見たのがその夢の前なのか後なのかは、もう覚えていない。その声がオブライエンのものだと見極めたのも、いつだったのか忘れた。でもいずれにしても、そう見極めたのだ。闇の中でかれに話しかけたのはオブライエンだった。

オブライエンが敵なのか味方なのか、ウィンストンはちっとも確信できなかった——今朝の目配せの後でも、相変わらず確信は不可能だった。どのみち、それは大して重要ではなかった。二人の間には、理解の結びつきがあって、それは愛情や党派制よりも重要なことだった。「いつか暗闇のない場所で会おう」とかれは言った。どういう意味かはわからなかったが、いつか何らかのかたちでそれが実現することだけは知っていた。

テレスクリーンからの声が止まった。ラッパの合図が、はっきりと美しく、停滞した空気の中に漂いこんだ。声がたたみかけるように続く。

「静聴！ ご静聴を願います！ マラバー前線からたったいま速報が届きました。南インドの我が軍が輝かしい勝利をおさめたとのことです。いま報道したこの戦闘で、戦争の終結のめどがつくかもしれないとお伝えする許可がおりています。それでは速報です——」

悪い知らせがくるな、とウィンストンは思った。そしてその通り、すさまじい死傷者と囚人の数を含めたユーラシア軍殲滅の輝かしい描写に続いて、来週からチョコレートの配給が三十グラムから二十グラムに減らされるという発表がきた。

ウィンストンはまたゲップをした。ジンの酔いがさめかけていて、気が沈んでいる。テレスクリーンは——勝利を祝うためか、はたまた失われたチョコレートの記憶を埋没させようとしてのことか——「オセアニア、そは汝のもの」を大音響で流しはじめた。立ち上がって気をつけの姿勢をとるべきだった。でもいまいる位置では見られることはない。

「オセアニア、そは汝のもの」に続いてもっと軽い音楽となった。ウィンストンは窓辺に寄って、テレスクリーンには背中を向け続けた。相変わらず寒く晴れた日だ。どこか遠くでロケット弾が、鈍い反響するとどろきと共に炸裂した。現在では週に二十～三十発がロンドンに投下されている。

眼下の通りでは、破れたポスターを風がばたばたとはためかせ、「英社主義」の一語がけいれんのようにあらわれたり消えたりした。聖なる原理^{イングソック}英社主義。ニュースピーク、二重思考、過去の変動性。自分が海底の森林をさまよい、化け物じみた世界で迷子になったが、その自分自身が怪物であるような気がした。ひとりぼっちだった。過去は死に、未来は想像できなかった。生きた人間がたった一人でも自分の味方であるという可能性がどれだけあるというのか。そして党の支配が永遠には続かないと言えるのだろうか？ それに対する答えのように、真実省の白い壁面にある三つのスローガンがこちらを向いている。

戦争は平和

自由は隷属

無知は力

ポケットから二十五セント玉を取り出した。そこにも、小さくはっきりした文字で、同じスローガンが掘られており、その硬貨の裏側にはビッグ・ブラザーの顔が刻印されていた。硬貨からでもその目は人を見据えている。硬貨からも、切手からも、本の表紙からも、旗からも、ポスターからも、タバコの包装からも——あらゆるところから。いつも目がこちらを監視し、声はこちらを包み込む。寝ても覚めても、働くときも食事のときも、屋外

でも屋内でも、風呂の中でもベッドの中でも――逃れようがない。自分の頭蓋骨内部のほんの数立方センチ以外に、自分だけのものと言えるものはなかった。

太陽がめぐるって、真実省の無数の窓にはもう光が当たらなくなり、要塞の銃眼のように陰気に見えるようになっていた。巨大なピラミッド型を前にして心がひるんだ。強すぎる、襲撃できない。ロケット弾を千発うちこんでもつぶせないだろう。再び、自分がだれに向けて日記を書いているのか思案した。未来のために、過去のために――空想上のものかもしれない世界のために。そして目の前のそこに横たわるのは、市ではなく殲滅。日記は灰となり、自分は蒸気となる。自分の書いたものを読むのは思考警察だけで、その直後にこれは存在を消され、記憶からも消される。自分の痕跡すら残らず、匿名で紙にかきつけたことばですら物理的に生き残れないのに、どうやって未来に訴えかければいいのか。

テレスクリーンが14時を告げた。十分でここを出なくては。仕事に14時30までに戻らなくてはならない。

不思議なことに、時を告げるチャイムが勇気を取り戻させてくれた。自分は孤独な幽霊で、だれも決して聞くことのない真理をつぶやいているだけだ。でもつぶやいている限り、あるはっきりしない形で、連続性は失われない。人間の遺産を伝えるには、自分の主張を聞いてもらうことではなく、正気であることだ。テーブルに戻り、ペンをインクに浸すと、こう書いた。

未来または過去へ、思考が自由であり、人々がお互いにちがっていて、孤独に暮らしてはいない時代へ――真理が存在し、行われたことを取り消すことができない時代へ。

均質性の時代より、孤独の時代より、ビッグ・ブラザーの時代より、二重思考の時代より――こんにちは！

おれはすでに死んでいる、とウィンストンは考えた。こうして自分の考えをまとめられるようになった今こそが、決定的な一步を踏み出したときのように思えた。あらゆる行為の帰結はその行為自体に含まれている。ウィンストンはこう書いた：

思考犯罪は死をもたらすのではない。思考犯罪は死**そのもの**なのだ。

自分が死人だと認識した以上、できるだけ生き延びることが重要となった。右手の指二本にインクの染みがついている。まさに墓穴を掘りそうな細部だ。省でかきまわっている狂信者（たぶん女だ：砂色の髪の小女か、創作部の黒髪女みたいなだれか）が、なぜウィンストンが昼食時間中にもものを書いていたのか、なぜ旧式のペンを使ったのか、**何**を書いていたのか、いぶかしみだすかもしれない――そして適切な部門に何かほのめかすかもしれない。洗面所について、ベトベトしたこげ茶色の石けんで慎重にインキをこすり落とした。その石けんは皮膚を紙ヤスリのように削るので、目下の目的にはぴったりだった。

日記は引き出しにしまった。隠そうとしてもまったく無駄だったが、その存在がばれたかどうかはわかるようにしておきたかった。ページのふちに髪の毛を置いておくのはすぐにはばれてしまう。指先で、それとわかる白っぽいほりをつまみ上げると、表紙の隅にふりかけておいた。本が動かされたら、こぼれ落ちるだろう。

第3章

ウィンストンは母親の夢を見ていた。

母親が消えたときは、確か十才か十一才だった。背が高く、彫像のようで、物静かで動きもおっとりしており、すばらしい金髪をしていた。父親はもっと漠然と、色黒でやせていて、いつもきちんと黒っぽい服を着ていて（ウィンストンは特に、父親の靴の底がとても薄かったのをおぼえている）、メガネをかけていたという記憶しかない。二人はたぶん、五十年代の初期の大粛正の中に飲み込まれてしまったのだろう。

目下の夢では、母親は自分よりはるか深い下の方にすわっていて、妹を抱いている。妹のことは、小さい弱々しい赤ん坊で、いつも静かで、大きい何でも見る目をしていたという以外は何も覚えていない。二人とも、こちらを見上げている。二人は何か地下の場所にいる——たとえば井戸の底、あるいはとても深い墓——でもそれは、すでにずっと下にあるのに、さらに下方に動き続けていた。沈む船のサロンにいて、暗くなる水を通してこちらを見上げている。サロンにはまだ空気はあるし、二人ともこちらが見えるしこっちも二人が見えるが、その間にも二人は沈み続け、次の瞬間にも永遠に二人を見えなくしてしまうはずの緑の水に沈んでゆく。こちらは光と空気の屋外にいるのに、二人は死へと吸い込まれ、そして二人が下にいるのは、まさにかれが上にいるためなのだった。こちらも、二人も、それを知っているし、それを知っているのが二人の顔から読み取れた。二人の表情にも心にも恨みはなく、こちらを生かすためには自分たちが死なねばならず、それが避けがたい物事の秩序の一部なのだという知識だけがある。

何が起きたのかはおぼえていないが、夢の中でかれは、母と妹の命が自分の命を救うために何らかの形で犠牲になったということを知っていた。それは夢の場面としての特徴を保ちつつ、知的な生活の連続であるような夢であり、目を覚ましたあとも目新しく価値あるものに思える事実や発想に気がつかせてくれるような夢だ。いまウィンストンがはっと気がついたのは、ほとんど三十年前の母親の死がの悲劇性や悲しさは、いまや不可能になっているということだ。悲劇は、まだプライバシーと愛と友情があり、家族がいちいち理由がなくてもお互いとともにあった、古代に属するものだった。母親の記憶が心をかきむしるのは、彼女が自分を愛するがために死んだからであり、そしてそのとき自分は幼すぎて身勝手に愛し返すことができず、そしていまは思い出せない何らかの形で、私的で改変不可能な忠誠の概念のために自らを犠牲にしたからなのだった。そうしたことは、現在では起こりえないのだ、とウィンストンは気がついた。今日では恐怖と憎悪と苦痛はあるが、感情の尊厳はなく、深く複雑な悲しみもない。このすべてが母と妹の大きな目の中に読み取れたようだが、その母と妹は何百尋も緑の水の中からこちらを見上げ、いまなお沈み続ける。

いきなりウィンストンは、短い弾力のある芝生に立っていた。夏の夕方、西日が地面に

きらめいている。いま目にしている風景はあまりにしょっちゅう夢に登場したので、それを現実の世界で見たことがあるのかどうか、完全には自信が持てなかった。起きているときの思考の中では、それを黄金の国と呼んでいた。古い、ウサギの穴だらけの牧草地で、踏み固められた道がうねうねと横切り、あちこちにモグラ塚がある。草原の向こう側に生い茂った茂みでは、榆の木の太枝がそよ風のなかでごくかすかに揺れており、その葉が女の髪のように密なかたまりとなって、ささやかにそよいでいる。もう少し近いところには、視界からははずれているけれど、澄んだゆるやかな小川があり、デース*1が柳の下の淀みで泳いでいる。

黒髪の子がその草原を横切ってこちらに向かってくる。ほとんど一動作で自分の服を破り捨てて、軽蔑したかのようにそれを横に投げ捨てた。彼女の肉体は白くなめらかだったが、それで欲望が喚起されることはなく、ウィンストンはほとんどそれを見なかったほどだ。その瞬間にかれを圧倒したのは、彼女が服を横に投げ捨てたときの身振りに対する賞賛だった。その優雅さとさりげなさは、一つの文化丸ごと、一つの思考体系まるごとを殲滅させるかのようで、ビッグ・ブラザーと党と思考警察をすべて、腕のすばらしい一動作だけで無の中へと掃き出してしまえるかのようだった。これまた古代に属する身振りだった。ウィンストンは「シェイクスピア」と口にしながら目をさました。

テレスクリーンは耳をつんざくような笛を流しており、それが同じ音で三〇秒続いた。それはゼロ七時 15、オフィス労働者の起床時間だ。ウィンストンは無理矢理からだをベッドから引きずり出した――裸で、というのも外部役員たちは年間三千の衣服クーポンしかもらえず、パジャマの上下は六百するのだ――椅子の上に放り出してあった薄汚い袖無しアンダーシャツとショーツをつかんだ。身体躍動が三分で始まるのだ。次の瞬間、ほとんどいつも起きて直ぐにおそわれるすさまじいせきこみで、ウィンストンはからだを二つ折りにしていた。肺がほとんど空っぽになってしまったので、息を取り戻すのには横になって、深呼吸を何度かしなくてはならなかった。咳き込んだために血管が膨張し、静脈瘤の潰瘍がまたかゆくなってきた。

「三〇から四〇のグループ！」と突き刺すような女性の声がわめいた。「三〇から四〇のグループ！ 位置について下さい！ 三〇から四〇！」

ウィンストンはテレスクリーンの前で飛び上がって直立した。スクリーンにはすでに、若そうな女性の姿が映っていた。やせてはいるが筋肉質で、チュニックと運動靴を履いている。

「腕の屈伸！」と彼女はわめいた。「わたしに拍子をあわせてください。いっち、二、三、四！ さあ同志のみなさん、もっと元気よく！ いっち、二、三、四！ いっち、二、三、四！……」

咳の発作からの痛みでも、夢の印象が頭から完全に消えたわけではなかったし、体操のリズミカルな動きはそれを少し復活させた。身体躍動の最中に適切とされる、陰気な楽しみの表情を顔にまといつつ、機械的に腕を前後にふりまわす間、かれは記憶のぼんやりした幼年期を回想しようと苦闘していた。きわめてむずかしいことだった。50年代末より前のことはすべて薄れていた。参照できる外部の記録がないと、自分自身の人生の輪郭すら鮮明さを失う。ほぼまちががなく起きていないはずの大事業が記憶にあたりするし、出来事の細部は覚えているのにその雰囲気がい思い出せなかったりするし、何一つ思い浮かば

*1 訳注：ウグイに似たコイの一種だそう。

ない長い空白の時期もある。当時はすべてがちがっていた。国の名前や、その地図上での形すらちがっていた。たとえば、滑走路一号は、当時はそういう名前ではなかった。イギリスとかブリテンとか呼ばれていたはずだ。でもロンドンは、昔からロンドンだったことはかなり確かだった。

ウィンストンは自国が交戦中でなかった時代をはっきりとは思い出せないが、子供時代にはかなり長い平和の時期があったことは明らかだった。最も初期の思い出の一つは空襲だったが、だれもがそのときに驚いていたからだ。コルチェスターに原爆が落ちた時だったかもしれない。空襲そのものは覚えていないが、父親の手が自分の手をつかまえて、下へ、下へと地面の奥深いどこかへ引き連れ、ぐるぐると下らせん階段が足の下で鳴り、あまりに足が疲れてきたのでベソをかきはじめて、途中で止まって休まなくてはならなかったのは覚えていた。母親は、そのゆっくりした夢見るような形で、ずっと遅れてついてきていた。赤ん坊だった妹を抱いている——それとも抱えていたのはただの毛布のかたまりだろうか。その時に妹が生まれていたかどうか、確信がはかった。やっと騒々しい混雑した場所に出てきたが、それは地下鉄の駅だった。

石敷きの床のいたるところに人々がすわりこみ、他の人たちは何段にも重なった金属の寝台にびっしりとすわっている。ウィンストンと両親は床に場所を見つけたが、近くには老人と老婆が寝台に並んで座っていた。老人は立派なダークスーツと、真っ白な髪から押し戻した感じの黒い布製帽子を身につけていた。顔は真っ赤で、目は青く涙で一杯だった。ジンのにおいがぶんぷんする。汗のかわりに肌からしみ出してくるようで、目から流れ落ちる涙も純粋なジンだと思えるくらいだった。でもちょっと酔ってはいても、その老人は本物の耐え難い悲しみに苦しんでいた。ウィンストンは子供ながらに、何か恐ろしいこと、何か許し難く、決して元に戻せないことがいま起きたのだと理解した。そして、それが何なのかわかったような気がした。老人の愛しただれか、小さい孫娘かもしれないが、それが殺されたのだ。数分ごとに老人はこう繰り返していた。

「あいつら信用しちゃんねえかったんだよ。そう言っただろうが、婆さん、え？ 信用したらこのざまだ。前から言った通り。あのクズども信用しちゃんねえかったんだよ」

でも信用しちゃんねえかったのがどのクズどもなのかは、ウィンストンはもう思い出せなかった。

その頃あたりから、戦争は文字通り不断に続いてきたが、厳密に言えばそれはずっと同じ戦争というわけではなかった。子供時代の何ヶ月かにわたり、ロンドンそのものでも混乱した市街戦があったし、そのいくつかは鮮明に記憶にある。でもその期間の歴史全体をたどり、各時点でだれがだれと戦っていたのかを述べるのはまったく不可能だった。書かれた記録も口伝も、現在の相関図以外のことは一切触れていないからだ。たとえば現在の一九八四年だと（いまが本当に一九八四年ならだが）、オセアニアはユーラシアと交戦中で、イースタシアと同盟関係にある。この三勢力が、かつて一度でもちがった形で手を組んでいたということは、公的にも私的な会話でも決して認められることはなかった。実は、ウィンストンがよく知っている通り、オセアニアがイースタシアと交戦してユーラシアと同盟関係にあったのはほんの四年前のことだった。でもそれは、記憶が十分なコントロール下にないたためにたまたま手元にあった、秘密の知識の断片でしかなかった。公式には、仲間の変更は一度も生じていない。オセアニアは目下、ユーラシアと交戦中である。したがってオセアニアは常にユーラシアと交戦していた。目下の敵は常に絶対的な悪であり、よってその相手との過去または未来の合意はまったく不可能であるということが導か

れる。

恐ろしいのは、とウィンストンは苦痛とともに肩を無理矢理うしろに曲げながら（腰に手をあてて、上体をまわしているところで、この運動は背筋によいとされていた）一万回も繰り返したことを考えた——恐ろしいのは、そのすべてが真実かもしれないということだった。党が過去に手をつこんで、このできごとやらあのできごとについて、**それがまったく起きていない**と言えるなら——それこそまさに、ただの拷問と死よりも恐ろしいことじゃないだろうか。

党は、オセアニアがユーラシアと同盟したことはないという。この自分、ウィンストン・スミスは、オセアニアがたった四年前にはユーラシアと同盟関係にあったことを知っている。でもその知識はどこに存在するのだろう。自分自身の良心の中だけであり、それはどのみち間もなく消滅させられてしまうものだ。そして他のみんなが党の押しつけるウソを受け入れたら——すべての記録が同じお伽話を語っていたら——そのウソは歴史へと流れ込んで真実となる。「過去を支配する者は未来を支配する。現在を支配する者は過去を支配する」というのが党のスローガンだ。でも過去は、その性質上改変可能なものではあっても、改変されたことはない。現在真実であることは、はるか昔からはるか未来まで真実である。単純明快。必要なのは自分の記憶に対する果てしない勝利だけだ。「現実コントロール」と呼ばれている。^{ニュースピーク}新語法では「^{ダブルシンク}二重思考」だ。

「休め！」と女性指導員が、ちょっと優しくに言った。

ウィンストンは腕を脇にたらし、ゆっくりと肺を空気で満たした。頭は^{ダブルシンク}二重思考の迷宮世界へとさまよっていった。知りつつ知らないこと、完全に正直であると意識しつつ、慎重に構築されたウソを語る。相互に相殺し合うような二つの意見を同時に持ち、それらが矛盾していると知りつつ両方を信じる。論理に対して論理を使い、道徳を否定しつつそれに依拠すること、民主主義は不可能だと信じつつ党が民主主義の守護者だと信じる。忘れることが必要なものはすべて忘れ、それが必要とされたら勝手にそれを記憶に引き戻し、そしてすぐさま再び忘れ去ること。そして何よりも、この同じプロセスをこのプロセス自体に適用すること。それこそが究極の巧妙さだった。意識的に無意識を動員して、それから再び自分がたった今行った催眠術行為を意識から消し去ること。「^{ダブルシンク}二重思考」という言葉を理解することさえ、^{ダブルシンク}二重思考が必要となる。

女性指導員が、また気をつけを命じた。「ではこんどは、つま先に手が届くか見てみましょう！」と熱心に言う。「では腰から曲げてみましょう、同志のみなさん。いっち、に！
いっち、に！……」

ウィンストンはこの体操が大嫌いだった。かかとから尻まで痛みが走るし、最後にはまたもや咳の発作が引き起こされるのがおちだ。空想の持っていた多少の楽しみもこれで消えてしまった。過去は単に変えられたのではなく、破壊されたんだ、とウィンストンは考えた。だって自分の記憶以外に何の記録もなかったら、どんなに自明な事実であっても証明なんかできやしない。ビッグ・ブラザーのことを最初に耳にしたのがいつの年だったか思い出そうとしてみた。たぶん六〇年代だったはずだと思ったが、確実なことは何も言えなかった。党の歴史ではもちろん、ビッグ・ブラザーは革命のごく初期からその指導者であり守護者だった。その偉業はだんだんと時代をさかのぼり、いまやすでに伝説の四〇年代や三〇年代からすでに続くことになっていた。当時は変な円筒状の帽子をかぶった資本家たちが、まだロンドンの街路で大きな輝く自動車やガラス壁の馬車を乗り回していた時代だ。この伝説のどこまでが事実でどこまでが発明品なのかは知りようがなかった。ウィ

ンストンは、党そのものが誕生したのがいつの日だったかも思い出せなかった。一九六〇年以前に英社主義イングソックということばをきいたことがあるとは思わなかったが、旧語法オールドスピークでの語形——つまり「イギリス社会主義イングリッシュ・ソシャリズム」——ではもっと以前からあったかもしれない。すべてが霧の中にとけこんでしまっている。確かに、確実なウソを指摘できることもある。たとえば、党の歴史書で主張されている、党が飛行機を発明したというのは真実ではない。飛行機は物心ついた頃から存在していた。でも、何も証明はできない。証拠はあったためしがない。全人生でたった一度だけ、歴史的事実のねつ造をまちがえようもなくはっきりと示す証拠を手にしたことがあった。そしてその時には——

「スミス！」とテレスクリーンから金切り声じみた声が叫んだ。「6079番 スミス・W！

そう、あなたです！ もっと身をかがめてください！ やればできるはずですよ。もっと気合いを入れて。もっと下まで！ そーうです、同志。さあ休め！ 全員です。こちらを見てください」

ウィンストンの全身に熱い汗が噴き出した。顔は完全な無表情のまま。決してうろたえを外に示さないこと！ 嫌悪を外に出さないこと！ 視線のちょっとしたふらつきでバレてしまいかねない。立って見つめる女性指導員は、腕を頭上にあげて——優雅にはいえないが、非常にきれいかつ効率よく——身をかがめて、指の第一関節を足の指の下に入れた。

「こーんなふうには、同志のみなさん！ こーんなふうにしてくださいね。もう一度見ていてくださいよ。わたしは三九歳で四人の子持ちなんですよ。さあ見てください」彼女はまた身をかがめた。「わたしのひざは曲がってませんよね。みなさんだって、やろうと思えばできるんです」と言いながら身を起こす。「四十五歳以下の人はだれでもつま先に手が届きます。わたしたちみんな、前線で戦う特権があるわけではありませんが、少なくとも健康でいようじゃありませんか。マラバー前線の兵士たちのことを考えてください！ 浮き要塞の水兵たちを！ あの人が耐えていることを考えてみましょう！ さあもう一度やってみましょう。はい、ずっとよくなりましたよ、同志。本当に上出来です」と彼女が元気づけるように語りかけたウィンストンは、思いっきり身をかがめて、数年ぶりにひざを曲げずにつま先に触れることができたのだった。

第4章

一日の仕事が始まったときに出る、テレスクリーンの近さすら放出を抑えられない深い無意識のため息とともに、ウィンストンは書き取り装置を引き寄せて、マウスピースのほこりをはらい、メガネをかけた。それから、仕事機の右手にある気送管からすでに飛び出してきた、四つの小さな筒状の紙をほどき、クリップであわせて留めた。

小区画の壁には三つのくぼみがあった。一つは話筆機の右側にある、文書メッセージ用の小さな気送管だ。左には、新聞用のもっと大きな気送管。そして横の壁には、ウィンストンからすぐに手の届くところに、針金の格子で保護された大きな横長のスリットがあった。この最後のものは反古紙を捨てるためのものだ。似たようなスリットが、この建物中に何千、何万とあり、それも部屋ごとどころかあらゆる廊下にごく短い間隔で設置されていた。どういうわけかそれは記憶穴とあだ名されていた。何か文書が破壊されると知っていたら、あるいはそこらに反古紙が転がっていたら、手近な記憶穴のフラップを上げてそこに捨てるのが反射的な行動となっていた。するとそれは温風の流りに運ばれて、どこか建物の裏に隠されている巨大な焼却炉へと向かうのだ。

ウィンストンは、丸められていたのをほどいた四枚の紙を検分した。それぞれ一、二行のメッセージが、省内で使われる短縮形の専門用語——ニュースピークではないが、かなりニュースピーク用語が使われている——で書かれていた。こう書かれている。

タイムス 17.3.84 bb 演説不適報告 アフリカ 修正

タイムス 19.12.83 予測 3 yp 83 4 四半期 ミスプリ 確認 最新号

タイムス 14.28.84 豊省 不適引用 チョコ 修正

タイムス 3.12.83 報告 bb 日令 二重プラス非良 参照 非人 全面改定 ファイル前上提

かすかな満足感と共にウィンストンは最後のメッセージを横に置いた。これはややこしく責任ある仕事なので最後に処理した方がいい。残り三つは定型作業だが、二番目は数字一覧をあさる面倒な作業になるだろう。

ウィンストンはテレスクリーンの「バックナンバー」をダイヤルし、『タイムズ』の適切な号を要求した。ものの数分間で気送管から出てきた。受け取ったメッセージは、何らかの理由で改変、あるいは公式用語でいえば修正が必要となった、記事やニュースを指していた。たとえば三月一七日号の『タイムズ』では、ビッグ・ブラザーがその前日の演説で、南インド前線は静かなままだが北アフリカでユーラシアの攻勢が始まると予測していた。ところが実際にはユーラシア司令部は、南インドの攻勢を開始して、北アフリカでは動かなかった。したがってビッグ・ブラザーの演説を書き直し、かれが実際に起こったことを予想したようにする必要が生じた。あるいはやはり『タイムズ』の十二月十九日号

で、各種消費財の一九八三年第四四半期（同時に第九時三カ年計画における第六四半期）における産出量の公式予測を公表していた。今日の号は実際の産出量についての記述を含んでいたが、すべてのものについて、予測値は大幅にまちがっていたようだ。ウィンストンの仕事はもとの予測値を修正して、それが実際の値と一致するようにすることだ。第三のメッセージはといえば、これはものの数分で直せるごく単純なまちがいがだった。二月というほんの少し前の時点で、豊富省は1984年中にはチョコレートの配給量は減らさないと約束（公式用語では「分類的確言」）を発表した。実はウィンストンも知っているように、チョコレートの配給は三〇グラムだったのが、今週末には二〇グラムに減らされる予定だった。必要なのは単に、もとの約束のかわりに、四月のどこかで配給量を減らさざるを得ないという警告を入れればいだけだ。

ウィンストンはそれぞれのメッセージに対応し終わるとすぐに、話筆した訂正を該当する『タイムズ』にクリップで留めて、気送管に送り込んだ。それから可能な限りもっとも無意識に近い動作で、もとのメッセージや自分が作ったメモなどをすべて丸めると、記憶穴に落とし込んで炎に燃やし尽くされるに任せた。

気送管が向かう見たこともない迷路で何が起きるのか、かれも詳しくは知らなかった。だが一般的なことは知っていた。ある号の『タイムズ』で必要とされた訂正がまとめられてそろえられると、その号は印刷し直され、もとの号は破棄されて、修正済みの号がかわりにファイルに加えられる。この絶え間ない改変プロセスは新聞だけでなく、本や雑誌、パンフレット、ポスター、ちらし、映画、音声録音、マンガ、写真など——政治的、イデオロギー的に少しでも重要性を持つかもしれないあらゆる文献や記録すべて——に及んだ。毎日、毎分ごとに、過去は最新の状態に更新される。こうすれば、党の行ったあらゆる予想は、記録証拠に基づいて正しかったのだということが示される。どんなニュースだろうと意見表明だろうと、その時点のニーズにそぐわないものは、記録に残ることは認められなかった。歴史はすべて改変可能な羊皮紙であり、必要に応じていくらでもきれいに白紙に戻されて書き直されるのだった。この作業が行われてしまえば、いささかも偽造が行われたとは一切証明できなかった。記録部の最大の部門は、ウィンストンが働いている部門よりはるかに大きくて、そこでの人々の仕事は、すでに改訂されて破壊されるべき本や新聞などの文献を追跡し、集めることだった。政治的な同盟関係の変化やビッグ・ブラザーが口走ったまちがった予言などが、何十回となく書き直された『タイムズ』の号が、相変わらずもとの日付のままファイルに並んでいる。本もまた何度もリコールされて書き直されたが、すべて何ら改変が行われたという記録なしに再発行される。ウィンストンが受け取り、処理が終わったらまちがいなくすぐに処分した文書指令でさえ、なんら偽造が行われるなどということを書いたりほめかしたりはしていなかった。常に述べられるのは、ミスやまちがい、ミスプリ、引用間違いなどであり、したがって正確さを保つために正す必要がある、ということだった。

だが実は、これは偽造ですらない、とかかれは豊富省の数字を改訂しつつ考えた。単に一つのでたらめを別ののでたらめで置き換えるだけだ。自分が扱っている内容のほとんどは、現実世界とは何一つ結びついてはいなかった。真っ赤なウソに見られるほどの結びつきさえない。統計はもとの数字だろうと改訂後の数字だろうと、まったくの想像の産物であることにはかわりなかった。かなりの場合、自分が勝手に頭の中ででっちあげることになっていた。たとえば豊富省の予測では、その四半期のブーツ生産は一億四五〇〇万足ということになっていた。実際に生産は六二〇〇万足だという。だがウィンストンは予測値の書

き直しにあたり、予測値を五七〇〇万足に引き下げた。そうすれば、ノルマが十分以上に達成されたといういつもの主張が可能になるからだ。どのみに、六二〇〇万足というのは五七〇〇万足という数字よりも、あるいは一億四五〇〇万足という数字に比べても、事実に近いわけではなかった。おそらくブーツなどまったく作られていないのだろう。もっとありそうなこととして、だれもどれだけ生産されているかわかっていないし、まして気にもしていない。みんな知っているのは、紙の上ではどの四半期にも天文学的な数のブーツが作られているはずなのに、オセアニアの人々のおそらく半分くらいは裸足でうろついているということだ。そしてあらゆる記録された事実についても話は大きなり小なり同じだった。すべてはぼんやりした影の世界へとかき消えて、ついには今日が何月何日なのかもはっきりしなくなった。

ウィンストンは廊下の向こうを見た。向かいの小区画には、小柄で厳密そうな、あごの黒いティロツソンという男が一心に働いており、ひざにはたたんだ新聞がおかれ、口は話筆機のマウスピースにぐっと寄っている。自分の言うことを、自分とテレスクリーンとだけの秘密にしておこうという雰囲気だった。かれは顔をあげ、そしてそのめがねがウィンストンのほうに、敵意に満ちた一瞥を投げかけた。

ウィンストンはティロツソンをほとんど知らなかったし、かれが何の仕事で雇われているのか見当もつかなかった。記録部の人々は、そう気軽には自分の仕事の話をしな。長い窓のない廊下部屋には、二列に並んだ小区画で人々が果てしなく紙をかかささいわせ、話筆機につぶやく声のうなりが響いていたが、毎日廊下を足早に行ったり来たり、あるいは二分憎悪で腕をふりまわしたりするところは見ているのに、名前すら知らない人物が何ダースもいた。自分の隣の小区画にいる、砂色の髪の女性は、一日中苦勞して、ひたすら報道から数年前に蒸発させられ、したがって元々存在しなかったとされる人々の名前を削除し続けているのだった。これはなかなかふさわしいことに思えた。彼女自身の夫も数年前に蒸発させられていたからだ。そして数区画離れたところにいる、おとなしい、手際の悪い、夢見る生き物はアンブルフォースという名で、毛だらけの耳と、韻や韻律に関する意外な才能を持っており、イデオロギー的に不適切となったが、何らかの理由で詩集に遺しておくべき詩の歪曲版——決定版と呼ばれていたが——を作っているのだった。そしてこの廊下部屋は、労働者五十人かそこらだが、記録部という巨大で複雑な組織の中で、一つの課でしかなく、いわば一つの細胞でしかない。向こう、階上、階下には、群衆のような労働者たちが、想像もつかないほど多様な仕事に従事している。副編集長をそなえた印刷工房、タイポグラフィの専門家や、写真偽造のための一大設備を備えたスタジオ。テレビ番組部は、エンジニアやプロデューサーがいて、さらに声色を真似るのがうまいかどうかで特別に選ばれた役者群がいた。リコールされるべき本や雑誌の一覧をひたすら作るのが仕事の司書軍団もいた。訂正された文書が保存される広大な保管庫があり、もとのコピーを破壊するための、隠れた巨大な焼却炉があった。そしてどこかは知らないが、まったく匿名で、この作業全体を調整して、方針を決める指導脳がいるはずだった。その方針によって、過去のこの部分は保存するがあの部分は偽造し、他の部分は消去することが必要となるわけだ。

そして記録部は結局のところ、それ自体が真実省の一部局でしかなかった。真実省の主な仕事は過去を再構築することではなく、オセアニア市民に新聞、映画、教科書、テレスクリーン番組、芝居、小説などを提供することだ——ありとあらゆる情報、指令、娯楽、銅像からスローガンまで、叙情詩から生物学の論文、そして子供の書き取り帳からニュー

スピークの辞書まで。そして省は党の多種多様なニーズを満たすだけでなく、プロレタリアートのためにその活動を丸ごとずっと低いレベルでも繰り返さなくてはならなかった。一連のまったく別個の部局が、プロレタリア向けの文学や音楽、ドラマ、娯楽などを扱っていた。ここで作られるのは、スポーツと犯罪と星占いしか載っていないクズのような新聞、扇情的な安っぽい三文小説、セックスまみれの映画、そして多様化機と呼ばれる特殊な万華鏡により機械的に作曲される感傷的な歌だ。最低の種類のパルノ生産に従事する専門の課——ニュースピークではパルノ^{セック}課と呼ばれる——すらあって、その産物は封印した封筒に入って送り出され、その作成に従事する人々以外の党員は、見る一切許されていなかった。

ウィンストンの作業中に、メッセージが三つ気送管から出てきたが、ごく単純なことだったので、二分憎悪で中断される前にそれらは片付けてしまった。憎悪が終わると、かれは自分の小区画に戻り、棚からニュースピーク辞書を取って、話筆機を一方に押しやり、めがねをふいて腰を落ち着け、午前中の大仕事に取りかかった。

ウィンストンの人生最大の喜びは仕事だった。そのほとんどは退屈な定型作業だったが、中には実にむずかしくて複雑で、数学問題の深みにはまったときのように没頭してしまうような仕事もあった——きわめて繊細な偽造で、英社主義の原理に関する知識と、党が何を言ってほしいかという推測以外は何も導いてくれるものがないようなものだ。ウィンストンはこの手のものが得意だった。ときどき、『タイムス』のトップ記事の修正を任せられることもあって、それは丸ごとニュースピークで書かれているのだった。かれはさっき横にどけておいたメッセージをほどいた。こうある：

タイムス 3.12.83 報告 bb 日令 二重プラス非良 不人参照 全面改定 ファイル前上提

オールドスピーク（または通常英語）ではこういうことになるだろうか：

タイムス 1983年12月3日号の、ビッグ・ブラザーの日次指令報告はきわめて不満足なものであり、非在人物への言及がある。完全に書き直したうえでファイリングの前に上司に草稿を提出のこと。

ウィンストンは問題の記事を通読した。ビッグ・ブラザーの日次指令は、どうやら主に F F C Cなる組織の仕事ぶりをほめるのに費やされていたようだ。これは浮上要塞の水兵たちに、タバコなどの嗜好物を提供する組織だ。ある同志ウィザースなる人物、党中心の重要人物が、中でも特筆すべき存在として選り抜かれ、二等傑出勲章を与えられたのだった。

三ヶ月後、F F C Cは何ら理由も示されないまま、突然解体された。おそらくウィザースやその仲間は解職されたと推測されるが、新聞やテレスクリーンでそれについての報道はまったくなかった。これはありがちなことだ。政治違反者たちが裁判にかけられたり、公式に糾弾されることすら滅多になかったからだ。何千もの人がからみ、裏切り者や思考犯罪者たちが自分の犯罪について惨めな自白をしてから処刑される、公開裁判を伴うような大粛正は、特別な見せ物で数年に一度くらいしか起きない。もっと普通の場合には、党の不興を買った人々はあっさり消滅し、二度と行方が知れることはなかった。かれらの身に何が起きたのか、まったく見当もつかなかった。一部の場合には、死んでさえいないのかもしれない。ウィンストンの個人的知り合い（両親は含めない）も三〇人ほどこれ

までに姿を消していた。

ウィンストンは紙クリップでそっと鼻をつついた。通路を挟んだ小区画では同志ティロツソンが、相変わらず何かを隠すかのように話筆機の上にかがみ込んでいる。一瞬その顔があがった。またもや敵意に満ちた目がねの視線。ウィンストンは、ティロツソンが自分と同じ仕事に従事しているのではないかと思った。これほどに面倒な作業は、たった一人に任されることは決してない。一方、それを委員会にかけたら、偽造が行われていることを公式に認めることになる。おそらくは一ダースもの人々が、ビッグ・ブラザーの本当の発言について、競合するバージョンを作る作業にかかっているのではないか。そして党中心のマスター頭脳が、そのどれかのバージョンを選び、再編集して、必要となる相互参照プロセスを開始し、それから選ばれたウソが永続記録へとまわされて真実となる。

ウィンストンはなぜウィザースが解職されたか知らなかった。汚職のためか無能のためか。それともビッグ・ブラザーが、人気の出すぎた部下を始末しただけかもしれない。あるいはウィザースかその近くの人物が、邪説傾向の嫌疑をかけられたのかもしれない。あるいは——これがいちばんありそうだったが——肅正や蒸発が政府にとって不可欠なメカニズムだからこれが起きただけなのかもしれない。唯一本物のヒントは「不人参照」ということばにあった。これはウィザースがすでに死んでいることを示唆している。逮捕されただけでは、死んだとは限らない。とくには釈放されて、一年から二年も自由にしていたあげくに処刑されることもあった。ごくまれに、とっくの昔に死んだと思っていた人物が、何か公開裁判で幽霊のように再登場し、何百という人々を告発する証言をしてから消滅することもあった。だがウィザースはすでに不人になっていた。かれは存在しなかった。存在したこともなかった。ウィンストンは、単にビッグ・ブラザーの演説の論調を逆転させるだけでは不十分だと考えた。もとの話題とまるっきり無関係な内容に変えた方がいい。

いつもの裏切り者や思考犯罪者に対する糾弾に仕立ててもいいが、それはちょっとあまりに見え透いている。一方で前線での勝利や第九次三カ年計画での過剰生産による勝利をでっちあげるのは、記録をあまりにややくしくしてしまうだろう。必要なのはまったくのおとぎ話だった。突然頭の中に、すっかり仕上がった形で、同志オギルヴィなる人物の姿が飛び込んできた。かれは最近戦闘で、英雄的な状況で死んだのだった。ときどきビッグ・ブラザーは、日次指令を慎ましいたき上げの党員の記念にあてることがあった。その人物の生と死が、人々の従うべき価値あるお手本として讃えられるのだ。この日、かれは同志オギルヴィを記念したのだ。もちろん同志オギルヴィなる人物が存在しないのは事実だが、印刷物何行かと写真何枚かを偽造すれば、すぐに実在したことになる。

ウィンストンはしばし考え、話筆機を引き寄せると、ビッグ・ブラザーのおなじみの文体で口述を始めた。軍隊式でもありながら術学的でもあり、そして質問を投げかけてすぐにそれに自分で答えるという手口のため（「この事実からどんな教訓が学べるだろうか、同志諸君？ その教訓とは」云々かんぬん）、真似しやすい。

三歳にして同志オギルヴィは、太鼓とサブマシンガンとヘリコプター模型以外のあらゆるおもちゃを拒んだのだった。六歳にして——特別に規則を曲げることで規定より一歳早く——スパイ団に入った。九歳にして部隊長となった。十一歳のとき、叔父の会話を盗み聞きして犯罪傾向があると思えたので、かれを思考警察に告発した。十七歳で青年反セックス連盟の地区組織長となった。十九歳のときに設計した手榴弾は平和省に採用され、最初の試験のときには一発で三十一人のユーラシア人囚人たちを殺した。二十三歳でかれは、作戦行動中に絶命した。重要な指令を携えてインド洋上空を飛行中に、敵のジェット

機に追跡されたかれは、機関銃を重石にして飛行機から海中に飛び込み、指令もろとも海の藻屑と消えた――この末路を考えると、羨望の念を感じずにいるのは不可能だ、とビッグ・ブラザーは述べた。ビッグ・ブラザーは同志オグリヴィの人生の純粹さと一途さについていくつか言葉を足した。かれは完全にセックスを拒み、たばこも吸わず、一日一時間ずつジムで過ごす以外に娯楽は持たず、結婚と家族育成が一日二十四時間の任務への献身とは相容れないという信念の元、生涯独身の誓いをたてていた。かれが話す内容は英社主義イングソックの原理のみであり、人生の目的は敵ユーラシアの打倒と、スパイ、妨害工作者、思考犯罪者やその他裏切り者たちのあぶり出しだけだった。

ウィンストンは、同志オグリヴィに傑出勲章を授与すべきか内心で議論した。最終的には、それはやめておいた。無用な相互参照作業が増えるだけだからだ。

もう一度かれは、向かいの小区画のライバルを一瞥した。ティロツソンがまちがいなく自分と同じ作業に没頭しているのだ、という確信がなぜか浮かんた。最終的にだれのバージョンが採用されるかは知るよしもないが、ウィンストンはそれが自分ものであるはずだという深い自信を抱いた。一時間前は想像もしたことのなかった同志オグリヴィは、いまや事実となった。死人は創れるのに生者は創れないというのは、ちょっと不思議な気がした。現在には存在したことのなかった同志オグリヴィは、いまや過去に存在し、ひとたび偽造作業が忘れ去られれば、かれはシャルルマーニュやユリウス・カエサルと同じくらい権威をもって、同じ証拠に基づいて、実在したことになるのだ。

第5章

地下深くにある、天井の低い食堂で、昼食の行列がゆっくりよろよろと前進していった。部屋はすでになんまり満杯で、耳がつぶれそうなほどうるさかった。カウンターの格子からはシチューの湯気が絶えず流れ出し、そこには酸っぱい金属臭があったが、勝利ジンの臭いを打ち消すほどのものではなかった。部屋の奥には小さなバー、といってもただの狭苦しい片隅だが、そこからジンが大きなグラス一杯十セントで買えた。

「ちょうど探してたところだ」とウィンストンの背後から声がした。

振り向くと、調査部で働く友人のサイムだった。「友人」というのは必ずしも適切なことばではないかもしれない。最近では友人なんかおらず、同志がいるだけだ。だが同志の中には、一緒にいると他の同志よりは心地よい人物がいた。サイムは文献学者で、ニュースピークの専門家だ。実はかれは、ニュースピーク辞典第十一版の編纂に従事している専門家の大軍勢の一人なのだった。かなりのチビで、ウィンストンより背が低く、黒髪と飛び出したような大きな目をしていて、それが哀れみと嘲笑を同時にたたえており、話しかけているときにはこちらの顔を間近に観察するかのようだった。

「カミソリの刃を持ってないかと思ってね」とサイム。

「一枚もないよ!」とウィンストンは、ある種の後ろめたさからくる性急さで答えた。「いたる所探し回ったよ。もう存在しなくなってるんだ」

みんなカミソリの刃がないか人に聞いて回っている。実はウィンストンは、未使用のものを二枚ため込んでいた。過去何ヶ月も、カミソリが大欠乏状態だったのだ。党の店はいつも何かしら切らしていた。あるときはボタン、あるときは繕い用の毛糸、あるときは靴紐。いまはそれがカミソリの刃なのだ。手に入れようと思ったら、多少なりとも見込みがあるとすれば「フリー」マーケットでこっそりと探し回るくらいしかない。

「同じ刃をもう六週間も使ってるんだ」とウィンストンは、ウソを言った。

行列がまたじわりと前進した。それが止まると、かれは振り返ってサイムとまた向かい合った。二人とも、カウンターの端の山からベトベトの金属トレイを取った。

「昨日、囚人たちの絞首刑を見に行ったかい?」とサイム。

「仕事があったんだよ。映画で見るんじゃないかと思うぜ」とウィンストンは無関心を装った。

「実物を見るよりはるかに劣るな」とサイム。

かれのからかうような目がウィンストンの顔を値踏みした。その目はこう言っているようだった。「おまえのことはわかってるぞ。おまえなんかお見通しだ。おまえが囚人たちの絞首刑を見に行かなかった理由はよく知ってるとも」。知的な面で、サイムは反吐が出るほどの正統派だった。かれは敵の村へのヘリコプター襲撃や、思考犯罪者の裁判や自白、愛情省の監獄での処刑などに、不快なほど大喜びして満足を示すのだった。かれに話

しかけるのは、そうした話題から話をそらして、できることならニュースピークの詳細に没頭させるのが主眼だった。この話題であれば、かれは権威だったしおもしろかった。ウィンストンはちょっと顔をそむけて、その大きな黒い目の検分を避けた。

「なかなかの絞首刑だったんだが」とサイムは回想するように言った。「でも足を縛りあわせると台無しだと思うんだな。足をばたばたさせるのが見たいよ。そして何よりも、最後に舌がだらんと出てきて、それが青いんだ——それもかなり真っ青。そういう細部に魅力を感じるんだ」

「次どうぞ！」と、おたまを持った白エプロン姿のプロレが叫んだ。

ウィンストンとサイムはトレーを格子の下に置いた。それぞれにすばやく規定昼食がどしんと載せられた——ピンク色がかった灰色のシチュー 入りの金属製小皿、パンのかたまり、四角いチーズ、ミルクなしの勝利コーヒー入りコップ、サッカリンが一錠。

「あそこに空きテーブルがあるぜ、テレスクリーンの下のところ。途中でジンをもらってこよう」とサイム。

ジンは取っ手のない瀬戸物製のマグで支給されていた。二人は混雑した部屋の中を縫って横切り、上が金属製のテーブルの上に、トレーの上のものを移した。テーブルの片隅にはだれかがシチューをこぼしたのがたまっている。醜い液状の汚物で、ゲロみたいに見える。ウィンストンはジンのマグを手に取り、勇気をかき集めるために一瞬動きを止めて、油くさい液体を一気に飲み干した。目をしばたいて涙を払うと、急に腹が減っているのに気がついた。かれはスプーンでシチューを掻き込みはじめた。それはおおむねどろどろした液体の中に、スポンジ状のピンクがかった四角いものが入っていて、たぶん調理した肉なのだろう。二人とも、金属小皿を空にするまで一言も口をきかなかった。ウィンストンの左後方のテーブルでは、だれかが早口で絶え間なくしゃべっており、そのきつい口調はほとんどアヒルの鳴き声のようで、それが部屋全体の喧噪を突き破って聞こえてくる。

「辞書はどんな具合？」ウィンストンは騒音に負けないよう声を張り上げた。

「ぼちぼち。形容詞にかかったところ。すばらしいぜ」

サイムはニュースピークの話になったとたん、顔つきが明るくなった。金属小皿を脇に押しやり、パンの固まりを繊細な片手に、チーズをもう片方の手に取ると、テーブル越しに身を乗り出して、怒鳴らなくても話ができるようにした。

「第十一版は決定版なんだ。言語を最終形に仕立ててる——他のだれもこれ以外の言葉をしゃべらなくなったときの形なんだよ。おれたちの仕事が完成したら、君みたいな人はそれを最初っから学び直さないとダメだ。敢えて言うが、きみはおれたちの主な仕事は新語の発明だと思ってるだろう。だが大まちがい！ おれたちは言葉を破壊してるんだよ——それも大量に、毎日何百もね。言語を骨までそぎ落とす。十一版には、2050年までに古くなるような単語は一語たりとも入ってない」

サイムは飢えたようにパンをかじると何口か飲み込み、銜学者にも似た熱意で話を続けた。その細く陰気な顔が活気づき、目はもはやバカにしたような表情をなくして、ほとんど夢見るような表情になっている。

「何とも美しいんだな、この言葉の破壊ってやつは。もちろん大量に始末されるのは動詞や形容詞なんだが、処分できる名詞だって何百もある。同義語だけじゃない。反対語だってある。だって、何か別の言葉の単なる反対語なんて、存在が正当化できるかね？ 言葉はそれ自身の中にその反対語を含んでいる。たとえば「良い」を考えよう。「良い」という言葉があるのなら、「悪い」なんて言葉がなんで要るね？ 『非良い』でも十分に用

が足りる——いや、むしろこのほうがいい。こっちはずばり反対のことばだけれど、『悪い』だとそうはいかないから。あるいはまた、『良い』の強調版がほしいなら、『すばらしい』『見事』とかその他あれこれ、漠然とした役立たずな言葉をあれこれ抱えているのがまともと言えるか？『プラス良い』でその意味はカバーできる。あるいはもっと強いものが欲しいのなら『二重プラス良い』でいい。もちろん、いまの形式はすでに使われているけれど、ニュースピークの最終版ではそれ以外のものはなくなる。最終的には良さ、悪さの概念すべてがたった六語でカバーされる——現実にはたった一語で。この美しさがわからないか、ウィンストン？ もちろんもとはBBのアイデアだ」と彼は後付のように付け加えた。

ビッグ・ブラザーの名前が出て、ウィンストンの顔には生気のない熱意のようなものがチラリと浮かんできた。それでもサイムはすぐに、ある種の熱意欠如を感じ取った。

「ウィンストン、おまえニュースピークが本当に分かってないなあ」と彼はほとんど悲しげに言った。「自分でそれを書いているときにすら、おまえは相変わらずオールドスピークで考えてる。おまえが『タイムズ』に書くその手の記事をたまにいくつか読むよ。それなりにいいが、でも翻訳だ。内心ではおまえ、オールドスピークにこだわって、そのあいまいさや役立たずの意味の陰影を残したいんだろう。言葉の破壊の美しさがつかめていない。ニュースピークは世界中で、語彙が1年毎に減る唯一の言語だって知ってたか？」

ウィンストンは、もちろんそのくらい知っていた。彼はにっこりしてみせた。

「ニュースピークのそもそもの狙いは、思考の幅を狭めることなんだったのがわからないか？最終的に我々は思考犯罪そのものを文字通り不可能にする。それを表現する言葉がなくなるからだ。必要とされるあらゆる概念は、ずばり一語で表現され、その意味は厳密に定義され、その付属的な意味はすべてもみ消され忘れ去られる。すでに第十一版でその地点にかなり近づいている。だがプロセス自体はきみやおれが死んでからもずっと続く。毎年ことばはどんどん減る。今でももちろん、思考犯罪を犯す理由も口実もあり得ない。単なる自己規律、現実統制の問題だ。だが最終的にはその必要性さえなくなる。言語が完璧になれば革命は完全になる。ニュースピークは英社主義で英社主義がニュースピークだ」とかれは、何やら神秘めかした満足をこめて付け加えた。「ウィンストン、どんなに遅くても2050年には、存命中の人間はだれ一人として、いま我々が交わしているような会話は理解できなくなるというのがわかるか？」

「ただし——」とウィンストンは疑念をこめて始めたが、そこで口を閉じた。「プロレ以外は」とほとんど舌の先まで出かかっていたが、自分を抑えたそうした発言が何らかの形で非正統的ではないと完全には確信できなかったのだ。だがサイムは、かれが何を言おうとしていたかを感じ取ってしまっていた。

「プロレどもは人間じゃないから」とかれは事もなげに言った。「2050年には——おそらくはもっとはやく——オールドスピークのまともな知識はすべて消えてる。過去の文学すべては破壊される。チョーサー、シェイクスピア、ミルトン、バイロン——すべてニュースピーク版しかなくなる。何かちがうものに変えられただけじゃない、もともとの作品とは矛盾するようなものに変えられるんだ。党の文献すら変わる。スローガンでさえ変わる。「自由は奴隷」というスローガンなんて、自由の概念が廃止されたらあり得ないだろう？思考の環境そのものが丸ごとちがったものになる。実際、いま理解されているような意味での思考はなくなる。正統性とは考えないこと——考える必要がないことだ。正統性は無意識なんだ」

いつの日か、サイムは蒸散されるぞ、とウィンストンはいきなり深く確信した。知的すぎる。はっきりものが見えすぎ、率直に語りすぎる。党はそういう人間がお気に召さない。いつの日かこいつは消えうせる。それはかれの顔にはっきり書かれていた。

ウィンストンはパンとチーズを食べ終えた。椅子の中で少し横座りになってマグからコーヒーを飲んだ。左側のテーブルでは声高な人物がまだ何の反省もなく喋り続けていた。彼の秘書かもしれない若い女性が、ウィンストンに背を向けてすわっていて、彼の話に耳を傾け、その発言すべてに熱心に同意しているようだった。ときどきウィンストンは、若々しくいささかバカのような女性的な声でつぶやかれる、「ほんとおっしゃる通りだと思います、心底同意します」といった発言が耳に入ってきた。だがもう一つの声は一瞬足りとも、女子がしゃべっている時ですら止まることはなかった。ウィンストンはその男を見かけたことはあったが、創作部のお偉いさんだということ以外は何も知らなかった。30歳くらいの男性で、筋肉質ののとど、大きくよく動く口を持っていた。頭を少し後ろに傾けていて、そのすわっている角度のおかげでメガネに光が反射して、ウィンストンのほうには目のかわりに、黒い何もない円盤が二つ見えるだけだった。ちょっと恐ろしかったのは、彼の口から流れ出る音の流れから、単語一つたりとも識別できないということだった。たった一度だけ、ウィンストンは一節を聞き分けられた——「ゴールドスタイン主義の完全かつ最終的な排除」——がきわめて急速に出てきて、まるでひとかたまりの、まとめて鑄造された一行の活字のようだった。それ以外の部分はただの雑音、ガアガアという鳴き声だった。だがそれでも、男が言っていることを実際には聞き取れなくても、その全般的な性質についてはまったく疑問の余地はなかった。ゴールドスタインを糾弾し、思考犯罪者やサボタージュ犯への対応厳格化を要求しているのかもしれない。ユーラシア軍の残虐行為について激怒しているのかもしれない。ビッグ・ブラザーか、マラバル前線の英雄たちを賞賛しているのかもしれない——どれだろうと何のちがいがいもなかった。それがなんであろうと、そのあらゆる単語は純粋な正統教義、純粋な英社主義^{イングソック}なのは断言できた。目のない顔のあごが急速に上下に動くのを見ているうちに、ウィンストンはこれが本当の人間ではなく、一種の木偶人形なのだという不思議な感覚にとらわれた。しゃべっているのはこの男の脳ではなく、声帯なのだ。彼から出てくるものは言葉で構成されているが、それは本当の意味での発話ではない。それは無意識のうちに発せられる雑音で、アヒルがガアガア鳴くようなものなのだ。

サイムはしばらくだまっていて、スプーンの絵でシチューの淀みの中にパターンをくりかえしなぞっていた。向こうのテーブルからの声は急速にガアガア言い続け、まわりの喧噪にもかかわらず容易に聞き取れた。

「ニュースピークにある単語で、おまえが知ってるかはわからんが。ダックスピーク、アヒルのようにガアガア鳴くこと。二つの矛盾した意味を持つ面白い言葉の一つなんだ。敵について使うとそれは罵倒で、同意する相手に使うとそれはほめ言葉になる」

間違いなくサイムは蒸発させられるな、とウィンストンは再び考えた。かれはそう思っ
ていささか悲しかった。とはいえサイムが自分を軽蔑し、少し嫌っているのは十分に承知していたし、理由さえあればすぐに自分を思想犯罪者として告発できるのも知っていた。サイムには何かいささかおかしいところがあった。何か欠けているものがある。思慮、うわの空な部分、救いとなるようなある種の愚かさ。彼が非正統的だとは言えない。彼は英社主義^{イングソック}の原理を信じ切っていたし、ビッグ・ブラザーを崇拜し、勝利には大喜びで、逸脱者が大嫌い、しかも本気で嫌うにとどまらず一種の落ち着きのない情熱をもって嫌っ

ていた。最新の情報をひたすら求め、通常の党員はその足下にも及ばない。だが彼にはかすかな不敬の雰囲気がかつてつきまといついていた。言わぬが仏のことを言ってしまうし、あまりに本を夜見すぎているし、画家やミュージシャンのたまり場である栗の木酒場にも通っていた。栗の木酒場に通ってはいけないという法律はないし、不文律さえないが、それでもこの場所はなぜか不吉だった。党の古い、追い落とされた指導者たちは、そこに集まるのが通例だったが、その後ついに粛清された。ゴールドスタイン自身も、何年も前、何十年も前に、ときどきそこに姿を現したとされる。サイムの運命は簡単に予想がついた。だがサイムがほんの三秒ほどであっても、自分の、つまりウィンストンの秘密の意見がどんなものかを把握したら、即座に思考警察に売り渡されることになるのは事実だった。それを言うなら、他のだれでも同じだ。だがサイムは他のみんなよりその度合いが強い。情熱だけでは不十分だ。正統教義は無意識なのだ。

サイムが目を上げた。「パーソンズがきたぜ」

その声色の何か「あの薄らバカが」と付け加えたように感じられた。パーソンズは、勝利マンションでのウィンストンのご近所で、確かに部屋を横切ってくるところだった——太った中くらいの大きさの男性で、金髪でカエルのような顔を持っている。三十五歳だというのに、すでに首とウエストに脂肪の塊をつけつつあったが、その動きはすばやく少年っぽかった。その外見すべては男の子をそのまま大きくしたような感じで、既定のオーバーオールを着ているとはいえ、スパイ団の青い短パン、灰色のシャツ、赤いネックチーフを身につけているところを想像せずにはいられなかった。かれを思い描くときにはいつも、くぼみのある膝小僧、ぷくぷくした前腕からまくられた袖を思い描いてしまう。実際パーソンズは、コミュニティハイキングなど、身体活動で口実さえあれば、必ず短パンを身につけるのだった。彼はこちら二人を、陽気な「いよう、いよう」で迎え、テーブルについて、強烈な汗のにおいを放った。そのピンクの顔からは滴となった湿気がいたるところに立ち上っていた。その発汗能力は驚異的だった。コミュニティセンターでは、彼が卓球をやっていたのはすぐわかった。パドルのハンドルが湿っているからだ。サイムは長い言葉の列が書かれた紙切れを取り出して、それを指に挟んだインキ鉛筆で検討していた。

「こいつ、昼食時間もこうやって仕事だぜ」とパーソンズはウィンストンを小突いた。「熱心さってやつだよな。そこに持っているのはなんだい、旦那？　なんかオレにはちょっとむずかしすぎるものだろうな。スミスのだんな、なんであんたを追いかけ回してるか教えてやろうか。オレに払うの忘れた、あの購読費だよ」

「どの購読だっけ？」とウィンストンは自動的に服の上からお金を探った。給与の四分の一ほどは自発的な購読用に取り置かれていたが、それがあまりに多すぎて、どれがどれかもわからないほどなのだった。

「憎悪週間のやつだよ。ほら——家ごとの基金。うちの街区はオレが財務担当なんだ。全面的に打ち出すつもりなんだぜ——すごいショーを仕掛けてやる。いやあ、言うておくが勝利マンションが街路でいちばんでかい旗の掲示をしてなくても、オレのせいじゃないからな。二ドル出すって約束してくれたよな」

ウィンストンは、しわくちんの汚い紙幣二枚を見つけて渡し、パーソンズはそれを小さな手帳に書き留めた。文盲ならではのていねいな手書き文字だ。

「ところでだね、旦那、うちの乞食小僧が、昨日パチンコであんたを狙ったって聞いたよ。それについてははっきり折檻しといたから。それどころか、二度とやったらパチンコ

を取り上げると言ってやったよ」

「処刑にいけなくてちょっと機嫌が悪かったんだろう」とウィンストン。

「ああ、まあな——オレが言いたいのは、まともな精神を見せるってことだ、そうだろ？ イタズラばかりの物乞いチビどもだ、あの二人とも。だが目の鋭さときたら！ 連中が考えるのはスパイどものことだけ、それに戦争だ、もちろん。うちの娘がこないだの土曜に何をしたと思う？ 部隊がバーカムステッドのほうにハイキングにでかけてたときだぜ？ 他に女の子二人をいっしょにこさせて、ハイキングから抜けだし、午後中ずっと変な男を尾行してたんだ。2時間もずっと尾行して、森の中をずっと、そしてそれからアマーシャムに入ったら、パトロールに引き渡したんだ」

「なぜそんなことを？」ウィンストンはいささか驚いた。パーソンズは勝ち誇ったように続けた。

「うちの子はそいつがまちがいなく何やら敵のエージェントだと確認したんだ——たとえばパラシュートで降下したかなんかかもな。だが重要な点というのはだな、旦那。そもそもなんで娘がそいつに目をつけたと思う？ そいつが変な種類の靴を履いてたの気がついたんだよ——そんな靴を履いてるやつにはこれまでお目にかかったことがないそうさ。だからそいつは外国人だった可能性が高い。七歳の小娘にしちゃ、かなり賢いだろが？」

「その男はどうなった？」とウィンストン。

「ああ、そいつはオレにはわからんよ、もちろん。だがこうなっても驚かんね」とパーソンズはライフルを構え、そして舌を鳴らして爆発を示してみせた。

「いいことだ」とサイムはあいまいに言ったが、自分の紙切れから顔を上げようとしなかった。

「もちろん万が一の危険は冒せないからな」ウィンストンも唯々諾々と合意した。

「オレが言いたいのは、だって戦争が続いてるもんさ」とパーソンズ。

これを裏付けるかのように、頭上のテレスクリーンからラップが漂い出てきた。だが今回は軍事的勝利の宣言ではなく、単に豊富省からの発表だった。

熱烈な若々しい声が叫んだ。「同志諸君、聞きたまえ！ 輝かしいニュースがあります。生産のための戦いに勝利しました！ あらゆる消費財の産出量についていまや完了した計上を見ると、生活水準は前年比で最低でも20パーセント高まったことがわかりました。今朝はオセアニア全土で、抑えようのない自発的なデモが生じ、労働者たちが工場やオフィスから行進して出てくると、横断幕を掲げて通りをパレードし、ビッグ・ブラザーへの感謝を述べたのです。彼の賢明なるリーダーシップが与えてくださった、我々の新しい幸福な生活に対する感謝を口々に述べました。集計された数字をいくつかお示ししましょう。食品は——」

「我々の新しい幸福な生活」という一節が何度か繰り返された。これは豊富省の最近のお気に入りだった。パーソンズはラップの音を取られて、啞然とするような荘厳さでそれを聴き続けた。一種の教化された退屈さだ。数字は追えなかったが、それが何らかの形で満足すべきものなのだということがわかった。彼は巨大で汚いパイプを引っ張り出したが、それはすでに焦げたタバコが半分詰まっていた。葉タバコの配給が週100グラムでは、パイプをいっぱいまで満たすのはめったに不可能だったのだ。ウィンストンは、慎重に水平を保った勝利タバコを吸っていた。新しい配給は明日まで始まらないし、残ったタバコは四本だけだったのだ。その瞬間では、彼は遠くの雑音に対しては耳を閉ざし、テレ

スクリーンから流れ出すものに聞き耳をたてた。どうやらチョコレート配給を週 20 グラムに増やしてくれたことで、ビッグ・ブラザーに感謝するデモまであったらしい。そしてほんの昨日、配給が週 20 グラムに減らされるという発表があったばかりだったのだ。こんな話を、みんながたった 24 時間後に鵜呑みにするなんてあり得るのだろうか？ そう、みんな鵜呑みにした。パーソンズは楽々と、動物の愚かさをもって鵜呑みにした。向こうのテーブルの目なし動物はそれを熱烈に、情熱的に鵜呑みにして、先週の配給量は 30 グラムだったと示唆するものを全員追跡し、糾弾し、蒸発させようというすさまじい欲望を発揮して見せた。サイムもそうだ——もっと複雑な、二重思考を使ったやり方で、サイムも鵜呑みにしていた。ならば、記憶を持っているのは自分一人なのだろうか？

テレスクリーンからはすばらしい統計が流れ出し続けた。去年と比べると、食品、衣服、住宅、家具、鍋、燃料、船、ヘリコプター、本、赤ん坊がすべて増えていた——あらゆるもの、病気や犯罪や狂気以外はすべて増えていたのだ。毎年毎年、一分ごとに、全員、あらゆるものが急激に猛然と上昇していた。サイムがさっきやっていたように、ウィンストンはスプーンを手にとって、それをテーブルの上にこぼれた淡い色の肉汁につっこんで、そこから長い線を引っ張り出してパターンを描きはじめた。かれは人生の物理的な様相について、恨みがましく思案した。ずっとこんな様子だったのだろうか？ 食べ物はいつもこんな味だったろうか？ 彼は食堂を見回した。天井の低い混雑した部屋で、無数の肉体の接触により壁はべとついていた。ポコポコの金属テーブルや椅子が、あまりに密に寄せ集められているので、すわると肘が触れあう。曲がったスプーン、へこんだトレイ、粗雑な白いマグカップ。あらゆる表面は脂ぎって、あらゆる割れ目に汚れが詰まっている。そしてひどい人とひどいコーヒーと金属味のシチューと汚れた衣服が入り混じった、酸っぱい匂い。いつも腹の底と肌には、一種の抗議があった。何か自分が権利を持つものをだまし取られた、という感覚だ。何かひどくちがっていたという記憶は、確かになかった。正確に思い出せるあらゆる時代には、食べ物はいつも不十分で、靴下や下着で穴だらけでないものではなく、家具はいつもボロボロで壊れかけ、部屋の暖房は弱すぎ、地下鉄は混雑し、家は崩壊寸前で、パンは黒っぽく、お茶はめったに手に入らず、コーヒーは泥のような味で、紙巻きタバコは不十分——合成ジンを除けば安く豊富なものはない。そしてもちろん、これは肉体が年を追うごとに悪化はしたとはいえ、その不快と汚れと物不足、果てしない冬、靴下のベトベトぶり、いつも動かないエレベーター、冷たい水、カスだらけの石けん、バラバラになる紙巻きタバコ、奇妙なひどい味の食べ物に心が病むというのは、これが物事の自然な秩序などではないというしるしなのではないだろうか？ 物事がかつてはちがったという先祖からの何か記憶でもない限り、なぜそれが耐えがたいなどと感じてしまうのか？

彼はまた食堂を見回した。ほとんどみんな醜悪だったし、制服の青いオーバーオール以外の服を着ていても、やはり醜かっただろう。部屋の向こう端には、一人でテーブルに向かっている、小柄で奇妙なほどカナブンに似た男がコーヒーを飲んでおり、その小さな目は左右に怪しげな視線をキョロキョロ向けている。あたりを見回さなければ、党が理想として設けた身体タイプ——背の高い筋肉質な若者と胸の張り出した乙女、ブロンドの髪、活気にあふれ、日に焼けて何の懸念もない——が実在して主流ですらあると思ってしまうのは、何とも簡単なことだなあ、とウィンストンは思った。実は彼が判断できる限り、このエアストリップ・ワンの人々の大半はチビで暗く機嫌が悪かった。あのカナブンめいたタイプの連中は、おもしろいくらいに省庁にはびこっているのだ。小柄で陰気な男たち、

人生のきわめて早い時期に太りはじめ、短足でシャカシャカと動き、太った不可思議な顔で目はやたらに小さい。党の支配下ではそういうタイプが最も繁栄しやすいらしい。

豊富省からの発表は、再度のトランペット音と共に終わり、キンキンした音楽がかわりに流れはじめた。パーソンズは数字を大量に見せられてなにやら興奮したらしく、パイプを口から取り出した。

「豊富省はまったく、今年はすばらしい仕事ぶりだな」と彼は、いかにも事情通ぶって首を振って見せた。「ちなみにスミスの旦那よ、融通できるようなカミソリの刃なんか持ちちゃいねえよな？」

「一つもない」とウィンストン。「こっちだって同じ刃を六週間も使ってるんだ」

「まあそうだよなあ——訊くだけ訊いてみようと思ってな」

「すまん」とウィンストン。

隣のテーブルのガアガア声は、省の発表中は一時的に鎮まっていたが、それが以前に負けない大音量で再開した。なぜだかウィンストンは、気がつくといきなりパーソンズ夫人のことを考えていた。ゴワゴワの髪の毛と、顔のしわにはホコリが溜まった女性だ。二年しないうちに、その子供たちは母親を思考警察に告発するだろう。パーソンズ夫人は蒸散させられる。サイムも蒸散。ウィンストンも蒸散。オブライエンも蒸散。だがパーソンズ自身は決して蒸散させられない。ガアガア声の目なしの生き物は決して蒸散させられない。省庁の迷路のような廊下を実に巧みにカサコソうろつく、小さなカナブンめいた連中も、決して蒸散させられない。あの黒髪女子、創作部からの女子——彼女も決して蒸散させられない。自分はだれが生き残りだれが消えるか、直感的にわかるようだった。だが生存を可能にするのがずばり何なのかとなると、なかなかわからなかった。

この瞬間、彼は激しくどやされて、空想から無理矢理引き出された。隣のテーブルの女子が少し向きを変えて、こちらを見ていた。あの黒髪女子だ。こちらを横目で見ていたが、その視線は奇妙なほど強烈だった。目が合った瞬間、彼女はまた目をそらした。

ウィンストンの背中に冷や汗が吹き出てきた。全身をひどい恐怖の衝撃が貫いた。一瞬で消えたが、何かしつこい不安が残った。なぜ彼女はおれを見ていたんだろう？なぜおれをつけまわすんだろう？残念ながら、自分がきたときに彼女がすでにいたのか、後からやってきたのか思い出せなかった。だが少なくとも昨日、二分憎悪のとき、特にこれという必然性もないのに彼女は真後ろにすわったのだ。真の狙いは自分に聞き耳をたてて、十分に大声で怒鳴っているかを確かめることだった可能性が高い。

さっきの考えが戻ってきた。おそらく彼女は思考警察の一員ではないのだろう。だがそれを言うなら、最も危険なのはまさに素人のスパイなのだ。彼女がいつまで自分を見ていたかはわからなかったが、ヘタをすれば五分にもなった可能性があり、自分がその間に表情を完全に抑制していなかった可能性もある。何か公共の場にいたりテレスクリーンの範囲内にいたりするときに、物思いにふけるのはきわめて危険だった。ほんのつまらないことでも命取りになりかねない。神経質な顔のひきつり、無意識のうちに見せる不安の表情、ぶつぶつぶやく習慣——少しでも異常性の示唆を伴うものや、何か隠し事をしていという示唆を持つものは何でも。いずれにしても、不適切な表情（たとえば勝利が発表されたときに、不信の表情をするなど）はそれ自体が処罰の対象となる刑だ。ニュースピークにはそれを指す単語さえある。フェイスクライムと呼ばれるものだ。

女子は再びこちらに背を向けた。ひょっとすると結局彼女は自分を尾行したりはしておらず、二日続けて近くにすわったのは、偶然だったのかもしれない。彼のタバコの火が消

えたので、それを慎重にテーブルの端に置いた。中の煙草の葉を温存できたら、仕事の後で吸い終えよう。隣のテーブルにいる人物は思考警察のスパイである可能性がかなり高く、自分が愛情省の監獄に3日以内に入れられる可能性はかなり高いが、タバコの吸いさしは無駄にしてはならない。サイムは自分の紙切れを折りたたんでポケットにしまった。パーソンズはまた話し始めた。

「旦那、話したかもしれねーがな、うちの物乞い二人がマーケットばばあのスカートに火を放ったんだよ」と彼はパイプの吸い口を回しつつ笑って見せた。「BBのポスターでソーセージを包んでたのを見かけたからってな。後ろから忍び寄って、マッチ箱で火をつけてやった。かなりのヤケドを負ったはずだぜ。まったくろくでもない。だが芥子まがいに鋭い！スパイでいまや連中がやるのはそういう一級の訓練なんだ——オレの頃よりもいいくらい。お上がガキどもによこした最新の装備は何だと思う？鍵穴越しに聞き耳立てるための盗聴耳当てだよ！娘がこないだ一つ持って帰ってきたんだ——うちの居間のドアで試してみて、鍵穴に耳をあてるより2倍もよく聞こえるとさ。もちろんただのオモチャだぜ、言っとくけど・それでも、ちゃんとした考え方は身につくだろ、え？」

その瞬間にテレスクリーンが突き刺すようなホイッスルを鳴らした。仕事に戻る合図だった。三人とも即座に立ち上がり、エレベーター周辺の争いに加わり、そして残った煙草の葉がウィンストンのタバコからこぼれ落ちた。

第6章

ウィンストンは日記にこう書いていた：

三年前のことだった。暗い夜のこと、大きな鉄道駅の近くにある狭い脇道だ。彼女は壁にある戸口近く、ほとんど光のない街灯の下に立っていた。若い顔を分厚く塗っている。私が惹かれたのは実はその塗りなのだった。その仮面のような白さと、明るい赤い唇。党の女性は絶対に顔を塗らない。道にはだれもおらず、テレスクリーンもなかった。彼女は二ドルと言った。私は――

そのときには先を続けるのはつらすぎた。彼は目を閉じて指を押し当て、絶えず繰り返されるその光景を絞り出そうとした。一連の卑猥な言葉を絶叫したい圧倒的なほどの誘惑にかられた。あるいは壁に頭を叩きつけ、テーブルを蹴り倒し、インキの壺を窓から投げ出したい――自分を苦しめる記憶を黒塗りしてくれるものなら、どんな暴力的で騒々しいことでもやりたくなった。

最大の敵は、自分自身の神経系なのだ、と彼は考えた。自分の中の緊張が、いつ何か目に見える症状としてあらわれてもおかしくない。数週間前に道端ですれちがった男のことを思い浮かべた。ごく普通に見える男性で、党员で、三十五歳から四十歳ほど、背は高めでやせていてブリーフケースを持っていた。数メートル離れたところで、その男の顔の左半分がいきなり、何かけいれんで歪みはじめた。ちょうどすれちがったときにも、同じことが起きた。ちょっとしたひくつき、震え、カメラのシャッター音並みに一瞬。だが明らかに習慣的だ。そのときに自分が思ったことも思い出した。あの哀れな野郎はおしまいだ、と思ったのだ。そして恐ろしいことに、その行動はおそらくは無意識のものだったのだ。中でも最も致命的な危険は寝言だった。彼の知る限り、それを防ぐ方法はないのだ。

彼は息を吸い込むと書き続けた。

その女と戸口をぬけて裏庭を通り、地下の台所に行った。その壁際にベッドがあり、テーブルにひどく灯りを落としたランプがあった。彼女は――

歯を食いしばった。唾を吐き捨てたくなった。地下室の台所の女のことと同時に、彼は妻キャサリンのことを考えた。ウィンストンは結婚していた――少なくともかつては結婚していた。たぶんいまでも、妻が死んでいないとわかっている以上、結婚しているのだろう。再びあの地下の台所の、ぬるい息詰まる匂いが漂ってくるようだった。その匂いはムシや汚い服や、悪質な安手の香水でさらにひどくなっていたが、それでも魅惑的だった。というのも党の女性はだれも決して香水など使わず、また使うところを想像すらできないからだ。香水を使うのはプロレだけだった。彼の内心では、その香りは交接とどうしようもなく混じり合っているのだった。

その女性についていったのは、二年かそこらで初めてのぶりかえしだった。売春婦との関係はもちろん禁止されていたが、それはたまに勇気を出して破るルールの一つなのだ。危険ではあるが、生死に関わるものではない。売春婦といっしょのところを捕まれば、強制労働キャンプで五年くらいか。他に違反がなければそれ以上にはならない。そして現行犯で捕まるのさえ避ければ、実に簡単だった。貧困地区は、すぐに自分を売りに出す女だらけだった。中にはジンのボトル一本で買える女もいた。プロレはジンを飲んではいけないことになっていたのだ。暗黙のうちに、党は売春を奨励する傾向さえあった。完全に抑圧できない本能のはけ口となるからだ。単なる背徳など大した問題ではない。それがこっそり行われ、歓びがなく、埋もれて軽蔑されている階級の女しか関与していなければそれでいい。許されざる犯罪は、黨員同士の乱交だった。だが——これは大粛清で糾弾された犯罪者たちがいつも必ず自白する罪の一つなのだが——そんなことが実際に起きているのを想像するのはむずかしかった。

党の狙いは、単に男女が党の統制の効かない忠誠関係を形成するのを防ぐというだけではない。その本当の口に出さない目的は、性行為からあらゆる歓びを取りのぞくことだった。結婚の内外問わず、敵は愛ではなくエロティズムだ。黨員同士の結婚はすべて、そのために任命された委員会の承認が必要で——この原理は決して明示されなかったが——そのカップルが、肉体的に惹かれあっているという印象を与えたら、常に許可は下りなかった。結婚の唯一認知された目的は党に奉仕する子どもを得るためだ。性交はいささか嫌悪すべきちょっとした手術、浣腸を受けるようなものと見られた。これまた、はっきり述べられることはなかったが、間接的にあらゆる黨員に子供時代からずっと刷り込まれるのだ。青年反セックス同盟などといった組織まであった。これは両性の完全な禁欲を訴える団体だ。あらゆる子どもは人工授精（ニュースピークでは人精と呼ばれる）で得られ、公的機関で育てられるのだ。これが完全に真面目に主張されているわけではないのはウィンストンも知っていたが、それでもなぜかこれは党の全般的イデオロギーにうまくはまっているのだ。党は性的本能を殺すか、殺せないならそれを歪めて汚いものにしようとしていた。なぜそうなのかはわからなかったが、それが自然なことに思えた。そして女性に関する限り、党の努力はおおむね成功していた。

再びキャサリンのことを考えた。別れてからもう九年、十年——十一年近くになるはずだ。彼女のことをほとんど考えないのが不思議だった。ときには何日も続けて、自分が結婚していたことさえ忘れてしまえるのだ。いっしょにいたのはたった十五ヶ月ほどだ。党は離婚を認めず、子どもがない場合には離別を奨励するのだった。

キャサリンは背が高く金髪的女子で、きわめて背筋がのびた、見事な動きをしていた。目鼻だちのはっきりした、わし鼻の顔をしていた。気高いと呼べそうな顔なのだが、それもその背後には能う限り何一つないのだというのを発見するまでのことだ。結婚生活のきわめて早期に彼は、キャサリンこそ自分が出会った中で、例外なく最も愚かで粗野で空疎な心の持ち主だと確信した——とはいえそれは、ほとんどの人よりも彼女を親密に知っていたというだけのことかもしれないが。彼女の頭の中にはスローガンでない思考など一つたりともなく、党から渡されたら彼女が嚙呑みにできないほどまぬけな主張は、まったく何一つとして存在しないのだった。「人間セントラ」と彼はキャサリンに内心であだ名をつけていた。だが一つのことさえなければ、彼女との暮らしも耐えられただろう。その一つとは——セックスだ。

触れたとたん、彼女は身を縮めて硬直するようだった。彼女を抱きしめるのは、ちょう

つがいをつなげた木製の人形を抱くようなものだった。そして奇妙だったのは、彼女がこちらを抱きしめているときですら、彼女が同時に全力で自分を押しやっているような感じがしたということだ。彼女のこわばった筋肉がそんな印象を与えたのだ。目を閉じてそこに横たわり、抵抗するでもなく協力するでもなく、身を任せるだけ。きわめて屈辱的で、しばらくすると陰惨になった。だがそれですら、二人がセックスせずにいようと合意できたら、いっしょに暮らすのも我慢できただろう。だが奇妙なことに、それを拒否したのはキャサリンのほうだった。できることなら二人は子どもを作らねばならない、と彼女は言った。このためこのパフォーマンスは相変わらず続き、週に一回、それが不可能でない限りは定期的に行われた。かつて彼女は、朝にそれをわざわざ告げて、何か晩にやらねばならないことで、忘れてはならないことなのだとでも言うようだった。彼女はそれについて二種類の呼び名を使った。一つは「赤ん坊づくり」で、もう一つは「私たちの党への義務」(そう、彼女は本当にこの表現を使った)だった。間もなく彼は、この指定日がやってくると、本当にはっきりとうんざりする気分を感じるようになった。だが運のいいことに子どもはついでできず、最終的に彼女は試みを諦めることに合意して、その後間もなく二人は別離した。

ウィンストンはかすかにため息をついた。そしてペンを再び手にして書いた。

彼女はベッドに身を投げ出し、即座に、何一つ前戯なしに、想像できる限り最も粗野でひどいやり方で、私は彼女のスカートを引き上げた。そして――

暗いランプの明かりの中に立っている自分の姿が甦ってきた。鼻孔にはムシや安い香水が漂い、内心では敗北と嫌悪感がたちこめ、その瞬間ですらそれはキャサリンの白い肉体の思い出と入り混じっていた。その肉体は、党の催眠力により永遠に凍りついていたのだ。なぜ常にこうでなければならぬんだ？ なぜ何年も間を置いて、こんな薄汚い取っ組み合いをするのではなく、自分だけの女性を持ってないのだろうか？ だが本当の情事などほとんど考えられないできごとだった。党の女性はみんな似たり寄ったりだ。禁欲は、党への忠誠と同じくらい彼女たちに根深く植えつけられている。ゲームや冷水、学校やスパイ団や青年同盟などで叩き込まれるゴミクズ、講義、パレード、歌、スローガン、軍楽などで叩きこまれるものにより、自然な感情が彼女たちからは追放されてしまったのだ。理性は、例外もいるはずだと告げていたが、心はそれを信じようとはしなかった。みんな不妊なのだ、党がそうあるべきだと意図した通りに。そして彼が求めたのは、愛されること以上に、生涯たった一度でもいいからその美德の壁を打ち倒すことだった。性行為をうまくやったら、それは反逆だ。欲望は思考犯罪だ。キャサリンを目覚めさせることさえ、もしそれを実現できていたとしても、誘惑と同じなのだ。彼女は妻だったというのに。

だが残りの話を書き留めねばならなかった。彼はこう書いた。

ランプを明るくした。光の中で見た彼女は――

暗闇の後では、パラフィンランプのかすかな灯りも非常に明るく思えた。初めてその女をまともに見た。彼女のほうに一步踏み出したが、情欲と恐怖に満ちて立ち止まった。ここにくることで犯したリスクは痛いほどわかっていた。出たところでパトロールが自分を捕まえることも十分にあり得た。それを言うなら、やつらがこの瞬間にもすぐ外で待ち構えているかもしれない。ここにやってきた目的を果たさずにここを離れたとしても――！

どうしても書き留めておかねばならない、告白しなければならぬ。そのランプの灯り

の中で突然わかったのは、その女が歳寄りだということだった。顔に塗りたくった絵の具はあまりに分厚くて、段ボールの仮面のようにひび割れそうだった。髪は白髪交じりだった。だが本当にゾットする細部は、彼女の口が少し開いて、そこには洞窟のような黒さ以外何も見えなかったことだ。歯が一本もなかったのだ。

彼は急いで書き殴った。

灯りの中で見た彼女はかなりの老婆で、少なくとも五十歳にはなっていた。それでも私はまるで気にせずやった。

再び指をまぶたに押し当てた。ついにそれを書き止めたが、何も変わらなかった。この療法は失敗だった。汚い言葉を絶叫したい衝動はいつになく強かった。

第7章

「希望があるなら、それはプロレにある」とウィンストンは書いた。

希望があるなら、プロレにあるとしか考えられなかった。というのも、その大量の黙殺された大衆、オセアニア人口の85パーセントにしか、党を破壊する力は生み出せないからだ。党は内部から打倒はできない。党の敵があっても、集まったりお互いを見つけたりすることさえできない。伝説の友愛団が存在したにしても（確かに存在する可能性はあった）、その団員たちが二、三人以上の大人数で集まれるとは考えられなかった。反乱というのは、ある目つき、声の抑揚、最大でもたまにささやかれる言葉でしかない。だがプロレたちは、どうにかして自分たちの強さに気がつけたなら、はかりごとをする必要などない。単に立ち上がり、ハエを振り落とす馬のように自分たちを揺り起こすだけでいい。彼らさえその気になれば、明日の朝にでも党を粉々に粉碎できる。どう考えても、遅かれ早かれ彼らはそうしようと思いつくはずでは？ だがそれなのに――!

かつて、混雑した通りを歩いていたとき、何百人もの叫び声――女性の叫び声――が少し先の脇道から噴出したのを思い出した。それは怒りと絶望の侮れない絶叫であり、深い大音響の「おおおおお」という声で、それが鐘の音の残響のように響き続けたのだ。彼の心は躍った。始まったんだ！ 暴動だ！ プロレたちがついに身をふりほどいた！ その場所にたどりつくとき、見えたのは二、三百人の女性の暴徒たちが青空市場の屋台に密集しているところだった。その顔は、沈み掛けた船の死にゆく乗員たちであるかのように悲劇的だった。だがこの瞬間に、全般的な絶望は大量の個別の口論へと解体していった。どうやら屋台の一つがブリキのシチュー鍋を売っていたようだ。ひどい安手の代物だったが、どんなものでも調理器具は常に入手困難なのだ。いまや供給がいきなり底をついた。うまく手に入れた女性たちは、他のみんなに小突かれ押しやられつつ、自分のシチュー鍋を手をそこを離れようとして、その他何十人も女性は屋台のまわりにむらがって、屋台主をえこひいきだと糾弾し、どこかに予備のシチュー鍋を隠しているはずだと糾弾していた。新たに叫び声が響いた。ふくれあがった女性二人、うち一人は髪を振り乱して、一つのフライパンを取り合い、相手の手からそれを引きむしろうとしていたのだ。しばらく二人は引っ張り合いを演じていたがそこで取っ手がはずれてしまった。ウィンストンはうんざりして彼女たちを眺めた。だがほんの一瞬だけ、たった数百人ののどからの叫びで、ほとんど恐ろしいとすら言える力が鳴り響いたではないか！ なぜこいつらは、本当に意味があることについて、決してこのように叫べないのだろうか？

彼は書いた。

目覚めるまで彼らは決して反逆せず、反逆した後にならなければ彼らは目を覚ませない。

これは、党の教科書のどれかをほぼ引き写したようなものかもしれない、と彼は思案した。党はもちろん、プロレを隷属から解放したと主張していた。革命前には、彼らは資本家にとんでもなく抑圧されており、飢えて殴られており、女性は炭坑で強制労働させられ（実は女性はいまでも炭坑で働いていた）、子どもは六歳で工場に売られていたのだ。だが同時に、ダブルシンクの原理に忠実に、党はプロレがもともと劣った存在であり、常にわずかな単純な規則の適用によって、動物のように従属させられねばならないのだと教えていた。現実には、プロレたちについてはほとんどわかっていなかった。大して知る必要はなかったのだ。連中が働いて繁殖し続ける限り、他の活動など重要ではなかった。放っておけば、アルゼンチンの草原に放たれた牛のように、彼らに自然と思える生活様式に、一種の先祖伝来のパターンに逆戻りしたことだろう。生まれ、泥の中で育ち、十二歳で働きはじめ、ごく短期間だけ美しさが花開いて性欲が生まれ、二十歳で結婚して、三十歳で中年になり、ほとんどは六十歳で死ぬ。厳しい肉体労働、家庭と子どもの世話、近所とのつまらない口論、映画、サッカー、ビール、そして何より博打が彼らの心の地平を満たしている。やつらを統制しておくのはむしろかしくはない。思考警察のエージェント数人が常に彼らの間を動き回り、ウソの噂を流して、危険になりそうと思われた数少ない個人に目をつけては排除すればいい。だが、彼らに党のイデオロギーを植えつけようという試みは一切行われなかった。プロレが強い政治感情を持つのは望ましくなかった。連中に求められるものは、原始的な愛国心だけだ。労働時間を増やしたり配給を減らしたりする必要が出たら、それに訴えかければいいのだ。そして彼らが不満を抱いても（ときにはそういうこともあった）その不満は行き場がなかった。全般的な思想がないので、チマチマした具体的な不満にそれを集中させるしかないのだ。大きな邪悪はすべて、やつらには気づかれなかった。プロレの大半は家にテレスクリーンさえ持っていなかった。市民警察ですら、彼らにはほとんど介入しなかった。ロンドンでは大量の犯罪が起きていて、泥棒、盗賊、売春婦、ヤクの売人、ありとあらゆる恐喝者がいて、世界の中の別世界を構成していた。だがそれがすべてプロレたち自身の中で起きていたから、まったく重要性はなかった。道徳面でのあらゆる問題で、彼らは先祖伝来の規範に従うのを許されていた。党の性的な清教徒主義は彼らには適用されなかった。乱交は処罰を受けず、離婚も許された。それを言うなら、プロレたちが少しでも必要性や願望を示したら、宗教的な信仰すら許されただろう。連中は疑惑にすら値しない。党のスローガンに言うように「プロレと動物は自由である」

ウィンストンは手を下に伸ばして、静脈瘤を慎重にひっかいた。またかゆくなってきたのだ。思いが必ず戻ってくるのは、革命前の人生が本当はどんなものだったか、決して知ることができないということなのだった。彼はピアソン夫人から借りた、子供向け歴史教科書を引き出しから取り出し、その一節を日記に書き写し始めた。

古い時代（とその本には書かれていた）、栄光の革命より前には、ロンドンは今日のわたしたちが知っている美しい都市ではありませんでした。それは暗く、汚い、ひどい場所で、ほとんどだれも十分に食べるものがなく、何百人、何千人もの貧しい人たちが、足にはくブーツもなく、眠るために頭の上に屋根さえなかったのです。きみたちと変わらない歳の子どもたちが、ざんこくなご主人さまのため、一日十二時間も働かねばなりません。そのご主人たちは、はたらきがおそいとムチで叩き、干からびたパンくずと水しか与えなかったのです。でもこのひどい貧し

さの中に、ごくわずかに大きく壮大で美しい家があって、そこには金持ちがすんでいて、最大三十人も召使いたちがそのめんどろをみていました。この金持ちたちは、しほんかとよばれていました。こいつらはデブでみにくい連中で、じゃあくな顔をしていました。この向かいのページの絵にあるような顔です。長い黒い上着を着ているのがわかりますね。これはフロックコートと呼ばれていました。そして奇妙なピカピカした、ストーブのえんとつみたいな形の帽子をかぶっています。これはトップハットとよばれていました。これがしほんかたちの制服で、ほかのだれもそれを着てはいけなかったのです。しほんかたちは世界のすべてを所有していました。家も、工場も、お金もぜんぶです。だれかが言うことをきかないとろうやに入れてしまうか、あるいは仕事をとりあげてうえじにさせてしまえたのです。ふつうの人がしほんかに話をしたければ、身をちじこまらせて、おじぎをして、帽子をぬいで「サー」と呼びかけねばなりませんでした。しほんかたちみんなの親玉は王様と呼ばれ、そして――

だがかれは、カタログの残りも知っていた。ローン製の法衣を着た枢機卿、アーミン毛皮製ローブの裁判官、首と手のさらし台、足をはさむさらし台、踏み車の刑、キャットオーナインの刑、知事閣下の晩餐会、法皇のつま先に口づけする風習の話も出てくる。また初夜権と呼ばれるものもあったが、おそらくこれは子供向けの教科書では言及されていないだろう。これは、あらゆる資本家は自分の工場で働くどんな女性とも寝る権利があるという法律なのだ。

このうちどのくらいがウソか、どうすればわかるだろうか？ 平均的な人間は、現在のほうが革命前よりもいい暮らしをしているというのは、確かに本当だという可能性はある。それを否定する唯一の証拠は、自分自身の骨身から出てくる物言わぬ抗議、自分が暮らしている状態は耐えがたいもので、どこか別の時代にはもっとちがっていたはずだという本能的な感覚なのだった。現代生活について、本当に特徴的なことは、その残酷さと不安定さではなく、単にそれがあまりに殺伐としていて、貧相で、歓びがないことなのだ、ということに思い当たった。人生は、あたりを見回せば、テレスクリーンから流れ出るウソとは似ても似つかないばかりか、党が達成しようとしている理想とすらまるでちがっているのだ。その人生の広大な領域は、黨員にとってすら中立的で非政治的であり、陰惨な仕事をなんとか切り抜け、地下鉄での場所をめぐる争い、すりきれた靴下をつくろい、サッカー錠剤をねだり、紙巻きタバコの吸い殻を取っておくといった代物なのだった。党が設定した理想は何か巨大でおそろしく、輝くものだった――鋼鉄とコンクリートの世界、巨大機械と恐ろしい兵器の世界――戦士と狂信者の国で、それが完全に一体となって前へと行進し、みんな同じ思考を考え、同じスローガンを叫び、永遠に働き、戦い、勝利し、糾弾している――三億人がみんな同じ顔だ。だが現実には、崩壊する薄汚い都市に、食べ物不十分な人々が穴の空いた靴でうろろうして、いつもキャベツとひどい便所の匂いがする、継ぎを当てた19世紀の家屋で暮らしているというものだ。かれはロンドンの幻影を見たように思った。広大でボロボロで、百万ものゴミ箱の都市だ。それとまざりあっているのがパーソンズ夫人の姿で、皺だらけの顔と荒れた髪をして、詰まった排水管を寄り辺ない様子でいじくりまわしている。

手を下に伸ばしてまた足首を搔いた。昼も夜もテレスクリーンは、今日の人々は食事も衣服ももっとあり、家も改善し、娯楽もよくなっていると証明する統計で人々の耳を潰し

ていた——寿命も延び、労働時間も短くなり、五十年前の人々よりも大きく、健康で、強く、幸福で、知能も高く、教育水準も上がっているという。その一言たりとも、裏付けることも否定することもできない。たとえば党は、今日では成人プロレの40パーセントは読み書きできると主張する。革命前は、その数字はたった15パーセントだったと言われる。党によれば、乳児死亡率は千人あたりたった160人だが革命前はそれが300人だったそうだ——そんな調子で続く。未知数が二つある一つの方程式のようなものだ。歴史書のあらゆる単語、疑問の余地なく受け入れられているものですら、完全なおとぎ話だという可能性も十分ある。彼の知る限り、初夜権などという法律は一度も存在せず、資本家などという生き物も、トップハットなどという衣装もまったく無かったかもしれないのだ。

すべては霞の中へとかき消えていった。過去は消され、その消したことも忘れられ、ウソが真実となる。人生で、たった一度だけ、彼は——そのできごとの後だ。それが重要なことなのだ——確固たるまちがえようのない、偽装行為の証拠を所有したことがある。それを、三十秒も指の間に持っていたらどうか。1973年のことだったにちがいない——いずれにせよ、キャサリンと別離した頃のことだった。だが本当に関連した日付は、その七年か八年前なのだった。

その物語が本当に始まったのは60年代半ば、大粛清の時期で、革命の元々の指導者たちが一気にまとめて一掃されたときだった。1970年になると、ビッグ・ブラザーその人以外は一人たりとも残っていなかった。残りは全員が裏切り者や反革命家だとして暴かれていた。ゴールドスタインは逃亡し、だれも知らないところに隠れていた。そして残りのうち、数人はあっさり消えうせ、大多数は壮観な公開裁判の後で処刑された。その裁判で、彼らは自分の犯罪を自白したのだ。最後の生き残りたちの中には、ジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードという三人の男がいた。この三人が逮捕されたのは1965年だったはずだ。ありがちなことだが、三人とも一年かそれ以上姿を消したので、だれもかれらの生死すら知らなかったが、そこでいきなり、いつもながらのやり方で己の犯罪を告白するために引き出されてきたのだ。敵との内通を自白した(当時も敵はユーラシアだった)。公金の着服、数々の信頼された党員の殺害、革命が起こるずっと前から始まっていた、ビッグ・ブラザーの指導に対する陰謀、そして何十万人もの死を招いた妨害工作。こうしたことを告白してから、彼らは恩赦を受け、党に復帰して、閑職とはいえ立派そうな名前の役職を与えられた。三人とも『タイムズ』に長い卑屈な論説を書き、自分たちの裏切りの理由を分析してみせて、つぐないをすると約束した。

かれらが釈放されて間もなく、ウィンストンは実際にその三人が栗の木酒場にいるのを見かけていた。横目でかれらを眺めていたときの、怯えきった魅惑は忘れられない。自分よりはるかに年配の男たち、古い世界の遺物で、党の英雄的な日々から残された、最後の偉大な人物たちとすら言えた。地下闘争と内戦の栄光がまだかすかに彼らにまわりついていた。すでにその時点で事実や日付はばやけつつはあったが、自分がビッグ・ブラザーの名前を知るより何年も先に、かれらの名前を知っていたという気がした。だがかれらは違法者、敵、不可触の存在であり、一、二年で絶対確実に殲滅される運命にあった。一度思考警察の手に落ちた者は、一人として最終的にそこから逃れることはできない。墓場に送り返されるのを待つ死骸なのだ。

三人の間近のテーブルにはだれもいなかった。こうした人物の近くにいるのを見られることさえ賢明ではなかった。かれらはこの酒場の名物である、丁子で味付けしたジンのグラスを前にだまってすわっていた。三人のうち、その外観がもっともウィンストンに感銘

を与えたのはラザフォードだった。ラザフォードはかつては有名な戯画作家であり、その強烈な漫画は、革命の前や革命の間に、世論をかきたてるのに役立った。いまでも、かなり間をおいて、彼の漫画は『タイムズ』に登場していた。それは単に、以前の様式の模倣でしかなく、奇妙なまでに生気がなく、説得力のないものではあった。いつもそれは、昔のテーマを焼き直していた——スラム貧困住宅、飢えた子ども、市街戦、トップハットの資本家たち——バリケードの上ですら資本家たちは相変わらず、過去に戻ろうという絶え間ない絶望的な試みとしてトップハットにしがみついているようだった。ラザフォードは怪物めいた人物で、べとつく灰色のたてがみを持ち、顔はたるんでシワが刻まれ、唇はぶあつく黒人的だった。すさまじく強い人物だったこともあるのだろう。いまやその巨体はたるみ、だらしなく、ふくれあがり、あらゆる方向に垂れ下がっていた。こちらの目の前で崩壊しつつあるようで、山が崩れるところのようだった。

人気のない、15時という時間だった。この酒場にそんな時間になぜいたのか、もう思い出せなかった。ほとんど無人だった。テレスクリーンからはキンキンした音楽が流れていた。三人はその隅っこでほとんど身動きせずじろすわり、決して口を開かなかった。注文もなく、給仕が新しいジンのグラスを持ってきた。かれらの隣のテーブルにはチェス盤があり、駒が並べられていたが、だれもゲームをしようとはしなかった。そして、ひょっとして全部で三十秒ほどだったかもしれないが、テレスクリーンに何か起きた。流れる曲が変わり、音楽の調子も変わった。そこに入り込んだ何かがあった——だが表現しづらいものだ。奇妙な、割れるような、やかましい、耳触りな音符だ。心の中でウィンストンはそれを黄色い音符と呼んでいた。するとテレスクリーンからの声がこう歌っていた。

大きな栗の木の下で
あなたとわたし
おたがい売り渡す
みんな転がる栗の木で

三人は身じろぎすらしなかった。だがウィンストンが再びラザフォードの荒れ果てた顔をちらりと見ると、その目に涙があふれているのがわかった。そして初めて、内心である種の身震いが起こり、自分が何に対して身震いしたかもまだわからないうちに、アーロンソンとラザフォードが二人とも鼻を折られていることに気がついたのだった。

その後間もなく、三人とも再逮捕された。どうやらかれらは、釈放されたその瞬間から、新しい陰謀を企てたらしい。二回目の裁判で彼らは、かつての犯罪すべてを改めて自白し、さらに大量に新しいものもつけくわえた。かれらは処刑され、その運命は党史に記録され、後世への警告とされた。その五年ほど後の1973年に、ウィンストンは自分のデスクに気送管からちょうど飛び込んできたばかりの文書の束を開いているところだったが、そこで他の文書にまぎれこまされて、そのまま忘れられたらしい紙切れに出くわした。丸まったその紙をのばしたとたん、その重要性がわかった。それは十年ほど前の『タイムズ』から破り取られた半ページだった——ページの上半分だったので、日付が入っていたのだ——そしてそこには、ニューヨークでの何か党会議での代表団写真が載っていたのだ。その集団の中心に大きく映っていたのはジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードだった。まちがえようがなかったし、どのみちその名前は写真したのキャプションに書かれていた。

重要なのは、どちらの裁判でも三人とも、その日に彼らがユーラシアにいたと自白して

いたことだった。彼らはカナダの秘密飛行場から、シベリアのどこかにある会合場所に飛び、ユーラシア参謀たちと野合して、重要な軍事機密を売り渡したのだ。その日付がウィンストンの記憶にこびりついていたのは、それがたまたま真夏の日だったからだ。だがこの物語はすべて、無数の他の場所にも記録されているはずだ。考えられる結論は一つしかない。自白がウソなのだ。

もちろん、これ自体は新発見でもなんでもない。その時点ですらウィンストンは、粛清で抹消された人々が、本当に糾弾されている犯罪を犯したとは想像していなかった。だがこれは確固たる証拠だった。廃棄された過去の断片であり、まちがった地層にあらわれて地質学理論を破壊する化石の骨のようなものだ。これをどうにか世界に発表し、その意義が知らされたら、党を粉碎するに十分なものだった。

彼はすぐに作業に取りかかった。その写真が何かを見て、その意味を理解したとたん、彼はそれを別の紙で覆った。幸運なことにそれを開いたとき、テレスクリーンの視点からは逆向きになっていたのだった。

彼はひざに筆記パッドをのせて、椅子を後ろにおしやっけて、できるだけテレスクリーンから離れた。顔を無表情に保つのはむずかしくはないし、呼吸ですら努力次第ではコントロールできる。だが鼓動はコントロールできないし、テレスクリーンはかなり繊細なので鼓動を拾える。彼は、自分では十分ほどと思った時間がたつにまかせ、その間ずっと、何かの偶然——たとえば机上いきなり突風が吹いてくるなど——で自分が裏切られるのではという恐怖に苦しめられた。そして、二度とそれを表に出すことなく、彼はその写真を他の反古紙といっしょに記憶穴に落とし込んだ。さらに一分くらいもすれば、おそらくそれは灰燼に帰したことだろう。

それが十年——いや十一年前のことだった。今日ならおそらく、彼はその写真をとっておいたことだろう。それを自分の指で持ったという事実が、いまだに何か自分にとってちがいをもたらすように思えるというのは不思議なことだった。その写真自体は、それが記録したできごとと共に、ただの記憶になっているというのに。過去に対する党の掌握力があまり強くないのは、もはや存在していない証拠のかけらが、かつては存在していたから、なのだろうか？

だが今日、それがどうにかして灰から復活させられるとしても、その写真は証拠にすらならないかもしれない。すでにかれがその発見をした時点では、オセアニアはもはやユーラシアと戦争をしておらず、三人の死んだ男たちが自国を裏切った相手は、イースタシアのエージェントに対してであったはずだ。それ以来、他の変化もあった——二つか、三つか、いくつかは思い出せなかった。彼らの自白は何度も書き直されて、元の実事や日付など、ごく小さな意義さえもはやなくなっているだろう。過去は変わっただけでなく、絶えず変えられ続けている。かれが最も悪夢の感覚により苦しめられたのは、なぜそんな詐欺行為が行われたのか、自分自身も一度たりともはっきり理解したことがなかったという点だった。過去を捏造する目先の利益は明らかだったが、その最終的な動機は謎めいていた。彼は再びペンを手にしてこう書いた。

やりかたはわかる。理由がわからないのだ。

彼は、それまで何度も思案したように、自分自身がイカれているのではないかと思案した。キチガイというのは、単に立った一人の少数派なのかもしれない。ある時代には、地球が太陽のまわりを巡ると信じるのは狂気だった。今日では、過去が変えられないと信じ

るのが狂気なのかも。そんな信念を抱いているのは自分一人かもしれず、もし一人なら、つまり自分はキチガイだ。だが自分がキチガイだという考えはそんなに気にならなかった。恐ろしいのは、自分が同時にまちがっているかもしれないということだった。

彼は歴史の児童書を手に取り、その口絵となっているビッグ・ブラザーの肖像を眺めた。その催眠術のような目がウィンストン自身の目をのぞきこんだ。まるで何か巨大な力が自分にのしかかっているようだった——頭蓋骨の内部に貫通し、自分の脳に対して攻撃をしかけ、自分の信念を恐怖により否定させ、自分自身の感覚という証拠を否定するようほとんど説得してしまうのだ。最終的には、党は二足す二が五だと発表し、こちらはそれを信じるしかなくなる。遅かれはやかれ、連中がその主張をするのは避けられなかった。党の立場の論理がそれを要求するのだ。単に体験の有効性にとどまらず、外部の現実の存在そのものが、暗黙の内にかれらの哲学では否定される。邪説にとっての邪説は常識だ。そして恐ろしいのは、やつらがそれ以外の考え方をしたらこちらを殺すということではなく、やつらのほうが正しいかもしれないということなのだ。というのも、なぜ二足す二が四だとわかるのだろうか？あるいはなぜ重力が作用するとわかるのか？過去が変えられないということも？過去と外部世界が心の中にしかなく、心自体は統制可能ならどうなってしまうのか？

だがちがう！かれの勇気がいきなり、自力で硬直するかのようだった。心の中に、何ら明らかな連想で呼び起こされたわけでもないのに、オブライエンの顔が浮かび上がった。かれは以前にも増して、オブライエンが自分の味方だと確信した。かれはオブライエンのために日記を書いていたのだ——オブライエンに宛てて。それはだれも読まないはずの絶え間ない手紙だが、それは特定人物に宛てられたものであり、その論調はその事実からきっていたのだ。

党は、自分の目と耳の証拠を拒絶せよという。それが連中の最後の最も本質的な命令だ。自分に対して並び立つさまじい力を考えると、かれの心は沈んだ。どんな党の知識人だろうと、論争すれば自分をやすやすと論破するだろうし、細かい議論は自分には理解できず、まして答えることもできないだろう。だが正しいのはこちらなのだ！まちがっているのは向こうで、自分が正しいのだ。自明なこと、バカげたこと、真実であることは擁護されねばならない。自明のことは真実であり、それにしがみつくなのだ！確固たる世界は存在し、その法則は変わらない。石は固く、水は濡れていて、支持のない物体は地球の中心に向かって落ちる。自分がオブライエンに語っているのだという気持と、自分が重要な公理を述べているという感覚をもって、かれはこう書いた。

自由とは、二足す二が四になると言う自由である。それが認められれば、その他すべてが続く。

第8章

どこか通路の奥底から、コーヒーをローストする匂い——本物のコーヒーで、勝利コーヒーではない——が街路にが漂い出てきた。ウィンストンは思わず立ち止まった。二秒ほどだろうか、かれは半ば忘れかけた子供時代の世界に戻っていた。そのときドアが叩きつけられ、その香りはまるで音だったかのように、唐突に打ち切られたように感じられた。

彼は舗装の上を数キロ歩いたところで、静脈瘤がズキズキしていた。コミュニティセンターでの晩を欠席したのはこの三週間で二回目だった。軽率な行動だった。センターでの出席回数が慎重にチェックされているのはまちがいがなかったからだ。原則として党員には余暇などなく、ベッドで寝るとき以外は決して一人きりではない。働くか、食事か、寝ていないときには、何らかに共同娯楽に参加しているものとされた。孤独を好む様子を示唆するものはすべて、一人で散歩にでかけることさえ、常に少し危険なのだった。ニュースピークにはそれを指す言葉があった。自生 (OWNLIFE) と呼ばれ、個人主義と畸人ぶりを意味するものだ。だがこの晩、省を出たとき、四月の空気のかぐわしさに惹かれたのだ。空はその年にそれまで見たものよりも温かい青で、いきなりセンターでの長く騒々しい晩、退屈で疲れるゲーム、講義、ジンを潤滑剤にした痛々しい仲間騒ぎが耐えがたく思えたのだ。思わずかれはバス停から向きを変え、ロンドンの迷路に迷い込み、まずは南、それから東、そしてまた北にさまよい、知らない通りで迷子になりつつ、自分がどの方向に向かっているかもほとんど気にしなかった。

かれは日記にこう書いていた。「希望があるなら、それはプロレにある」。このことばが絶えず甦ってきた。神秘的な真実と露骨なばかばかしさを湛えた発言だ。かれはどこか、かつてセントパンクレアス駅だったものの北と東にある、広大な茶色のスラムにいた。歩いている石畳の通りには二階建ての小さな家が並び、そのボロボロの戸口はすぐに歩道に出るようになっていて、なぜか不思議とネズミの巣穴を思わせるのだった。舗石のあちこちには汚水の水たまりがあった。暗い戸口の中や外、さらに両側に伸びる狭い裏道には、驚くほど大量の人々が群れていた——魅力の絶頂にある女子たちが、粗野に口紅を塗りたくった口をしている。そしてその女子を追いかける若者たち、さらにその女子が十年たてばどうなるかを示す、デブでヨタヨタ歩く女たち、さらにねじれた足でシャカシャカ歩く老いぼれて腰の曲がった生き物たち、ボロをまとった裸足の子供たちがその水たまりで遊んで、母親からの怒りの叫びを受けて逃げ惑う。その通りの窓の四分の一ほどは、割れて板張りになっていた。ほとんどの人はウィンストンのことなどまるで気に留めなかった。数人が、警戒をこめた好奇心をもって眺めていた。レンガのような赤い上腕をエプロン上で腕組みしている化け物じみた女性二人が、戸口の外でしゃべっていた。ウィンストンは近づきつつ、その会話のかけらを耳にした。

『『そうだよ』って言ってやったんだよ。『そりゃあ結構なこって。だけどあんたああた

しとおんなし立場になったら、あたしとおんなしことやったはずだよ』ってね。『口ではなんとでも言えるけど、でもあんたはあたしみたいな問題かかえてないんだから』

もう一人は言った。「そうだねー。まったくその通り、ほーんとそーゆーもんだよ」

その騒々しい声が突然止まった。女たちは彼が通り過ぎるのを、敵意をこめた沈黙の中で見守った。だが正確には敵意ではない。ただの警戒のようなもの、一瞬の身構え、何か見慣れぬ動物が通り過ぎるときと同じだ。党の青いオーバーオールは、こんな通りでは見慣れたものであるはずもない。実際、そこで文句なしの業務でもない限り、そんな場所にいるのを見つかるだけでも賢明ではない。パトロール員に出くわしたら呼び止められかねない。「同志、書類を拝見できますか？ こんなところで何を？ 仕事を終えたのは何時ですか？ これはいつもの帰り道ですか？」——そしてそれが延々続く。いつもとちがう道を歩いて帰るのを禁止する規定があるわけではない。だが思考警察が聞きつけたら、注目されるには十分だった。

いきなりその通り全体が沸き立った。あらゆる方向から警告の叫びが聞こえた。みんなウサギのように戸口に飛び込んでいる。ウィンストンのすぐ先で、若い女性が戸口から飛びだして、水たまりで遊んでいる幼児を抱え上げ、エプロンでくるんで、また戸口に飛び込んだ。そのすべてが流れるような一動作だ。その同じ瞬間に、アコーディオンのような黒スーツを着た男が脇の横丁から出てきて、興奮したように空を指さしながらウィンストンに駆け寄った。

「スチーマーだ！ 旦那、気をつけて！ 頭上から一発くるぞ！ 急いで腹ばいに！」とそいつは叫んだ。

「スチーマー」というのは、プロレがどういうわけかロケット爆弾につけたあだ名だった。ウィンストンは即座に腹ばいになった。プロレがこの手の傾向をするときには、ほぼまちがいがなく正しいのだ。ロケットがくるときには、数秒前に告げる何やら本能を持っているようなのだ。ロケットは音速よりも速いはずなのに。ウィンストンは頭上でしっかり腕を組んだ。轟音があがり、舗石が波打つようだった。軽い物体が背中に降り注いだ。立ち上がると、最寄りの窓からのガラスのカケラだらけなのがわかった。

かれは歩き続けた。爆弾はその通りの 200 メートル先で家の集まりを破壊したのだった。黒煙のかたまりが空に垂れ下がり、その下にはしっくりのほこりが立ち上って、すでにその廃墟のまわりに群集がたかっていた。すぐ先の舗石の上に小さなしっくりの山ができていて、その真ん中にまばゆい明るい筋が見えた。近寄ると、それが手首でちぎれた人間の手なのがわかった。その血まみれの切り口以外は、その手は完全に白くなっていて、まるで石膏の模型のようだった。

その代物をドブに蹴り込み、それから群集を避けるため、右に曲がって横丁に入った。三、四分で爆弾の影響を受けた場所をぬけ、すると街路のむさ苦しい群集生活は、何事もなかったかのように続いていた。二十時近く、プロレが通う飲み屋（「パブ」とかれらは呼んでいた）は客でいっぱいだった。薄汚いスイングドアは、絶えず開いたり閉じたりしていて、その中から小便、おがくず、酸っぱいビールの匂いが漂ってきた。突き出した家屋の正面が作る片隅で、男三人がきわめて密接して立っており、その真ん中の男が畳んだ新聞を持ち、他の二人はそれを男の肩越しに読んでいた。彼らの表情を見分けられるほど近づく以前から、ウィンストンは彼らの身体のあらゆる動きで、三人が没頭しているのがわかった。明らかに三人が読んでいるのは、何か真面目なニュースなのだった。数歩離れたところまでやってきたとき、いきなりその三人が別れて、二人が激しい口論を始めた。

一瞬、彼らはほとんど殴り合いを始めそうな勢いだった。

「クソめが、オレの言ってることがわかんねえのかよ？ 七で終わる数字はもう十四ヶ月も当たってねえんだって言ってるだろが！」

「当たったよ、その間にも」

「当たってねえたら！ ウチん戻れば二年分のやつを全部、紙切れに書いといてある。時計仕掛けみたいにちゃんと書いとくんだ。それで言うんだが、七で終わる数字は一度も――」

「いや、七はホントに当たってるって！ もうその数字全部を思い出せそうなほどだよ。最後は四、ゼロ、七だ。二月だった――二月の二週目」

「二月が聞いて呆れるぜ！ オレ全部まちがいがなく書いてあるんだ。それで言うんだが七で終わる――」

「まったくいい加減にしろって！」と三人目。

三人は宝くじの話をしていたのだ。ウィンストンは三十メートル離れてから振り返った。相変わらず口論は、活き活きとした情熱をこめた顔で続いていた。宝くじは、毎週さまざまな賞金を支払うので、プロレたちが真面目に注目する唯一の公的イベントなのだった。おそらく、宝くじが死なずにいる大きな、いや唯一の理由であるプロレは、何百万人もいそうだった。それがかれらの飲び、愚行、暇つぶし、知的刺激なのだ。宝くじの話となれば、ほとんど読み書きできない人々ですら、複雑な計算ができるしとんでもない記憶力を発揮するようだった。必勝法や予測、幸運のお守りを売るだけで生計を立てている人々が山ほどいた。ウィンストンは宝くじ運営にはまったく関係なかった。豊富省が管理しているのだ。だがその当選金がおおむね架空だというのは知っていた（実際、党の間はみんな知っていた）。本当に支払われるのは少額だけで、大金が当選する人物は存在しないのだ。オセアニアのある部分と他の部分との間にまともな相互通信が存在しないので、これを手配するのは簡単なことだった。

だが希望があるとすれば、それはプロレにあるのだ。それにはしがみつくしかない。言葉にすると、まともには聞こえる。それが信仰と化すのは、その歩道あたりを歩き交う人間を見たときだ。曲がって入った通りは下り坂となった。この近隣には前にきたことがあるような気がして、あまり遠からぬところに大通りがあるように思った。どこか先のほうで、叫び声が響いた。その道は急に曲がり、それが階段に続いて、そこを下ると沈み込んだロジがあり、屋台が何戸か並んで、しなびて見える野菜を売っていた。この瞬間に、ウィンストンは自分がどこにいるのかわかった。この路地は大通りに続いているのだ。そして次の角を曲がったところ、五分もかからないところに、いまや日記で使っている白紙の本を買った古物屋があるのだ。そしてさほど遠からぬ小さな文具屋で、彼はペン入れとインキびんを買ったのだった。

階段のてっぺんで、しばし立ち止まった。路地の反対側には、貧相な小さなパブがあり、その窓は曇りガラスに見えるが、実際には単にほこりで覆われているだけなのだった。きわめて高齢の男性が、背は曲がっているが元気で、白い口ひげをエビのように前方に突き出させつつ、スイングドアを押し開けて入っていった。立って見守るうちに、少なくとも八十歳にはなっているこの老人は、革命が起きたときにはすでに中年だったはずだとウィンストンは思い当たった。彼などの数少ない数名こそは、いまや消滅した資本主義の世界との間に存在する最後のつながりなのだった。党そのものの中でも、革命以前に思想を形成された人物はあまり残っていなかった。50年代と60年代の大粛清で、高齢世代はおお

むね一掃され、生き残ったわずかな人々もとっくの昔に脅されて、完全な知的降伏を示していた。今世紀初期の状況について正直な説明をしてくれる人物が生き残っているとすれば、プロレだけだ。いきなり、日記に書き写した歴史書の一節が心に甦り、ウィンストンはイカレた衝動に囚われた。パブに入り、あの老人の知己をなんとか得て質問するのだ。こう尋ねよう。「少年の頃の暮らしを話して下さい。その頃はどんな様子でしたか？ いまより物事はよかったですでしょうか、それともひどかったのでしょうか？」

自分に怯える暇を与えないよう急いで、かれは階段を下りて狭い通りを横切った。もちろんキチガイ沙汰だった。いつもながら、プロレと話をしたり、かれらのパブに通ったりしてはいけないというはっきりしたルールはなかったが、あまりに珍しい行動なので、絶対に目についた。パトロールが現れたら、急にめまいがしたのだと言い訳してもいいが、たぶん信じてはもらえないだろう。ドアを押し開けると、醜悪なチーズめいた酸っぱいビールの匂いが顔に吹き付けてきた。かれが入ると、声の喧噪の音量が半分ほどに下がった。背後でみんなが自分の青いオーバーオールを見ているのが感じられた。部屋の向こう端で続いていたダーツの試合が、三十秒ほども途切れただろうか。後を追ってきた老人はバーに立ち、何やらバーマンと口論している。そのバーマンは背が高くでっぷりしたかぎ鼻の若者で、すさまじく太い腕をしている。他に数名がグラスを手立てに立っていて、その光景を眺めていた。

老人は、肩をまっすぐいからせた。「おう、十分にいいいに頼んだじゃろが。このクソろくでもねえ飲み屋に、パイントのマグが一つもないとは言わせんぜ」

「で、そのパイントとやらってのは、いったいぜんたい何なんですかい？」とバーの男は、カウンターに指先を置いて身を乗り出した。

「こんにゃろを見やがれてんだ！ バーマンを名乗るくせにパイントが何かもご存じねえ！ だからよ、パイントってのはクォートの半分で、ガロンは四クォートになるんだろが。お次はABCでも教えろってか？」

「聞いたことないですなあ」とバーマンは手短かに言った。「リットルか半リットル——うちはそれしか出さない。目の前の棚にグラスがあるでしょう」

老人は言い張った。「おいら、パイントがいいんだ。パイントを出してくれるなんざ簡単なおことだろうが。おいらの若い頃には、ろくでもねえリットルなんざあなかったぜ」

「あんたが若い頃といえば、みんな木の上に住んでたでしょうよ」とバーマンは言って、他の客たちをちらりと見た。大笑いが起きて、ウィンストンが入ってきたことで生じた気まずさは消えたようだった。老人の蒼白だった顔がいまや紅潮した。かれは向きを変え、何かつぶやいて立ち去りつつ、ウィンストンにぶつかった。ウィンストンはその腕をつかんだ。

「一杯おごらせてください」とかれは言った。

「これはご立派な紳士で」と相手は、再び肩をまっすぐいからせた。ウィンストンの青いオーバーオールには気がつかなかったようだ。「パイント！」とかれは声高にバーマンに言い放った。「ワロップーパイント」

バーマンは、半リットルの濃い茶色のビールを、カウンター下のバケツですすいだけの分厚いグラス二つに注いだ。プロレのパブで買えるドリンクはビールだけだ。プロレはジンを飲んではいけないことになっていた。とはいえ、実際には手に入れるのは容易ではあった。ダーツの試合はまた全開となり、バーにかたまった男たちは宝くじの話を始めた。ウィンストンの存在は一瞬忘れられた。窓の下に木製のテーブルがあり、そこでなら

老人と、盗み聞きされる心配なしに話げできた。恐ろしく危険なことだったが、とにかくこの部屋にはテレスクリーンはない。ここに入った瞬間にウィンストンが確かめたことだった。

グラスを前に腰を据えつつ、老人はグチった。「あんじゃろ、パイント入れてくれたっていいのによ。半リットルじゃ足りねえんだ。満足いかん。丸一リットルだと多すぎだ。膀胱がうずいちまう。まして値段がな」

「お若い頃以来、いろいろ大きな変化をごらんになってきたでしょうね」とウィンストンは用心深く言った。

老人の淡い青い目が、ダーツ盤からバーに動き、バーから男子用トイレのドアへと移った。まるでその変化が起こると思ったのが、このバーの部屋だとも言うようだった。

やっとかれは口を開いた。「ビールはマシだったな。それに安かった！ おいらが若い頃は、うすいビール——ワロップって呼んだもんだ——は一パイント四ペンスだ。戦争前だげな、もちろん」

「どの戦争ですか？」とウィンストン

「どれも戦争だろ」と老人は漠然と言った。グラスを掲げ、また肩をのぼした。「んじゃ、あんたに最高の健康を祈って！」

そのやせたのどで、鋭くとがったのど仏が、驚くほど急速に上下動をして、ビールは消えた。ウィンストンはバーにでかけ、半リットルをさらに二杯持ってきた。老人は、丸一リットル飲むことに対する彼の偏見を忘れたらしかった。

「あなたは私よりずっと高齢ですね。私が生まれる前に成人していたはずです。昔の日々、革命前がどんなだったか思い出せるでしょう。私の年齢のみんなは、そういう時代のことを実は何も知らないんです。本で読んだだけで、本に書かれていることが本当とは限らない。それについてご意見をうかがいたい。歴史の本では、革命前の生活はいまとはまったくちがうと言んです。最悪の抑圧、不正、想像を絶するほどの貧困があったと。ここロンドンでは、大半の人々は生まれてから死ぬまで、一度も十分に食べたことがなかったと。半分は足に履くブーツもなかった。一日十二時間労働で、九歳で学校を出て、一部屋に住人が寝ていたと言います。そして同時にごくわずかな人々、ほんの数千人ほどがいました——資本家たち、と呼ばれている人です——金持ちで権力を持っていたんです。所有できる者ほとんどすべてを所有していたんです。巨大で豪華な家に召し使い三十人を使って暮らし、自動車や馬四頭立ての馬車を乗り回し、シャンパンを飲んで、トップハットをかぶり——」

老人はいきなり活気づいた。

「トップアットだと！ それが出てくるなんて不思議なもんだ。ちょうどそいつが、ほんの昨日、頭に浮かんだばかりですよ。なぜかはわからん。ただ考えてたんよ、もう何年もトップアットなんざ見てないってな。あっさり消えちまった、んなもんは。おいらが最後にかぶったのは、義理の妹の葬式だったなあ、そしてそれは——日付まではわからんが、もう五十年も前だったか。もちろん、んのときだけ借りたんだげな、わかるだろ」

ウィンストンは辛抱強く言った。「トップハット自体はどうでもよいのです。重要なのは、そういう資本家——それと少数の弁護士や聖職者とか、資本家にたかっていた連中——はこの世の支配者だったってことです。すべては彼らの便益のために存在していた。あなた——一般人、労働者——はそいつらの奴隷だった。こちらに何でも好き勝手なことができた。家畜のようにカナダに出荷することもできた。やりたければこちらの娘たちと

も寝られた。キャットオーナインテイルズとかいうもので鞭打たれるよう命じることでもできた。横を通るときには帽子を脱がねばならない。あらゆる資本家は従僕どもの群れを従えて――」

老人は再び活気づいた。

「従僕！ いやあ、その言葉をきくのは、えらく久しぶりだな。従僕ときたか！ ンとに懐かしいぜ、いやホント。思い出すなあ。ロバ年も前だったか――ときどき、日曜午後にアイドパークにときどき出かけて、野郎どもが演説するのを聞いたもんだ。救世軍とかローマカトリック教会、ユダヤ人、インド人――いろんな連中がいたなあ。んでもって、一人いた野郎が――名前は出てこねえが、すげえ力のこもった話屋だったなあ。半端な罵倒ぶりじゃなかったぜ。「従僕ども！ ブルジョワジーの従僕ども！ 支配階級の走狗ども！」寄生虫――そんな言い方もしたな。それとアイエナ――まぢがいなくアイエナ呼ばわりはしてた。もちろんそいつが言っていたのは労働党のことだがな、わかるだろ」

ウィンストンは、話がかみ合っていないという印象を得た。

「私が本当に知りたかったのはこういうことなんです。昔と比べていまのほうが自由だとお感じになりますか？ もっと人間として扱われていますか？ 昔の時代には、金持ちたち、てっぺんの連中――」

「キソク院」と老人は懐かしそうに述べた。

「貴族院、とおっしゃりたいなら。お尋ねしたいのは、そうした連中は金持ちであなたが貧乏だと言うだけで、劣った存在として扱えたのでしょうか？ たとえば、そいつらを『サー』と呼んで、通り過ぎるときには帽子をぬがねばならなかったというのは事実ですか？」

老人は深く考え込むようだった。答える前に、ビールの四分の一ほどを飲み干した。

「そうだな、帽子をそいつらに向けて触れてやると喜んだよな。敬意を示すことになる、みたいなの。おいらは別にそういう感じはしなかったんだが、それでもよくやったもんよ。やんなきゃいけなかった、と言おうか」

「そしてそいつらが――歴史の本で読んだ話を引用しているだけなんです――そいつらやその召使いどもは、あなたを歩道からつきとばしてドブに落とすというのがよくあったんですか？」

老人は言った。「いつだか、んな連中の一人がおいらを押しやがったな。まるで昨日のことみてえに思い出すぜ。競艇の夜だ――競艇の夜にはみんな、えらく荒っぽくなりやがんだよ――んでシャフツベリー通りで若い野郎にぶつかっちゃってよ。大した紳士だったぜ、そいつ――ドレスシャツ、トップアット、黒いオーバーコート。そいつあ何やら歩道をジグザグに歩いてやがって、こっちあうっかりぶつかっちゃったわけよ。そいつ言いやがる。『どこ見て歩いてるんだ』とな。おいらは言ってやったぜ。『てめえがクソ歩道を買ったつもりでもいやがんだか？』そいつは言いやがる。『なめた口きくと、そのクソ首ひねり落としてやる』。んで『てめえ、飲んだくれてやがんな。すぐにもサツに突き出しちゃう』ってな。そしたら、信じられっかよ、そいつおいらの胸ぐらつかんでよ、どつきやがって、こっちは投げ出されちまってバスに轢かれる寸前よ。まあおいらも若かったしよ、ここは一発くらわせちゃろうとしたら、そんなとき――」

ウィンストンは絶望感に襲われた。この老人の記憶は、細かい話のゴミためてしかない。一日中質問しても、まともな情報は得られまい。やはり党史は、ある程度は正しいのかもしれない。いや完全に正しいことさえあり得る。かれは最後に一回だけ試してみた。

「きちんと説明できていなかったかもしれませんね。言いたいのはこういうことです。あなたはずいぶん長く生きてこられた。人生の半分は革命前に過ごされている。たとえば1925年には、もう成人してましたよね。ご記憶からするとどうでしょう、1925年の生活はいまよりよかったのか悪かったのか？ 選べるものなら、いま生きるのと当時生きるのとどっちがいいですか？」

老人は思索にふけるようにダーツ盤を眺めた。ビールを以前よりもゆっくりと飲み干した。口をひらいたときには、寛容で哲学的な雰囲気が漂った。まるでビールで優しくなったかのようにだった。

「おいらに何と言って欲しいかはわかってる。文句なしに若くなりたいと言って欲しいんだろう。ほとんどの人は、尋ねりゃそう言うだろさ、若くなりたいってな。若い頃は、健康で強いもんな。人生でおいらくらいの時期になれば、ずっと身体のどこかがおかしくなる。足がなにやらおかしくなってる、膀胱もひっでえもんだ。夜には六回も七回も起き出すはめになる。んだが逆に、老いぼれだとかかなりいいところもある。昔みたいな心配はねえ。女がらみの騒ぎもねえし、こいつはいいことだ。言っちゃあアレだが、もう三十年近くも女を抱いてねえなあ。それ以上に、抱きてえとも思わねえ」

ウィンストンは窓枠に背中をもたせかけた。これ以上続けても仕方ない。もっとビールを買おうとしたところで、老人はいきなり立ち上がり、あわてて部屋の横にある臭い小便器に駆け寄った。追加の半リットルがすでに作用していたのだ。ウィンストンはかれの空のグラスを見つめて、一、二分ほどすわったままで、自分の足が再び外の通りへと己を運び出したときも、ほとんどわの空だった。最大でもあと二十年で、巨大で単純な質問、「生活は革命前のようがいまよりよかったのか？」は、どうあがいても回答不能となる。だが実質的には、今ですら回答不能だった。というのも数少ない散在する古代世界からの生き残りは、ある時代と別の時代を比べる能力がないからだ。何百万もの役立たずなことは覚えている。同僚との口論、なくした自転車ポンプ探し、とっくに死んだ妹の表情、七十年前の風の強い朝に舞い上がったほこり。だが重要な事実はすべて彼らの視野の外だった。こいつらはアリと同じで、小さな物体は見えても大きいものは見えないのだ。そして記憶があてにならず、文書記録が偽造されたら——そうなれば、党が人間生活の状態を改善したという主張は受け入れるしかなくなる。というのもそれを検証できるような基準は存在せず、二度と存在しようもないからだ。

この瞬間に、思索の流れが唐突に中断した。立ち止まって目を挙げた。狭い通りにいて、暗い小さな店が数軒、住宅の中に散在している。すぐ頭上には、色あせた金属の球体がぶら下がっていて、かつては金メッキでもされていたかのように見える。見覚えがある場所だった。もちろん！ あの日記を買った古物屋の前に立っていたのだ。

刺すような恐怖に貫かれた。そもそもあの本を買うこと自体が拙速な行為だったし、この場所には二度と近づきまいと誓っていたのだ。だが思索がさまようのを許したとたん、足が勝手に自分をこの場に連れ戻したのだ。日記を始めたのは、まさにこうした自殺的な衝動から自衛したいと思ってのことだったのに。同時に、二十一時近いというのに店がまだ開いているのに気がついた。歩道をうろついているよりも中に入るほうが、多少は怪しまれないという気がして、彼は戸口をくぐった。質問されたら、カミソリの刃を買いたいと思っていたといえどもっともらしい。

店主はちょうど、ぶらさがった灯油ランプに火をつけたところだった。それは汚れた感じながら親しみ深い匂いを放った。店主は六十歳くらいの人物だろうか、弱々しく背中が

曲がり、長い博愛的な鼻を持ち、穏やか目が分厚いメガネで歪んでいる。髪はほぼ真っ白だが、眉毛はぼさぼさでまだ黒かった。そのメガネ、優しく念の入った動き、古い黒ビロードの上着を着ているという事実が、彼に漠然とした知性の雰囲気を与えていて、まるで彼が何か文筆家か、あるいは音楽家だったかのような印象をもたらした。その声は柔らかく、まるでかき消えるようで、その訛りはプロレの大半ほど歪んだものではなかった。

店主は即座に言った。「歩道にいらっしゃるときからわかりましたよ。あの若い女性の記念アルバムをお買い上げ下さった紳士でいらっしゃいますね。あれは美しい紙でしたよ、あれは。クリーム罫線紙、と昔は呼ばれておりました。あのような紙は——そうだな、50年は作られておりません」。かれはメガネの上からウィンストンをのぞいた。「何か特にお役にたてることでもございますか？ それとも単にご覧になりたいだけでしたか？」

ウィンストンはあいまいに答えた。「通りすがりで、ちょっとのぞいただけです。何かこれといって欲しい物もない」

「かまいませんよ。ご満足いただけたとは思えませんから」とかれは柔らかい手のひらで、詫びるような身ぶりをした。「ご覧のとおりですよ。空っぽの店と言ってもいい。ここだけの話ですが、骨董取引はもうおしまいです。もはや需要もないし、在庫もありません。家具、陶器、ガラスはみんな、大なり小なり破壊されました。そしてもちろん金属はほとんど溶かされてしまった。真ちゅうのロウソク立ては何年もお目にかかっている」

店の小さな内部は、実は不安なほどモノだらけだったが、いささかでも価値があるものはほとんど何もなかった。床はきわめて限られていた。壁際はすべて、無数のほこりっぽい額縁が積み上がっていたからだ。ウィンドウにはナットやボルト、すりきれたノミ、刃の折れたペンナイフ、まともに動くようなそぶりさえしていない、古びた時計などの各種ガラクタが並んでいた。隅にある小さなテーブルの上だけに、小物が大量にあった——漆塗りの嗅ぎ煙草入れ、めのうのブローチなど——そこには何か面白いものがありそうに見えた。そのテーブルのほうにふらふらと向かう途中で、目がランプの灯りの中で柔らかく光る、丸い滑らかなものにとまり、かれはそれを手に取った。

重たいガラスのかたまりで、片側は丸く、反対側は平らで、ほとんど半球状だった。ガラスの色彩と手触りの両方に、何か得意な柔らかさ、まるで雨水のような感じがあった。その真ん中に、曲がった表面により拡大されて、奇妙な、ピンク色の、複雑な形をした物体があり、バラカインギンチャクを思わせた。

「これは何ですか？」魅了されてウィンストンは尋ねた。

老人は答えた。「サンゴでございます、それはね。おそらくインド洋からきたのでしよう。かつてはそれを、何かガラスの中に埋め込んだのです。それは作られて百年に満たないはずはありません。もっと古いかもしれない、その様子ですと」

「美しいものですね」とウィンストン。

「美しいものです」と相手も味わうように言った。「ですが、そんなことを言う人は最近あまりおりませんな」とかれは咳き込んだ。「さて、まさかそれをお買いになりたいというなら、四ドルの値段となります。そんなものなら八ポンドの値がついた頃を覚えておりますよ。八ポンドといえば——まあ計算はできませんが、かなりの金額でございました。しかし最近では本物のアンティークのことなんて、だれが気にしましょうか——残ったわずかなものについてでも？」ウィンストンは即座に四ドルを渡して、その欲しくてたまらないものをポケットにすべりこませた。それに惹かれたのは、美しさよりもむしろ、現在とはまったくちがう時代に属しているように思わせる雰囲気なのだった。ソフトで雨水の

ようなガラスは、これまで見たどんなガラスともちがっていた。それが二重に魅力的なのは、一見するとまったく役立たずだからだ。とはいえ、かつてはそれが文鎮として使われただろうと推測はできた。ポケットのなかできわめて重かったが、ありがたいことに、そんなにふくれては見えない。党員が所有するには奇妙なものであり、疑念を抱かせるものですらあった。古いものはすべて、それを言うなら美しいものはすべて、いつも漠然と怪しまれた。老人は四ドルを受け取って、目に見えて機嫌がよくなった。ウィンストンは、三ドルか、ヘタをすると二ドルでも相手が受け取っただろうと気がついた。

「よろしければ、二階の別の部屋もご覧になりますか。大したものはありません。ごくわずかです。二階に行かれるなら、灯りを用意いたします」

かれは別のランプを灯し、曲がった背中で、急でボロボロの階段をゆっくり先導して、小さな通路を通り、街路には面しておらず、石畳の中庭と、煙突の森林を見渡す部屋に案内した。家具の配置は、まるでこの部屋がまだ人が暮らすためのものだとでも言うようだとウィンストンは気がついた。床にはじゅうたんがあり、壁には絵が一つ二つ、暖炉に寄せて深いだらしめない安楽椅子があった。古風な十二時間の盤面を持つガラス時計が、マントルピースの上でカチカチと時を刻んでいる。窓の下、部屋の四分の一近くを占めているのは巨大なベッドで、まだマットレスがのっている。

老人は半ば詫びるように言った。「妻が他界するまでここでいっしょに暮らしておりました。少しずつ家具を売りさばいておるところです。さてこれは美しいマホガニーのベッドでございます。あるいは、南京虫を追い出せばそうなります。しかし申し上げれば、いささかかさばるものではございますな」

かれはランプを高く掲げて部屋全体を照らそうとするようだった。そしてその温かく薄暗い光の中で、その場所は不思議なほど魅力的だった。あえて危険を犯すつもりさえあれば、この部屋を週に数ドルで借りるのは容易だろうという考えがウィンストンの脳裏をよぎった。それはとんでもない、あり得ない考えで、思いついたと同時に放棄すべきものだった。だがこの部屋はかれの中にある種のノスタルジーを目覚めさせた。一種の先祖伝来の記憶だ。こんな部屋にすわるのがどんなものか、燃える炎の前の安楽椅子にすわり、足をフェンダーに向けて暖炉の台にやかんをかけるのがどんな感じか、ずばり知っているように思えた。完全に一人で、完全に安全で、だれにも見張られず、どんな声にも追い立てられず、やかんの歌と時計が時を刻む親切な音しかしないのだ。

「テレスクリーンがない」かれは思わずつぶやいた。

「ああ、あの代物は一度も持ったことがありません。高価すぎます。それに一度も必要だと思ったこともございませんで、なぜかしらね。さてその隅にあるのは素敵な折りたたみ式テーブルでございますが、畳む部分を使いたければ新しいちょうつがいを入れねばなりません」

もう一つの角には小さな本棚があり、ウィンストンはすでにそちらに近づいていた。そこに入っているのはゴミだけだった。書籍の狩り立てと破壊は、他の場所と同じくプロレ地区でも徹底して行われたのだ。オセアニアのどんな場所にも、1960年以前に印刷された本があるとはきわめて考えにくかった。老人はまだランプを持ったまま、暖炉の反対側、ベッドの向かいにぶら下がったローズウッドの額に入った絵の前に立っていた。「さて、もし古いプリントに少しでもご関心がおありでしたら――」と彼は穏やかに話し始めた。

ウィンストンは部屋を横切って絵を検分した。四角い窓を持ち、正面に小さな戦闘がある、楕円形の建物を描いたスチール版画だった。その建物のまわりには手すりがあり、そ

の裏がわには彫像らしきものがあった。ウィンストンはしばらくそれを見つめた。何か漠然と見覚えがあるような気がしたが、その彫像は記憶がなかった。

「額縁が壁に固定されておりますが、はずして差し上げてよろしゅうございますよ、よろしければ」と老人。

ウィンストンはようやく口を開いた。「この建物は知っています。いまは廃墟です。正義宮殿の外の、通りの真ん中にある」

「その通りです。法廷の外。爆撃されたのは——ああ、もう何年も前のことです。かつては教会で、セントクレメント・デインズ、という名前でした」。かれは申し訳なさそうに微笑し、まるで自分が何かバカげたことを言うのを意識しているとでも言うようだった。そしてこう付け加えた。「オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘！」

「なんですか、それは？」とウィンストン。

「ああ——『オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘』。私が少年だった頃にあった詩ですよ。続きは忘れてしまいましたが、最後は覚えています。『これがロウソク、ベッドに導く灯り、これが鎌で頭を切り落とす』。一種のダンスでした。腕を伸ばしてその下を通るのですが『これが鎌で頭を切り落とす』というところで腕をおろして、こちらを捕まえるのです。教会の名前ばかりでしたな。ロンドンの教会はみんな入っておいりましたよ——主要なものは、ということです」

ウィンストンは漠然と、その教会が何世紀のものだろうかと思案した。ロンドンの建物の年代を見極めるのは常にむずかしかった。巨大で壮大なものはすべて、外観がそこそこ新しければ、自動的に革命後に建てられたものとされ、明らかにもっと古いものは、中世と呼ばれるなにやら薄暗い時代のもものとされる。資本主義の数世紀は、価値あるものはまったく生み出さなかったとされた。本からと同様、建築からも歴史はまるで学べなかった。彫像、記念碑、碑石、通りの名前——過去に光をあてそうなものはすべて、系統的に変えられていた。

「教会だったとは知らなかった」

老人は語った。「実は、かなり残ってはいるのですよ。だが他の用途に使われておるのです。さて、あの詩はどう続きましたっけ？ そうそう！ 思い出した！

『オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘、お代は三ファージング、とセントマーチンズの鐘——』

そうでした、さてこれが精一杯思い出せるところです。ファージング、というのは小さな銅の硬貨で、一セントと似ておりました」

「セントマーチンズというのはどこでした？」とウィンストン。

「セントマーチンズですか？ まだ建っておりますよ。勝利広場の、写真ギャラリーの横に。三角じみたポーチと、正面に列柱がある建物で、大きな正面階段がございますな」

ウィンストンはその場所をよく知っていた。各種のプロパガンダ展示に使われる博物館だった——ロケット爆弾や浮遊要塞の縮尺模型、敵の残虐行為を描いたロウ細工のタブローなどを飾るのだ。

「セント・マーチンズ・イン・ザ・フィールドというのが昔の呼び名でした」と老人は補った。「とはいえ、そのあたりのどこにもフィールドなどあったとは記憶しておりませんが」

ウィンストンはその絵は買わなかった。ガラス製文鎮よりなおさら不適切な所有物になっただろうし、額縁から取り出さないと、家に持ち帰るのは不可能だ。だがさらに数分

にわたりそこにとどまり、老人と話をした。その名前はウィークスではないという——店頭
の碑銘からはそうとしか思えないが、チャリントンという名前なのだ。チャリントンさん
はどうやら、六十三歳のやもめで、この店で30年にわたり暮らしてきた。その間、
ウィンドウの上の名前を変えるつもりではいたが、それを実際にやるまでには到っていな
かったのだ。二人がしゃべっている間ずっと、途中まで思い出された詩が、ウィンス
トンの脳裏を駆け巡っていた。オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘、お代は三
ファージング、とセントマーチンズの鐘！奇妙ながら、それを頭の中で繰り返すと、本当
に鐘の音が聞こえるような幻想が生まれた。どこかにまだ偽装され忘れられたまま存在す
る失われたロンドンの鐘。一つ、また一つと幻のような鐘楼が、次々に鳴り響くのが聞こ
えるような気がした。だが思い出せる限り、自分は現実の生活で教会の鐘が鳴るのを聞いた
ことなど一度もないのだ。

チャリントンさんから離れて、一人で階下に入り、自分がドアを出る前に通りを偵察し
ているところを老人に見られないようにした。すでに、しばらくの間隔をおいてから——
一ヶ月くらいだろうか——この店にまたくる危険を犯すと決めていた。センターでの一晚
をサボるより大して危険ではないかもしれない。深刻な愚行は、そもそもあの日記を買っ
た後でこの場所に戻ってくることなのだった。この店主が信頼できるかもわからないとい
うのに。だが——！

そうとも、とかれは再び考えた。また来よう。さらに美しいごみくずのかけらをもっと
買うのだ。セントクレメント＝デインズの版画を買い、額縁から取り出して、オーバ
ーオールの上着の下に隠して持ち帰ろう。あの詩の残りをチャリントンさんの記憶から引き
出してやろう。あの二階の部屋を借りるというキチガイじみた計画すら、再び一瞬頭を横
切った。五秒ほどくらいか、その興奮状態のために軽率になって、かれは窓からざっと外
を確かめることさえせずに、歩道に足を踏み出した。そして即興の曲にあわせてハミング
さえ始めていた。

オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘、お代は三ファージング、とセントマーチ
ンズの鐘——

いきなり、心が凍り付き内臓が水になったような気がした。青いオーバーオールの人物
が歩道をこちらに向かっており、十メートルも離れていない。架空部の女子だ。黒い髪の
女子。暗くなっていたが、彼女を見分けるのは容易だった。向こうはこちらの顔をまっす
ぐ見つめ、それからこちらを見もしなかったかのように、さっさと歩き続けた。

数秒にわたり、ウィンストンは麻痺状態でまるで動けなかった。それから右に曲がり足
早に立ち去ったが、そのときは自分の向かう方向がまちがっているとは気がつかなかっ
た。いずれにしても、一つ疑問は片付いた。もはやあの女子が自分をスパイしているのは、
疑問の余地がなかった。ここまで尾行してきたにちがいない。単なる偶然だけで、たまた
ま同じ晩に、同じへんびな裏通りを歩いていたなどはあり得ない。ここは党員たちが暮ら
すあらゆる区画から、何キロも離れているのだ。偶然にしてはあまりにできすぎだ。本当
に彼女が思考警察のエージェントなのか、生真面目さに動かされた素人スパイなのかは、
ほとんど問題ではない。彼女が見張っているというだけで十分だ。おそらくあのパブに入
るところも見られただろう。

歩くのは一苦労だった。ポケットのガラスの固まりが、一步毎に腿にぶちあたり、それ
を取り出して投げ捨てようかと半ば思ったほどだ。最悪なのは腹の痛みだった。数分にわ
たり、すぐに便所にたどりつかなければ死ぬとさえ思った。だがこんな区域には公衆便所

などない。だがそこで痙攣がおさまり、後には鈍い痛みだけが残った。

その通りは袋小路だった。ウィンストンは立ち止まり、数秒たちつくして漠然と、どうしようか思案し、そしてきびすを返して来た道に戻った。向きを変えたとき、あの女子が自分の横を過ぎたのはたった三分前だから、追いかければたぶん追いつけるはずだと気がついた。どこか静かな場所にくるまで後をつけて、舗石で彼女の頭蓋骨を叩き潰せる。ポケットの中のガラスの固まりは、重いから十分その役を果たせるはずだ。だがかれは即座にその考えを捨てた。肉体的な努力を少しでもするなど考えただけで耐えがたかったからだ。走れないし、そんな一撃もくらわせられない。それに彼女は若く頑丈だから、身を守るだろう。またコミュニティセンターにいまから急いでかけつけ、そこが閉まるまでとどまって、この晩について部分的なアリバイを確立しようかとも考えた。だがこれまた不可能だ。死にそんな倦怠感に襲われた。もうさっさと家に帰って腰をおろし、静かにしたいだけだった。

アパートに戻ったときには二十二時をまわっていた。照明の主電源は二十三-三十にスイッチが切られる。かれは台所にいって、勝利ジンを紅茶カップ一杯近く飲み干した。そしてアルコーブのテーブルにでかけ、すわって日記を引き出しから取り出した。だがすぐには開かなかった。テレスクリーンからは騒々しい女性の声が、愛国的な歌をがなりたてていた。かれは本の大理石模様の表紙をすわったまま見つめ、意識から立ち上る声を封じようとしては失敗していた。

連中がつかまえにくるのは夜、いつも夜なのだった。適切なことは、つかまる前に自殺することだ。まちがいなく、そうする人々もいた。多くの消滅は実は自殺なのだ。だが火器や、素早く確実な毒が完全に入手不能な世界にあって、自殺するには絶望的な勇気が必要だった。彼はある種の驚きをもって、苦痛と恐怖の生物学的な役立たずぶりについて考えた。まさに特別な努力が必要とされるときに限って、常に惰性へと凍り付いてしまう、人間の身体の裏切りを思った。素早く行動さえしていれば、あの黒髪の女子を黙らせられたのに。だがまさに自分の危険が極端だったがために、自分は行動の力を失ってしまった。危機のときには、人は決して外部の敵と戦っているのではない、とかれは思い当たった。常に自分の肉体と戦っているのだ。この瞬間ですら、ジンにもかかわらず、腹の鈍い痛みのおかげで続けてものを考えるのは不可能だった。そしてそれは、一見すると英雄的だったり悲劇だったりするあらゆる状況で同じなのだ。戦場だろうと拷問室だろうと、沈む船上だろうと、自分が戦おうとしている問題は常に忘れ去られる。というのも肉体はふくれあがって宇宙を満たし、恐怖で麻痺したり痛みで絶叫したりしていないときですら、人生は一瞬ごとの、飢えや寒気や睡眠不足、腹痛や歯痛との戦いなのだ。

かれは日記を開いた。何か書き留めておくのが重要だ。テレスクリーンの女性は新しい歌を始めていた。その声は、ギザギザのガラスのかけらのように、脳に突き刺さるようだった。オブライエンのことを考えようとした。この日記を贈る相手、宛てる相手だ。だがかわりに、思考警察に連行された後で自分に何が起こるかを考え始めた。即座に殺されてもかまわない。殺されるのは想定通りだ。だが死ぬ前に（だれもそんな話はしないのに、みんなそれを知っていた）自白のルーチンを経由しなければならない。床に這いつくばって、お慈悲を求めて絶叫し、骨の折れる音、砕かれる歯、血みどろの髪の毛のかたまり。

なぜそんなものを耐えさせられるのだろうか。終わりはいつも同じなのに？ なぜ人生から数日、数週間を切り出す必要があるのか？ だれも見つからずにはすまないのだし、だれも自白を逃れることは一度もなかった。思考犯罪に陥ったら、ある日付までに死ぬのは

確実だった。ならばなぜあの恐怖が、何を変えるわけでもないのに、未来の時間に埋め込まれていなければならないのか？

さっきより少し、オブライエンの姿を呼び起こすのに成功した。「暗闇のない場所で会おう」とオブライエンは語った。その意味はわかった、あるいはわかったと思った。暗闇のない場所とは想像された未来であり、決して見ることはないが、事前の知識によって神秘的に共有できる場所なのだ。だがテレスクリーンからの声が耳をいたぶり続けていたので、その考えの流れを続けられなかった。口にタバコをくわえた。タバコの半分がすぐに舌の上に転がり落ちた。苦い粉で、再び吐き出すのはむずかしい代物だ。ビッグ・ブラザーの顔が心に浮かび上がり、オブライエンの顔に置き換わった。数日前にやったのと同じように、彼はポケットから硬貨をすべり出して眺めた。その顔がこちらを見上げていた。重く、平静で、護るような顔。だがその暗い口ひげの下にはどんな微笑が隠されているのだろうか？ 不吉な葬鐘のように、あの言葉がよみがえってきた。

戦争は平和

自由は隷属

無知は力

第 II 部

第1章

午前中の最中で、ウィンストンは自分の区画を離れて便所に向かった。

長い、照明の明るい廊下の向こう端から一人こちらに向かってきた。黒髪の女子だ。あの古物商の外で出くわした晩からすでに四日経つ。近づいてきたのを見ると、右腕が吊り包帯で釣られているのがわかった。オーバーオールと同じ色だったので、遠目にはわからなかったのだ。おそらく小説の筋書きが「押し込まれる」ときにあのでかい万華鏡をふりまわして、手をつぶしてしまったのだろう。創作部ではよくある事故だった。

二人が四メートルほどまで近づいたときに、女子はつまずいて、ほとんど顔から転びそうになった。鋭い痛みの叫びが彼女から絞り出された。怪我をした腕の上にもっすぐ転んだのだろう。ウィンストンは足を止めた。女子は身を起こして膝立ちになった。その顔は白濁した黄色い色になり、それを背景に口がいつになく赤く浮かび上がった。目はこちらの目とあわせられ、そこに浮かんだ訴えるような表情は、痛みより恐怖のように思えた。

ウィンストンの頭に奇妙な感情が湧いた。目の前にいるのは自分を殺そうとしている敵だ。同時に目の前にいるのは人間という生き物で、苦しんでおりおそらく骨折している。すでにかれは本能的に、助けようと前に出つつあった。転んで包帯を巻いた腕が下敷きになったのを見た途端、まるで自分の身体に痛みを感じたように思えた。

「怪我は？」とかれ。

「なんでもありません。腕が。すぐによくなります」

まるで動悸がしているような話しぶりだった。蒼白になったのはまちがいない。

「何か折れてませんか？」

「いえ、だいじょうぶです。しばらく痛みますが、それだけ」

彼女は自由な手を差し伸べ、かれは彼女が立ち上がるのを手伝った。顔色が少し戻り、ずっと快方に向かったようだった。

彼女はきっぱり繰り返した。「なんでもありません。手首を少しぶつけただけです。同志、ありがとう！」

そしてその一言と共に、彼女はこれまで進んでいた方向に歩き続け、本当に何事もなかったような足早ぶりだった。この一見すべては、三十秒もかからなかったはずだ。気持ちを顔に出さないようにするのは、すでに本能の域に達した習慣ではあり、そもそも二人はそれが起きたとき、テレスクリーンの真ん前に立っていたのではある。それでも、一瞬の驚きを示さないようにするのはとてもむずかしかった。というのも立ち上がるのを助けているほんの二、三秒ほどの間に、女子は何かをこちらの手にすべりこませたのだ。彼女がそれを意図的にやったのは疑問の余地がなかった。何か小さく平らなものだった。トイレのドアを通り抜けたところで、かれはそれをポケットに移して指先で触れてみた。四角く畳んだ紙切れだ。小便器に向かって立っている間に、もう少し指先でいじって、それを開

けた。明らかにそこには、何やらメッセージが書かれているにちがいない。一瞬、それを大便室に持ち込んですぐに読みたい衝動にかられた。だがそれが驚くほどの愚行だというのは十分承知していた。テレスクリーンが常に見張られているのが、そこ以上に確実な場所などないのだ。

かれは自分の小区画に戻り、紙切れをさりげなく机の上の他の紙切れにまぜて投げだし、メガネを掛けて話筆機を引き寄せた。「五分、最低でも五分だ！」とかれは自分に言い聞かせた。胸の中で心臓は恐ろしいほどの音量で鼓動した。ありがたいことに、やっていた仕事はただの定型作業で、長い数字の一覧を修正するだけだったからそんなに集中する必要はなかった。

紙に書かれたものがなんであれ、何かしら政治的な意味を持つにちがいない。考えられる可能性は二つあった。可能性がずっと高いのは、あの女子は恐れたとおも思考警察のエージェントだというものだ。なぜ思考警察がこんな形でメッセージを配信しようとするのかはわからなかったが、何か理由があるのだろう。紙切れに書かれているのは、脅し、召喚、自殺命令、何らかの罠かもしれない。だが別の、もっと壮絶な可能性があり、押さえつけようとする努力の甲斐もなく、絶えずそれが頭をもたげ続けるのだった。そのメッセージは思考警察からきたものではまったくなく、何か地下組織からきたものだ、という可能性だ。友愛団は本当に実在したのかもしれない！あの女子はその一員なのかも！まちがいにバカげた考えではあったが、紙切れを手にしたその瞬間に、それが頭に湧き上がってきたのだ。もっとあり得そうな他の考えに思い当たったのは、やっとな分過ぎてからのことだった。そしていまだに、頭はこのメッセージがおそらく死を意味すると告げているのに、かれはそうは信じて折らず、法外な希望はしつこく続き、心は高鳴り、数字を話筆機につぶやくときの声が震えないようにするのも苦労したほどだった。

仕上がった作業の束を丸めて気送管にすべりこませた。八分たっていた。鼻のメガネを調整しなおし、ため息をついて、次の仕事の束を引き寄せたが、そのてっぺんにあの紙切れが載っている。彼はそれを平らにのぼした。そこには、大きな雑然とした手書きでこう書かれていた。

あなたを愛しています。

数秒にわたり、あまりに愕然として、この罪に問われる代物を記憶穴に投げ込むことさえできなかった。そして投げ込んだときも、あまりに興味を示しすぎるのは危険だと十分にわかっていたのに、どうしても読み返して、その言葉が本当にそこにあるのを確認せずにはいられなかった。

その午前中の残りは、仕事がほとんど手に着かなかった。一連のつまらない作業に頭を集中させるよりなおさらひどいのは、自分の興奮をテレスクリーンから隠す必要があることだった。腹の中で炎が燃えさかっているような感じがした。暑く混雑した騒音だらけの食堂での昼食は苦悶だった。昼食時には少しでも一人きりになりたいと期待していたが、ツイていないことに、あの愚鈍なパーソンズが隣にどっかり腰を据え、シチューの安っぽい匂いをほとんど圧倒するほどのすえた汗のにおいを放ちつつ、憎悪週間の準備についてしゃべり続けたのだった。彼は特に、ビッグ・ブラザーの頭部の紙粘土模型に熱をあげていた。幅二メートルで、スパイ団のかれの娘の部隊がこのために作っているのだという。苛立たしいのは、まわりでみんな大声を張り上げているので、ウィンストンはパーソンズの言うことがほとんど聞き取れず、絶えずまぬけな発言を繰り返すよう頼まねばならない

ということだった。一度だけ、あの女子の姿をちらりと見かけた。部屋の向こう端で、他に二人の女子とテーブルについている。こちらに気づいていない様子だったし、かれもその方向を二度と見ないようにした。

午後は多少はしのぎやすかった。昼食後すぐに、微妙でむずかしい作業がやってきて、数時間かかるし他のすべては脇に置いておかねばならなかった。二年前の一連の生産報告を偽造する作業で、いまや疑惑のかけられている党中心の有力者の信用を落とすような形でそれを行うのだ。この手の作業はウィンストンが得意とするもので、二時間以上にわたりあの女子を頭から完全に閉め出すのに成功した。だがそれが終わると彼女の顔の記憶が戻ってきて、それとともに一人きりになりたいという燃えさかる耐えがたい欲望がやってきた。一人きりになるまでこの新しい展開を考え抜くのは不可能だ。今夜はコミュニティセンターで過ごす夜のの一つなのだった。彼は食堂でまた味のしない食事をかきこみ、センターに急いで、「討論グループ」の荘厳なばかばかしさに参加し、卓球を二試合やって、ジンを何杯か飲み干し、「チェスで学ぶ英社主義^{イングリッシュ}」という講義を半時間ずわって聞いた。精神は退屈のあまりもがき苦しんだが、このときばかりはセンターでの一晩をサボろうという衝動は起きなかった。「あなたを愛しています」の言葉を見て、生き延びたいという欲望が湧き起り、ちょっとした危険を犯すのも急にバカげたことに思えた。連続して考え続けられるようになったのは、やっと23時になって、帰宅してベッドに入ってからだった——暗闇の中、だまってさえいればテレスクリーンからも安全な場所だ。

解決が必要な物理的問題だった。どうやってあの女子と接触して会合を手配しようか？ もはや彼女が何か自分に罫をしかけているのではという可能性は考えなかった。そんなことがないのはわかっていた。あのメモを渡したときの彼女はまちがいがなく焦っていたからだ。明らかに彼女は怯えきっていた。無理もない。またその申し出を拒絶するという考えは、思い浮かびさえしなかった。たった五夜前には、敷石で彼女の頭蓋骨を叩き潰そうかと考えていたのに、もはやそれはどうでもよかった。夢の中で見た、彼女の若々しい裸身を考えて。他のみんなと同じバカで、頭はウソと憎悪に満ち、腹は水が詰まっているものと想像していた。彼女を失うかもしれない、白い若々しい肉体が自分の手から滑り落ちてしまうかもしれない、と考えるとある種の熱にとらわれた！ 他の何よりもこわかったのは、すばやく接触しないと彼女があっさり気を変えるかも知れないということだった。だが会うための物理的困難はすさまじかった。すでにチェスで詰んでいるのに駒を動かそうとするようなものだ。どっちを見てもテレスクリーンが見ている。実のところ、彼女と連絡を取る方法として考えられるものはすべて、あのメモを読んで五分以内に思いついた。だがいまや、考える時間ができたので、それをテーブルに道具を一行に並べるように、一つずつ検討していった。

当然ながら今朝起きたような遭遇を繰り返すわけにはいかなかった。記録部で彼女が働いていたなら、比較的単純だっただろうが、創作部が建物の中のどこにあるかなど、漠然としたイメージしかなかったし、そこへでかける口実もなかった。どこに住んでいるかわかって、出勤時間がわかれば、なんとか無理をして帰宅途中に彼女とどこかで会う算段もできる。だが彼女を家まで尾行するのは危険だ。省の外でうろうろしなくてはならず、必ず気づかれてしまう。郵便で手紙を送るとなると、これは問題外だった。あらゆる手紙は配達中に開封されるというのは、あまりにお定まりでもはや秘密ですらなかった。それを言うなら、手紙を書く人などいないも同然だった。たまにメッセージを送らねばならないときには、長いフレーズの一覧が書かれた印刷済のはがきがあり、あてはまらないものを

線で消すのだ。いずれにしても、彼女の住所どころか、名前すら知らないのだ、最後にかかれは、最も安全な場所は食堂だと判断した。テレスクリーンにあまり近くない、部屋の真ん中にあるテーブルに一人ですわってもらえれば、そしてそこら中に十分な騒々しい会話があれば――そうした条件が、そうだな、三十秒も続けば、何語かやりとりができるかもしれない。

その後まる一週間の人生は、落ち着かない夢のようだった。翌日、彼女は、すでに笛が吹かれてこちらが立ち去る間際まで食堂にあらわれなかった。おそらく遅いシフトに変更されたのだろう。二人は目も合わせずにすれちがった。その翌日に彼女はいつもの時間に食堂にいたが、他に三人の女子といっしょで、しかもテレスクリーンの真下だった。そして恐ろしい三日にわたり、彼女はまったく姿を見せなかった。かれの心身はすべて、耐えがたい敏感さ、ある種の透明性にやられてしまったようで、あらゆる動き、あらゆる音、あらゆる接触、話したり聞いたりしなければならぬあらゆる単語が苦悶に変わるようだった。眠りの中でも彼女の姿から完全に逃れることはできなかった。この日々には日記には触れなかった。救いがあるとすればそれは仕事であり、仕事中は十分ほど続けて我を忘れることができた。彼女に何が起きたかはまったく見当もつかなかった。調べる方法も皆無だった。蒸発させられたか、自殺したか、オセアニアの向こう端に異動になったかもしれない。最悪で最もありえそうなのは、単に気が変わって自分を避けることにしたのかもしれない。

翌日彼女は再び姿をあらわした。腕の吊り包帯ははずれ、手首には石膏の帯が巻かれていた。彼女の姿を見た安心感はあまりに大きかったので、数秒にわたり彼女をまじまじと見つめるのを我慢できなかった。翌日には、ほとんど彼女に話しかけるのに成功しかけた。食堂に入ってきたとき、壁から十分離れたテーブルにすわっており、一人きりだった。時間がはやくて、満員というほどではなかった。列がゆっくりすすんで、ウィンストンはほぼカウンターまでやってきたが、そこで前にいるだれかが、サッカリン錠をもらっていないと苦情を申し立てたので、二分ほど足止めをくらった。だがウィンストンがトレーを確保して、彼女のテーブルのほうに向かったときも、彼女はまだ一人きりだった。さりげなくそちらに歩き、目は彼女の向こうにあるテーブルに空きがないか探した。彼女は三メートルほども離れていただろうか。あと二秒で行ける。そのとき、背後から声がよびかけた。「スミス！」かれは聞こえなかったふりをした。「スミス！」とその声は、さらに大きく繰り返した。仕方ない。彼はふりむいた。ブロンドでバカそうな顔をしたウィルシャーという若者が、ほとんど知り合いでもないのに、自分のテーブルの空席にニッコリと招いていた。断るのは安全ではなかった。気がつかれてしまった今となっては、だれもいない女性のテーブルにでかけてすわるわけにはいかない。あまりに目立つ。かれは親しげな微笑を浮かべてすわった。バカそうなブロンドの顔が正面から迫ってきた。ウィンストンは、そのど真ん中にピッケルをたたきつける幻影を見た。女子のテーブルは数分後に埋まった。

だが彼女も自分が向かってくるのを見たはずで、それで気づく点もあったかもしれない。翌日彼は、早めに着くように配慮した。すると案の定、彼女はほぼ同じあたりのテーブルにいて、今度も一人きりだった。行列のすぐ前にいる人物は、小柄ですばやく動く、カナブンのような人物で、平らな顔と、小さな疑い深そうな目をしていて、ウィンストンがトレーを持ってカウンターから離れようとする、この小男がまっすぐ彼女のテーブルに向かっているのがわかった。また希望が沈んだ。もっと向こうのテーブルには空席があったが、小男の外観の何かが、最も人の少ないないテーブルを選ぶほど自分の快適性を

重視する人物だろうと示唆していた。心臓が凍り付くような主で、ウィンストンは小男のあとにしたがった。彼女と二人きりになれないと意味がない。この瞬間、すさまじいガシャンという音がした。小男は腹ばいになり、トレーは吹っ飛び、スープとコーヒーの残りが二つ床一面に飛び散っていた。彼は恨みがましい目をウィンストンに向けつつ立ち上がりはじめた。かれをつまづかせたのではと疑っているのは明らかだった。だがどうでもいい。五秒後に爆音のような鼓動を響かせつつ、ウィンストンは彼女のテーブルにすわっていた。

彼女を見たりはしなかった。トレーを置いて、すぐに食べ始めた。一気に話すのがなにより重要だ。他のだれかがくる前に。だがいまや恐ろしい恐怖に囚われてしまった。最初に接触されてから一週間がすぎた。心変わりしたかもしれない。まちがいなく心変わりしたはずだ！ こんな情事が成功裏に終わるわけがない。こんなことは現実の人生では起きないのだ。尻込みしてまったく口をきけなかったかもしれないが、その瞬間にアンブルフォースが目に入った。耳が毛だらけの詩人で、トレーを持って部屋の中をヨタヨタとさまよい、すわる場所を探しているのだ。アンブルフォースは何かぼくぜんとウィンストンに惹かれていて、見つければまちがいなくこのテーブルにすわる。行動時間は一分ほどしかない。ウィンストンも女子もたゆまず食べ続けた。食べているのはうすいシチュー、というかハリコット豆のスープだった。低いつぶやきでウィンストンは話しはじめた。どちらも顔をあげなかった。水っぽい代物をスプーンで着実に口に運び、スプーンの合間に必要なことばを、低い感情のない声でやりとりした。

「仕事あがりは？」

「18時30」

「どこで会える？」

「勝利広場、記念碑近く」

「テレスクリーンだらけだ」

「群集があれば関係ないから」

「合図は？」

「なし。あたしが大勢に混じっているのを見るまではこないで。それをこっちを見ないで。ただどこか近くにいて」

「時間は？」

「19時」

「わかった」

アンブルフォースはウィンストンを見つけそこない、別のテーブルにすわった、二人はそれ以上口をきかず、同じテーブルの対角線上にすわった二人に可能な限り、お互いを見なかった。女子は昼食をさっさと食べ終えて立ち去り、ウィンストンはそこにとどまってタバコを吸った。

ウィンストンは指定時間前に勝利広場に着いた。溝の刻まれた巨大な柱の根本のまわりをうろついた。そのてっぺんではビッグ・ブラザーの彫像が、エアストリップ・ワンの戦いで、かれがユーラシアの飛行機（数年前にはイースタシアの飛行機だったが）を殲滅させた、あの南方の空を見つめていた。目の前の街路には、馬にまたがった人物の彫像があり、それがオリヴァー・クロムウェルなのだとされていた。予定時間を五分すぎても彼女はまだ姿を見せていなかった。またもやひどい恐怖にとらわれた。来ないんだ、気が変わったんだ！ かれはゆっくりと広場の北側に歩いて、セントマーチン教会が見分けられ

たので、何か色あせた歓びのようなものを感じた。その鐘は、鐘があったときには「お代は三ファージング」と鳴ったのだ。そのとき彼女が、彫像の根本に建っている野を見た。その柱にらせん状にはられたポスターを読むか、読むふりをしている。もっと人が集まるまで、近づくのは危険だった。パディメントのまわり中にテレスクリーンがあった。だがその瞬間に、叫び声が轟いて、どこか左のほうから重車両の轟音が響いてきた。いきなり、みんなが広場を走って横切っているようだった。彼女は身軽に記念碑の根本にあるライオンのまわりを跳び越えて、その群集に加わった。ウィンストンも続いた。走りながら、まわりの叫び声を元に、ユーラシアの囚人たちを乗せた車団が通過するのだと知った。

すでに高密度の群集が広場の南側をふさいでいた。ウィンストンは、ふつうならどんな集団でも外周部にひかれる人物ではあったが、押して、突き飛ばし、前に進んで群集の中心にもぐりこんだ。やがて女子に腕をのぼせば届くところまできたが、間に巨大なプロレト、同じくらい巨大な女性、おそらくはかれの妻が立ちほだかり、貫通不能の肉体の壁を形成しているようだった。ウィンストンは横のほうに身をもがいて、思いっきり押し込んで、何とか二人の間に肩を押し込んだ。一瞬、その筋肉質の尻二つの間で、内臓がぐちゃぐちゃに潰されるような気がしたが、少し汗をかきつつなんとか突破した。彼女の隣だった。肩を並べ、二人ともじっと前だけを見ている。

軽機関銃で武装したこわばった表情の衛兵たちが四隅に立つ、長いトラックの行列が、ゆっくりと通りを下っていた。そのトラックには、チビの黄色人種たちが、貧相な緑がかかった制服を着てしゃがみこみ、密集して詰め込まれていた。その悲しい蒙古系の顔立ちが、何の興味も示さずにトラックの横から外を眺めていた。たまにトラックがゆれると、金属のぶつかる音がした。囚人たちはみんな足枷をされているのだ。その悲しい顔が次々にトラックいっぱいになり積み込まれて通り過ぎる。ウィンストンは彼らがそこにいると知っていたが、たまに目に入るだけだった。彼女の肩と、その腕がひじまですっとこちらに押しつけられていたからだ。その頬があまりに近くて温かみを感じられそうだった。彼女はすぐに状況を制した。食堂でやったのと同じだ。以前と同じ無感情な声で話し始め、唇はほとんど動かさず、声の喧噪とトラックの轟音ですぐにかき消される、ただのつぶやきで語り出した。

「聞こえる？」

「うん」

「日曜午後は休める？」

「うん」

「ならしっかり聞いて。全部覚えて。パディントン駅に行って――」

驚くほどの軍事的な精度をもって、彼女はとるべき道筋を説明した。鉄道で半時間移動。駅の外で左折。道沿いに二キロ。てっぺんのバーがはずれた門。草原を横切る小径。草の生えた小径。茂みの間の通路。コケの生えた枯れ木。頭の中に地図があるかのようだった。「全部覚えた？」最後に彼女はそうつぶやいた。

「うん」

「左折、右折、また左折。門はてっぺんのバーがない」

「うん。時間は？」

「15あたり。待たせるかも。あたしは別の道で行く。本当に全部覚えた？」

「うん」

「なら急いで離れて」

それは言われるまでもなかった。だがその瞬間には、二人は群集から抜け出せなかった。トラックはまだ列をなして通過中で、人々はまだ飽き足りないかのように見とれていた。当初は罵声や冷やかし声もいくつかあったが、それを発しているのは群集の中の党员だけで、それも間もなくとまった。あたりに満ちた感情は単なる好奇心だった。外国人はユーラシアからだろうとイースタシアからだろうと、一種の珍獣なのだ。囚人以外の形でそいつらを目にすることは、文字通り決してなかったし、囚人としてですら、ほんの一瞬かいま見られるだけだ。また戦争犯罪者として絞首刑になる数名を除けば、そいつらがどうなるのかは、だれも知らなかった。丸い蒙古系の顔に続いて、もっとヨーロッパ型の顔がやってきた。汚く、ひげ面で疲れ切っている。汚い頬骨の上にある目がウィンストンと目をあわせ、ときには不思議なほど強烈に見つめてから、またすぐ目をそらした。車団はそろそろ終わりかけていた。最後のトラックには老いた男がいるのが見えた。その顔はもじゃもじゃの毛の固まりで、まっすぐ建って手首を前で交差させ、まるでそれを縛られるのは慣れていてもいうようだった。今にもウィンストンと彼女が別れる時がくる。だが最後の瞬間、群集にまだ封じ込められているときに、彼女の手がこちらの手を探して、かすかに握りしめた。

十秒もたったはずはなかったが、二人の手が握られていたのはずいぶん長い時間に思えた。彼女の手のある細部を学ぶ時間があった。長い指、形のいい爪、仕事で固くなった、豆のなる手のひら、手首の下のなめらかな肉をかれは探索した。触れただけで、もう見ればわかる。その瞬間に、彼女の目の色を知らないのに思い当たった。たぶん茶色だろうが、黒髪の人が青い目をしているときもある。頭をめぐらせて彼女の方を見るのは、考えられないほどの愚行だ。手を握りあいつつ、肉体の圧力の中でだれにも見られず、二人はしっかり前をみつめ、すると女子の目ではなく高齢の囚人の目が、髪のかたまりの中からウィンストンを悲痛に見つめるのだった。

第2章

光と影のまだらの中、小径を通り抜けると、大枝が別れているところでは必ず黄金の陽だまりに出た。左側の木々の下では、地面はブルーベルで湿っていた。空気が肌に口づけするようだった。五月二日だ。森のもっと深い深奥からはモリバトの鳴き声が響いてきた。

少し早すぎた。道筋については何の苦勞もなく、彼女は明らかに実に経験豊富だったから、かれも通常ほどは怯えていなかった。おそらく彼女なら安全な場所を見つけられると信じてよかろう。一般には、ロンドンより田舎のほうが特に安全と想定はできなかった。もちろんテレスクリーンはなかったが、いつも隠しマイクの危険があり、声が拾われて認識されかねない。さらに一人きりで出かければどうしても注意を引いてしまう。百キロ以下の距離ならパスポートに承認印をもらう必要はなかったが、ときには鉄道駅にパトロールがうろついていて、党员をみつけたら全員の書類を検分し、面倒な質問をするのだ。だがパトロールは登場せず、駅からの歩きでは、慎重にちらちら振り返って、尾行されていないのを確かめた。列車はプロレだらけで、夏めいた天気のおかげでみんな休日気分だった。乗ってきた木製シートの客車は、ある巨大な一家であふれかえるほどの満員ぶりで、歯なしの曾祖母から生後一ヶ月の赤ん坊までいて、それが田舎の「義理の家族」と午後を過ごすためにでかけるという。そして尋ねもしないのに、ちょっとばかり闇市のバターも手に入れるのだと説明してくれた。

小径は広がり、一分もしないうちに彼女の言った通路にやってきた。ただの獣道でしかないものが、茂みの間をぬけている。腕時計はなかったが、まだ15時ではないはずだ。足下のブルーベルが実に密生していたので、踏みつけずにはいられなかった。ひざまずいて、いくつかを摘んだ。暇つぶしもあったが、会うときに女子に花束を渡したいと漠然と思ったからでもある。でかい束を作り、そのかすかで弱々しい香りを嗅いでいたとき、背後で物音がして凍り付いた。まちがいなく踏まれて折れた小枝の音だ。かれはブルーベル摘みを続けた。それがいちばんいいやり方だ。彼女かもしれないし、結局後をつけられていたのかもしれない。振り向けば罪悪感を示すことになる。次々に積み続けた。すると肩に軽く手が置かれた。

目をあげた。彼女だった。首を振ってみせたのは、明らかに静かにしているという警告で、それから茂みをかきわけて、急いで狭い通路を先導して森の中に入った。明らかに前も来たことがあるのだ。というのも地面のぬかるんだ部分をほとんど習慣のように避けたからだ。ウィンストンは、まだ花束を握りしめて後にしたがった。まずはホッとしたもの、力強い装い肉体が自分の前を動いていくのを眺め、深紅の腰帯がヒップの曲線をちょうど引き出すように巻かれているのを見ると、自分がいかに見劣りするかひしひしと感じられた。この瞬間ですら、彼女がふりむいて自分を見たら、やっぱりやめておこうと思うことも十分にあり得た。空気の甘さと葉っぱの緑がかれをひるませた。すでに駅から歩い

てくる間に、五月の日差しで自分が汚く蒼白く感じられ、屋内の生き物で、肌の毛穴にすすまみれのロンドンのほこりが詰まっているように感じた。彼女はこれまで、開けた場所で明るい日差しの下で自分を見たことがないだろうと思い当たった。彼女が話していた、倒木のところにやってきた。彼女はそれを跳び越えて、力任せに茂みをかきわけた。そこに開けた場所があるようには見えなかった。ウィンストンが従うと、自然の空き地にやってきたのがわかった。小さな開けた草地で、それが背の高い若木に囲まれて完全に閉ざされている。女子は立ち止まって振り返った。

「着いたよ」と彼女。

数歩離れて向き合った。まだとても近づく気にはならなかった。

「小径で何も言いたくなかったのは、隠しマイクがあるかもしれないから。たぶんないとは思うけど、あるかも。いつもあのブタどものだれかが、こっちの声を認識する可能性はあるし。ここなら大丈夫」

まだ近づくだけの勇気が出なかった。「ここなら大丈夫？」かれはまぬけに繰り返した。

「ええ、木を見てよ」小さなトネリコで、しばらく前に切り倒されてから、また生えてきて小枝の森林となり、その枝のどれも手首ほどの太さもない。「マイクを隠せるほどの大きさのものはないよな。それにここには前にもきたし」

間を持たせるための会話でしかなかった。かれはもう彼女に近づけるようになった。彼女はまっすぐ背をのばして横にたち、顔に浮かんだ微笑はかすかに肉肉っぽく、まるでなぜ彼がそんなにためらっているのか不思議に思っているかのようだった。ブルーベルは地面にこぼれ落ちて積み上がっていた。ひとりでに落ちたかのようだった。彼女の手を取った。

「信じられないだろうが、この瞬間まで君の目が何色か知らなかった」茶色か、とかれは認識した。茶色でもうすい茶色で、まつげが濃い。「こうして私の実際の姿を見て、私を見ても我慢できるのか？」

「うん、全然」

「私は三十九歳。妻がいて始末できない。静脈瘤もある。入れ歯が五本」

「全然どうでもいい」と彼女。

次の瞬間、どちらが動いたかはわからないが、彼女が腕の中にいた。当初は、まったく信じられないという思いしかなかった。若々しい肉体が自分の身体に押しつけられ、黒髪の固まりが顔に当たり、そして、すごい！本当に彼女は顔を上げて、ウィンストンはその広い赤い口にキスしていたのだった。その腕をこちらの首に巻きつけて、愛しい人、大切な人、大好きと呼んでいた。地面に押し倒しても、まったく抵抗せず、好きにしていたのだった。だが本当のことを言えば、単なる接触以上の肉体感覚はなかった。感じたのは信じられなさで誇りだった。これが起きているのは嬉しかったが、肉体的な欲望はない。あまりにはやすぎる。彼女の若さときれいさにかれは怯えた。女なしで暮らすのに慣れすぎていたのだ——理由がわからなかった。女子は身体を起こし、ブルーベルを髪から引っ張り出した。そして寄り添ってすわり、腕をこちらの腰に回した。

「あわてなくても大丈夫。午後ずっとあるんでしょ。すばらしい隠れ家だと思わない？コミュニティハイキングで前に迷子になったときに見つけたんだ。だれかが近づいてきても、百メートル先から聞こえる」

「君の名は？」とウィンストン。

「ジュリア。あなたのは知ってる。ウィンストン——ウィンストン・スミス」

「どうしてわかった？」

「そっちよりも調べごとはうまいつもりなんだけどね、愛しい人。ねえ、あのメモを渡す日より前には、あたしのこと、どう思ってた？」

ウソを告げようという誘惑は一切感じなかった。最悪のことをまっ先に語るのは、一種の愛の告白ですらあった。

「見るだけでいやだった。強姦してから殺したいと思ったよ。二週間前には、その頭を敷石でかち割ってやろうかと本気で考えた。本当のことを言えば、君が思考警察の関係者だろうと思っていたよ」

彼女は大喜びで笑った。明らかにこれを、自分の変装の優秀さに対する讃辞と受け取ったのだ。

「やめてよ、思考警察だなんて！本気でそんなこと思ったの？」

「まあ、ずばり思考警察とは言わないがね。だが君の全般的な外見——とにかく君が若くて新鮮で健康だというだけでだよ、おわかりだろうが——君がおそらくは——」

「立派な黨員だと思ったんだろ。発言も行いも純粹。横断幕、行進、スローガン、ゲーム、コミュニティハイキングとかその手のいろいろ。そしてちょっとでもチャンスがあったら、あなたを思考犯罪者として告発して殺させるとでも思った？」

「うん、そんなところだ。若い女子の大半はそんな具合だからね、ご存じの通り」

「このろくでもない代物のせいだよ」と彼女は青年反セックス連盟の深紅の腰帯を引きちぎり、それを枝に投げかけた。そして、まるで自分のウェストに触れて何かを思い出したかのように、オーバーオールポケットを探って、小さなチョコレートの固まりを取り出した。それを半分に割り、片方をウィンストンにくれた。食べないうちから、それがきわめて珍しいチョコレートなのはわかった。暗く光り、銀紙に包まれているのだ。チョコレートは通常、鈍い茶色のボロボロした代物で、その味は、何と表現したものか強いて言うなら、ゴミを焼いたときの煙のようだった。だがいつだったか、彼女がくれたようなチョコレートを味わったことがあった。その香りを一嗅ぎしただけで、何かはっきり特定できない記憶が甦ってきたが、強力で心乱れるものなのはまちがいがなかった。

「これ、どこで手に入れた？」

「闇市」と彼女は平然と言った。「実はあたし、まさにそんな具合の女子だから。外見はね。スパイ団では班のリーダー。青年反セックス連盟のボランティアを週に三夜やるし。何時間も何時間も、あのろくでもないクズをロンドン中に貼って回んの。行進ではいつも横断幕の端を持つようにして。いつも快活で、絶対何もサボらない。いつも群集と怒鳴れ、というのがモットー。それしか安全でいられないからさ」

チョコレートの最初のかけらがウィンストンの舌の上で溶けた。すばらしい味だった。だが意識のふちのほうで動き回っている記憶がまだあった。何か強くかんじられつつも、明確な形をとっておらず、横目でとらえた物体のような記憶が。彼はそれを脇に押しやった。それが、取り消したいのにはや取り消せない、何か行動の記憶だということしかわからなかった。

「君はずいぶん若い。私より十歳か十五歳は年下だ。私のような男のどこに魅力を見出したんだ？」

「顔の何かかな。運試しをする気になったから。おさまりの悪い人を見つけるのはうまいからね。初めて見たときから、あいつらに逆らっているのは確信したんだ」

あいつら、というのは党のこと、とくに党中央のことらしい。そいつらについて、彼女

は公然と嘲るような憎悪をもって語ったのでウィンストンは落ち着かない気分になったが、どこか安全でいられる場所があるとすれば、ここはまちがいなく安全だというのもわかっていて。彼女について驚愕させられたのは、粗野な口ぶりだった。党員は罵倒語など使わないはずで、ウィンストン自身もほとんど罵倒語は使わなかった。少なくとも声に出しては。だがジュリアは、党、特に党中心について語るときには、小便まみれの路地にチョークで書かれているような言葉を使わずにはいられないようなのだ。決していやではなかった。単に党やそのやり口に対する反逆の一症状でしかなく、なぜだかそれが自然で健全に思えたのだ。まるで腐った藁をかいたときの、馬のくしゃみのようなものだ。二人は空き地を離れ、木漏れ日があちこちに見える木陰を歩き、道が並んで歩くほど広くなったときには、お互いの腰に手を回すのだった。腰帯がなくなると、そのウェストがずっと柔らかく感じられるのに気がついた。二人とも声はささやきにとどめた。空き地をぬけると、静かにしたほうがいい、とジュリアは言った。やがて二人は小さな森の端まで来た。ジュリアはかれを止めた。

「開けたところには出ないで。見ている人がいるかもしれないから。大枝の後ろにいれば大丈夫」

ハシバミの茂みの影に二人は立っていた。日差しは、無数の葉の間をぬけても、まだ顔に当たると暑かった。ウィンストンは向こうの草原を見渡し、奇妙な、ゆっくりした認識でショックを受けた。見てすぐわかった。古い、草が食べられた放牧地で、それを横切る歩道があり、あちこちにモグラ塚がある。反対側の荒れた茂みには、楡の木の大枝がそよ風のなかでごくかすかに揺れており、その葉が女の髪のように密なかたまりとなって、ささやかにそよいでいる。まちがいなくどこか近くに、視界からははずれているけれど、小川があって、緑の淀みにはデースが泳いでいるはずでは？

「近くに小川がないか？」かれはささやいた。

「あるよ、小川が。実は次の野原の端にあんの。魚もいて、すごい大きい。それが柳の下の淀みに寝て、尻尾をゆらしているのを見られるんだ」

「黄金の国——まさに」とかれはつぶやいた。

「黄金の国？」

「なんでもないんだ、本当に。ときどき夢で見る風景なんだ」

「見て！」ジュリアがささやいた。

ほんの五メートルも離れていない、ほとんど二人の顔の高さにある枝に、ツグミが舞い降りた。二人が見えなかったのかもしれない。鳥はひなたで、二人は日陰にいたのだ。それは翼を一度ひろげてから、また慎重に畳んで、ちょっと頭を下げて、まるで太陽に何かお辞儀をするかのようで、そして流れるような歌をさえずりはじめた。午後の静けさの中で、その音量は驚異的だった。ウィンストンとジュリアは身を寄せ合い、魅了された。音楽はひたすら続き、一分ごとに驚くほどの変奏を示し、一度も同じものを繰り返すことなく、まるでその巧みさを意図的にひけらかしているかのようだった。ときどき数秒止まり、翼を開いてはまた畳み、それから斑点模様のついた胸をふくらませて、再び爆発するように歌い出した。ウィンストンはそれを、一種の漠然とした畏敬をこめて眺めた。あの鳥は、だれのために、何のために歌っているのだろうか？ 伴侶もライバルも見えてはいないのだ。それがだれもない森林の端にとまり、何もないところに音楽を注ぐよう仕向けたのは何なのだろうか？ やはりどこか近くにマイクが隠されているのではと思った。かれとジュリアは低いささやき声でしかしゃべっておらず、二人の会話は拾われまいだろうが、

ツグミは聞かれたことだろう。その装置の向こう端では、チビのカナブンめいた男が熱心に聞いているかもしれない——あの鳥の歌を聴いているのだ。だが次第に、音楽の洪水があらゆる憶測を頭から追い出した。まるでそれが、全身に浴びせられた一種の液体で、それが木漏れ日と混ざり合ったかのようなようだった。かれは考えるのをやめ、ひたすら感じた。腕の曲がったところにおさまった彼女のウェストは柔らかくて温かかった。それを引き寄せ、胸を寄せ合った。彼女の身体がこちらに溶け込むかのようなようだった。手をどこに動かしても、水のように受け入れてくれる。二人の口が出会った。さっき交わしたハードなキスとはまったくちがう。二人が再び顔を離すと、どちらも深くため息をついた。鳥が怯えて、翼をはためかせて飛び去った。

ウィンストンは彼女の耳に唇をよせた。「今だ」とささやいた。

彼女はささやき返した。「ここじゃダメ。隠れ家に戻って。そのほうが安全」

すばやく、ときどき小枝をピシピシと折りながら、二人は空き地へと戻っていった。いったん若木の輪の中に入ると、彼女は向きを変えて対面した。どちらもせわしい息づかいだったが、彼女の口の端に微笑が再びあらわれていた。立ってこちらを一瞬見てから、自分のオーバーオールジッパーを探った。そして、そうだ！ほとんど夢の中と同じだ。想像したのと同じくらいすばやく、彼女は服をむしり取り、それを横に投げ捨てた動作は、文明を丸ごと殲滅させるかのごとき、あの壮大なる動きなのだった。彼女の身体は太陽の中で白く輝いた。だが一瞬、かれはその身体を見ていなかった。その目は、かすかで大胆な微笑をうかべた、そばかす顔に釘付けになっていた。かれは、彼女の前にひざまづき、相手の手を取った。

「これは前にもやったのか？」

「もちろん。何百回も——まあ、何十回ってところかな」

「党员と？」

「うん、いつも党员と」

「党中心の連中と？」

「あのブタどもとはやらないでしょ、絶対。向こうは、ちょっとでも機会があればやりたがる連中がいくらでもいるけど。表向きほどの聖人君子じゃないから、あいつら」

心が踊った。何十回となくやったのか。それが何百回だったらよかったのに——何千回でも。腐敗を匂わせるものはすべて、荒々しい希望でかれを満たすのだ。わかるものか、党は皮剥けば腐りきっていて、その奮闘努力と自己否定のカルトは、単に不正を隠すための隠れ蓑なのかもしれないぞ。その連中丸ごと、ライ病か梅毒に感染させられたら、もう喜んでそうするのだが！腐敗させ、弱め、衰えさせるものなら何でも！彼女を引き下ろして、二人が向き合ってひざまづくようにした。

「聞いてくれ。君が寝た男が多ければ多いほど、君が愛おしくなる。わかるか？」

「うん、完璧に」

「純潔が大嫌いなんだ。善良さなんか嫌いだ！どこにも美德なんか一切ほしくない。みんなが骨の髄まで腐敗していてほしいんだ」

「おやおや、それならあたしでぴったりなはずね、愛しい人。骨の髄まで腐りきってるから」

「これをやるのは好きなのか？ 私だけのことじゃない。やること自体が？」

「大好き」

何よりも聞きたかったのはそれだった。単にある人間の愛だけでなく動物的本能、単純

な無差別の欲望。それが党を粉々に引き裂く力なのだ。彼女を草の上に、こぼれ落ちたブルーベルの上に押さえつけた。今回は何の困難もなかった。すぐに二人の胸の上下動が通常速度にまで減速し、一種の喜ばしい脱力感の中で、二人は離れて転がった。日差しは暑くなったようだった。二人とも眠くなった。彼は脱ぎ捨てたオーバーオールに手を伸ばして、彼女の上に部分的に引っ張り上げた。ほぼすぐに二人とも眠りに落ち、半時間ほど眠った。

先に目をさましたのはウィンストンだった。起き上がりそばかす顔を眺めた。まだ自分の手のひらを枕に静かに眠っている。口を除けば、彼女を美人とは言えない。目のまわりには、よく見ればシワが一、二本ある。短い黒髪はきわめて濃く柔らかかった。彼女の名字も住所も知らないことにふと思い当たった。

若く力強い肉体、いまや寄る辺なく眠る肉体は、かれの中に哀れむような、護りたいという気持を目覚めさせた。だがあのハシバミの木の下で、ツグミが歌っているときに感じた無上の優しさは、完全には戻らなかった。彼はオーバーオールを脇にやって、彼女の白い横腹を眺めた。昔なら、男が女子の肉体を見てそれが望ましいと思ったら、それで話はおしまいだった。だが現在では純愛だの純粋な性欲だのは持てない。どんな感情も純粋ではあり得ない。すべては恐怖や憎悪と交じりあっているからだ。二人の抱擁は戦いであり、絶頂は勝利だった。党に対する一撃なのだ。それは政治的行為なのだった。

第3章

「ここにはもう一度こられるけど。どんな隠れ家でも、二回は安全に使えるの。でもあと一、二ヶ月は無理」とジュリア。

目を覚ましたとたん、彼女の態度が変わった。警戒したビジネスライクな様子になって、服を着ると、深紅の腰帯を巻き、帰宅の旅の細部を手配し始めた。これは彼女に任せるのが当然に思えた。明らかにウィンストンにはない実務的な感覚が備わっているし、またロンドン周辺の田舎部について、無数のコミュニティハイキングから蓄積した網羅的な知識を持っているらしい。与えられた帰路は、来た道とはまったくちがっていて、別の鉄道駅に送られた。

「絶対に行きと同じ道では帰らないで」と、まるで重要な一般原則を言明するかのよう
に述べた。先に帰るのは彼女で、ウィンストンは半時間待ってからそれを追うように言われた。

四晩後に、仕事の後で会える場所を指示した。貧困区画の一つにある街路で、青空市場があり一般に混雑して騒々しかった。彼女は屋台の間をうろつき、靴紐か縫い糸でも探しているふりをする。まわりが大丈夫だと判断したら、彼が近づいたときに鼻をかむ。そうでなければ、彼女を素通りすること。だが運がよければ、群集の真ん中で、四分の一時間は安全に話ができて、次の逢瀬を手配できる。

「じゃあ、いかなきゃ」かれが指示を飲み込むと同時に彼女は言った。「19時30に戻る
ことになってるから。青年反セックス連盟に二時間参加しないと。ピラまきかなんかすんの。ひどいじゃない？ 身体を払ってくれない？ 髪に小枝とかない？ 本当？ ならさよなら、愛しい人、さよなら！」

彼女はこちらの腕に飛び込み、ほとんど暴力的にキスをする、一瞬後には若木の間を押し分け、ほとんど音もなく森の中に姿を消した。いまだに彼女の姓も住所もわからなかった。だがそれで何か変わるわけでもない。二人が屋内で会えるとか、文書でやりとりできるとかいうのは、考えられないことだったからだ。

結局のところ、二人は二度とあの森の空き地には戻らなかった。五月の間に二人が実際に性交できた機会は、あと一回しかなかった。それはまたジュリアの知っている隠れ家でのことで、三十年前に原子爆弾が落ちた田舎の、ほとんど無人の地域にある、廃墟となった教会の鐘楼だった。たどりついてしまえば、そこはいい隠れ家だったが、そこに行くまでがとても危険だった。それ以外は街頭でしか会えず、晩ごとに場所が変わり、しかも一度に半時間以上は決して過ごせなかった。街頭ではふつう、話はできた、とは言える。混雑した歩道をふらふら歩き、完全に肩を並べるわけでもなく、決してお互いを見ることもなく、二人は奇妙な間歇的な会話を言い、まるで灯台の明かりのようについたり消えたりするのだが、いきなりそれが党の制服の接近やテレスクリーン間近となって沈黙に陥り、

それから何分か後に、文章の途中から再開して、そして事前に決めた場所で別れるためいきなり中断し、そして翌日ほぼ前置きなしに続けられる。ジュリアはこうした会話にずいぶん慣れているようで、それを「分割払いの会話」と呼んでいた。また彼女は、唇を動かさずに話すのが驚くほど上手だった。夜毎の会合が一ヶ月近く続いて、やっと一回だけキスを交わせた。だまって横丁を通っているとき(ジュリアは大通りから離れているときには決して口をきかない)、耳をつんざく轟音がして地面が揺れ、空気が暗くなり、気がつくウィンストンは横倒しになっていて、アザができて縮み上がっていた。ロケット爆弾がかなり近いところに落ちたにちがいない。いきなり、ジュリアの顔が自分の顔からほんの数センチのところにあるのに気がついたが、それがチョークのように蒼白だ。唇まで白かった。死んだのか！抱きしめると、自分がキスしている顔が生きた温かい顔なのがあった。だが何やら粉っぽいものが唇を遮った。二人とも顔がぶあつい漆喰で覆われていたのだ。

ランデブー場所にやってきても、合図もなしにすれちがわねばならないときもあった。ちょうどパトロールが角を曲がってきたり、頭上をヘリコプターが飛んでいたりしたからだ。それほど危険でないときでも、出会う時間を見つけるのはむずかしかっただろう。ウィンストンは週60時間労働、ジュリアはさらに長時間勤務で、休日は仕事の圧力に応じて変わり、なかなか一致しなかった。どのみちジュリアは完全に空いた晩がめったにない。講義やデモに出席し、青年反セックス連盟のピラまきをしたり、憎悪週間用に横断幕の用意、貯蓄キャンペーンの集金、その手の活動ですさまじい時間を費やしていた。その甲斐はある、カモフラージュなんだ、というのが彼女の言い分だった。細かいルールを守れば、でかいルールを破れる。彼女は果てはウィンストンまでせっついて、一晚を追加で差し出し、熱心な党員が自発的にやっているパートタイムの弾薬作業に登録させたのだった。だから毎週一晚、ウィンストンは麻痺しそうな退屈の中で四時間過ごし、小さな金属のかげらをネジで留めるのに費やした。おそらく爆弾の信管の部品なのだろう。場所はすき間風まみれの、薄暗い工房で、ハンマーで叩く音がテレスクリーンの音楽と陰惨に混じり合っているのだった。

教会の鐘楼であったときには、断片的な会話のすき間が埋められた。日が照りつける午後だった。鐘の上の小さな四角小部屋の空気は暑く淀んでいて、ハトの糞の匂いがプンプンしていた。そのほこりっぽい小枝まみれの床にすわって二人は何時間もしゃべり続け、ときどき片方が立ち上がって、矢狭間から外をのぞき、だれも近づいてこないのを確かめるのだった。

ジュリアは二十六歳だった。他の女子三十名(「いつも女臭いの！女なんか大嫌い！」と彼女はついでのように言った)と共に寄宿舎暮らしで、仕事は、推測通り、創作部の小説執筆機だった。仕事は楽しく、主に強力ながらもクセのある電気モータの駆動と保守作業だった。「頭は悪い」けれど、手を使うのは好きで、機械作業には自信があった。長編執筆のプロセスをすべて説明できた。計画委員会が発行する一般指令からはじまり、書き直し部隊による最後の修正で終わるのだ。だが、最終製品には興味が無いという。「読むなんてどうでもいい」とのこと。本はジャムやブーツの靴紐のように、とにかく作らなければいけない商品なのだ。

60年代初頭以前の記憶はまったくなく、革命前の日々についてよく語った唯一の人物は、八歳のときに姿を消した祖父だった。学校ではホッケーチーム主将で、二年連続で体育トロフィーを勝ち取っていた。スパイ団では班長で、青年連盟では支部書記を務めてか

ら青年反セックス連盟に加わったのだった。いつも見事な人柄を表向きにはまどっていた。ポルノ課——創作部の中で、プロレの間に流通させる安手のポルノを量産する下位部門——での仕事にさえ選ばれたほどだ（これは文句なしによい評判を示すものなのだ）。そこで働く人びとにはクソ屋と呼ばれている、と彼女は述べた。そこに一年ほどとどまり、『おしおき物語』『女子校での一夜』といった題名のブックレットを袋に密封したものをくり出す支援をした。これらはプロレの若者たちがこっそり買うよう意図されたもので、自分たちが何か違法のものを買っているという印象を与えようというわけだ。

「どういう本なんだい？」とウィンストンは好奇心にかられて尋ねた。

「ああ、ろくでもないクズ。ホントに退屈。プロットは6種類しかないんだけど、それを多少入れ替えるわけ。もちろんあたしは万華鏡の仕事しかなかったけど。書き直し部隊には一度も入らなかった。文芸屋じゃないですからね——その仕事ですらこなせないほど」

ポルノ課で働く人びとはすべて、部長たちを除けば女子だと知って彼は驚愕した。その理屈は、男は性本能が女性よりも抑えにくいので、扱う汚物により墮落する危険性が高い、というものだった。

「既婚女性がそこで働くのさえいい顔をしないんだ、あいつら」とジュリアは付け加えた。女子はいつも実に純粋ということになっていた。ここにそうでない女子が一人いるわけだが。

初の情事は十六歳のとき、六十歳の党員とのものだが、この相手は後に逮捕を逃れるために自殺した。「ありがたい話だったな、そうでないと自白のときにあたしの名前も吐かせただろうから」。その後はいろいろ相手がいた。彼女の考える人生というのは単純きわるものだった。こっちは楽しくすごしたい。「あいつら」というのは党のことだが、こっちの楽しみを邪魔したい。だから精一杯ルールを破る。「あいつら」がこちらの歓びを奪うのと同じくらい、自分がかまるのを回避したいというのが自然なのだと思っているらしい。党が大嫌いで、それを極度に粗野な言葉で述べたが、党の全般的な批判はしなかった。自分自身の生活に関係しない限り、党のドクトリンなどに関心はなかったのだ。すでに日常用語と化したものを除けば、彼女がニュースピーク用語を使わないのに気がついた。友愛団のことなど聞いたことがなく、そんなものが存在することさえ信じるのを拒んだ。党に対する組織的な反逆など、どのみち失敗するに決まっているから、彼女から見ればバカげたものだった。ルールを破りつつ同時に生き延びるのが賢明なのだ。若い世代には彼女のような者がどれだけいるのだろうか、とかれは漠然と思った。革命後の世界で育ち、それ以外は何も知らず、党を何か、空と同じように変えられないものとして受け入れ、その権威に対して反逆することなく、ウサギが犬をよけるように、単にそれを回避するだけ。

結婚の可能性についてはお互い話さなかった。あまりに突拍子もなく考える価値もない。ウィンストンの妻キャサリンがどうにか始末できたとしても、そんな結婚を認める委員会など想像もつかない。白昼夢としてさえ絶望的だった。

「どんな人だった、奥さんって？」とジュリア。

「言うなら——ニュースピークの、『好笑的』って知ってるか？ 天然の正統、悪い思考を持ってないという意味」

「知らない。でもその手の人は知ってる、まったくろくでもない」

結婚生活の話を語り始めたが、奇妙なことに、その要点についてはすでに知っている様子だった。キャサリンに触れたとたんその身体が硬直すること、腕をしっかりとこちらに

巻きつけているときですら、全力でこちらを押しつけているように思えるやり方について、ジュリアは自分自身で見たか感じたかしたように説明してくれたのだった。ジュリアが相手だと、そういう話も苦勞せずにできた。どのみちキャサリンは、とっくの昔に痛々しい記憶ではなくなり、単なる嫌な思い出になっていたのだった。

「それでも、たった一つのことさえなければ我慢したんだが」。かれは、キャサリンが毎週同じ夜に無理矢理実施させた、冷感症のちょっとした儀式について語った。「向こうも嫌でたまらなかったのに、絶対にそれをやめようとしらないんだ。それを彼女はこう呼んでいた——絶対に見当つかないだろうね」

「私たちの党への義務」ジュリアは即答した。

「なぜわかった？」

「あたしだって学校くらい行ってんの。十六歳以上は月一度のセックス対話。それと青年運動でも。何年もかけて叩き込むから。たぶんかなりの場合にはうまくいくんじゃないかな。でももちろん、確実ににはわかんないよね。人間なんてみんな偽善者ばっかだから」

ジュリアはこの話題を広げはじめた。なんでも彼女自身の性に戻ってくるのだ。どんな形であれそれに触れられると、彼女はすさまじい鋭さを発揮する。ウンストンとはちがって、彼女は党の性的純潔主義の内的な意味を把握していた。単に性本能が、党の支配の及ばない独自の世界をつくり出すから、可能なら破壊すべきだということにとどまらない。もっと重要なのは、性的剥奪がヒステリーをつくり出すということだ。これは望ましい。戦争熱と指導者崇拝に変換できるものだからだ。彼女の言い方は次の通り。

「性交ではエネルギーを使うよね。そして終わったら幸せで、他のことなんかどうでもいい。あいつらは、みんながそんなふうを感じるのが我慢できないでしょ。いつも活力で満ち満ちていてほしいわけ。行ったり来たりの行進だの声援だの旗振りだの、単にセックスが歪んだだけ。自分の中で幸せなら、ビッグ・ブラザーだの三カ年計画だの二分憎悪だの、その他あいつらのくだらないクズなんかで興奮する必要なんかもないもん」

まったくその通りだ。純潔性と政治的正統性の間には直接の親密なつながりがある、とかれは思った。

というのも、党が黨員たちに求める恐怖、憎悪、きちがいじみた騙されやすさを適切な水準で維持させるためには、何位か強力な本能を封じ込めて、それを原動力として使うしかないではないか？ 性衝動は党にとって危険であり、党はそれを逆手に取って利用した。あいつらは親の本能にも似たような細工をしている。家族を本当に廃止はできないし、実際、人々はほとんど古くさいやりかたで子どもを大切にしよう奨励されている。その一方で、子供たちは系統的に親に刃向かうように仕向けられ、親をスパイして、その逸脱を報告せよと教わる。家族は実質的に、思考警察の延長となるのだ。それは、あらゆる人が昼夜を問わず、自分を親密に知っている密告者に取り囲まれるようにするための装置なのだった。

いきなり、キャサリンに思いを馳せた。キャサリンならまちがいなく、思考警察に自分をつきだしたことだろう。とはいえ、バカすぎてこちらの意見の非正統性に気づかなかったかもしれないが。だがこの瞬間に本当に彼女のことを思い出させたのは、午後のうだるような暑さで、それが額に汗をもたらした。十一年前の、別のあるうだるような夏の午後起こったこと、いや起こらなかったことについて、かれはジュリアに話し始めた。

結婚して三、四ヶ月の頃だった。ケントのどこかで、コミュニティハイキングの途中で迷子になったのだ。他のみんなから数分遅れただけだったが、曲がるころをまちがえ

て、すぐに古いチョーク採石場の縁で行き止まりになってしまった。十、二十メートルほどの急激に落ち込む崖で、底には大きな石が転がっている。道を尋ねられる相手もいなかった。迷子になったと気づいた瞬間、キャサリンはおろおろし始めた。騒々しいハイキングの群集から一瞬でも離れると、彼女は何かまちがったことをしたような気分になるのだ。すぐに来た道を急いで戻り、他の方向を探したがった。だがその瞬間、ウィンストンはミソハギの固まりが、眼下の崖の割れ目に生えているのに気がついた。その一つの固まりは二色、マゼンタとレンガの赤で、どうやら同じ根っこから映えているようだった。そんなものはこれまで見たこともなかったので、キャサリンに来て見るよう呼びかけた。

「ご覧、キャサリン！ あの花をご覧よ。あの谷底近くの固まり。二つのちがった色が混じってるの見える？」

すでにキャサリンはそこを去ろうと向きを変えていたが、いささか不承不承とはいえ、一瞬そこに戻ってきた。かれが指さしているところを見ようと、崖っぷちから身を乗り出しさえた。かれはそのちょっと後ろに立って、支えようと妻のウェストに手を置いていた。

この瞬間、まったく二人きりだということに思い当たった。どこにも人っ子一人おらず、そよぐ葉もなく、鳥すらない。こんな場所なら隠しマイクがある危険はないも同然だし、マイクがあっても音しか拾えない。午後の最も暑く眠たい時間だ。太陽が照りつけ、顔に汗がたっていた。そこでふと思いついたのだ……

「そこで一発、ドンとどついてやらないと。あたしならそうしたな」とジュリア。

「そうだな、君ならやっただろうよ。私だって、いまの私ならばそうしたかもしれない。あるいはむしろ——いやわからん」

「やらなくて後悔してる？」

「うん、全体としては、やらなくて後悔してる」

二人はほりっばい床に並んですわっていた。彼女を近くに引き寄せる。その頭がこちらの肩にのせられ、その髪の毛の香りがハトの糞を隠した。彼女はとても若いのだ。まだ人生から何かを期待しており、不都合な人物を崖から突き落としたところで、何も解決しないのを理解していないのだ、とかれは思った。

「実のところ、何も変わらなかったらうな」とかれ。

「だったらなんで、やらなくて後悔すんの？」

「単に、やらないよりやるほうが好みだからというだけだ。私たちのやってるこのゲームでは、私たちの価値はない。ただ、他よりマシな失敗があるってだけなんだ」

ジュリアの肩が、異論でうごめくを感じた。いつも自分がこの手のことを言うと反論するのだ。個人が常に敗北するとは認めなかった。ある意味で彼女は、自分がすでに破滅していて、遅かれ早かれ思考警察につかまって殺されると気がついてはいた。だが彼女の精神の別の一部では、自分が好きに生きられるような秘密世界の構築が可能だと信じていたのだ。必要なのは、ツキと狡猾さと大胆さだけ。幸福などないというのを彼女は理解しなかった。唯一の勝利ははるか未来、自分が死んだずっと先にしかないことも、党に対して宣戦布告をした瞬間から、自分を死骸として考えたほうがいいというものも理解しなかった。

「私たちは死者」とかれ。

「まだ死んでない」とジュリアは平板に述べた。

「肉体的にはね。六ヶ月、一年——五年かもしれない。私は死ぬのが怖いんだ。君は若

いから、おそらく私よりもっと怖がっているかもしれない。もちろん、できるだけ先送りはしたい。だがそれでほとんど何もちがいは生じない。人間が人間である限り、死と生は同じことなんだ」

「まったく、デタラメもいいとこ！ 寝るならどっちがいいの、あたしか骸骨か？ 生きていて楽しくない？ 感じるのが好きじゃないの？ これがあたし、これがあたしの手。これがあたしの脚。あたしは本物。確固たる存在、生きてる！ コレ、好きじゃないの？」

ジュリアは身をひねり、下腹部を押しつけてきた。オーバーオール越しに、熟しているのにシッコリした胸が感じられた。その肉体が、若さと活力の一部をこちらに注ぎ込むようだった。

「うん、大好きだ」

「なら死ぬ話はやめてよ。さて、そろそろ次に会う話を固めておかないと。あの森の場所に戻ってもいいかな。かなりほとぼりも冷めたと思うし。でも今回は別のやり方で行かないと。全部計画ずみ。まず列車にのって——でもホラ、図示してあげるから」

そしてその実務的なやり方で、彼女はほこりを集めて小さな四角を作り、ハトの巣からの枝を使って床に地図を描き始めた。

第4章

ウィンストンは、チャリントンさんの店の二階にある、貧相な小部屋を見回した。窓の脇では巨大なベッドが、ボロボロの毛布とカバーのない長枕でしつらえられていた。十二時間表示の古くさい時計は、マントルピースの上でカチカチと時を刻んでいた。隅の折りたたみ式テーブルの上には、最後の訪問時に買ったガラスの文鎮が、半ば暗闇の中で柔らかに輝いていた。

炉格子の中には、チャリントンさんが提供してくれたおんぼろのブリキ製オイルストーブ、シチュー鍋、コップ二つがあった。ウィンストンはバーナーに点火して、鍋に水をいれて沸かした。封筒に入れた勝利コーヒーとサッカリン錠をいくつか持ってきた。時計の腕は、17-20を指している（訳注：これは7-20のまちがいのはず）。実際には19-20なのだ。彼女は19-30にやってくる。

愚行だ、愚行だ、と精神は言い続けていた。意識した甘い考えの自殺行為的愚行。党員が犯せる犯罪の中で、これは最も隠しようがない。実はこのアイデアが頭に漂ってきたのは、ある幻影としてなのだった。ガラスの文鎮が、折りたたみ式テーブルの表面に写っているという幻影だ。見込んだとおり、チャリントンさんは喜んで部屋を貸してくれた。明らかにそれで手に入る数ドルをありがたがっていた。また、ウィンストンがその部屋を求めているのは、情事のためなのだと知っても、ショックを受けたり機嫌を損ねたりはしなかった。むしろ遠い目をしつつ、いかにも一般論めいた話を始めて、ウィンストンはまるで自分が半ば目に見えなくなったかのような印象を受けた。プライバシーというのは、きわめて貴いものですなあ。だれしもたまには、一人きりになれる場所がほしいものですからなあ。そしてそんな場所があるなら、それを知った他の人々はだれであれ、それを他言しないのが普通の思いやりというものでしょうなあ。そして、言いながらほとんど姿を消すかのような雰囲気、この家には入り口が二つあって、片方は路地に続く裏庭から入れるのだ、と付け加えた。

窓の下ではだれかが歌っていた。ウィンストンは、モスリン地のカーテンの保護に護られつつ、のぞいてみた。六月の太陽はまだ空高く、眼下の日差しでいっぱい裏庭では、ノルマン建築の柱のようにがっしりした巨体の女性が、屈強な赤い上腕とズック地のエプロンを腰に巻いて、洗濯おけと物干しづなの間をドスドスと行き来し、一連の四角い白いものを洗濯ばさみで止めていた。赤ん坊のおむつか、とウィンストンは気がついた。口に洗濯ばさみをくわえていないときには、ずっと力強いコントラルトで歌い続けている。

しょせん夢とはわかっていたの
行きずりに消える四月の日
でも一目、一言、夢がそそられ！
それが

心を奪い去る!

この曲はロンドンを過去何週間も席卷していた。それは音楽部の下部局がプロレのために発表し続けている、無数の似たり寄ったりの曲の一つなのだった。

こうした歌詞は、人間の手を一切加えずに、歌詞機と呼ばれる道具で作られていた。だがこの女性はそれを実にリリカルに歌ったので、そのろくでもないゴミクズが、ほとんど心地よい音に変わりそうなほどだった。女性の歌声と、その靴が敷石に引きずる音が聞こえ、街頭の子供たちの叫びと、どこかはるか彼方ではかすかに車両の轟音が聞こえたが、それでもこの部屋はテレスクリーンがないおかげで、不思議なほど静かに思えた。

愚行だ、愚行だ、愚行!! と再び考えた。この場所に数週間以上通ったら絶対につかまってしまう。だが本当に自分たちだけのものと言える隠れ家を、屋内で手近に持てるという誘惑は、二人にとって強すぎるものだった。教会の鐘楼を訪れてからしばらくは、逢瀬を手配するのは不可能だった。憎悪週間を控えて、勤務時間がすさまじく増やされた。まだ一ヶ月も先なのだが、それに伴う莫大で複雑な準備が、あらゆる人に追加の仕事をもたらしていたのだ。やっと二人とも、同じ日の午後自由時間を確保できた。あの森の空き地に行くことで合意した。その前の晩に、二人は道端で手短かに顔をあわせた。いつもながら、群集の中でお互いにふらふら接近する間。ウィンストンはほとんどジュリアのほうに目をやらなかったが、チラリと見たところ、どうもいつもより青ざめているように見えた。

話しても安全と判断してすぐに彼女はつぶやいた。「全部取り消し。明日ってこと」

「なんだって?」

「明日の午後。無理」

「どうして?」

「ありがちな理由よ。今月は早くきちゃったの」

一瞬かれは激怒した。知り合って一ヶ月の間に、彼女に対する欲望の性質が変わったのだ。当初は、真の官能性などないも同然だった。最初の性交は単なる意志による行為だった。だが二回目以降はそれが変わった。彼女の髪の毛の匂い、口の味わい、肌の感触がウィンストンの中に、あるいはまわりの空気すべての染みこんだようなのだ。彼女は肉体的な必要性となり、求めるだけにとどまらず、手に入れる権利があると感じる存在となった。来られないと言われたとき、彼女にごまかされたような気がした。だがまさにその瞬間、群集が二人を押しつけあい、手が偶然触れあった。彼女はこちらの指先をすばやく握りしめ、それは欲望ではなく愛情をもたらすものだった。女性と暮らしているなら、こういう理由の失望は、当たり前何度でも起こるできごとなのだと思いがたつた。そして、これまでジュリアに感じたことのない、深い優しさにいきなり包まれた。自分たちが結婚十年の夫婦だったらと願った。いまと同じように二人で街路を歩けたらと願った。それを公然とやり、恐れることなく、小話をして家のためにあれこれちょっとした買い物をするのだ。何よりも、二人きりでいられて、しかも毎回会うたびに性交しなければと義務感にとらわれる必要のない場所があればと願った。チャリントンさんの部屋を借りるという考えを思いついたのは、まさにその瞬間というわけではなく、その翌日のどこかだった。それをジュリアに提案すると、驚くほどためらいなしに承知してくれた。二人とも、それがキチガイじみているのは知っていた。まるで二人とも意図的に墓場に近づこうとしているかのようだ。ベッドのふちにすわって待ちながら、再び愛情省の地下室のことを考えた。その

宿命づけられた恐怖が意識を出入りする様子は不思議なものだった。その地下室は、将来のどこかに固定されて横たわり、100の前に99がくると同じくらい確実に死に先立ってやってくるのだ。それを避けることはできないが、先送りにはできるかもしれない。だがそれなのに、ときどき意識的で意図的な行動により、人はそれが起こるまでの間隔を短縮する道を選んでしまうのだ。

この瞬間に階段を足早に上がってくる音がした。ジュリアが部屋に飛び込んできた。粗い茶色のキャンバス地のツールバッグを抱えていた。これはときどき省で彼女がうろうろ抱えているのを見かけたようなものだ。かれは進み出て彼女を抱きしめたが、向こうはいささか拙速に身をふりほどいた。相変わらずツールバッグを持っていたせいもある。

「ちょっと待った。持ってきたものを見せてあげるから。あのクソ勝利コーヒー持ってきた？ やっぱりね。元のところにしまっといてよ、そんなのいらないから。これ見て」

ジュリアはひざをついて、バッグを大きく開くと、そのてっぺんに詰めたスパナ数本とネジ回し一本を放り出した。その下にはきちんとした紙袋がたくさんあった。最初に手渡してきた袋は、不思議ながらおぼろげに馴染みのある感触がした。なんだか重たい、砂のようなものが詰まっていて、どこに触れても袋がへこむ。

「これって、砂糖？」

「本物の砂糖。サッカリンじゃない砂糖。それとパンが一斤——まともな白パン、あたしらのろくでもないパンじゃないよ——それとちっちゃい瓶入りのジャム。それと缶入り牛乳——でもこれ見て！ こいつは本当に胸張っちゃうわよ。ちょっとズックでかなり包まないといけなかったんだけど、それは——」

だが梱包の理由は説明するまでもなかった。その香りはすでに部屋を満たしていたのだ。豊かな熱い香りで、幼い子供時代からの放たれるように思えたが、確かに最近でもたまに出くわす、ドアがバタンと閉じられる前に通路から吹き流れてきたり、混雑した街路で不思議と広がったりする香りで、一瞬だけ香ってすぐに消えてしまう香りなのだ。

「コーヒーだ。本物のコーヒー」とかれはつぶやいた。

「党中央のコーヒー。丸一キロあんのよ」

「どうやってこんなにあれこれ手に入れられた？」

「みんな党中央の代物よ、あのブタども、あらゆるものを持ってんの、何でも。でももちろん給仕や召使いはいろんな人がそれをくすねて——ほら、紅茶の小さな包みもある」

ウィンストンは彼女の隣にしゃがんだ。そして袋の片隅を破って開いた。

「本物の紅茶だ。ブラックベリーの葉っぱじゃない」

「最近、紅茶はやたらに出回ってんの。インドを占領したとかなんとか」と彼女はあいまいに行った。「でも聞いてよ。三分だけ向こうを向いて。ベッドの反対側に行ってすわって。窓には近寄らないで。それと言うまでこっち向かないで」

ウィンストンは、モスリンのカーテン越しにぼんやりとながめた。下の裏庭では、赤い腕の女性が相変わらず洗濯おけと物干し綱の間をドシドシと往き来していた。口から洗濯ばさみをさらに二つ取って、感情たっぷりと歌った。

いずれ楽になると言うけれど
いつか忘れると言われるけれど
何年たってもあの微笑や涙
いまでも心を

締め付けるの！

彼女はそのたわごとめいた歌すべてを暗唱しているようだった。その声は甘い夏の空気とともに舞い上がり、きわめてリリカルで、何か幸福そうな憂鬱に満ちていた。六月の晩が果てしなく続き、洗濯物が無限にあって、そこに千年とどまりおむつを乾して、ゴミクズを歌い続けていても、彼女はまったく不満を抱かなかっただろうという気がした。そういえば、党員がだれ一人、自分だけで自発的に歌うのを聞いたことがないのは不思議だった。一人で歌うなどというのは、いささか非正統で、危険なほどエキセントリックで、まるで独り言のように思われた可能性さえある。人が何かについて歌いたいと思うのは、人々が多少なりとも飢餓水準に近いときだけなのかもしれない。

「もうこっち見ても大丈夫」とジュリア。

ふりむくと、一瞬彼女がだれだかわからなかった。実際に予想していたのは、彼女が全裸になっているところだった。だが全裸ではなかった。起きた変身はそれよりずっと驚くものだった。化粧していたのだ。

プロレタリア地区のどこかの店に忍び込んで、メイク材料を一揃い買ったにちがいない。唇は深い赤に塗られていた。頬には紅が差され、鼻には白粉が塗られていた。目の下にも何やら一筆加えられて、それが輝くように見せていた。あまりうまい化粧ではなかったが、そうした面でのウィンストンの基準はあまり高いものではなかった。それまで顔に化粧品をつけた党の女性など、見たことはおろか想像したことさえなかった。外観の改善は驚異的だった。適切な場所に少しばかり色を塗っただけで、ずっときれいになっただけでなく、何よりも、はるかに女性的になっていたのだ。そのショートヘアとボーイッシュなオーバーオールは、それを際立たせるばかりだった。彼女を腕に抱くと、その鼻孔に合成スマイレの波があふれた。あの地下室の台所の薄暗さと、女性の洞窟のような口が想いだされた。あの女が使っていたのと同じ香りだ。だがこの瞬間は、それも気にならなかった。

「香水もか！」

「ええそう、香水も、なの。そして次はどうするかわかる？ どっかから、本物の女性用ドレスを手に入れて、こんなろくでもないズボンの代わりにそれを着るの。シルクのストッキングとハイヒールも履く！ この部屋では、女になるんだ、党の同志じゃなくて」

二人は服を脱ぎ捨てると、巨大なマホガニーのベッドに飛び込んだ。彼女の前で全裸になったのは、これが始めてだった。これまでは自分の蒼白く貧相な身体があまりに恥ずかしく、さらにふくらはぎから突き出す静脈瘤と、足首の変色したアザも見せたくなかったのだ。シーツはなかったが、二人が横たわる毛布はすり切れてすべすべしており、ベッドの大きさとスプリングの効き具合には二人とも驚いた。「南京虫だらけなのはまちがいないけど、気にしないよね」とジュリア。最近ではプロレの住宅以外では、ダブルベッドにお目にかかることなどなかった。ウィンストンは少年時代にはたまに寝たことがあった。ジュリアは、思い出せる限り一度も経験がなかった。

やがて二人はしばらく眠り込んでしまった。ウィンストンが目覚めると、時計の針は九近くに迫っていた。身じろぎはしなかった。ジュリアがこちらの肘に頭を埋めて眠っていたからだ。そのメイクのほとんどは、ウィンストンの顔か長枕に移っていたが、軽い頬紅の染みが、彼女の頬骨の美しさをまだ引き立てていた。沈みゆく太陽からの黄色い日差しが、ベッドの足下に落ちかかり、暖炉を照らした。そこではシチュー鍋の水が激しく沸騰していた。裏庭の女性の歌は止まっていたが、遠い子供たちの叫びが街頭から漂ってき

た。廃止された過去には、こんなふうにはベッドに横たわるのが普通の体験だったのだろうか、と彼はぼんやり思った。夏の晩の涼しさの中、男と女が糸まわず、好きな時に愛を交わし、好きな話題の話をして、起き上がる必要などまるで感じることなく、単に横たわって外の平和な物音を聞いているのだ。そんなことがあたりまえに思えた時代など、もちろんあったはずもない、のだろうか？ ジュリアは起きて目をこすると、肘で状態を起こしてオイルストーブを眺めた。

「あの水の半分は湯気で蒸発しちゃってるね。すぐに起きてコーヒー淹れるから。あと一時間ある。そっちのアパートでの消灯時間は？」

「23 = 30」

「寄宿舎では23。でもその前に戻らないと。だって——おい、出てけこの薄汚い獣が！」
彼女はいきなりベッドで身をひねると、床から靴をつかんで、少年じみた腕の一閃でそれを部屋の隅に投げつけた。あの二分憎悪の朝に見た、ゴールドスタインに辞書を投げつけた動作とまったく同じだった。

「どうしたんだ？」とかれはびっくりして尋ねた。

「ネズミ。忌まわしい鼻を腰板から突き出してるのが見えた。あそこに穴があるな。でもしっかり脅かしてやったから」

「ネズミだと！ この部屋に！」とウィンストンはつぶやいた。

再び身体を横たえつつ、ジュリアは平然としていた。「そこら中にいんのよ。寄宿舎の台所にまでいるんだから。ロンドンの一部なんかネズミだらけ。子どもを襲うんだって知ってた？ ホント。そういう通りでは、お母さんは赤ん坊を二分とほっとけないんだって。でっかい茶色のネズミの仕業。それで最悪なのが、その獣どもがいつも——」

「やめてくれ！」とウィンストンは、目をしっかり閉ざした。

「ちょっと大丈夫？ 真っ青だけど。どうしたの、ネズミで気分が悪くなったの？」

「よりもよって——ネズミかよ！」

彼女は身体を押しつけて手足をからめ、自分の身体のぬくもりでウィンストンを安心させようともいうようだった。かれはすぐには目を開かなかった。数瞬にわたり、生涯にわたってときどき繰り返された悪夢に戻ったような気分になった。いつもおおむね同じ夢だ。暗い壁の前に立っていると、その向こう側に何か耐えがたいもの、恐ろしすぎて正視できないものがあるのだ。夢の中で最も深い気分はいつも自己欺瞞なのだった。というのも実は、その暗闇の壁の向こうに何がいて知っていたのだ。死ぬほど頑張れば、自分の脳みそのカケラを引きちぎるほど頑張れば、その存在を明るみに引きずり出すことさえできた。いつも、それが何かを突き止める前に目が覚めた。だがなぜかそれは、かれが黙らせたときにジュリアが言いかけていたことと関係しているのだった。

「すまん。なんでもない。ネズミが嫌いなんだ。それだけ」

「心配しないでね、愛しい人。あの薄汚い獣どもなんか、ここには入れないから。出かける前に、穴に少しズックを詰めとくね。そして今度くるときには、少ししっくいを持ってきて、きっちり穴埋めするから」

すでにあのパニックの黒い瞬間は半ば忘れられていた。ちょっと恥ずかしくなって、ウィンストンは身を起こしてベッドの頭部にもたれた。ジュリアはベッドを出てオーバーオールを着ると、コーヒーを淹れた。シチュー鍋から立ち上る香りはあまりに強力にわくわくするものだったから、二人は窓を閉めた。そうでないと外のだれかが気がついて、詮索したがるかもしれない。コーヒーの味よりさらにすばらしかったのは、そこに砂糖が加

えたなめらかな味わいだ。長年のサッカリンの後で、ウィンストンがほとんど忘れかけていた味わいだ。片手をポケットに突っ込み、もう片方の手にはジャムつきパンを持って、ジュリアは部屋の中をうろつき、本棚を興味なさそうに眺め、折りたたみテーブルを修理する最善の方法を指摘し、ぼろぼろの安楽椅子に身を沈めて快適かどうかを調べ、バカげた十二時間式の時計を、一種の辛抱強い興味をもって観察した。ガラスの文鎖をベッドのほうに持ってきて、もっと明るい光の中で見てみようとした。ウィンストンはそれを彼女の手から取り、いつもながら、そのガラスの柔らかく雨水のような見かけに魅了された。

「何なのそれ、何だと思う？」とジュリア。

「何でもないと思う——というか、何か使われていたわけじゃないと思う。だからこそ気に入ってるんだ。あいつらを変えるのを忘れた、ちょっとした歴史のかたまりだ。百年前からのメッセージなんだ、読み方さえわかっていたらね」

「それとあそこの絵」——と彼女は向かいの壁にかかった鉄版画に会釈した——「あれも百年前のもの？」

「もっとだ。二百かもしれないくらい。わからないよ。最近では、なんであれ年代なんか絶対わからないから」

彼女は近寄ってそれを眺めた「あの獣が鼻を突き出したのはここだな」と彼女は絵のすぐ下にある腰板を蹴飛ばした。「この絵に描いてあるのって何？ どっかで前に見たような気がするんだけど」

「教会だよ、少なくとも昔はそうだった。セント＝クレメント・デーンズ、という名前だった」。チャリントンさんに教わった詩の断片が頭に浮かび、半ばノスタルジックに彼は付け加えた。「オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘！」

仰天したことに、彼女がその先を続けた。

お代は三ファージング、とセント＝マーチンズの鐘

お支払いはいつ、とオールドベイリーの鐘——

その先は思い出せないや。でも最後のところは覚えてる。『これがロウソク、ベッドに導く灯り、これが鎌で頭を切り落とす！』

合い言葉の半分ずつのようだった。だが「オールドベイリーの鐘」の後にもう一行あるはずだ。うまくつつけば、チャリントンさんの記憶から掘り起こせるかもしれない。

「だれに教わった？」

「おじいちゃん。小さかった頃に暗唱してくれたものよ。八歳のときに蒸発させられたけど——というか、消滅したけど。レモンってどんなものだったのかな」と彼女は脈絡なしに付け加えた。「オレンジは見たことある。丸い黄色い果物で、皮が分厚いの」

「レモンなら覚えている。50年代にはかなり普通だったんだ。ものすごく酸っぱくて、匂いを嗅いだだけで歯がむき出しになる」

「あの絵の裏にはムシがいると思うんだな。いつか外して、よく掃除しようっと。たぶんそろそろ出なきゃいけない時間だよ。この塗り物を洗い落としはじめないと。まったくうんざり。後であなたの顔の口紅も落としてあげるから」

ウィンストンは、その後数分にわたり起き上がらなかった。部屋は暗くなりつつあった。転がって明かりにほうに向かい、横たわったままガラスの文鎖をのぞきこんだ。いつまでも見飽きないほどおもしろいのは、サンゴのかけらではなく、そのガラス自体の内部

なのだった。何とも言えぬ深みがあり、同時に空気のように透明だ。まるでガラスの表面が空の弧であり、空気まで含めて小さな世界を封じ込めたかのようなだった。自分がその中に入れるような気がした。いや、本当にその中にいて、マホガニーのベッドと折りたたみテーブルも、時計も鉄版画も、文鎮そのものもいっしょにいるような気がした。文鎮は自分がある部屋で、サンゴはジュリアと自分の命であり、それがクリスタルの真ん中で、一種の永遠の中に固定されているのだ。

第5章

サイムが消滅した。ある朝がくると、サイムは職場にいなかった。考えの浅い人々数名が欠勤を話題にした。翌日は、だれもサイムの話をしなかった。三日目にウィンストンは、記録部の入り口ホールに出かけて掲示板を見た。その掲示の一つは、チェス委員会の委員が印刷されており、サイムもその一人だった。それはほとんど前と同じに見えた——何も打ち消されたりはしていない——だが名前一つ分だけ一覧が短くなっていた。それで十分。サイムは存在しなくなった。もともと存在しなかった。

天気は焼け付くように暑かった。迷路のような省では、窓のない空調の入った部屋は平常気温を維持していたが、屋外では歩道が足を焼き、ラッシュアワーの地下鉄の臭気は恐ろしいほどだった。憎悪週間の準備がいまや全開で、全省庁の職員は残業していた。行進、会合、軍事パレード、講義、蠟人形、展示物、映画ショー、テレスクリーン番組すべてをまとめねばならない。観客席を作り、人形を作り、スローガンを決め、歌を書き、噂を流し、写真を偽造しなくてはならない。創作部のジュリアの課は、小説生産から外されて、一連の残虐パンフレットを急ごしらえしていた。ウィンストンは、いつもの勤務に加え、『タイムズ』の過去記事ファイルをひっくり返して、演説で引用されるニュース記事を改変したり粉飾したりするのに、毎日長い時間をかけていた。夜遅く、騒々しいプロレたちの群集が街頭をうろつく頃には、町は奇妙に熱っぽい雰囲気となった。ロケット爆弾がいつになく頻繁に落とされ、ときにははるか彼方で大爆発が起きて、だれにも説明がつかず、とんでもない噂ばかりが飛び交った。

憎悪週間のテーマ曲となるはずの新曲（「憎悪の歌」と呼ばれていた）はすでに作曲され、テレスクリーンで果てしなく宣伝されていた。荒っぽい吠えるようなリズムを持ち、音楽と呼べるかどうかとも怪しく、むしろドラムのビートに似ていた。行進する足音にあわせて何百人もの声がそれを歌うと、恐ろしかった。プロレたちはそれが気に入ったようで、深夜の街頭ではこの曲が、いまだに人気のある「しょせん夢とはわかっていたの」と競り合っていた。パーソンズ一家の子供たちは昼夜問わず一日中、クシとトイレットペーパーで作った楽器でそれを耐えがたいほど演奏し続けていた。ウィンストンの晩は空前の忙しさだった。パーソンズが率いるボランティア団が、憎悪週間に向けて街頭の準備をしており、バナーを縫い、ポスターを描き、屋根に旗竿を立て、吹き流しをかけるためのワイヤーを危なっかしげに通りに渡していた。パーソンズは、勝利マンション単独で旗やバナーを四百メートルにわたり掲げるのだと豪語していた。これぞ本領発揮ということで、かれは嬉々としていた。暑さと肉体労働のため、かれは晩に半ズボンと開襟シャツに戻る口実ができていた。そしてどこへでも顔を出し、押したり引いたり、ノコギリで切ったり釘を打ったり、即興をしたり、みんなを同志じみた励ましでみんなの士気を高め、肉体のあらゆるシワから、はてしないほどのすえた匂いの汗を放っていた。

新しいポスターがいきなりロンドンの到るところにあらわれた。キャプションはなく、単にユーラシア兵士の化け物じみた姿が描かれている。身長三、四メートルで、無表情な蒙古系の顔と巨大なブーツで前進し、腰だめにした軽機関銃を構えている。そのポスターをどの角度から見ても、その銃口は短縮法により拡大されていて、まっすぐこちらに向けられているように見えるのだ。この代物が、あらゆる壁の空いた場所に貼られ、ビッグ・ブラザーの肖像よりも多いほどだった。プロレたちは、通常は戦争には無関心だが、定期的な愛国心の熱狂へと追いやられていた。一般的な気運と調和するように、ロケット爆弾はいつもより大量の人々を殺していた。ステップニーの混雑した映画館に一発が落ちて、何百人もの犠牲者を瓦礫の中に埋めた。そのご近所の全住民が、長いいつまでも続く葬式に顔を出したが、それは何時間も続き、実質的には糾弾集会だった。別の爆弾が、遊び場に使われていた空き地に落下し、数十人の子供たちが粉々にされた。さらに怒りのデモが生じ、ゴールドスタインの人形が焼かれ、ユーラシア兵のポスター何百枚もが破り捨てられて炎にくべられ、その混乱の中で多くの店が強奪された。すると、スパイたちが無線波でロケット爆弾を誘導しているという噂が流れ、外国生まれの嫌疑をかけられた高齢夫婦の家が放火され、二人は窒息死した。

チャリントンさんの店の上の部屋では、そこに行けるときには、ジュリアとウィンストンは開いた窓の下のむきだしのベッドに並んで横たわり、涼しさを求めて素っ裸になっていた。ネズミは二度と戻ってこなかったが、暑さで南京虫がゾットするほど増えていた。気にならないようだった。汚くてもきれいでも、この部屋は天国だった。到着したらすぐに、闇市場で買ったコショウをすべてにふりかけて、服をはぎ取り、汗だくの身体で愛を交わして眠りに落ち、目をさますと南京虫たちが集結し、反撃すべく群がっているのだ。

四回、五回、六回——六月の間に二人は七回も密会した。ウィンストンは、始終ジンを飲む習慣を捨てた。飲みたいとも思わなくなっていた。以前より太り、静脈瘤はおさまって足首上の皮膚上の茶色い染みが残るだけとなった。早朝の激しい咳の発作も止まった。人生のプロセスはもはや耐えがたいものではなくなり、テレスクリーンにしかめっ面をしたり、呪詛を絶叫したりする衝動もまったくなくなった。いまや安全な隠れ家、ほとんど家のようなものがあるので、めったに会えず、しかも数時間ずつしか会えないのも大してつらくは思えなかった。大事なのは、古物店の上の部屋があるということだ。それがそこにあり、不可侵だと知っているだけで、その中にいるも同然なのだ。その部屋は一つの世界であり、絶滅した動物が歩ける過去のたまり場なのだ。いつも上階に向かうついでに足を止め、チャリントンさんと数分にわたりおしゃべりをした。老人はどうも、ほとんど、いやまったく外に出ないようだし、またほとんどお客もないようだった。小さい暗い店と、食事を調理するさらに小さな裏の台所とのあいだで、ほとんど幽霊のような暮らしをしていた。その台所にはいろいろあったが、中でも信じられないくらい古い蓄音機があり、巨大な拡声ホーンがついていた。かれはおしゃべりできて喜んでいるようだった。無価値な在庫の中を歩き回りつつ、その長い鼻と分厚いメガネと、ピロードの上着に包まれた曲がった肩を持つかれは、いつも商売人というよりは収集家の雰囲気漂わせていた。ある種の色あせた熱意をもって、かれはこっちのガラクタの山やあっちの山を指でいじる——瀬戸物の瓶の栓、壊れた嗅ぎ煙草入れの塗られたふた、とっくの昔に死んだ赤ん坊の髪の毛が入った金色銅のペンダント——そして決してウィンストンに買うかとは尋ねず、単にそれを味わうよう求めるのだ。かれとの話は、すり切れたオルゴールの奏でる音を聞くようなものだった。記憶の片隅から、忘れられた詩の断片をさらにひきずりだしてき

た。四と二十の黒鳥についての詩があり、曲がった角の牛の詩があり、哀れなクックロピンの死についての詩があった。「ご興味があるかと思ひ当たったのですがね」と新しい断片を語るたびに、かれは遠慮するような笑いを浮かべるのだった。だがどの詩でも、数行以上は思い出せないのだった。

いま起きていることが長続きしないのは二人とも知っていた——ある意味で、それが脳裏を離れたことはなかった。来るべき死の事実が、横たわるベッドなみに確固たるものに思えることもあり、二人は一種の絶望的な官能性でお互いを求め合った。まるで時計があと五分で鳴ろうというときに、呪われた魂が快樂の最後の固まりにしがみつこうようなものだ。だが、安全の幻想のみならず、それが永遠に続くという幻想に囚われるときもあった。実際にこの部屋にいる限り、どんな害も及ばないような飢餓したのだ。ここまでくるのは困難で危険だったが、部屋自体は保護区なのだ。まるでウィンストンがあのだ文鎖の中をのぞきこみ、このガラスの世界の中に入り込めるような気がして、いったん入ればそこで時間が止まると感じたときのようなようだった。しばしば二人は、逃避の白昼夢に浸った。この幸運が無限に続き、この密通をいまと同じように、自然に死ぬまでずっと続けられるという妄想だ。あるいはキャサリンが死んで、巧妙な手管によりウィンストンとジュリアはうまく結婚できる。あるいは二人とも姿を消して、どちらも見分けがつかないほど姿を変え、プロレタリア訛りで喋れるようにして、工場で仕事を見つけ、裏通りでだれにも知られずに生涯を送る。まったくのナンセンスで、二人ともそれは承知していた。現実には、逃げ出せるはずもない。唯一実行可能な計画は自殺だが、彼らはそれも実施するつもりなどなかった。日々、週ごとに、未来のない現在を紡ぐというのは止めようのない本能らしかった。ちょうど肺が、空気がある限り次の呼吸をしようとするようなものだ。

またときどき、二人は党に対する積極的な反逆活動をしようかとも話したが、そのための第一歩をどう踏み出すべきか見当もつかなかった。あの伝説の友愛団が現実だったとしても、そこに参加する方法を見つけるといふ困難があった。彼は自分とオブライエンとの間に存在する、というか存在するように思える、不思議な親密性についてジュリアに話した。ときどき、オブライエンの目の前にあっさり進み出て、自分が党の敵だと宣言して、支援を要求しようという衝動を感じるのだとも告げた。なかなかおもしろいこととして、これはあり得ないほど性急な行動だとはジュリアは考えなかった。彼女は人々を顔で判断するのに慣れていたので、ウィンストンが目つきの一閃だけでオブライエンを信頼できる人物と考えるのは自然なことだと思ったのだ。さらに彼女は、あらゆる人、またはほとんどあらゆる人が実はこっそり党を嫌っており、安全だと思えば当然ルールを破ると思っていた。だが、広範な組織化された反対勢力が存在するとも、存在できるとも信じようとはしなかった。ジュリアによれば、ゴールドスタインとその地下勢力のおとぎ話は、党が自らの狙いをもって発明したゴミクズの束でしかなく、人々は単にそれを信じるふりをするしかないのだと彼女は言う。彼女は党の集会や自発的なデモで、名前を聞いたこともなく、その犯罪と称するものなどこれっぽっちも信じていない人々の処刑を求めて、数え切れないほど絶叫してきた。公開裁判が起きているときには、法廷を朝から晩まで取り囲む青年連盟の連隊に参加し、ときどき「裏切り者に死を！」と叫んだ。二分憎悪の間は、ゴールドスタイン罵倒で彼女はだれにも負けなかった。だが、ゴールドスタインというのがだれで、どんな教義を代表しているのやら、彼女は本当に漠然としか知らないのだった。彼女は革命後に育ち、五〇年代や六〇年代のイデオロギー闘争のことなど若すぎて記憶になかった。独立した政治運動などという代物は、彼女の想像力の範疇にはなかった。

そしていずれにしても党は無敵だった。常に存在し、いつも変わらないのだ。それに反逆しようと思ったら、秘密の不服従か、せいぜいが誰かを殺したり何かを爆破したりといった、孤立した暴力行動しかないのだ。

ある面で彼女はウィンストンよりはるかに鋭く、党のプロパガンダにはるかにだまされにくかった。何かのついでにユーラシアに対する戦争に言及したら、彼女は戦争なんか起きていないと思っていると平然と言っかけて、ウィンストンを驚愕させた。ロンドンに毎日のように墜ちているロケット爆弾は、おそらくオセアニア政府が「単にみんなをこわがらせておくために」自ら発射しているのだろうと言う。これはまさに、ウィンストンがまったく思いもよらなかった発想だった。彼女はまた、二分憎悪でいちばん苦勞するのは、何とか爆笑しないようにすることだ、と述べたので、ウィンストンはいささかうらやましく思った。だが党の教えを疑問視するのは、それが何らかの形で自分自身の生活に関係してきたときだけだった。しばしばあっさり公式のおとき話を平然と受け入れたが、それは真実と嘘との差が彼女には重要に思えないからなのだった。たとえば彼女は、学校で教わったからということで、飛行機を発明したのは党だと信じていた(50年代のウィンストン自身の学校時代には、確かに党が発明したと主張していたのは、ヘリコプターだけだったはずだ。一ダースほどの年がたち、ジュリアが学校にいるときには、すでに飛行機も自分の発明に仕立てていたのか。もう一世代たてば蒸気機関も党の発明にされていることだろう)。そして飛行機なんか自分が生まれる前から、革命のはるか以前から存在したとウィンストンが告げても、その事実は彼女にとって、まったくどうでもいいことなのだった。結局のところ、飛行機なんかだれが発明したってどうでもいいじゃない、というわけだ。それ以上にいささか衝撃だったのは、何かちょっとした一言から、オセアニアが四年前にはイスタシアと戦争していて、ユーラシアとは講和状態だったというのを覚えていないことがわかったときだった。確かに彼女は、戦争そのものがインチキだとは思っていたが、明らかに敵の名前がかわったことすら気がついていないのだった。「ずっとユーラシアと戦争してたんじゃないか」とジュリアは漠然と言った。ウィンストンは少し恐くなった。飛行機の発明は彼女が生まれるはるか前のできごとだが、戦争の敵の切り替えはたった四年前、彼女が成人したずっと後に起きている。それについて、ジュリアと四分の一時間ほども議論したのだろうか。最終的には彼女の記憶をむりやり取り戻させるのに成功し、確にかつてはユーラシアではなくイスタシアが敵だったと、彼女もぼんやり思い出した。だがこの問題は相変わらず彼女にとってはどうでもいいことだった。「それがどうしたっての？ いつだって、次から次へくだらない戦争じゃない。どのみちニュースなんて全部ウソなのはわかってんだし」

ときどき、記録部のことと、自分がそこでやっている恥知らずな偽造について話した。彼女はそれで別に震え上がるようでもなかった。ウソが真実になるとしても、足下に開く奈落を感じたりはしないのだ。ジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードの話をして、一瞬だけ指の間でつまんだ重大な紙切れの話をした。彼女はちっとも感銘を受けなかった。それどころか、そもそもこの話の意味すら最初は理解できなかったのだ。

「お友だちだったの？」

「いや、まったく知らない。党中心の人々なんだ。それに私よりはるかに高齢だ。革命前の古き時代の人々だ。ほとんど見たこともないくらい」

「だったら何心配してんのよ。みんなしょっちゅう殺されてるでしょうに」

かれは何とかわからせようとした。「これは突出した話なんだ。単にだれかが殺された

とかいうだけのことじゃない。過去が、昨日以前の過去が本当に消し去れたというのがわからないか？ それがどこかに生き残っていると、それは何か数少ない具体的なものについて、そこには何の言葉もついていない。あそこのガラスのかたまりみたいなもんだ。すでに私たちは、革命と革命以前の日々のことなんか、文字通り何も知らない。あらゆる記録は破壊されるか偽造され、あらゆる本は書き直され、あらゆる絵は描き直され、あらゆる彫像や街路や建物の名前が変えられる、あらゆる日付が改変されている。そしてそのプロセスが、一日ごと、一分ごとに続いているんだ。歴史は止まった。存在するのは果てしない現在だけで、そこでは党が常に正しい。もちろん私は、過去が偽造されているのは知っている。でもそれを証明するのは絶対に不可能なんだ。その偽造をやったのが私であっても。偽造が終われば証拠は何もない。唯一の証拠はこっちの頭の中だけで、他に私の記憶を共有する人間がいるかどうか、絶対に確信できない。生涯で、そのたった一度の瞬間だけ、事後の確固たる証拠を手にしてたんだ——事件の何年も後に」

「で、それが何の役にたったの？」

「何も、だって数分後に捨ててしまったから。でも同じことが今日起きたら取っておいただろう」

「ふん、あたしならそんなことはしない。リスクを冒す気は十分あるけど、でも何かそれなりの見返りがいるじゃん。古新聞の切れ端なんかのためじゃない。それを取っておいたとしても、何ができるっての？」

「大したことはできないだろう。でも証拠なんだ。あちこちに疑念を植えつけることはできただろう、あえてだれかにそれを見せたら話だが。私たちの生きている間には何も変えられるとは思わない。だがあちこちで小さな抵抗のかけらが湧き起こるのは想像できる——小さな集団が結束して、次第に成長し、ヘタをすれば多少は記録も残して、次世代がその後を引き継げるようにするんだ」

「次の世代なんかに興味はないの。興味あるのはあたしたちのことだけ」

「君ってのは、下半身だけの反逆者だな」そう言うと、彼女はこれが見事なほど気が利いていると思って、喜んで抱きついてきた。

党の教義が持つ意味合いについて、彼女はこれっぽっちも興味がなかった。こちらがインテグリティの原理や二重思考、過去の可変性、客観的現実の否定について話始め、ニュースピーク用語の使用を始めるたびに、彼女は退屈して混乱し、そんなものは全然気にしたことがないと述べるのだった。そんなのみんなゴミクズだと知ってるんだから、心配しなくていいじゃない？ 歓声をあげるべきときと、罵声を浴びせるべきときはわかっていたし、それだけで十分。それでもこの手の話を続けようとするれば、彼女は寝てしまうという心折れる習慣を持っていた。いつ、どんな体勢でも眠れる人間の一人なのだ。彼女と話をするうちに、正統性の外見を保ちつつ、その正統性がどんなものかまるで理解せずにいるのが実に簡単だということに気がついた。ある意味で、党の世界観というのは、それを理解できない人々にこそ、もっとうまく押しつけられるのだ。そういう連中には、現実の最もとんでもない侵害ですら受け入れさせられる。どれほど壮絶なことを要求されているか決して完全には理解できず、何が起きているかに気がつくほど、世間のできごとに関心がないのだ。理解しないことで彼らは正気でいられる。単にあらゆることを鵜呑みにするが、鵜呑みにしても何も害はない。それは何も残滓を残さず、まるで鳥の身体を消化されずに通り抜ける穀物のようなものだからだ。

第6章

ついに起こった。待っていたメッセージが届いたのだ。生涯にわたり、これが起こるのを待っていたように思えた。

省の長い廊下を歩いていて、ジュリアがメモを手にもすべりこませた地点の寸前まできたところで、自分より大柄なだれかが背後を歩いているのに気がついた。その人物は、だれだか知らないが軽く咳払いして、どうやら何かを話す前触れらしかった。ウィンストンは急停止して振り返った。オブライエンだった。

ついに二人は対面したが、ウィンストンの唯一の衝動は逃げ出すことに思えた。鼓動が暴力的に高まった。何も口をきけなかった。だがオブライエンは同じ動きで前進を続け、ウィンストンの腕に一瞬親しげな手を置いたので、二人は並んで歩いていた。彼は党内部のメンバーの大半と一線を画す、特有の深い親しみをこめて話し始めた。

「君と話す機会があればと思っていた。先日『タイムズ』で君のニュースピーク記事を読んでね。君はニュースピークに学術的な興味を持っているとお見受けするが？」

ウィンストンは、少し自制心を取り戻した。「学術的なんてとても。ただの素人です。私の仕事の対象でもない。言語の実際の構築にはまったく関わっておりませんし」

「だが君は非常にエレガントな書きぶりだよ。これは私だけの意見じゃない。最近、まちがいなく専門家と言うべき君の友人と話をしていたんだがね。その名前はちょっと失念してしまったが」

またもやウィンストンの心が痛み揺れた。これはサイムについての言及以外の何物でもあり得なかった。だがサイムは死んだばかりか、廃止されており非人間になっていた。サイムのことだとはっきりわかる言及は、命に関わるほど危険だった。オブライエンの言及は明らかに合図、暗号として意図されていたにちがいない。ちょっとした思考犯罪を示すことで、彼は二人を共犯者に仕立てたのだ。二人はゆっくりと廊下を下ったが、こんどはオブライエンが足を止めた。あの身ぶりにいつもこめられている、奇妙な、警戒を解くような親しみやすさで、彼は鼻の上のメガネを調整した。そして先を続けた。

「本当に言いたかったのはだね、君の論説では古くなった単語が二つ使われていたのに気がついたということなんだ。だがそれが古くなったのは、ごく最近のことだ。『ニュースピーク辞典』第十版は見たかね？」

ウィンストンは答えた。「いいえ。まだ十版は出ていないと思います。記録部ではまだ九版を使っています」

「十版はあと数ヶ月は登場しないはずだ。だが見本版が出回っている。私も一冊持っているが、興味があれば見てみるかね？」

「はい、是非とも」ウィンストンは、即座に、これがどこへ向かおうとしているかを理解した。

「新しい展開の中にはきわめて巧妙なものもある。動詞の数の削減——この部分は君にはさぞおもしろかろう。そうだな、伝令に辞典を持たせて届けようか？ だがどうも私は必ずその手のものを忘れるたちなんだ。君の都合にあわせて、私のアパートまで取りに来てもらうというのはどうかな。待った。これが住所だ」

二人はテレスクリーンの前に立っていた。いささかうわの空で、オブライエンはポケットを二つ探って、小さな革装のノートと金色のインキ鉛筆を取り出した。テレスクリーンの真ん前で、その道具の向こうはして見ているものならだれでも書いた内容を読めるような一で、オブライエンは住所を殴り書き、そのページを破ってウィンストンに渡した。

「晩にはおおむね家にいる。いなくても、召使いが辞典を渡してくれる」

そしてかれは立ち去り、紙切れを手にしたウィンストンを後に残した。今回はそれを隠す必要はなかった。それでも彼は、書かれたことを慎重に暗記して、数時間後に大量の他の紙といっしょに記憶穴に落とし込んだ。

二人がしゃべっていたのは、最大でもほんの数分だっただろう。この一件が持ち得る意味合いはたった一つしかない。これはウィンストンに、オブライエンの住所を報せる方法として仕組まれたものなのだ。これは不可欠だった。直接尋ねない限り、だれかの住所は決してわからないからだ。住所録のようなものはまったくなかった。「私に会いたければ、ここにいるぞ」というのがオブライエンの言いたいことなのだった。辞典のどこかにメッセージが隠されていることさえあり得る。だがいずれにしても、確実なことが一つあった。夢見た陰謀は本当に実在しており、自分はその外周部に到達したのだ。

自分が遅かれ早かれオブライエンの呼び出しに応えるのはわかっていた。明日か、それともずっと後になってか——確信は持てなかった。いま起きているのは、何年も前に始まったプロセスの展開でしかなかった。その第一歩は秘密のどうしようもない考えで、二歩目は日記を開くことだった。考えを言葉にして、いまや言葉を行動に移すのだ。最後の一步は、愛情省で起こる何かだ。彼はそれを受け入れていた。終わりは始まりに含まれていた。だが恐ろしいものだった。あるいはもっと厳密には、死の前触れのようなもので、前より少し命が減るようなものなのだ。オブライエンと話をしている間にもすでに、その言葉の意味が腹に落ちると、身体が寒気で震えるような気分に関わられた。墓場の湿り気に踏み出したような感覚だった。そしてそれが大してマシというわけではなかった。墓がそこにあり、自分を待ちうけているのはずっと知っていたからだ。

第7章

ウィンストンは目にいっぱい涙を浮かべて目を覚ました。ジュリアが眠そうに転がって身を寄せ、「どうしたの」のようなことをもごもご言った。

「夢で——」と始めたが、そこで止まった。複雑すぎて言葉にできない。夢自体もあるが、それにつながった記憶があり、それが目を覚ましてから数秒後に頭に泳いで入ってきたのだった。

かれは目を閉じたまま横たわり、まだ夢の雰囲気動揺していた。莫大で輝かしい夢で、全人生が雨後の夏の晩の風景のように目の前に広がるのだ。そのすべてがガラスの文鎮内で起きたが、ガラスの表面は天蓋であり、その天蓋の中のすべては、明るく柔らかい光であふれ、その中では果てしなく見通せるのだった。またその夢は、母親が行った腕の身ぶりを通じて理解されたものだった——ある意味ではその腕の動きで構成されていたのだ。その動きは、三十年後にニュース映画で観たユダヤ人女性が繰り返した動きでもあり、小さな少年を銃弾から守ろうとした動きだが、その直後にヘリコプターが二人とも粉々に吹き飛ばしてしまったのだった。

「なあ知ってたか？ この瞬間まで私は、自分が母親を殺したと思い込んできたんだ」

「なんで殺したの？」とジュリアはほとんど眠りかけて言った。

「殺していないよ。物理的にはね」

夢の中で、かれは最後に見た母親の姿を思い出し、そして数秒ほど目覚めるうちに、それを取り巻く小さなできごとの群れがすべて戻ってきた。長年にわたり自分が意図的に意識から押し出してきたらしき記憶だった。日付は確信がなかったが、それが起きたときには十歳未満ではなかったはずで、十二歳だったかもしれない。

父親はしばらく前に消失していたが、どれほど前かは思い出せない。当時の不確実で落ち着かない状況のほうがよく怯えている。空襲と地下鉄駅への避難をめぐる定期的なパニック、そこらじゅうに瓦礫の山、街頭に張られたわけのわからない宣言、全員同じ色のシャツを来た若者の群れ、パン屋にできるすさまじい行列、遠くで聞こえる間歇的な機関銃——何よりも、常に食べ物がないという事実。他の少年たちと午後に長い時間をかけて、ゴミ箱やくず入れを漁り、キャベツの葉の芯やジャガイモの皮、ときには酸っぱくなったパン屑を引っ張り出して、そこから慎重に灰を取りのぞいたりした。さらに一部のルートで移動するトラックの通過を待ったりもした。そのトラックは牛のエサを積んでいるのがわかっていて、道の穴でゆれると、ときには油かすを少しこぼしたりするのだ。

父親が消失したとき、母親は一切驚いたり、激しい悲しみを示したりしなかったが、突然の変化を見せた。完全に魂が抜けたようになったのだ。必ず起こるとわかっている何かを母が待っているのは、ウィンストンにさえわかった。やるべきことは全部こなし——料理、洗濯、繕い、ベッドの整え、床掃除、マントルピースのほこり払い——いつもきわ

めてゆっくりと、奇妙なほど余計な動作がなく、絵描きの使うマネキン人形がひとりだけで動いているかのようにだった。その大きく豊満な身体は、放っておけば自然に静止に戻るかのようにだった。ときには何時間にもわたり、母はほとんど身動きせずにベッドにすわり、妹をあやし続けた。妹は小さく病気でほとんど音を立てない、二歳か三歳の子どもで、顔はやせこけてサルめいている。ごくたまに、母はウィンストンを抱いて、何もいわずにずっと身体に押しつけるのだった。幼く自分勝手なウィンストンであっても、これが今後起こるはずの、決して口に出されぬできごとと何か関係しているのはわかった。

家族が暮らしていた部屋を思い出した。暗く、すえた匂いの部屋で、その半分が白い掛け布団を持つベッドに占領されていた。炉格子にガスこんろがあり、食べ物を入れる棚があり、外の踊り場には数部屋で共用している茶色い陶器の流しがあった。母親の彫像のような身体がガスコンロの上にかがめられ、シチュー鍋の何かをかき混ぜているところを覚えている。何よりも絶え間ない空腹と、食事ときのあさましい激闘を覚えている。母親を責め立てるように、何度も何度も、なぜもっと食べ物がなにか尋ね、母親に怒鳴って激怒し（自分の声色さえおぼえていた。その声はすでに声変わりし始めていて、ときには変などら声になった）、あるいは自分の分け前以上をもらおうとして、泣き言じみた哀れっぽい調子を試してみたりするのだ。母はいつも、取り分以上を与えてはくれた。かれが「男の子だから」最大の分け前をもらうのが当然だと思っていたのだ。だが母親がいくらくれても、必ずもっとよこせとウィンストンは要求した。食事ごとに母は、自分勝手を言っただけで、妹は病気で食べ物があるんだというのを忘れないでと諫めたが、無駄だった。母がよそうのをやめると、怒りで叫び出し、シチュー鍋とスプーンを母の手からむしり取ろうとして、妹の皿からかけらをひつつかんだりする。自分が他の二人を飢えさせているのはわかっていたが、自分が抑えられなかった。自分にはその権利があるとさえ思った。お腹の壮絶な飢えがそれを正当化するように思えたのだ。食事の間には、母親が見張っていないと、絶えず棚の乏しい食事の蓄えをくすね続けていた。

ある日、チョコレートの配給があった。過去何週間も何ヵ月も、そんな配給はなかった。その貴重なチョコのかたまりは、かなりはっきり覚えている。一家三人で、二オンスの板チョコだった（当時はまだオンスが使われていた）。三等分すべきなのは明らかだった。いきなり、他人の声を聞くように、自分が大音量で全部自分によこせと要求しているのが聞こえた。母は、欲張るなど告げた。長くしつこい口論になり、それが堂々巡りで、怒鳴り声と哀れに求める声、涙、抗弁、取引が行われた。小さな妹は両手で母親にしがみつき、まさに子ザルのように、母の肩越しに大きく悲しげな目でこちらを見つめていた。最後に、母はチョコの四分の三を割ってウィンストンに与え、残りの四分の一を妹に渡した。女の子はそれを手に持って、ぼんやりと見つめた。なんだか知らなかったのかもしれない。ウィンストンは、一瞬突っ立って妹を見ていた。そしていきなり素早く飛び上がって、チョコのかけらを妹の手からもぎ取り、ドアめがけて駆けだした。

母親が後から呼びかけた。「ウィンストン、ウィンストン！ 戻りなさい！ 妹にチョコを返して！」

かれは立ち止まったが、戻らなかった。母親の心配そうな目がこちらの顔をじっと見ていた。いまだにかれはそのことを考えても、そのときに起ころうとしていたのがなんだかわからなかった。妹は、何か取られたのはわかっている、弱々しい泣き声をあげはじめた。母は妹を抱きしめて、その顔を乳房におしつけた。その身ぶりの何かで、妹が死にかけているとわかった。かれは背を向けて階段を駆け下りた。手の中ではチョコレートがベトベ

トになり始めていた。

二度と母親を見ることはなかった。チョコレートを食べ喰ってから、少し後ろめたくなり、数時間街路をうろついたが、お腹が空いたので家に帰ったのだ。帰ると、母親は消えていた。これはその頃にはあたりまえのことになりつつあった。部屋からは母親と妹以外何もなくなっていなかった。服も持って行かず、母親のコートさえそのままだった。いまだに彼は、母親が本当に死んだのかまったく確実なことはわからない。単に強制労働キャンプに送られただけということも十分あり得る。妹はといえば、ウィンストン自信と同様に、内戦の結果として生まれた、家なき子たちのためのコロニー（教化センターと呼ばれていた）に除去されたのかもしれない、あるいは母親といっしょに労働キャンプに送られたのかもしれない、あっさりどこかに置き去りにされて見殺しにされたのかもしれない。

その夢はまだ脳裏に鮮明で、特に母の腕の、保護するような動きには、そのあらゆる意味がこめられているようだった。思いは二ヵ月前の別の夢に移った。ちょうど子どもをしがみつかせたまま、貧相な白い掛け布団のベッドにすわっていたのとまったく同じように、その夢の母も自分のはるか下の沈んだ船にすわっていて、一分ごとにますます深く溺れゆくが、それなのに暗くなる水を通してこちらを見上げていたのだ。

ジュリアに、母親の喪失の話をした。彼女は目も開けずに転がって、もっと快適な姿勢に落ち着いた。

「その頃のあんた、ケダモノじみたブタ小僧だったんでしょうね。子どもはみんなブタだから」と彼女はもごもごと言った。

「うん。だがいまの話の本当のポイントというのは――」

その息づかいから、彼女がまた眠りに落ちようとしているのは明らかだった。母の話を続けたいとは思った。記憶から判断する限り、母親は決して変わった女性ではなく、まして知的な女性などではなかった。それでありながら、彼女はある種の気高さ、ある種の純粋さを持っていた。それは単に、彼女が従っていた基準が個人的なものだったせいだ。彼女の気持ちは彼女自身のもので、外部からは変えられなかった。何の効果もない行動が、それ故に無意味だなどは、彼女は思いもよらなかった。だれかを愛したなら、愛したのであり、他に何も与えるものがなくても、それでも愛は与えるのだ。最後のチョコレートがなくなったとき、母は子どもを腕に抱きしめた。それは無駄で、何も変えはしなかったし、チョコレートを増やしもしなかったし、子どもの死も自分自身の死も回避はできなかった。だが彼女はそうすることが自然だと思ったのだ。船の難民女性がやはり男の子を腕で覆ったのは、銃弾に対して紙切れほどの役にもたたなかった。党がやった恐ろしいことは、物質世界に対する力をすべて奪っておきながら、単なる衝動、単なる気持など何の意味もないと思い込ませてしまったことなのだ。いったん党に掌握されてしまえば、自分の感じること、感じないこと、やることやらなかったことは、文字通り何のちがいも生み出さない。何が起ころうとこちらは消滅し、自分もその行動も、二度とだれにも伝わらない。歴史の流れからきれいさっぱり取りのぞかれてしまう。だがほんの二世前の人々にとっては、これはまるで重要なことには思えなかつただろう。かれらは歴史を改変しようとしていなかったからだ。かれらは個人としての忠誠心に動かされており、その忠誠心を疑問視することはなかった。重要なのは個人の関係であり、まったく無防備な身ぶり、抱擁、涙、臨終の男にかけられる言葉は、それ自体として価値を持つ。いきなり思い当たったが、プロレたちはこの状態にとどまっていたのだ。党や国や思想に忠実ではなく、お互いに対して忠実なのだ。生涯で初めて、ウィンストンはプロレを軽蔑もせず、またいつの日

か目覚めて世界を再生してくれるはずの、単なる不活性の力として見るのも止めた。プロレたちは人間のままでいたのだ。内面を硬直させなかった。自分ですら意識的な努力により学び直さねばならない原初的な感情にしがみついていた。そしてこれを考える中で思い出したのは、一見すると特に関係もないのだが、数週間前にちぎれた手が歩道に転がっているのを見て、それを自分がキャベツの莖であるかのように、ドブに蹴り込んだことだった。

「プロレたちは人間だ。私たちは人間じゃない」とかれは声に出した。

「なんで？」再び目を覚ましたジュリアが言った。

かれは少し考えた。「私たちにできる最善の策は、手遅れになる前にあっさりここから出て行って、お互い二度と会わないことだと思いついたことはないか？」

「ええ、それは何度か頭に浮かんだけど。でもやっぱりそれはいや」

「私たちはこれまでツイていたが、長続きはするまい。君は若い。普通で罪のない人間に見える。私のような人間に近づかないようにすれば、あと五十年は生き続けられるかもしれないんだ」

「いいえ。一通り考えぬいたの。あなたのやることは、あたしもやる。そう悪い方に考えなさんなって。あたし、生き続けるのは結構うまいんだから」

「私たちが一緒にいられるのは、あと六ヶ月——一年——わかるはずもない。最後にはまちがいなく引き離される。二人とも、どれほど徹底的に孤独になるかわかっているのか？ いったん捕まったら、どっちも相手のためにできることは何もなくなる。文字通り何も。私が自白したら、君が射殺され、自白を拒否したら、やっぱり君は射殺される。私のやることも言うことも、あるいは言わないことすら、何一つとして君の死を五分も先送りできないんだ。二人とも相手の生死すらわからない。どちらのまったく何の力も持てなくなる。唯一だいたいなのは、どちらもお互いを裏切らないということだが、それですら、いささかのちがいがいも生み出さない」

「裏切って、自白のことなら、もちろん二人ともやるでしょうよ。みんな必ず自白するんだから。どうしようもないでしょう。あいつら拷問すんのよ」

「自白じゃない。自白は裏切りじゃない。言うことややることはどうでもいい。大事なものは気持だけだ。あいつらが、君を愛するのを止めさせられたら——それが本当の裏切りだ」

彼女はそれを思案した。そして最後に行った。「あいつらにも、それはできない。どんなことでも、言わせることはできる——どんなことでも——でも、それを信じさせることはできないよ。こっちの内面には入ってこれない」

「そうだな」と彼は、少しばかり希望をこめて言った。「そうだな。確かにその通り。内面には入ってこれない。何も結果にちがいはなくても、人間のままでいるのが大切だと感じるなら、あいつらを打ち負かしたことになる」

決して眠らない耳を持つテレスクリーンのことを考えた。昼夜こちらをスパイはできるが、頭をしっかりと使えば、それでもあいつらを出し抜ける。あいつらが身につけた小知恵がいくらあっても、他の人間が何を考えているかつきとめるための秘密は決して身につけてはいない。本当にあいつらの手に落ちてしまえば、そうでもないのかもしれない。愛情省の中で何が起きるかはだれも知らないが、見当はつく。拷問、薬、神経反応を記録する繊細な機械、眠らせず一人きりにして、絶えず質問攻めにすることで次第にこちらを弱める。どのみち事実は隠しとおせない。調べれば追跡され、拷問で絞り出せる。だが生き延

びることではなく、人間のままでいることが狙いなら、それが最終的にどうだということか？ 気持を変えさせることはできない。それを言うなら、自分でも、やりたくても自分の気持ちは変えられない。発言や行動や思考のすべてを極度に細かく暴くことはできる。だが心の奥底、その仕組みが自分にとってすら謎の心は、不可侵のままなのだ。

第8章

やった、ついにやったんだ！

二人が立つ部屋は、細長くて柔らかく照らされていた。テレスクリーンは低いつぶやきにまで音量がしぼってあった。濃い青のじゅうたんの豊かさはピロードを歩いているような印象を与えた。部屋の向こう端にオブライエンが、緑の覆いをつけたランプの下にすわり、両側に大量の書類を積み上げていた。召使いがジュリアとウィンストンに入るよう示したときも、あえて顔を上げようとはしなかった。

ウィンストンの胸はあまりに高鳴りすぎて、自分がまともに話せるかも自信がなかった。やったんだ、ついにやったんだ、としか考えられなかった。ここにくること自体が軽率だったし、ふたりいっしょにくるなど、愚行のきわみだった。とはいえ二人とも別々の道筋でやってきて、オブライエンの戸口にくるまで会わなかったのだが。だがこうした場所に足を踏み入れるだけでも、かなり神経をすり減らした。党中心の住まいの中を見るなどめったにないことで、かれらの暮らす町の一角に足を入り込むことさえ珍しかった。このアパートの巨大な街区、あらゆるものの豊かさと広々とした様子、よい食べ物とよいタバコの馴染みのない香り、静かでおそろしいほど素早いエレベーターの上下動、あちこへと急ぐ白いお仕着せの召使いたち――すべてが尻込みさせるものだった。ここにくるよい口実があったが、いきなり角から黒制服の警備兵が登場し、書類を見せろと言い、出ていけと命じるのではないかという恐れに一步一步に襲われるのだった。だがオブライエンの召使いは、二人をためらわずに入れた。白い上着の小柄で黒髪の男で、ダイヤ型の完全に無表情な顔、まるで中国人のような顔だった。案内された通路は柔らかい絨毯がしかれ、クリーム紙の壁紙と白い腰板で、すべてがほこり一つ無いほど清潔だ。これもまたひるませるものだった。ウィンストンは、人間の身体が接触して薄汚れていない壁を持つ通路など、見た記憶がまったくなかった。

オブライエンは、指で紙切れをつまんで、それを熱心に調べているようだった。その重たい顔は、うつむいていて鼻筋が見えたが、侮れない様子で知的に見えた。二十秒ほども、身じろぎ一つせずすわっていただろうか。それから話筆機を引き寄せて、省庁のハイブリッド専門用語でメッセージを一気に口走った。

「第一テン五テン七は全面承認マル六の中の提案は愚劣ニプラス思想犯罪寸前削除せよマル機械類総経費の総プラス見積出る未建設作業は非進行マル通信終わり」

彼はもったいをつけて椅子から立ち上がると、無音の絨毯を横切ってこちらにやってきた。ニュースピーク語とともに、お役人じみた雰囲気少し薄れたようだったが、その表情はいつもよりも陰気で、まるで邪魔されて不愉快だとも言うようだった。ウィンストンがすでに感じていた恐怖を、ごく普通の恥ずかしさの一閃が貫いた。自分がばかげたま

ちがいをしてかしたことも十分あり得そうに思えたのだ。というのも、オブライエンが何やら政治的な陰謀家だなどという証拠など、現実には何があっただろうか？ 目の輝きと、たった一言のそれらしき発言だけだ。それ以外は自分の秘密の想像で、それが夢の上に乗っているだけだ。辞典を借りに来たという口実に立ち戻ることもできなかった。というのもそれならばジュリアの存在が説明つかないからだ。テレスクリーンの前を通り過ぎるとき、オブライエンが何か思いついたようだった。かれは立ち止まり、横を向いて壁のスイッチを押した。パチッという鋭い音がした。声が止まった。

ジュリアが小声をたてた。一種の驚きの叫びだ。自分のパニックの最中だというのに、ウィンストンもあっけにとられて、つい口走ってしまった。

「消せるんですか！」

オブライエンは言った。「そう、消せるんだ。我々にはその特権がある」。いまやかれは二人と向き合っていた。そのがっしりした身体が二人を見下ろし、その表情はいまだに解説不能だった。かれはウィンストンがしゃべるのを、いささかいかめしい様子で待っていたが、何をしゃべればいい？ この辞典ですら、かれが単なる忙しい人物で、なんで邪魔されたのかと苛立っているだけという可能性はあった。だれも口を開かなかった。テレスクリーンが切られてから、部屋は死んだように静まりかえった気がした。刻々と過ぎる秒がずいぶん長く感じられた。苦勞しつつもウィンストンは、オブライエンの目を見続けた。するといきなり、その陰気な顔が、何か微笑の発端のようにも見えるものへと崩れた。そのトレードマークのような身ぶりで、彼は鼻の上のメガネを直した。

「私が言おうか、それとも君が言うか？」

「私が言います」とウィンストンは即座に言った。「あれは本当に切られてるんですね？」

「ああ、すべては切られている。我々しかおらん」

「私たちがここに来たのは――」

ウィンストンは間をおいた。始めて、自分の動機がいかに漠然としたものかに気がついたのだ。オブライエンからどんな支援を期待しているのか、実は自分でもわかっていなかったもので、なぜ自分がここに来たかを言うのも容易ではなかった。先を続けたが、言っていることが頼りない、思い上がったものだというのは自覚していた。

「何か陰謀団があると考えています。何か秘密組織で、党への反対活動をしていて、あなたがその関係者だと思っています。私たちも参加して働きたいのです。私たちは党の敵です。英社主義の原理を信じていません。思考犯罪者です。また不倫者です。これをお話するのは、自分たちをあなたに委ねたいと思うからです。他の形で私たちを告発なさりたいなら、その覚悟はあります」

かれは立ち止まり、ドアが開いたのを感じて肩越しにのぞいた。すると確かに、あの小柄な黄色い顔の召使いがノックもなしに入ってきたところだった。それがデキャンターとグラスをのせたお盆を持っているのをウィンストンは見た。

オブライエンは平然と言った。「マーティンも一味なのだよ。飲み物をこっちに持ってきてくれ、マーティン。丸テーブルにのせてくれ。椅子は足りているか？ ならみんなすわって、落ち着いて話をしよう。マーティン、自分の椅子も持ってきてくれ。これから十分は召使いをやめていいぞ」

小男はすわり、すっかりくつろぎつつ、それでもまだ召使いめいた雰囲気や漂わせていた。従者が特権を楽しんでいるという雰囲気だ。ウィンストンは視界の端でかれを眺めた。この人物は全人生がある役割を演じることなのだという気がした。だからかれは、そ

の仮装の人格を一瞬たりとも捨てるのが危険だと感じてしまうのだ。オブライエンはデキャンターの首をつかんで、グラスを濃い赤の液体で満たした。それを見てウィンストンは、何か壁か掲示板で見た何かのおぼろな記憶が引き出された——電球で構築された巨大なびんで、それが上がったり下がったりして、中身をグラスに注いでいるように見えるのだ。てっぺんから見るとその代物はほとんど黒く見えたが、デキャンターの中ではルビーのように輝いていた。甘酸っぱい匂いを放っていた。ジュリアが自分のグラスを取って、露骨な好奇心をこめてそれを嗅いでいるのが見えた。

オブライエンはかすかな微笑を浮かべた。「ワインと呼ばれている。本で読んだことはあるはずだろう。残念ながら党外縁にはあまり出回らないようだがな」そして再び真面目な顔になり、グラスを掲げた。「まずは健康に乾杯するところからはじめるのがふさわしいと思うがね。そして我々の指導者に乾杯。エマヌエル・ゴールドスタインに」

ウィンストンは何かせき立てられるようにそのグラスを手を取った。これは呼んだこともあり、夢見てきたものだった。ガラスの文鎮やチャリントンさんの忘れかけた韻文のように、それは消えたロマンチックな過去に属したのだ。秘密の考えの中では古の時代と呼ぶのが好きな時代だ。どういうわけか、ずっとワインはきわめて甘いもので、ブラックベリージャムのような味で、すぐに酔ってしまうものだと思っていた。実際には、飲み込んでみると、この代物は実にはがっかりするものだった。本当のことを言えば、長年ジンを飲んできた後では、ほとんどワインの味など感じられなかった。かれは空のグラスを置いた。

「ではゴールドスタインは実在するんですね？」

「ああ、実在するし、健在だ。どこにいるかは知らん」

「そして陰謀は——組織は？ 本当なんですか？ 思考警察の単なるでっちあげではない？」

「いや、本当だ。友愛団と我々は呼んでいる。それが実在して君も一員だという以上は、友愛団のことはあまり知ることはないだろう。その話はすぐにするが」とかれは腕時計を見た。「党中心のメンバーですら、テレスクリーンを半時間以上切っておくのは賢明ではない。君たちはいっしょにくるべきではなかったし、帰りは別々に帰らなければいけない。同志、君が」——とジュリアに会釈し——「先に帰りなさい。二十分ほど余裕がある。わかると思うが、まずいくつか質問をさせてもらおう。一般的に言って、何をやる覚悟がある？」

「できることなら何でも」とウィンストン。

オブライエンは椅子にすわったまま身体を回転させてウィンストンと対面した。ジュリアのことはほとんど無視しており、ウィンストンが彼女を代弁するのが当然と思っているようだった。一瞬、まぶたがはためいた。そして低い、感情のない声で質問をはじめた。まるで決まり切った、一種の教義問答でもあるかのようで、その答のほとんどはすでにわかっているとでも言うようだった。

「命を捧げる覚悟は？」

「あります」

「人を殺す覚悟は？」

「あります」

「何百人もの無実の人々の死につながりかねない妨害工作を行う覚悟は？」

「あります」

「自国を裏切って外国に売り渡す覚悟は？」

「あります」

「インチキをして、偽造し、脅迫し、子供たちの精神を汚し、習慣性ある薬物を配布し、売春を奨励し、性病をばらまく覚悟はあるか——道徳の頹廃を引き起こして党の力を弱めそうなことはなんでもするか？」

「します」

「たとえば、子どもの顔に硫酸をかけるのが我々の利益にかなうようなことがあれば——それもやる覚悟はあるか？」

「あります」

「己の正体を捨てて、残り一生を、給仕や港湾労働者として送る覚悟はあるな？」

「あります」

「我々が命令すれば自殺する覚悟もあるな？」

「あります」

「二人とも、離ればなれになって二度とお互いに会えなくなる覚悟はあるか？」

「いや！」とジュリアが割り込んだ。

自分が答えるまでに、長い時間がかかったような気がした。一瞬ウィンストンは、口をきく能力が奪われたような気さえした。下は無言で動き、一つの単語の最初の音節を形成してから、もう一つのほうに移り、それが何度も何度も繰り返された。実際に言うまで、自分がどちらの単語を言うのかわからなかった。「いいえ」とついにかれは言った。

「正直に答えてくれてありがたい。我々としてはすべて知っておく必要があるのですね」とオブライエン。

そしてジュリアに向き直り、いささか気持のこもった声で付け加えた。

「この人が生き延びても、まったく別人になっているかもしれないのはわかるかね？ 新しい身元を与えねばならなくなるかもしれない。顔、動き、手の形、髪の色——声すら変わってしまう。そして君自身もちがった人物になっているかもしれない。我々の下界は、人々をまったく見分けがつかないほど変えてしまえるのだ。ときにはそれが必要となる。ときには脚や腕を切断することさえある」

ウィンストンは、マーチンの蒙古風の顔をもう一度脇目で見ずにはいられなかった。目に見える傷はなかった。ジュリアは少し青ざめ、そばかすが見えていた。だが大胆にオブライエンと向き合った。何かをつぶやいたが、了承のようだった。

「よろしい。この話は片付いた」

テーブルの上には、紙巻きタバコの銀の箱があった。いささかうわの空で、オブライエンはそれを他のみんなのほうに押しやり、自分でも一本取って、立ち上がるとゆっくり行ったり来たりし始めて、まるで立っているほうがよく考えられるとでもいうようだった。それはとても上質の紙巻きタバコで、高密でしっかり中身も詰まっておき、紙も馴染みがないほどすべすべしていた。オブライエンなまた腕時計を見た。

「マーティン、配膳室に戻ったほうがいい。十五分でスイッチを入れる。戻る前にこの同志たちの顔をよく見ておいてくれ。再び会うことになるだろう。私はわからん」

玄関でやったのとまったく同じように、小男の黒い目は一同の顔を見つまたいた。その態度には親しみのかけらもなかった。かれはみんなの外見を記憶していたが、それに何の興味も抱かず、特に興味も感じなかいかのようだ。ウィンストンは、合成の顔はその表情を変えられないのかも知れないと思いついた。口もきかず、一切の会釈もなく、

マーティンは部屋を出て、背後で静かにドアを閉めた。オブライエンは、黒いオーバーオールポケットに片手を突っ込み、もう片方の手で紙巻きタバコを持ちつつ、部屋を行ったり来たりした。

「まったく何もわからない状態で戦うことになるのはわかるな？ いつも何もわからない。命令を受けてそれに従うが、その理由はわからない。後で我々の住む社会の本当の性質と、我々がそれを破壊するための戦略を学べる本を送ろう。その本を読んだら、友愛団の正式メンバーになれる。だが我々の戦いが奉じる全般的な目標と、この辞典での目先の作業以外、君は何も知ることがない。友愛団が存在するとは告げたが、そのメンバーが百人なのか、一千万なのかは教えられない。君の個人的な知識からだ、メンバーがグダースもいるのかさえ断言はできない。接触相手は三人か四人で、それも消滅するにつれて時々更新される。これが君たちの最初の接触相手だったから、それは温存される。命令を受け取る時には私からくる。我々が君とやりとりを必要とするなら、それはマーティンを通じて行われる。最終的に君たちがつかまったら、自白する。それは避けられない。だが君たち自身の行動以外には、自白することはほとんどない。どうでもいい人間を一握り以上は裏切ることができないのだ。おそらく私さえも裏切ることはないだろう。その頃には、私は死んでいるか、ちがった顔のちがった人物になっているだろう」

かれは柔らかいじゅうたん上で、行ったり来たりを続けた。その身体のボリューム感にもかかわらず、その動きには驚くほどの優雅さがあった。それは片手をポケットに突っ込んだり、紙巻きタバコを扱ったりする身ぶりにさえも現れた。彼が与える印象は、強さにも増して、自信と理解に皮肉がかすかに混じったものだった。どれほど一途であっていても、かれは狂信者が持つ、他のすべてを度外視するような態度はまったくなかった。殺人、自殺、性病、四肢の切断、顔の改変の話をするときには、かすかにからかうような調子があった。その声はこう言うようだった。「これは避けられないことなのだよ。これは我々が、目をそむけることなくやらねばならないことなのだ、人生が再び生きる価値のあるものとなったら、我々はこんなことをしたりはしない」。尊敬の波、ほとんど崇拜の波が、ウィンストンからオブライエンに向けて発せられた。その瞬間に、彼はゴールドスタインの影のような姿を忘れていた。オブライエンの強力な肩と、そのぶっきらぼうな顔つき、実に醜いのに実に文明的なその顔つきを見ると、かれを倒せるなどと信じるのは不可能だった。かれを出し抜けるような策略は存在せず、予見できない危険も存在しないのだ。ジュリアですら感銘を受けたようだった。タバコの火が消えたのも忘れて、一心に聞き入っていたのだ。オブライエンは続けた。

「友愛団の存在について、噂は聞いただろう。自分なりにそれについての考えを形成したはずだね。たぶんそれが、巨大な陰謀家の地下世界で、それが地下室でこっそり集まり、壁にメッセージを書き殴り、合い言葉や特別な手振りでお互いを見分けるといったものを想像しただろう。そのようなものは存在しない。友愛団のメンバーたちは、お互いを見分ける手段をもたず、どのメンバーも、他にほんの数人以上の正体を知ることにはできない。ゴールドスタイン当人ですら、思考警察につかまったとしても、メンバー全員の一覧や、完全な一覧につながるようなどんな状況も提供できない。そんな一覧は存在しないのだよ。友愛団は一層できない。というのもそれは通常の意味での組織ではないからなんだ。それをまとめているのは思想だけで、それは破壊できない。その思想以外には何も己を支えるものはない。仲間意識も奨励も得られることはない。ついにつかまったときにも、何の助けも得られない。メンバーたちを決して助けたりはしないのだ。せいぜい、だれかを

黙らせることが絶対的に必要な場合には、ときどき囚人の独房にカミソリの刃をこっそり持ち込むことはできる。結果も無く希望もなしに生きるのに慣れねばならない。しばらく働き、やがてつかまり、自白し、死ぬ。君が見る結果はこれだけだ。自分の生涯に何か目に見える変化が起こる可能性はない。我々は死者なのだ。我々の真の命は未来にある。我々はそこに、一握りの塵と骨のかけらとしてそこに参加する。だがその未来がどんなに遠いものかは、知りようがない。千年先かもしれない。現在では、正気の領域を少しずつ広げる以外には何もできることはない。我々は集団としては行動できない。個人から個人へと知識を外に広げられるだけで、それが世代毎に続くのだ。思考警察がいる以上、それ以外の方法はない」

かれは足を止め、三度目の腕時計確認をした。そしてジュリアに言った。

「同志、そろそろ帰ってもらおう時間だ。待った。デキャンターがまだ半分残っている」

彼はグラスをそれぞれ見たし、その足を持って自分のグラスを掲げた。

「こんどは何に乾杯しようか？」と彼は、相変わらずかすかな皮肉を匂わせつつ言った。

「思考警察の混乱に？ ビッグ・ブラザーの死に？ 人類に？ 未来に？」

「過去に」とウィンストン。

「過去のほうが重要だ」と重々しくオブライエンも同意した。グラスを空け、ジュリアは即座に立ち上がって帰ろうとした。オブライエンは戸棚のてっぺんから小さな箱を取り出し、そこから彼女に平らな白い錠剤を渡して、舌の上に乗せておくように行った。ワインの匂いをさせたまま外へ出ないのが肝心だという。エレベーターの操作員たちはきわめて観察力が鋭いのだ。彼女の背後でドアが閉まった瞬間、オブライエンは彼女の存在など忘れたかのような様子だった。そしてまたちょっと行ったり来たりしてから、足を止めた。

「細かい話を詰めておこう。どこかに何かの隠れ家を持っているかと思うが？」

ウィンストンは、チャリントンさんの店の上にある部屋について話した。

「とりあえずはそれでいい。後で別のものを手配しよう。隠れ家はひんぱんに変えねばならない。それまでに、できるだけ早めに**あの本**を君に送ろう」——オブライエンですら、その一語が強調されているかのように発音したのにウィンストンは気がついた——「むろんゴールドスタインの本のことだ。一冊手に入れるまでにしばらくかかるだろう。あまり数がないものでね、ご想像のとおり。思考警察が、こっちの作るのに負けない速さでそれを追いかけて破壊するんだ。それで何が変わるわけでもないんだがね。あの本は破壊不可能なんだよ。最後の一冊が消えても、ほとんど一言一句を頭から再現できる。仕事にはブリーフケースを持っていくね？」とかれは付け加えた。

「はい、いつも」

「どんなヤツだ？」

「黒、ものすごくおんぼろで、ベルトが二本あります」

「黒、ベルト二本、ものすごくおんぼろ——よろしい。遠からぬ将来のある日——正確な日付はわからん——午前中の仕事の一つに、何か印刷ミスのあるので、反復を要求することになる。その翌日、ブリーフケースを持たずに仕事に行け。その日のどこかで、街頭で男が君の腕に触れて『ブリーフケースを落とされましたよ』と言う。その男が渡すブリーフケースに、ゴールドスタインの本が入っている。十四日以内に返却すること」

二人ともしばし無言だった。

「あと数分で君にも帰ってもらおう。再び会うだろう——そして会うときには——」

ウィンストンは顔を上げた。「暗闇のない場所で、ですか？」

オブライエンは驚いた様子もなくうなずいた。「暗闇のない場所で」とまるでそのほめかしの気がついたかのように言う。「さてそれでは、立ち去る前に何か言いたいことは？何かメッセージでも？何か質問でも？」

ウィンストンは思案した。それ以上尋ねたい質問はないようだった。まして、何やら大仰な一般論をここで口走りたい気もしなかった。オブライエンや友愛団と直接関係したことを何か尋ねるかわりに、かれの頭に浮かんだのは、母が最期の日々を過ごした薄暗いベッドルームと、チャリントンさんの店の上にある小部屋とが言わばいりまじったものと、あのガラスの文鎮と、ローズウッドの額に入った鉄版画だった。ほとんど思いつきのようにかれは口を開いた。

「オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘、で始まる古い詩を聞いたことはあったりしますか？」

またもオブライエンはうなずいた。一種の深い慇懃さで、かれはその一連を完成させた。

オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘
お代は三ファージング、とセントマーチンズの鐘
お支払いはいつ、とオールドベイリーの鐘
お金持ちになったら、とショーディッチの鐘

「最後の行をご存じなんですね！」とウィンストン。

「そうだ。最後の行を知っている。さて残念だが君はもう行ってくれ。いや待て。あの錠剤を一つ提供させてくれ」

ウィンストンが立ち上がると、オブライエンは手を差し出した。その強力な握手はこちらの手のひらの骨を潰しそうだった。戸口で振り返ったが、オブライエンはすでに、こちらのことを眼中から締めだそうとしているようだった。テレスクリーンを制御するスイッチに手を置いて待っている。その向こうにウィンストンは、緑の傘を持つランプと、話筆機と、書類がいっぱいに詰まった針金のバスケット群が見えた。この一件はおしまいだ。三十秒もしないうちに、オブライエンは中断された重要な党の仕事に戻るのだ、とウィンストンは思い当たった*1。

*1 訳注：オーウェル自身の最後の草稿では、ここに次の一節があったとのこと：

二百メートルほども進んだらどうか、二つの街灯の間にある暗がりにたどりついたところで、何か柔らかいものがぶつかってきたのでびっくりした。次の瞬間、ジュリアの腕がしっかりこちらの腕に巻きついていていた。

「ほら、最初の命令を破ったのがわかるよね」と彼女は唇をこちらの耳に寄せて囁いた。「でも我慢できなくて。明日の予定を決めなかったでしょ。聞いて」と彼女はいつものやり方で、次の逢瀬について指示を与えた。「じゃあね。おやすみ、愛しい人。おやすみなさい！」

彼女はこちらの頬を、ほとんど荒っぽく何度もキスしてから、壁の影にすべりこんで、すぐに姿を消した。その唇は冷たく、暗闇の中でその顔は蒼白だったように思えた。彼女が待っていたのは、次の逢瀬を手配するためだったとはいえ、彼女からの抱擁は、何かお別れとして意図されていたのだという奇妙な印象があった。

第9章

ウィンストンはくたくたで、身体がゼリー状になっていた。ゼリー状というのが適切な用語だ。それは唐突に頭に浮かんだのだった。身体は、ゼリーの弱さだけでなく、その半透明性も持っているように思えた。手のひらを掲げたら、透かして光が見えるような気がした。血液もリンパ液も、すさまじい仕事の山で干上がってしまい、弱々しい神経や骨や皮膚の構造だけが残っていた。あらゆる感覚が増幅されるようだった。オーバーオールが肩に食い込み、歩道が足をくすぐり、手の開閉すら一苦労で関節がきしむ。

五日で九十時間以上も働いた。省の他のみんなも同様だった。いまやそれがすべて終わり、彼は文字通り手持ち無沙汰だった。どんな性質の党の仕事も、翌朝まではなかったのだ。六時間を隠れ家で過ごし、さらに九時間を自分のベッドで過ごすこともできた。ゆっくりと、穏やかな午後の日差しの中で、かれは貧相な通りをチャリントンさんの店のほうに歩きつつ、常にパトロールを警戒し続けたが、この午後にはだれもじゃまするやつはいないと、不合理にも確信していた。抱えている重いブリーフケースが一步ごとにひざにぶつかり、脚の皮膚にピリピリするような感覚を走らせていた。その中にはあの本がある。すでに六日にわたり保有していたのだが、まだ開いてもおらず、見てもいなかった。

憎悪週間の六日目、行進や演説、叫び、歌、横断幕、ポスター、映画、蠟人形、響く太鼓とキイキイとしたトランペット、行進する足の踏みならす音、戦車のキャタピラ音、大量に集まった飛行機の轟音、轟く銃声——それが六日も続き、巨大なオルガズムが身もだえしつづつ絶頂へと近づき、ユーラシアの全般的な憎悪が極度に沸騰して譫妄状態となり、もし行事の最終日に公開絞首刑となる予定のユーラシア戦争犯罪者二千人をこの連中が捕まえたら、全員引きちぎられたのは疑問の余地がない——ちょうどこの瞬間に、オセアニアは実はユーラシアとはまったく戦争していないと発表された。オセアニアは、イースタシアと戦争をしている。ユーラシアは同盟相手なのだ。

もちろん、何か変化が生じたなどと認める発言は一切なかった。単にそれが発表され、それもあまりに突然で、あらゆるところで一気に、ユーラシアではなくイースタシアが敵だと報されたのだ。ウィンストンはそれが起きたとき、ロンドン中心部の広場でデモに参加していた。夜で、白い顔と深紅の横断幕がたっぷりと投光器で照らされていた。広場は何千人ほどでいっぱい、スパイ団制服を着た学童千人ほどのかたまりもいた。深紅の垂れ幕をかけた演台では、党中心からの弁舌家、小柄でやせていて、異様に長い腕と巨大なはげ頭にバラバラの巻き毛がくっついた人物が、群集を煽っていた。このランブルスティルツキンのような小男が、憎悪で顔を歪め、片手でマイクの首を握りつつ、もう片方の手(骨張った腕の先端ですさまじい大きさだ)が頭上の空気を恐ろしげに握りしめた。その声は、アンプのせいで金属っぽく、果てしない残虐行為、虐殺、強制移住、収奪、強姦、囚人拷問、民間人爆撃、嘘まみれのプロパガンダ、不当な攻撃、条約違反などの果てしない

カタログをがなり立てていた。それに耳を傾ければ、まず説得され、その後頭がおかしくならずにはいられない。数瞬ごとに、群集の怒りが沸騰して、話者の声は何千ものものどから抑えようもなく発せられる、野生の獣じみた罵声にかき消されてしまう。最も壮絶な叫びはすべて学童たちからやってきた。その演説が、二十分も続いたろうか、そこへ伝令が急いで演壇に駆け上がり、話者の手に巻いた紙切れが押し込まれた。かれは演説を中断することなく、その紙を開いて読んだ。声も態度もまったく変わらず、また発言の内容も一切変化しなかったが、いきなり名前が変わった。何も言われずに、群集の間に理解の波が走った。オセアニアはイースタシアと戦争しているのだ！ 次の瞬間、すさまじい動揺が起きた。広場を彩る横断幕やポスターはすべてまちがっているのだ！ そのほぼ半数は、まちがった顔が描かれている。妨害工作だ！ ゴールドスタインの手先が暗躍していたんだ！ 暴動じみた幕間が生じ、ポスターが壁から破り取られ、横断幕がビリビリに破かれて踏みこまれた。スパイ団たちは屋根の上によじ登り、煙突からはためく吹き流しを切断するという暴挙に出た。だが二、三分もするとすべては終わった。演説家はまだマイクの首を握り、肩を前に丸めたまま、空いた手で空をつかみ、そのまま演説を続けた。さらに一分で、群集からは再び動物めいた怒号が噴出していた。憎悪は前とまったく同じように続き、ただその標的だけが変わっていた。

振り返って見てウィンストンが感心したのは、話者がある行から次へと切り替えたのが文章の途中であり、しかも間を空けることもなく、構文さえも乱さなかったということだった。だがそのときのウィンストンには他に専念すべきことがあった。ポスターが引きちぎられている混乱の瞬間に、顔を見る余裕の無かった男が肩を叩いたのだ。「失礼、ブリーフケースを落とされましたよ」。ウィンストンはうわの空で、ブリーフケースを無言で受け取った。その中身を見る機会ができるまでに何日もかかるのはわかっていた。デモが終わった瞬間、すでに23時になっていたのに、かれは真実省に直行した。真実省の全職員もそうしていた。すでにテレスクリーンから発せられる命令は、全員を職場に呼び戻すものだったが、ほとんど必要ないものだった。

オセアニアはイースタシアと戦争していた。オセアニアは昔からずっとイースタシアと戦争していたのだ。過去五年の政治文献の相当部分は、いまや完全に廃れた。各種の報告や記録、新聞、書籍、パンフレット、映画、録音、写真――すべて電光石火で修正が必要だった。何の指令も発行されていなかったが、各部長が一週間以内に、ユーラシアとの戦争やイースタシアとの同盟について、一切の言及がどこにも残らないように意図しているのは周知のこととなった。圧倒的な作業量であり、しかも必要とされるプロセスは本当の名前では呼べないため、苦勞はさらに増した。記録部の全員が二十四時間のうち十八時間働き、睡眠時間はギリギリ三時間とれるだけだった。物置からマットレスが運び込まれ、廊下中に並べられた。食事は、食堂の服務員たちが手押し車で運んで来る、サンドイッチと勝利コーヒーだ。仮眠のため中断するときには、毎回ウィンストンは机の上から作業を一掃するようにしたが、眠たく痛む目をして仕事に這い戻る頃には、気送管の紙筒の洪水が、またもや吹雪のように机を覆っていて、話筆機を半ば覆い隠し、床にまでこぼれ落ちていたから、最初の作業はいつも、それを多少なりともきちんとした山に積み上げて、作業場所を空けることなのだった。何よりもひどいのは、その作業がまったくもって純粋に機械的なものではないということだった。名前を入れ替えるだけで十分なことも多かったが、できごとの少しでも詳細な報告だと、配慮と想像力が求められた。戦争を世界のこちらからあちらへと移転させるために必要な地理的知識ですら、かなりのものなのだ。

三日目になると目が耐えがたいほど痛み、メガネを数分ごとに拭かねばならなかった。背骨の折れそうな肉体的作業で苦闘しているようなものだ。それは拒否する権利はあるのだが、それでも神経症的なほどやりとげたくてたまらない作業なのだ。記憶する余裕がある限り、話筆機につぶやいたあらゆる言葉、インク鉛筆のあらゆる執筆が、意図的なウソだったという事実はまったく気にもならなかった。部の全員と同じく、その偽造が完璧となるように注意を払っていた。六日目のある朝、気送管を流れてくる筒の流れが減速した。最大半時間にわたり、気送管から何も出てこない。そして一つ筒がやってきて、その後は何もなし。どこでもほぼ同じ頃に、仕事が落ち着き始めていた。部の中を、深いながらも秘密のため息が走った。決して口に出せぬ偉業が実現したのだ。いまやどんな人間だろうと、ユーラシアとの戦争が起こったのを文書記録で証明することはできないのだ。1200 時には、省の全職員は明日の朝まで自由だという予想外の発表があった。ウィンストンは、作業中にずっと足の間に置かれており、寝るときには身体の下にあったスーツケースを相変わらず抱えたまま、家に帰り、ヒゲを剃り、風呂の中で水温がぬるま湯程度でしかなかったのに眠りこんでしまいそうになった。

何やら官能的に関節をきしませながら、かれはチャリントンさんの店の上にある階段を上った。疲れていたが、もう眠くはなかった。窓を開け、汚いちいさな石油コンロに点火すると、コーヒー用に水を入れた鍋をかけた。間もなくジュリアもくるだろう。一方で、本があった。彼はその自堕落な安楽椅子にすわり、ブリーフケースのベルトを解いた。

素人じみた製本の、重たい黒い本で、表紙には題名も著者も書かれていない。印刷もいささか不揃いだ。ページのふちはボロボロで、すぐにちぎれてしまう。まるでその本が多くの人々の手を経てきたかのような。題扉にはこう書かれていた。

寡頭制集産主義の理論と実践

エマヌエル・ゴールドスタイン著

ウィンストンは読み始めた。

第1章 無知は力

有史以来、おそらくは新石器時代末以来、この世には三種類の人々がいた。上級、中級、下層である。これらはいろいろさらに細かく分けられ、無数のちがった名前で呼ばれ、その相対的な数は、それぞれのお互いに対する態度と同様に、時代によって変わってきた。だが社会の基本構造は決して変わらなかった。すさまじい社会蜂起や、一見すると回復不能の変化の後でも、同じパターンが常にまたも確立してきた。ちょうどジャイロスコープが常に、どれほど遠くあちらこちらに押しやられても常に均衡に戻るのと同じである。

こうした集団の狙いはまったく相容れないものであり……

ウィンストンは読むのを止めた。主に、自分が快適かつ安全に読んでいるという事実を改めて噛みしめるためだ。一人きりだ。テレスクリーンもなく、鍵穴で聞き耳をたてる者もなく、肩越しにだれかいないかうかがったり、手でページを覆ったりする不安な衝動も

ない。甘い夏の空気が頬を撫でた。どこか遠くから、子どもの叫び声がかすかに漂ってきた。部屋そのものの中では、時計の虫の音のような音以外何も聞こえない。彼は安楽椅子にさらに深く腰を落ち着け、炉格子に足を投げ出した。至福であり、永遠だった。いきなり、いずれは一語残らず読み通し、再読するとわかっている本でときどきやるように、彼はいい加減なページを開くと、第III章にやってきた。そのまま読み進めた。

第III章 戦争は平和

世界を三つの大きな超国家に分割するというのは、実のところ20世紀半ば以前の時点で予想できたし、実際予想されていた。ヨーロッパがロシアに吸収され、大英帝国がアメリカ合衆国に吸収されることで、既存の三大列強のうち二つ、ユーラシアとオセアニアが、すでに実質的に誕生していた。第三のイースタシアが明確なまとまりとしてやっと登場したのは、さらに十年にわたる混乱した戦いの後でのことであった。超国家三つの間の国境は、場所によっては恣意的であり、また場所によっては戦況に応じて変動するが、一般的には地理的な境界に従う。ユーラシアはポルトガルからベーリング海峡に到る、ヨーロッパとアジアの陸塊のうち北部で構成される。オセアニアは南北アメリカ大陸、イギリス諸島を含む大西洋の島々、オーストラリア・アジア、アフリカ南部で構成される。イースタシアは他の二つよりは小さく、西側国境もあまりはっきりしないが、中国とその南の国々、日本列島、さらに大規模ながらはっきりしない、満州、モンゴル、チベットの一部で構成されている。

この三つの超国家は、組み合わせはいろいろながら、継続的に戦争を続けており、過去二十五年にわたりそれが続いていた。だが戦争は、もはや、20世紀初頭の必死の殲滅闘争ではなくなった。それは目的の限られた、お互いを破壊できない戦闘員たちの間の戦いであり、戦いの物質的な原因はなく、またまとまなイデオロギー的相違により敵味方が別れているわけでもない。だからといって、戦争という行いや、それに対する一般的な態度が、昔ほど流血を求めないとか、気高いものになったとかいうわけではない。それどころか、戦争ヒステリーがあらゆる国で、継続的かつ普遍的なものとなり、強姦、収奪、子どもの虐殺、住民まるごとの奴隷化、釜ゆでや生き埋めにまで至る、捕虜に対する意趣返しといった行為は、通常のものともみなされ、それを行うのが自国側で敵ではない場合には、むしろ有益なこととされるのである。だが物理的な意味では、戦争はきわめて少数の人々しか関与せず、そのほとんどはきわめて高い訓練を受けた専門家であり、死傷者もそれほど多くはない。戦闘は、それが起こるときですら、どこかはっきりしない国境地帯で起こるのであり、一般の人はそれがどこにあるか憶測しかできない。あるいはシーレーンにおける戦略的な場所を守る浮遊要塞の周辺で起こるにとどまる。文明の中心においては、戦争とは絶え間ない消費財不足以上の意味を持たず、またたみにロケット爆弾が炸裂し、数十人ほどの死者が生じるだけなのである。戦争は実のところ、その性質を変えた。より厳密に言うならば、戦争が遂行される理由の重要性の順序が変わったのである。20世紀初頭の世界大戦で、すでに多少は存在していた動機が、いまや支配的なものとなり、意識的に認知され、それに基づいて行動が行われるのである。

現在の戦争の性質を理解するためには――というのも数年ごとに敵味方の再編は行われても、いつも同じ戦争ではあるのだ――そもそも決定的な勝利などあり得ないことを認識

する必要がある。三つの超国家のどれ一つとして、他の二つが手を組んだとしても、完全な征服は不可能である。あまりに勢力が均衡しており、自然の防御があまりにしっかりしすぎているためである。ユーラシアはその広大な陸で保護され、オセアニアは大西洋と太平洋に守られ、イースタシアはその住民の多産性と勤勉さにより保護されている。第二に、物質的な意味では、もはや戦うべき理由などない。自給自足の経済が確立し、生産と消費がお互いにあわせて調整されるようになると、それまでの戦争の主要な原因だった市場獲得争いは終わりを告げ、さらに原材料をめぐる競争はもはや死活問題ではなくなった。いずれにしても、三つの超国家すべてはあまりに広大であり、必要な原材料はほぼすべて自国内で調達できるのである。戦争に直接的な経済目的があるとすれば、それは労働力をめぐる戦争である。超国家の国境の間には、その三大勢力のどれもが継続的には保有していない、大ざっぱな四辺形が存在する。その頂点はタンジール、ブラザヴィル、ダーウィン、香港であり、その中に世界人口の5分の1ほどがいる。この人口高密度帯と北極の氷冠地帯の支配をめぐり、三大列強は絶えず戦っている。実際には、どの超国家もこの紛争地帯の全体を支配することはない。その様々な部分は絶えず所有者が変わり、突然の裏切りによりあちこちの断片を掌握する可能性が生まれることで、果てしない同盟関係の変化が生じるというわけなのだ。

紛争領土のすべては価値の高い鉱物資源があり、その一部はゴムなどの重要な植物製品を生み出す。ゴムは寒冷気候では比較的高価な手法で合成しなければならないのである。だが何よりも、その地域は底知れぬほどの安い労働力の備蓄を有している。アフリカの赤道地域や中東諸国や南インド、インドネシア群島を支配する列強は、低賃金で頑張って働くクーリーども数十億人の肉体を手に入れられる。こうした地域の住民は、大なり小なり公然と奴隷の地位に貶められ、征服者から征服者へと絶え間なく手を換え、ますます多くの武器を生み出す競争において、石炭や石油のように消費される。そしてそれによりますます多くの領土を捕獲し、ますます多くの労働力を手に入れ、武器をもっと作り、さらに領土を捕獲し、それがいつまでも続く。戦いは決して紛争地帯の縁からまともには動かないことは指摘しておこう。ユーラシアの国境は、コンゴ河床と北の地中海岸との間を行ったり来たりしている。インド洋と太平洋の島々は、絶えずオセアニアかイースタシアにより、取ったり取られたりしている。モンゴルでは、ユーラシアとイースタシアの分割線は決して安定していない。極地では、三大勢力はどれも莫大な領土を主張しているが、実際のところそこはほとんど人が住まず、探索もされていない。だがパワーバランスは常にほぼ均等であり、それぞれの超国家の中心地は常に不可侵のままである。さらに赤道周辺の収奪された人々の労働は、実は世界経済に必須ではない。世界の富には何も貢献することがない。というのも彼らが生産するものはすべて戦争のために使われ、そして戦争を仕掛ける目的は常に、次の戦争を仕掛ける立場を改善することだからである。奴隷人口はその労働により、戦争のテンポの絶え間ない加速を可能にする。だが彼らがいなかったとしても、世界社会の構造と、それが己を維持するプロセスに、本質的なちがいは生じない。

現代戦争の主要な狙いは(二重思考の原理に沿って、この狙いは党中心の指導者の脳内では、同時に認識されつつ認識されていない)、この機械の産物を使い果たしつつ、全体的な生活水準を抑えておくことである。19世紀末以来、消費財の余剰分をどうするかという問題は、工業社会に潜伏していた。現在では、食べものが充分にある人間がほとんどいないので、この問題は明らかに喫急のものではなく、人工的な破壊プロセスが作用していなくても、緊急性を持たないかもしれない。今日の世界は、1914年以前に存在した世

界と比べて、むき出しで、飢えた、荒廃した場所となっており、その当時の人々が未来に待望していた仮想の未来と比べれば、その度合いはなおさらひどい。20世紀初頭に、信じられないほど豊かで、娯楽が豊富で、秩序だち、効率的な未来社会のビジョン——ガラスと鋼鉄と雪のように白いコンクリートの、きらめく消毒された世界——は、ほとんどあらゆる教養人の意識の一部であった。科学と技術はとんでもない速度で進歩しており、それが今後も続くと考えるのが自然に思えた。だがこれは実現しなかった。一部は長期にわたる戦争や革命が引き起こした貧窮のせいであり、一部は科学技術の進歩は思考の実証的な習慣に依存するもので、それは厳格に型にはめられた社会では生き残れないせいでもある。全体としての世界は、五十年前よりも原始的になっている。一部の後進地域は進歩したし、各種の装置も、戦争や警察監視と何らかの形で関連したものに限られるが、開発はされた。だが実験と発明はおおむね止まり、1950年代の核戦争の災禍は完全に修復されることはなかった。それでも、この仕組みに内在する危険はまだ残っている。この仕組みが初めて登場したときから、ものを考えるあらゆる人には、人間の単純労働の必要性、ひいては人間の不平等の相当部分の必要性が消えたのは明らかであった。この仕組みが意図的にその目的のために使われたなら、飢餓、過重労働、不潔さ、文盲、病気は数世代で消し去れる。そして実のところ、そうした目的にまったく向けられなかったのに、一種の自動的なプロセスによって——分配しないわけにはいかない富を生産することで——この仕組みは平均的な人間の生活水準を、19世紀末から20世紀初めの五十年ほどの期間に、大幅に引き上げたのである。

だが、富の全面的な増大は、階級社会の破壊しかねないものだった——それどころかまさに富の全般的な増大こそがその破壊なのだった。みんながあまり働かず、飽食し、洗面所と冷蔵庫のある家に住み、自動車や飛行機さえ持っている世界では、最も露骨で最も重要かもしれない不平等形態はすでに消えている。それが普通になれば、富はもはや差をもたらさない。もちろん、個人的な所有物や豪華品という意味での富が均等に分配されつつ、権力が少数の特権カーストの手にとどまるような社会を想像することはできた。だが実際には、そんな社会は長期にわたり安定ではいられない。というのも、もし娯楽と安全が万人に享受されるようになれば、通常は貧困で何も考えられない人間の大量が、読み書きできるようになり、自分の頭で考えられるようになってしまうからだ。そしていったんそれを始めたら、彼らは遅かれ早かれ、特権を持つ少数派は何の役割も果たしていないことに気がつき、それを一掃してしまうだろう。長期的には、階級社会は貧困と無知の基盤の上でのみ可能だったのである。20世紀初頭の一部の思想家が夢見たような、農業的な過去に戻るのには、実行可能な解決策ではなかった。これはほとんど全世界で本能同然となった機械化の傾向と衝突するものだし、さらに工業的に後進状態にとどまる国はすべて、軍事的な意味で無力であり、直接的にせよ間接的にせよ、もっと先進的な競合国により支配されることになってしまうからだ。

また財の産出を制約することで、大衆を貧困状態にとどめておくのも、満足のいく解決策ではなかった。これは資本主義の最終フェーズ、おおむね1920年から1940年にかけてかなりの水準まで行われた。多くの国の経済が停滞するに任され、土地が耕作放棄され、資本設備は追加されず、人口の相当部分が労働を阻止されて、国の事前でぎりぎり生き延びさせられたのである。だがこれは同時に軍事的な弱さを引き起こし、さらにそれが課した窮乏は明らかに不必要なものだったので、どうしても反対が生じてしまった。問題は、産業の車輪をまわし続けながら、世界の実質的な富を増やさずにおくにはどうすべきかと

いうことだった。財は生産されねばならないが、それを流通させてはいけない。そして実際には、これを実現する唯一の方法は絶え間ない戦争状態なのである。

戦争の本質的な活動は破壊だが、それは必ずしも人命の破壊ではなく、人間労働の産物の破壊である。戦争は、大衆をあまりに快適にして、長期的にはあまりに知的にするのに使われかねないモノを、粉々に粉碎し、成層圏に吹き飛ばし、海底に沈めてしまう手法なのである。戦争の兵器が実際には破壊されないときですら、その製造は労働力を使用しつつも、消費できるものをまったくつくり出さない簡便な手法である。たとえば浮遊要塞は、貨物船を何百隻も作れる労働を困り込ませてしまった。最終的にはそれは古くなったとしてスクラップにされてしまい、だれにも何ら物質的な便益をもたらすことはなく、そしてさらに莫大な労働力をかけて、別の浮遊要塞が建造されるのである。原理的に、戦争活動は常に、人々のギリギリのニーズを満たした後に存在する、あらゆる余剰を食い尽くすように計画される。実際には、人々のニーズは常に過少に推計され、結果として生活必需品の半分は慢性的に不足する。だがこれは利点と見なされる。優遇されている集団ですら、多少は困窮間際の状態に保つのが意図的な政策なのである。全般的な希少性は、ちょっとした特権の重要性を高め、したがって、ある集団と別の集団との区別を拡大するのだから。20世紀初頭の基準からすると、党中央のメンバーですら、儉約した苦勞の多い生活を送っている。それでも、彼が享受する数少ないぜいたく——大きくて設備の整ったアパート、よい生地の衣服、高品質な食事や飲料やタバコ、召使い二、三人、私用の自動車やヘリコプター——により、彼の世界は党外周のメンバーとは隔絶されたものとなる。そして党外周のメンバーは、我々が「プロレ」と呼ぶ埋もれた大衆たちに比べれば、同様の優位性を持っているのである。社会的な雰囲気は、包囲された都市のようであり、そこでは馬肉の塊を持っているかどうか、豊かさや貧困の差をもたらすのである。そして同時に、戦争下にある、すなわち危険に曝されているという意識のために、あらゆる権力を少数カーストに渡すのも、生き残るための自然で避けがたい条件に思えるのである。

これから見るように、戦争は必要な破壊を実現し、しかもそれを心理的に受け入れられる形で行う。世界の余剰労働を無駄遣いするのに、神殿やピラミッドを建造したり、穴を掘ってそれを埋め直したり、果ては大量の財を生産してからそれに火を放ったりするのは、原理的には実に容易である。しかしこれは、階級社会の経済的基盤しか提供せず、情動的な基盤はもたらさない。ここで問題となっているのは、大衆の士気などではない。彼らの態度など、着実に働かせておける限りはいつでもよい。むしろ党そのものの士気が問題なのである。最も慎ましい党員ですら、有能で働き者で、狭い制約範囲内では知的であることさえ求められるが、一方ではだまされやすい無知な狂信者であってくれることも必要である。そうした人物の一般的な気分は、恐怖、憎悪、追従、オーギーじみた勝利の気分でなければならない。言い換えれば、戦争状態に適切な精神を持っていることが必要なのである。その戦争が本当に起きているかはどうでもいいし。決定的な勝利が不可能である以上、その戦争の首尾不首尾もどうでもいい。必要なのは単に、戦争状態が存在することだけである。党が党員に求める知性の分裂は、戦争の雰囲気でのほうが容易に達成できるものであり、いまやそれがほぼ普遍的になっているが、党の階級を上げるほど、それはますます顕著になる。まさに党中央においてこそ、戦争ヒステリーと敵への憎悪は最強となる。統治者としての役職においては、党中央メンバーはしばしば、戦争ニュースのあれやこれやの項目が不正直であると知っておく必要があるし、また戦争全体が怪しげで、実際には起きていないか、あるいは宣言されているものとはまったくちがった目的のために

遂行されているのを知っていることもある。だがそうした知識は二重思考の技法により、容易に中和化される。一方、党中心メンバーのだれも、一瞬たりとも戦争が本物だという神秘的な信念が揺らぐことはなく、それが自分たちの勝利に終わり、オセアニアが全世界の文句なしの盟主となることもまったく疑わない。

党中心のあらゆるメンバーは、このきたるべき征服を信仰のように確信している。これは、次第にますます多くの領土を獲得し、それにより圧倒的な力の優位性を積み上げることで達成されるか、あるいは何か新しく無敵の兵器を発見することで実現される。新兵器探索はたゆみなく続き、発明的、思索的な精神の持ち主がいささかでもはげ口を見いだせる、残り少ない分野の一つとなっている。今日のおセアニアでは、古い意味での科学はほぼ消滅している。ニュースピークには「科学」を指す言葉はない。過去のあらゆる科学的な業績の基盤となる実証的な思考手法は、英社主義の最も根本的な原理に逆らうものである。そして技術進歩ですら、その産物が人間の自由を減らすような形で使われない限りは起こらないのである。有益な技芸の分野すべてで、世界は足踏みしているか後退している。畑は馬が引く鋤で耕されているのに、本は機械で書かれている。だがきわめて重要な事柄——つまり要するに戦争と警察の偵察——においては、実証的なアプローチがいまだに奨励されるか、少なくともお目こぼしされている。党の二つの目標は、地表面すべてを征服することと、独立思考の可能性を一気にまとめて消し去ることである。したがって、党が解決したいと思っている大きな問題は二つある。一つは、他の人間が考えていることを、当人の意志に逆らっても発見する方法であり、もう一つは事前の警告をあたえることなしに、数秒で数億人を殺す方法である。科学研究がまだ続く限りにおいては、その研究対象はこの二つとなる。今日の科学者は、心理学者と審問官の合いの子であり、異常なほど精密に表情や身ぶり、声色の意味を研究し、薬物やショック療法、催眠術、拷問が真実をどれだけ引き出せるかを試験している。そうでなければ、その科学者は化学者、物理学者、生物学者であり、その専門領域において、人命を奪うのと関係ある部分だけに組み組んでいる。平和省の莫大な研究所や、ブラジルの森林やオーストラリアの砂漠に隠された実験所や、南極のだれも知らない島などで、専門家チームが疲れ知らずに作業を続けているのである。一部は、ひたすら将来の戦争の物流兵站面だけを考えている。また一部は、ますます大きなロケット爆弾や、ますます強力な爆薬、ますます貫通不可能な装甲を考案している。また、新しく致死性の高いガスを探したり、大陸まるごとの植生を破壊できるほど大量に生産できる、水溶性の毒を開発したり、考えられるあらゆる抗生物質に耐性のある病原菌を見つけたりしている。また水中の潜水艦のように地中をもぐって進む乗物を生み出そうと頑張る者もあり、飛行船として基地と独立して動ける飛行機などを作る者もいる。また太陽光を、何千キロも離れた宇宙空間に固定したレンズで集中させたり、地球の中心にある熱を利用して人工地震や津波を生み出したりするといった、さらに実現性の低い可能性さえ探究する者もいる。

だがこうしたプロジェクトのどれ一つとして、決して実現に多少なりとも近づくことはないし、三つの超国家のうち、他に対して大幅なリードを獲得することはない。さらに驚くべきなのは、三列強がどれもすでに、原子爆弾という形で、現在の研究者たちが発見しそうなどんな兵器よりも強力なものを保有しているということである。党は、自らの習慣にしたがって、原爆を発明したのは自分だと主張するが、それが最初に登場したのはずっと昔の1940年代であり、大規模に使用されたのは、そのおよそ十年後である。当時は、何百もの原爆が工業中心地に落とされた。主にヨーロッパのロシア、西欧、北アメリカであ

る。その影響として、万国の支配集団は、あと数個原爆が使われたら、組織化された社会の終焉、ひいては自分たちの権力の終焉を意味すると確信するに到った。その後は、公式の合意は決して交わされることも直されることもなかったが、それ以上の原爆は投下されなくなった。三列強はいずれも、単に原爆を生産し続け、遅かれ早かれやってくると思な信じている決定的な瞬間のためにそれを貯め込んでいるのである。そしてその間に、戦争の手法は三十年か四十年にわたりほとんど停滞したままとなっている。ヘリコプターは以前よりも多く使われるようになり、爆撃機はおおむね自力推進型の発射体に置きかえられ、脆弱な可動戦艦は、ほとんど不沈の浮遊要塞に取って代わられた。だがそれ以外の発展はまったくない。戦車、潜水艦、魚雷、機関銃、ライフルや手榴弾すらいまだに使われている。そしてマスコミやテレスクリーンで報道される果てしない虐殺にもかかわらず、数週間で数十万、果ては数百万の兵員が殺されることも多かった、以前の戦争の悲痛な戦闘は、二度と繰り返されていない。

三つの超国家のいずれも、深刻な敗北の危険をともなう作戦行動は決して試みない。大規模作戦が実施される時には、通常は同盟国に対する予告なしの攻撃である。三列強すべてが従っている戦略、あるいは従っているのだと自らをごまかしている戦略は同じなのだ。戦闘、交渉、タイミングのよい裏切りの攻撃により、どちらかの競合国を完全に包囲する基地の輪を獲得し、そしてその競合国と友好条約を締結し、ある程度の年月の間は平和的に共存して、疑念が眠りに落ちるようそそのかすというのが計画である。その間に、原爆を搭載したロケットが、あらゆる戦略地点で組み立てられる。最終的にそのすべてが同時に発射され、その影響はあまりに壮絶となるため、反撃は不可能となる。そうなれば、残った世界列強と友好条約を調印する頃合いだが、これまた次の攻撃の準備にすぎない。ほとんど言うまでもないことだが、この企みはただの白昼夢であり、実現不可能である。さらに、赤道と極地周辺の紛争地帯を除けば、戦闘などまったく起こりはしない。敵領土の侵略など決して実行されないのである。これにより、一部の地域では超国家同士の国境が恣意的だという事実が説明できる。たとえばユーラシアは、地理的にはヨーロッパの一部であるイギリス諸島を簡単に征服できるし、一方でオセアニアは、その国境をライン川や、果てはかつてのポーランドを流れるヴィスワ川まで押し広げることもできる。だがこれは、文化的統一性という、定式化されたことはないが全勢力が遵守している原則を侵犯することになる。オセアニアが、かつてフランスやドイツとして知られていた地域を占領したら、その住民を殲滅するか（これは物理的にきわめて困難である）、技術水準からするとオセアニアとほぼ同水準の、一億人ほどの住民を同化する必要がある。問題は、三超国家すべてで同じである。彼らの構造にとっては、外国人との接触は一切認められない。ただし限定的に、戦争捕虜や有色人種の奴隷との接触だけは容認される。その時点での公式同盟相手ですら、常にきわめて根深い疑念をもって見られている。戦争捕虜を除けば、オセアニアの平均的な市民は、ユーラシアやイースタシアの市民を決して見ることもないし、外国語の知識も禁止されている。外国人との接触が許されれば、相手も自分と似た生き物であり、それまで彼らについて告げられてきたことのほとんどがウソだと気がついてしまうからだ。彼が暮らす封印された世界が破られ、土気の根拠となっている恐怖、憎悪、自分が正しいという感覚が蒸散してしまいかねない。したがって、すべての勢力は、ペルシャやエジプトやジャワやセイロンがいくら手を替えようとも、主要な国境線は、爆弾以外の何物も越えてはならないのである。

この下には、決して明言はされないが暗黙に理解されて遵守される事実が存在する。つ

まり、三つの超国家における生活条件はほぼまったく同じだということである。オセアニアで主流の哲学は英社主義^{イングソック}と呼ばれ、ユーラシアでは新ポリシェヴィズムと呼ばれ、イスタシアでは通常、死滅崇拜と訳されるが、おそらく滅私奉公と解釈したほうがよいものとなっている。オセアニア市民は、他の二つの哲学の教義については一切知ってはならないとされているが、それでもそれが、道徳性と常識に対する野蛮な蹂躪だと非難するよう教わっている。実のところ、この三つの哲学はほとんど区別がつかず、それらが支える社会制度はまったく見分けがつかない。あらゆる場所に同じピラミッド構造があり、同じ半分神のような指導者の崇拜があり、果てしない戦争のため、戦争により存在する同じ経済がある。ここから、この三つの超国家はお互いを征服することはできないばかりか、征服しても何ら利益を得られないということになる。それどころか、お互いに紛争を続けることで、各勢力の維持を助けているのである。トウモロコシを三本立てかけあうようなものだ。そしていつもながら、三勢力の支配グループは、自分たちのやっていることを、認識しつつ、同時に認識していない。彼らは世界征服に命がけだが、一方で戦争が果てしなく、勝利なしで続かねばならないのを知っている。一方で、征服される危険などまったくないという事実は、英社主義^{イングソック}やその競合思想体系の顕著な特徴である、現実の否定を可能にしてくれる。ここで、以前に述べたことを繰り返さねばならない。継続的になることで、戦争の性質が根本的に変わった、ということである。

過去の時代には、戦争はほとんどその定義からして、遅かれ早かれ終わりを迎えるもので、通常はまちがいない勝利か敗北で終わった。また過去には、戦争は人間社会が物理的現実との接触を維持するための主要な装置の一つでもあった。あらゆる時代のあらゆる支配者は、追従者たちにまちがった世界観を押しつけようとしてきたが、軍事的な効果を毀損するような幻影を奨励することはできなかった。敗北は独立の喪失や、その他一般に望ましくないとされた結果を意味するので、敗北に対する予防措置は真剣なものでなければならなかった。物理的な事実は無視できなかった。哲学や宗教、倫理、政治では、二足す二は五になるかもしれないが、中や飛行機を設計しているときには、それは絶対に四でなければならない。非効率な民族は常に遅かれ早かれ征服されてしまうので、効率性を目指す闘争は妄想とは相容れないものであった。さらに効率的になるには、過去から学べる必要があり、つまりは過去に何が起きたかについて、それなりに正確な考えを持っている必要があった。新聞や歴史書はもちろん、いつも色がついていて偏向していたが、今日実践されているような偽装は不可能だっただろう。戦争は正気の確実な安全弁であり、支配階級にから見れば、それこそが安全弁として最も重要だったであろう。戦争が勝ったり負けたりするものである限り、どんな支配階級も完全に無責任にはなれなかった。

だが戦争が文字通り継続的になると、危険でもなくなる。戦争が継続するなら軍事的必要性などというものはない。技術進歩は止まって良いし、最もあからさまな事実でも否定し無視できる。すでに見た通り、科学的と呼べる研究はまだ戦争目的で実施されてはいるが、それは基本的には一種の白昼夢であり、結果が出せなくても別に重要ではない。効率性は、軍事的効率性でさえもはや必要とされない。オセアニアでは思考警察以外の何も効率的ではない。三つの超国家がいずれも征服不能なので、それぞれは別々の宇宙であり、その中ではどんな倒錯した思考でも安全に実践できる。現実には、日常生活のニーズ—衣食住のニーズ、毒を飲み込むのを避け、最上階の窓から外に踏み出したりしないといったニーズ—を通じて圧力をかけてくるだけだ。生と死の、肉体的な快楽と肉体的な苦痛との間には、相変わらず区別があるが、それだけだ。外部世界や、過去との接触と切り離さ

れているオセアニア市民は、外宇宙にいる人間のようなもので、どっちが上でどっちがしたか、知りようがない。そうした国家の支配者は、ファラオやカエサルたちには不可能なほど絶対的である。彼らは、被支配者たちが不都合なほど大量に餓死するのを防ぐ義務はあり、競合勢力と同じくらいの低い軍事技術水準にとどまる義務もある。だがその最低水準さえクリアすれば、現実を好き勝手な形に歪めてかまわないのである。

従ってこの戦争は、以前の戦争の基準に基づくなら、ただのままごとでしかない。一部の反芻動物同士の戦いのようなものだ。そうした動物の角はある一定の角度に固定されているため、お互いを傷つけられないのである。だが本物でなくても、意味が無いわけではない。消費財の余剰を食い尽くし、階級社会が必要とする特殊な精神的気運を温存するのに役立つ。戦争は、これから見る通り、いまや純粋な国内事件なのである。過去には、あらゆる国の支配集団は、共通の利害を認識して戦争の破壊力を制限しようとしたこともあったとはいえ、本当にお互いに戦い、勝者は常に敗者を収奪した。我々の時代においては、彼らはお互いに戦っているのではまったくない。戦争は、それぞれの支配集団が、自国の被支配者たちに仕掛けているものである。そしてその戦争の目的は、領土の征服を行ったり防いだりすることではなく、社会の構造を安泰にしておくことである。従って「戦争」という言葉そのものが、誤解を招くものとなったわけだ。継続的なものとなることで、戦争は存在しなくなったと言うのがおそらく正確であろう。新石器時代から20世紀初頭までそれが人類に行使してきた特異な圧力は消滅し、何かまったくちがったもので置き換わったのである。三つの超国家が、戦うのをやめて永続的な平和の下で暮らそうと合意し、それぞれが独自の国境の中で不可侵な存在として生きることにしても、その影響はほとんど変わらない。というのもその場合にも相変わらず自己完結した宇宙があり、外部の危険という正気をもたらす影響からは永遠に解放されるからである。真に永続的な平和は、永続的な戦争と同じである。これが――とはいえ党員の大半はこれを皮相的な意味でしか理解していないが――党のスローガン、「戦争は平和」の奥の意味なのである。

ウィンストンはしばし読むのを止めた。はるか彼方でロケット爆弾の轟音がした。禁断の書を持って、テレスクリーンのない部屋で一人きりだという至福の感情は、まだ薄れてはいなかった。孤独と安全は物理的な感覚であり、それが何やら疲労感と椅子の柔らかさ、頬をなでる窓からのそよ風の感覚と混ざり合っていた。この本には魅了された、というより、もっと厳密には、裏付けられた気がした。ある意味で、何も目新しいことは語ってくれなかったが、それが魅力の一部ではあった。自分のとちがった考えをまとめられたなら、まさにこういうことを述べただろう。自分と似たような精神の産物ではあったが、その精神はすさまじく強力で、体系的で、恐れ知らずだった。最高の本は、すでに知っていることを教えてくれるものなのだ、とかれは感じた。ちょうど第I章に立ち戻ったところで、階段にジュリアの足音が聞こえたので、迎えに立ち上がった。彼女は茶色いツールバッグを床に放り出して、こちらの腕に飛び込んできた。最後に会ってから一週間以上もたっていた。

「あの本が手に入ったぞ」と二人が身を離すとウィンストンは言った。

「あっそう。よかったね」とい彼女は大した興味も示さず、ほぼすぐに石油コンロの脇にしゃがんでコーヒーを淹れた。

半時間ほどベッドで過ごしてから、二人はこの話に戻った。そこそこ涼しい晩だったので、かけぶとんを引き上げた。下からはお馴染みの歌声と、敷石にひきずるブーツの音が

がした。ウィンストンが最初の訪問時にそこで見かけた、粗野な赤い腕の女性は、ほとんど裏庭の付属品のような存在だった。昼間は、彼女が洗濯おけと物干しづなの間を行進し、洗濯ばさみで自分の口を封じると、淫らな歌を歌い出すのを交互に繰り返さない時間などまったくないかのようだった。ジュリアはわき腹で横になり、すでに眠りに落ちる寸前のようなようだった。ウィンストンは床に転がっていた本に手を伸ばし、ベッドの頭の部分にもたれて身を起こした。

「これを読まないよ。君もだ。友愛団の全メンバーはこれを読むことになっている」
彼女は目を閉じた。「あんたが読んで。音読してよ。それがいちばんいいやり方。そうしたら途中でいろいろ説明もしてもらえし」

時計の針は六を指しており、つまりは18時ということだ。あと三、四時間ほど二人の時間がある。かれは本を膝にのせて、読み始めた。

第1章 無知は力

有史以来、おそらくは新石器時代終わり以来、この世には三種類の人々がいた。上級、中級、下層である。これらは多くの形でさらに細かく分けられ、無数のちがった名前では呼ばれ、その相対的な数は、それぞれのお互いに対する態度と同様に、時代によって変わってきた。だが社会の基本構造は決して変わらなかった。すさまじい社会蜂起や、一見すると回復不能の変化の後でも、同じパターンが常にまたも確立してきた。ちょうどジャイロスコープが常に、どれほど遠くまであちらこちらに押しやられても常に均衡に戻るのと同じである。

「ジュリア、起きてるか？」とウィンストン。
「起きてる。ちゃんと聞いているから。続けて。すばらしいじゃん」
彼は読み続けた。

こうした集団の狙いはまったく相容れないものである。上級集団のねらいは、その地位に留まることである。中級集団の狙いは、上級集団に取って代わることである。下層階級の狙いは、狙いがあるとすれば——というのも下層階級の変らぬ特徴は、重労働にあまりに押し潰されているので、日常生活を超えることについてなど、ごくたまにしか意識にのぼらないということなのだから——あらゆる区別を廃止して、万人が平等となる社会をつくり出すことである。したがって、歴史を通じて、基本的な輪郭のまったく同じ闘争が、何度も何度も繰り返し生じる。上級集団は長期にわたり、安全に権力を握っているように見えるが、遅かれ早かれ、彼らが自信か、あるいはうまく統治する能力か、はたまたその両方を失う瞬間がやってくる。そして中級集団に打倒される。中級集団は、自分たちが自由と正義のために戦っているというふりをすることで、下層階級を味方につけるのである。だが自分たちの目的を達成した途端、中級集団は下層階級をもとの隷属状態へと追い返し、自分たちが上級集団となる。すぐに他の集団のどれかが両方から、あたらしい中級集団が分離して、闘争が再開する。この三集団のうち、自分たちの狙いを一時的にでも達成するのに成功しない唯一の集団は、下層集団だけとなる。歴史を通じて物質的な進歩がなかったと言うと、言い過ぎになってしまう。今日の衰退期ですら、平均的な人間は数世紀前に比べ、物理的によい暮らしをしている。だが富が増えても、態度が和らいでも、

改革や革命が起きても、人間の平等が一ミリたりとも実現に近づいたことはない。下層集団の観点からすれば、あらゆる歴史的变化は、ご主人たちの名前が変わる以上の大した意味を持ってはいないのである。

19世紀末になると、このパターンの繰り返しは多くの観察者には明らかとなった。するとそこで、歴史を周期的なプロセスとして解釈する思想学派が登場し、不平等は人間生活の変えられない法則なのだということを示すのだと称するようになった。このドクトリンはもちろん、常に支持者を擁してはいたが、それがいまや提示されるやり方には重要な変化が生じていた。かつては、階層的な社会形態の必要性は、上層集団だけのドクトリンだった。王や貴族や神官たちがそれを訴え、彼らに寄生していた連中もそれを唱えた。そしてそれは、墓場の彼方にあるおとぎの国で見返りがあるのだ、という約束により和らげられていた。中層集団は、権力を求めて闘争しているときには、常に自由、正義、友愛といった用語を活用してきた。だがいまや、人類の友愛という概念は、まだ指揮を行う立場におらず、間もなくそういう立場になると願っていた人々からも攻撃を受けるようになった。かつては、中層集団は平等という旗印を掲げて革命を行い、そして古い支配階級が打倒されたとともに、新たな圧政を確立するのだった。だが新しい中層集団は、実質的に自分たちの圧政を事前に宣言していた。19世紀初頭に登場した理論で、古代の奴隷反乱にまでさかのぼる連鎖における最後の輪となった社会主義は、まだ過去のユートピア主義に深く感染していた。だが1900年以降に登場したそれぞれの社会主義の変種においては、自由と平等を確立するという目標は、ますます公然と放棄されるようになった。20世紀半ばに登場した新たな運動、オセアニアの英社主義^{イングリッシュ}、ユーラシアの新ポリシェヴィズム、イースタシアの通称死滅崇拜は、非自由と不平等を永続化させようという意識的な狙いを持っていたのである。こうした新しい運動は、もちろん、古いものから育ってきたため、その名前は温存され、そのイデオロギーにも口先だけの賞賛は向けられた。だがそれらすべての目標は、進歩を阻止して歴史をその瞬間で凍結させることである。お馴染みの振り子の逆転がまたもや起ころうとしたところで止まった。いつもながら、上層は中層に追い出され、中層が新たな上層になるはずだった。だが今回は意識的な戦略により、上層はその地位を永続的に維持できるようになった。

新しいドクトリンが台頭したのは、一部は歴史的知識の蓄積と、歴史感覚の成長のおかげである。そうしたものは19世紀以前はほとんど存在しなかった。歴史の循環的な動きがいまやわかるようになった、というかそう思えた。そしてそれがわかるのであれば、変えることもできる。だが主要な根底にある原因は、早ければ20世紀初頭には、人間の平等が技術的に可能になったということだった。相変わらず、人は生まれつきの才能の点では平等でなく、機能を専門特化させることで、ある個人が他の個人よりも優遇されるようにしなければならなかった。しかし、もはや階級区分も、富の大幅な差も必要がなくなってしまったのである。かつての時代には、階級区分は不可避なばかりか、望ましいものであった。不平等は文明の代償なのだ。だが機械生産の発展とともに、この主張は変わった。まだ人間はそれぞれちがう種類の仕事をする必要性はあったが、もはやちがった社会経済水準で生きる必要はもはやなくなったのである。従って、権力奪取寸前の新集団の観点からすると、人間の平等はもはや求めるべき理想ではなく、回避すべき危険となった。もっと原始的な時代には、公正で平和な社会は現実問題として不可能だったので、それを信じるのはかなり容易だった。人類が友愛状態で、法律もつらい労働もなく共存するこの世の天国という思想は、何千年も人間の想像力に取り憑いてきた。そしてこのビジョン

は、それぞれの歴史的変化から実際に利益を得たグループに対してすら、ある程度の影響力を持った。フランス革命、イギリス革命、アメリカ革命の後継者たちは、人権、言論の自由、法の前での平等といった自分のご託を部分的には信じており、ある程度までは自分の行動がそうしたものの影響を受けるのを許してきた。だが20世紀の1930年代になると、政治思想の主流はすべて専制主義的になっていた。地上の天国は、まさにそれが実現可能となった瞬間に否定された。あらゆる新しい政治理論は、どんな名前を名乗ろうとも、階級と組織厳格化へと立ち戻った。そして1930年頃に確立した、全般的な先行きの困難の中で、とっくの昔に廃止され、場合によっては百年も消えていた手法——裁判なしの収監、戦争捕虜の奴隷利用、公開処刑、自白を引き出すための拷問、人質の利用、人口丸ごとの追放——は再び一般的になったばかりか、啓蒙的で先進的だと自認する人々ですら、黙認するどころか積極的に擁護するものとなったのである。

十年にわたる国同士の戦争、内戦、革命、反革命が世界のあらゆる場所で続いた後で、ようやく英社主義とそのライバルたちが、完全に詰められた政治理論として台頭してきた。だがそれらは、すでに各種の一般には全体主義と呼ばれる仕組みが先駆けとなっていた。そうしたものは、20世紀初頭にすでに登場し、蔓延する混沌から台頭する世界の主要な概略は、とっくの昔に明らかだったのである。この世界をどの手の人々が統制するかも、同じく明らかであった。新たな貴族階級はもっぱら官僚、科学者、技術者、労働組合首脳、広報宣伝の専門家、社会学者、教師、ジャーナリスト、専門政治家で構成されていた。こうした人々の起源は、中産階級サラリーマンと、労働者階級の上層部にあるが、独占工業と中央集権政府による荒廃した世界によって形成され、まとめられた。過去の時代で彼らに相当する存在と比べれば、こちらはあまり貪欲ではなく、ぜいたくな暮らしにもさほど動かされず、純粋権力にも飢えてはおらず、何よりも自分たちの行動に意識的で、敵を潰すのに熱心であった。この最後の相違点が決定的である。今日存在するものと比べると、過去の圧政はすべて、中途半端で非効率であった。支配集団は常に、ある程度はリベラル思想に感染しており、そこら中でやり残しの不始末を放置しても平気で、明示的な行動だけを扱い、その被支配者たちが何を考えているかには興味を持たなかった。中世のカトリック教会ですら、現代の基準からすれば寛容であった。この理由の一部は、過去にはどんな政府も、その市民を絶えず監視下におく力を持っていなかったことである。だが印刷術の発明は、世論の操作をずっと簡単にしたり、映画とラジオはそのプロセスをさらに推し進めた。テレビの開発と、同じ道具で送受信を同時に行えるようにした技術進歩により、私生活は終わった。あらゆる市民、少なくとも監視する価値があるほど重要なあらゆる市民は、一日24時間にわたり、警察の監視下に置かれ、公式プロパガンダの音を浴びせられ、それ以外の通信チャンネルを閉ざしてしまえる。国会の意思への完全な服従のみならず、非統治者に完全な意見の均等性を強制する可能性が、いまや初めて存在するようになったのである。

50年代と60年代の革命期の後で、社会はいつもながら、上級、中級、下層へと自らを再編した。だが新しい上級集団は、その先人たちすべてとは異なり、直感に基づいて行動はせず、自分の地位を安全に保つために何が必要かを知っていた。寡頭政治の唯一の安全な基盤が集産主義だというのは昔から認識されていた。富と特権は、共同で所有するときわめて守りやすくなる。20世紀半ばに起こった「私有財産の廃止」は、つまるところ以前よりもはるかに少数の者の手に財産を集中させるという意味なのだ。だが次のようなちがいがあつた。その新所有者たちは、個人の寄せ集めではなく、集団になっているのであ

る。個人としては、党員は誰ひとり、つまらない身の回りの私物を除けば何も所有していない。集合的には、党はオセアニアのすべてを所有している。なぜならそれはすべてを統制し、その産物を党が適切と思うかたちで処分するからである。革命に続く数年においては、この支配的な地位にほとんど何の反対もなく踏み込むことができた。というのもこのプロセス全体が、集産化の動きと表現されていたからである。昔から、資本家階級が排斥されれば、社会主義が必然的に続くと思われてきた。そして資本家たちは文句なしに排除された。工場、鉱山、土地、家屋、輸送——すべて資本家から奪われた。そしてこうしたものはや民間所有物ではなかったため、それは公共財産であるはずだとされた。英社主義は、こうした職の社会主義運動から発したもので、こうした用語法を受けつぎ、社会主義運動の主要項目をまさに実施したのである。その結果、事前に予想され意図された通り、経済不平等は永続的なものにされた。

だが階級社会を永続化させるにあたっての問題はこれより根深い。支配集団が権力の座から転落する道は四つしかない。外から征服されるか、統治があまりに非効率で大衆が反乱したくなるか、不満を抱く強力な中間層を生み出すか、あるいは自ら統治する自信と意欲を失うか。こうした原因は単独で作用するものではなく、一般的にはその四つともある程度は存在している。このすべてに対して自衛できる支配階層は、永続的に権力の座にとどまれる。究極の決定要因は、支配階層自身の精神的な態度なのである。

今世紀の半ば以降、最初の危険は現実的には消えた。いまや世界を分割している三列強のそれぞれは、現実には征服不能であり、ゆっくりした人口変化でのみ征服可能となるが、そうした変化は広範な力を持つ政府なら簡単に回避できる。二つ目の危険は、やはり理論的なものでしかない。大衆は決してひとりでの反逆したりはせず、しかも単に抑圧されているというだけで反逆したりはしない。実際、比較基準を持つことが許されない限り、自分たちが抑圧されていることにさえ彼らは決して気がつかない。過去の繰り返される経済危機は、まったく無用のものであり、いまや起こさせないものとなっているが、他の同じくらい大きな混乱は可能だし実際に起こる。それでも政治的な影響はない。なぜなら、不満が明確化される方法がないからである。過剰生産の問題はといえば、これは機械技術の開発以来、我々の社会に潜在していたものだが、継続的戦争という装置により解決された（第 III 章参照）。この戦争はまた、公共の士気を必要な水準に高めておくのにも有用なのである。したがって我々の現在の支配者の観点からすると、残されたまともな危険はといえば、有能で雇用されていない、権力に飢えた人々の新集団が分離することと、支配集団内部におけるリベラリズムと懐疑主義の広がりである。つまり問題は教育的なものなのである。指導集団と、その直下にあるもっと大きな行政集団の意識を絶えず型にはめ続けるというのがその問題となる。大衆の意識は、否定的なやり方で影響を与えさえすればすむ。

この背景に基づけば、オセアニア社会の全般的な構造を、すでに知らなくても推測できるだろう。ピラミッドの頂点にはビッグ・ブラザーがいる。ビッグ・ブラザーは無謬であり全能である。あらゆる成功、あらゆる成果、あらゆる勝利、あらゆる科学的発見、あらゆる知識、あらゆる叡智、あらゆる幸福、あらゆる美德、は、そのリーダーシップとインスピレーションから直接生じたものとされる。だれもビッグ・ブラザーを見たことはない。それは掲示板の顔であり、テレスクリーンの声なのだ。彼が決して死ぬ事はないと、かなり自信を持って確信できそうだし、いつ彼がうまれたかについても、すでにかなりの不確実性がある。ビッグ・ブラザーは、党が世界に自分を提示する仮装なのである。その

機能は、愛、恐怖、畏敬といった感情の焦点として機能することである。こうした感情は、組織よりも個人に対するほうが感じやすいからだ。ビッグ・ブラザーの下には党中心がくる。その人数は600万人に限られる。つまりオセアニア人口の二パーセント未満である。党中心の下には党外周がくる。党中心を国家の頭脳と呼ぶなら、党外周は同様にその手になぞえられる。その下には、我々が習慣的に「プロレ」と呼ぶバカな大衆がいて、人口の85パーセントくらいを占めるだろうか。以前の分類からすれば、プロレが下層である。というのも、赤道地域にいて、征服者から征服者へと常にその帰属が変わる奴隷人口は、この構造の一部として永続的でも必須でもないからである。

原理的には、こうした三つの集団への帰属は世襲ではない。党中心の親を持つ子供たちであっても、理屈の上では自動的に党中心に入れるわけではない。党のどの部門への参加承認も、十六歳で受ける試験に基づいている。また人種差別はまったくないし、ある地域が別の地域を明確に支配するようなこともない。ユダヤ人、黒人、純粋インディアンの血を引く南米人も、党の最高位にはいるし、各地域の統治官たちは、常にその地域の住民から選ばれている。オセアニアのどこへ行っても、住民たちは自分が遠い首都から支配される植民地住人だという印象は持っていない。オセアニアには首都はないし、その有名無実の首長は、そこにいるかだれも知らない人物である。英語が主要な共通語であり、ニュースピークがその公式言語であるということ以外、まったく中央集権化されていない。その支配者たちは血縁で結びついてはおらず、共通のドクトリンへの服従で結びついている。確かに我々の社会は階層化され、しかもその階層はきわめて硬直しており、一見するとそれが世襲に基づくものに見える。各種集団の間での行き来は、資本主義はおろか、工業化以前の時代に見られたものよりもはるかに少ないのである。党の二つの部門間では、ある程度の入れ替わりはあるが、それは弱者が党中心から排除され、党外周の野心的なメンバーが、出生を許されることで無害化されるようにする、最低限の入れ替わりでしかない。プロレタリアたちは、実際には卒業して党に入ることは許されていない。彼らの中で最も才能ある者たち、不満の核となりかねない者たちは、あっさり思想警察に目をつけられて排除されるだけである。だがこの状態は必ずしも永続的ではないし、原理原則としてそれが決まっているわけでもない。党は、言葉の古い意味での階級ではない。それは自分の文字通りの子どもに権力を伝えようとはしない。そして最も有能な人間をトップに保つ方法が他になければ、プロレタリアートの階級からまったく新しい世代をリクルートしてくるのも、まったく辞さない。重要な年月においては、党が世襲機関ではないという事実が、反対勢力を黙らせるのに大きな役割を果たした。古くさい社会主義者は、「階級特権」とかいうものに対して戦うよう訓練されていたので、世襲でないものは永続的ではあり得ないと思い込んでいた。寡頭制の継続は物理的なものでなくてもよいということがわからず、世襲貴族制は常に短命だったのに、カトリック教会といった養子制による組織は、ときに何百年、何千年も続いたという事実を考へてみたりしなかったのである。寡頭制支配の本質は、父から息子への相続ではなく、ある種の世界観と生き様の持続であり、それを死者が生者に対して強制するということなのである。支配集団は、自分が後継者を指名できれば支配集団であり続けられる。党は、自分の血筋を永続化したいなどと思ってはいない。自分自身を永続化したいと思っているのである。誰が権力を握るかは重要ではない。階級構造さえ常に同じであればよいのである。

我々の時代を特徴づける、我々の信念、習慣、嗜好、感情、精神的な態度は、実は党の神秘性を維持し、今日の社会が持つ本当の性質がばれるのを阻止するために設計されてい

るのである。物理的な反乱や、反乱に向けたあらゆる事前の動きは、現在では不可能である。プロレタリアンからは何も恐れるものはない。放っておけば、彼らは世代から世代、世紀から世紀へと、働き、繁殖し、死に、反逆の衝動など一切持たないばかりか、世界が現状以外のものに成り得ると理解する力さえないまま続くだけなのである。彼らが危険に成り得るのは、工業技術の進歩により、彼らをもっと高度に教育する必要が出てきたときだけである。しかし軍事および商業的な競争がもはや重要ではなくなったため、一般教育の水準は、実は低下している。大衆が持つ、あるいは持たない意見は、どうでもいいことと見なされている。彼らには知的自由を与えてもかまわない。そもそも知性がないからである。これに対して、党员の間では、最も些末な主題についての、最も細かい意見の逸脱ですら容認できない。

党员は、誕生から死まで、思考警察の監視下で生きる。一人きりのときですら、自分が一人きりだとは確信できない。どこにいても、寝ても覚めても、仕事でも休みでも、風呂でもベッドでも、警告なしに査察され、しかも査察されていることさえわからない。彼のやることで、どうでもいいことは何もない。その交友関係、気晴らし、妻や子どもに対する行動、一人きりのときの表情、寝言、身体の特徴的な動きですら、細かくチェックされるのである。実際の犯罪行為だけでなく、どんなに小さくてもあらゆる変わった行動、あらゆる習慣変化、内面の苦悶の症状かもしれない、あらゆる神経的なクセなどもまちがいはなく検出される。彼はどんな方面でもまったく選択の自由はない。その一方で、その行動は法や明確に定式化された行動規範に統制されているのでもない。オセアニアには法律はない。検出されればまちがいはなく死を招く思考や行動も、正式に禁止されてはならず、果てしない粛清、逮捕、拷問、収監、蒸発は、実際に犯された犯罪に対する処罰として課されるのではなく、単に将来のどこかで犯罪を犯すかもしれない人物を一掃するためのものでしかないのである。党员は、正しい意見を持つだけでなく、正しい直感を持つことも求められる。彼に求められる多くの信念や態度は決して明確に述べられることはない。もし述べられたら、それは英社主義イングソックに内在する矛盾をあらわにしてしまう。彼が自然に正統な人物であるなら（ニュースピークで言う好考者なら）、あらゆる状況で考えるまでもなく、何が本当の信念で望ましい感情かを知っているのだ。だがいずれにしても、子ども時代に行われる CRIMESTOP/罪阻止、BLACKWHITE/黒白、DOUBLETHINK/二重思考というニュースピーク語を中心とした入念な精神的訓練のおかげで、彼はどんな主題についても、あまり深く考えたいとは思わず、また考えることもできないのである。

党员は、私的な感情を持たず、熱意の休止もまったくないものと期待されている。外国の敵や国内の裏切り者に対する絶え間ない憎悪の熱狂、勝利についての歓喜、党の力と英知に対する自己否定の中で生きるものとされる。味気ない満たされぬな生活が生み出す不満は外に向けられ、二分憎悪といった装置により発散されるし、懐疑的あるいは反逆的な態度を引き起こしかねない憶測は、以前に獲得した内面の規律により事前に潰される。この規律の最初にして最も単純な段階は、幼い子どもでも習得できるもので、ニュースピークでは CRIMESTOP/罪阻止と呼ばれる。罪阻止は、あらゆる危険な思考の寸前で、まるで本能的に踏みとどまる能力を指す。それはアナロジーを理解せず、論理的なまちがいを認識せず、英社主義イングソックに反するものであればきわめて単純な議論でも誤解する能力と、逸脱的な方向につながりかねない思考の方向性については、退屈したり反発したりする能力を含む。罪阻止は要するに、予防的な愚かさを意味するのである。だが愚かさだけでは不十分である。それどころか、全面的な意味での正統性は、曲芸師が自分の身体に対して持

つと同じくらい完全な、精神プロセスに対する統制を求めるのである。オセアニア社会は究極的には、ビッグ・ブラザーが全能であり党が無謬だという信念に基づいている。だが現実にはビッグ・ブラザーは全能ではなく、党は無謬ではないので、事実の扱いについて、たゆみない一瞬ごとの柔軟性が必要とされるのである。ここでのキーワードは「黒白」である。多くのニュースピーク語と同様に、この単語も二つの相互に矛盾する意味を持つ。敵に対して使われるときには、これは目の前の事実を平然と無視して、黒を白だと厚かましく主張する習慣を指す。党員に対して使われるときには、党の規律が求めるなら黒が白だと断言する忠実な意志を表す。だがこれはまた、黒が白だと信じ、それ以上に黒が白だと心から考え、自分が以前はそうでないと信じていたことを忘れ去ることを指す。これには絶え間ない過去の改変が求められる。それを可能にするのは、本当に他のすべてを内包する思考体系、ニュースピークで二重思考と呼ばれるものなのである。

過去の改変は二つの理由で必要となるが、その片方の理由は補助的であり、言わば予防的なものである。補助的な理由というのは、党員はプロレタリアと同様に、現在の状況に我慢している理由の一部はそれを比較する基準がないからだ、ということである。党員は過去から遮断されねばならない。外国から遮断されねばならないのと同じことである。彼は自分が先祖よりもよい暮らしをしており、物質的な快適性の平均的な水準が絶えず上がっていると信じてくれねばならないのだ。だが、過去の再調整のもっと圧倒的に重要な理由は、党の無謬性を安全に守るためである。演説、統計、各種記録が絶えず更新され、党の予想があらゆる場合に正しかったと示すだけの話ではない。ドクトリンは同盟関係の変化も一切認めるわけにはいかないということもある。というのも気が変わるのも、方針を変えることすら、弱さの告白だからである。たとえばユーラシアやイースタシア（どちらでもいい）が今日の敵であるなら、その国は常に敵であったはずなのだ。そして事実がそうではないと言うのであれば、事実のほうを変えねばならない。だから歴史は絶え間なく書き換えられる。この日々行われる過去の偽造は、真実賞によって実施されており、愛情省が実施する弾圧とスパイ活動と同じくらい、政権の安定性に不可欠なのである。

過去の改変可能性は、^{イングソック}英社主義の中心教義である。過去のできごとには、客観的な実在性はなく、文書記録や人間の記憶だけに生き残っている。過去は、なんであれその記録や記憶が一致して述べていることなのだ。そして党があらゆる記録を統制し、同じくその党員たちの精神も完全に統制しているなら、そこから過去というのは党が言う通りのものになんでもなれる、という話が導かれる。さらにまた、過去が改変可能ではあっても、ある具体的な瞬間に改変されたことはまったくなく、という話も導かれる。というのも、その瞬間に必要とされる形に何であれ改変されたら、その新しいバージョンこそが本物の過去なのであり、それ以外のちがう過去などいまだかつて存在したはずがないからである。これは、しばしば現実に起こるように、同じできごとが一年のうちに元型をとどめぬほど幾度となく改変された場合にすら成立する。あらゆる時点で党が絶対的な真実を握っており、絶対であるなら当然、現状とちがうはずはないのである。これから見るように、過去のコントロールは記憶の訓練に何よりも依存している。あらゆる文書記録をその瞬間の正統教義と確実に一致させるのは、単なる機械的な行動である。だが、できごとが望んだ形で起きたと、記憶するのが必要となる。そして文書記録を改変したり記憶を改めたりすることが必要でも、その改変を忘れるのも必要になる。これをやるコツは、他の各種精神技法と同じように学習できる。党員の大半はそれを学習しており、正統でありながら知的である者はまちがいなく全員が習得している。オールドスピークではこれは、きわめて率直

に「現実統制」と呼ばれる。ニュースピークではそれは二重思考と呼ばれるが、二重思考はそれ以外のものもいろいろ含むのである。

二重思考は、二つの矛盾する信念を同時に脳内に抱き、それを両方とも受け入れる能力を指す。党の知識人は、自分の記憶をどの方向に改変しなくてはならないか知っている。したがって、自分が現実^{イソ}に詐術を働いているのも知っている。だが二重思考の行使により、現実が侵犯されていないと思って満足できる。このプロセスは意識的なものでなくてはならない。そうでないと、十分な精度をもって実行できない。だが同時に無意識でなくてはならない。そうでないと不正のような気分が生じ、つまり罪悪感が生じるからである。二重思考は、英社主義^{イングソック}のまさに核心である。というのも党の本質的な行動は、意識的な詐術を使いつつも、完全な正直さに伴う確固たる目的意識を維持することなのだから。意図的なウソをつきつつ、心からそれを信じ込み、不都合になった事実をすべて忘れ、そしてそれが必要になったら、忘却の彼方から、必要なだけの期間にわたりそれを引き出し、客観的現実の存在を否定して、その一方でずっと自分が否定する現実を考慮する——これはすべて、不可欠であり必須なのである。二重思考という言葉を使うときにすら、二重思考の行使が必要となる。この言葉を使うことで、人は自分が現実をいじっているのを認めることになるからだ。二重思考をうまく使うことで、人はその知識を消し去る。そしてそれが無限に続き、ウソが常に真実の一步先を行くことになる。党がこれまで——そしてヘタをすると、今後数千年も続くかもしれない——歴史の道筋を阻止できたのは、最終的には二重思考という手段を通じてなのであった。

過去の寡頭政治が権力の座から転落したのは、どれも形骸化したか、軟弱になったからである。愚かで傲慢になり、状況の変化に対して適応し損ねたこともあるし、自由で臆病になり、武力を使うべきときに譲歩し、これまた打倒された。つまり、意識を通じてか、無意識を通じて倒れたのである。どちらの状況も同時に存在できる思考体系を作り出したのが、党の業績である。そして、党の支配が永続化できるような知的基盤は他には存在しないのである。支配し、支配し続けたいのであれば、現実という感覚を混乱させることができなくてはならないのである。というのも支配の秘訣は、自分自身の無謬性と、過去のまちがいから学ぶ力を組み合わせることなのだから。

ほとんど言うまでもないことだが、二重思考のもっとも精妙な実践者は、二重思考を発明し、それが精神的なインチキの巨大な仕組みだと知っている人々である。我々の社会では、何が起きているかを最もよく知っている人々は、同時に世界をありのままに見ることから最も遠ざかっている人々でもある。一般に、理解が深ければ、妄想もそれだけ深まる。知性が高まれば、正気はそれだけ薄れる。これをはっきり示すのは、戦争ヒステリーが社会階層を登るにつれて高まるという事実である。戦争に対する態度がほとんど理性的に近いのは、紛争地域の被支配民たちである。そうした人々にとって、戦争は単に絶え間ない災厄でしかなく、自分たちの身体を津波のようにあちらこちらへと押しやるものにすぎない。どちらが勝っているかは、彼らにとっては完全にどうでもいいことである。彼らは、その支配者の変化というのが単に、前と同じ作業を新しいご主人のためにやるというだけで、そのご主人たちも自分たちを前の主人と同じやり方で扱うのがわかっているのである。わずかばかり待遇のよい、我々が「プロレ」と呼ぶ労働者たちは、戦争などたまにしか意識しない。必要なときには、つつけば恐怖と憎悪の熱狂に陥るが、放っておけば、戦争が起きていることすらずっと忘れていられるのである。戦争に対する真の情熱が見られるのは、党内部、それもどこよりも党中心である。世界征服を最も強く信じているのは、

それが不可能だと知っている人々なのである。この正反対のもの——知識と無知、シニズムと熱狂——の奇妙な連結は、オセアニア社会の主要な特徴の一つである。その公式イデオロギーは矛盾だらけであり、別に矛盾がそこにあるべき現実的な理由がないときですら矛盾がある。このように党は社会主義運動が元々掲げていたあらゆる原理を拒否し、邪悪なものとしている。そしてそれを、社会主義という名前のもとにやるのである。数世紀にわたり例がないほどの労働階級蔑視を説き、かつては肉体労働者特有のものであり、そのために採用された制服を党員たちに着せている。系統的に家族の連帯を潰し、指導者を、家族の忠誠感情に直接訴えるような名前と呼ぶ。我々を統治する四省庁の名前ですら、その意図的な事実の逆転により、一種の鉄面皮ぶりを示している。平和省は戦争を遂行し、真実省はウソをつき、愛情省は拷問し、豊富省は飢餓をもたらす。こうした矛盾は偶然ではなく、ありがちな偽善の結果でもない。二重思考の意図的な実行なのである。というのも権力をいつまでも保持するには、矛盾を一致させるしかないからである。古代からの周期を破るにはこれ以外の方法はない。人間の平等を永遠に回避するには——我々の呼ぶ上流がその地位を永久に保つには——一般的な精神状態は、制御された狂気ではなくてはならないのである。

だが、この瞬間まで我々がほとんど無視していた問題が一つある。なぜ人間の平等が回避されねばならないのか？ このプロセスの仕組みが正しく記述されてきたとすれば、歴史のある特定時点で凍結させようという、この巨大で正確に計画された活動の動機は何なのであろうか？

ここで我々は中心的な秘密にたどりつく。これまで見た通り、党の神秘性、特に党中心の神秘性は二重思考に依存している。だがそれよりさらに深くあるのは、もともとの動機、決して疑問視されない直感なのである。その直感が事後的に、まず権力の掌握につながり、二重思考、思考警察、継続的な戦争といった必要な周辺事項を存在させるようになった。この動機を構成するのは実は……

ウィンストンは静けさに気がついた。まるで何か新しい音に気がつくようなものだった。ジュリアがこしばらく、まったく身動きしないように思えた。脇を下にして横たわり、腰から上は裸で、頬は手の上に載せられ、黒い巻き毛が一筋目にかかっている。その乳房が、ゆっくり定期的に上がっては下がった。

「ジュリア」

答はない。

「ジュリア、起きてるか？」

答はない。寝ている。彼は本を閉ざし、慎重に床に置くと横たわり、ベッドカバーを二人の上に引きあげた。

まだ究極の秘密を学んでいないな、とかれは考えた。方法はわかる。理由がわからない。第I章は、第III章と同じで、自分の知らないことは実は何も教えてくれなかった。単にすでに持っていた知識を体系化しただけだ。だがそれを読んで、自分が狂っているのではないということが、以前よりよくわかった。少数派だからといって、それがたった一人の少数派だろうと、狂っているということにはならないのだ。真実と非真実があり、全世界を敵にまわしても真実にしがみつくなら、それは狂ってはいない。沈みゆく太陽からの黄色い光線が、窓から斜めに入って枕に落ちかかった。彼は目を閉じた。顔にあたる太陽と、自分の身体に触れる彼女のなめらかなからだが、強く眠たい安心感をもたらした。自分は

安全だ。すべて大丈夫。彼は「正気は統計的ではない」とつぶやき、この一言が深遠な叡智を含んでいるという感覚と共に眠りに落ちた。

目を覚ますと、ずいぶん長いこと眠っていたような感じがしたが、旧式の時計を見ると、まだ20 = 30でしかなかった。しばらくうつらうつらしつつ横たわっていると、いつもの朗々とした歌声が下の裏庭から立ち上ってきた。

しよせん夢とはわかっていたの
行きずりに消える四月の日
でも一目、一言、夢がそそられ！
それが
心を奪い去る！

そのダラダラとした歌の人気は衰えなかったらしい。いまだにそこら中で聞かれた。憎悪の歌よりも人気が続いている。その音でジュリアが目を覚まし、豪勢に身を伸ばして、ベッドから出た。

「お腹空いた。コーヒーをもう少し淹れようかな。

畜生！ コンロが消えてるしお湯も冷めてる」と彼女はコンロを手にとって振った。「油もなくなってる」

「チャリントン爺さんから少しもらえるんじゃないかな」

「変だなあ、満杯にしたのを確かめておいたのに。服を着るね」そして彼女は付け加えた。「なんか寒くなってきた」

ウィンストンも立ち上がって服を着た。疲れ知らずの声が歌い続けた。

いずれ楽になると言うけれど
いつか忘れると言われるけれど
いつまでたってもあの微笑や涙
いまでも心を締め付ける！

オーバーオールを締めながら、部屋を横切って窓に向かった。太陽は家屋の間にすでに沈んだらしい。もう裏庭を照らしてはいない。石畳は洗ったばかりのように濡れ、空も現れたような印象があった。煙突パイプ群の間に見える空の青さが、実に新鮮で淡かったからだ。女性は疲れ知らずに行ったり来たりして、口に洗濯ばさみをくわえては、またそれを取り、歌ってはまた黙りこくり、さらにおむつを物干しに止め、それが次々に続く。洗濯は請負仕事なのか、それとも孫が二、三十人いるために奴隷作業を余儀なくされているのだろうか、と彼は思った。ジュリアが隣にやってきた。二人で、眼下のがっしりした姿を、一種魅了されたように見下ろした。そのいつもの態度の女性、物干し綱のほうに伸ばされた太い腕、突き出した力強いラバのような尻を見ながら、初めて彼女が美しいことに思い当たった。それまでは、五十歳の女性の身体、それも出産によりさまざまにくれあがり、その後仕事により硬化して粗野になり、熟しすぎた蕪のように芯まで粗くなった身体が、美しくなれるなどとは思ったこともなかった。だが実際に美しかったし、考えて見れば、美しくないはずがあるだろうか？ がっしりした凹凸の無い、大理石

のかたまりのような肉体と、そのざらざらの赤い肌は、少女の身体に比べるなら、バラの実とバラの花との関係と同じだ。果実が花より劣る必要もないではないか？

「美しい人だね」とかれはつぶやいた。

「ヒップの幅が、どう見ても一メートルはあるじゃん」とジュリア。

「それが彼女式の美しさなんだ」とウィンストン。

ジュリアの豊満なウェストを、楽々と腕に抱えた。ヒップからひざまで、その脇身がこちらに押しつけられていた。二人の身体から子どもが生まれることはない。それは二人が決してできないことの一つだった。二人が秘密を伝えられるのは、口伝え、精神から精神へだけなのだ。下にいる女性は精神などなく、強い腕と温かい心と多産な腹しかない。何人子どもを産んだのだろうか。優に十五人にはなるかもしれない。一瞬だけ野生のバラのような美しさを花開かせ、それが一年も続くだろうか、そしていきなり肥料をやった果実のように太り、固く赤く粗野になり、その後の一生は洗濯、こすり掃除、繕い物、料理、掃き掃除、磨き掃除、修繕、こすり掃除、洗濯だけとなり、まずは子供たちのため、次いで孫たちのため、それが途切れることなく三十年続くのだ。その果てに、彼女はまた歌っている。彼女から感じた神秘的な啓示は、なぜか淡い雲のない空の光景と混じり合っていた。その空は煙突パイプ群の彼方、はるか遠くまで広がっていた。空があらゆる人にとって同じだと思うと不思議だった。ユーラシアでもイースタシアでも、ここと同じなのだ。そしてその空の下の人々も、ほとんど同じなのだ——どこでも、世界中で、ちょうどこれと同じような人々が何億人、何十億人も、お互いの存在など知らない人々、憎悪とウソの壁に隔てられつつ、それなのにほとんどまったく同じ人々——彼らは考えることなど決して学んだことはないが、その心と臓腑と筋肉に、いつの日か世界を転覆する力を貯め込みつつある。希望があるとすれば、それはプロレにある！「あの本」の結末を読むまでもなく、彼はそれがゴールドスタインの最後のメッセージだと確信した。未来はプロレのものだ。そしてかれらの時代がきたとき、プロレたちが構築する世界が、この党の世界と同じくらい自分、ウィンストン・スミスにとって異質なものにならないと確信できるだろうか？ できる。というのも最低でもそれは正気の世界になるだろうからだ。平等性のあるところ、正気がある。遅かれ早かれそれは起きる。強さが意識に変わる。プロレは不滅だ。あの裏庭の雄々しい姿を見ると、それは疑問の余地がない。いつの日か、かれらの目覚めが起きる。そしてそれが起きるまで、それが千年先のことでも、かれらはどんな逆境にも負けず生き延び、肉体から肉体へと、党が共有せず殺せない活力を伝えてゆくのだ。

「あの初めての日、森の端で、私たちに歌ってくれたツグミを覚えているか？」

「あしたちになんか歌ってなかった。歌うのは自分の楽しみのためでしょう。それですらないな。ただ歌ってたの」

鳥は歌う、プロレも歌う。党は歌わない。世界中、ロンドンでもニューヨークでも、アフリカでもブラジルでも、国境地域彼方の謎めいた禁断の土地でも、パリとベルリンの街頭でも、果てしないロシア平原の村でも、中国と日本の市場でも——どこにでも、同じしっかりした征服不能の人々が立っている。労働と子育てで怪物のようになり、生まれてから死ぬまでつらい労働に従事しつつ、それでも歌っているのだ。こうした強力な下腹部から、意識を持つ存在の人種がいつの日か生まれるはずだ。こちらは死者だが、向こうのは未来。だがかれらが肉体を生かし続けるように、こちらが精神を活かし続け、二足す二は四だという秘密の教義を伝え続けるならば、こちらもその未来に参加できるのだ。

「私たちは死者」とかれ。

「あたしたちは死者」ジュリアは諾々と繰り返した。

「おまえたちは死者」と鉄の声が背後で言った。

二人は即座に離れた。ウィンストンの内蔵は氷になったようだった。ジュリアの瞳孔のまわりすべてが白くなっているのが見えた。その顔は濁った土気色だった。左右の頬骨にまだついている頬紅の跡が際立っており、まるでその下の皮膚とつながっていないかのようだった。

「おまえたちは死者」と鉄の声が繰り返した。

「絵の裏にあったのか」息の下でジュリアは言った。

「絵の裏にあったのだ」と声が言った。「その場にじっととどまれ。命令されるまで一切動かないこと」

始まった、ついに始まったんだ！ お互いの目を見つめて立ち尽くす以外、何もできなかった。命からがら逃げ出す、手遅れになる前に家から出る——そんな考えはまったく浮かばなかった。壁からの鉄の声に逆らうなど考えられなかった。留め金が外れたようなカチリという音がして、ガラスが割れるガシャンという音がした。絵が床に落ちてその裏のテレスクリーンがあらわになった。

「これでもう見られてしまう」とジュリア。

「これでもう見えてしまう」と声。「部屋の真ん中に立て。背中合わせに立て。手を組んで頭の背後に。お互いに触れるな」

触れていなかったが、ジュリアの身体が震えているのが感じられるようだった。あるいは単に自分が震えているだけか。歯がガチガチ言うのはなんとか抑えられたが、ヒザがガクガクするのは抑えられなかった。階下で、家の中でも外でも、踏みならされるブーツの音がした。裏庭は人でいっぱいようだった。何かが石の上をひきずられていた。女性の歌声は急に止まった。長い、転がるような金属音がして、まるで洗濯おけが裏庭の向こうに投げつけられたようだった。そして混乱した怒りの叫び声が、痛みの叫びで終わった。

「家は包囲されている」とウィンストン。

「家は包囲されている」と声。

ジュリアが歯を食いしばる音がした。「あたしたち、どうやらお別れを言った方がいいみたい」

「どうやらお別れを言ったほうがいい」と声。そしてそこにまったくちがう声が割り込んだ。細い洗練された声で、何か聞き覚えのある声だった。「ちなみに、その話のついでに言うと『これがロウソク、ベッドに導く灯り、これが鎌で頭を切り落とす！』」

ウィンストンの背後で何かがベッドの上にガシャンと転がった。窓からはしごの端が突っ込まれ、それが窓枠を内側に叩き込んだのだ。だれかが登ってきて窓から入ってくる。階段を上ってくる大量のブーツ音も聞こえる。部屋は黒制服の屈強な男たちでいっぱいになり、みんな足には鉄打ちのブーツと手には警棒を持っている。

ウィンストンはもはや震えてはいなかった。目すらほとんど動かなかった。意味があるのは一つだけ。じっとして、じっとして殴る口実を与えないこと！ なめらかな、懸賞ポクサーの滑らかなあごをもち、口はほとんど裂け目でしかない人物が、親指と人差し指の間で物思いにふけるように警棒をバランスさせながら、正面で立ち止まった。ウィンストンはその目を見た。両手を頭の後ろに組んで、顔と身体がすべてむきだしになっているという裸体感覚は、ほとんど耐えがたいものだった。男は白い舌先をつきだし、唇があるはずの場所をなめてから、そのまま通り過ぎた。またガシャンという音がした。だれかがテー

ブルからガラスの文鎮を手に取り、それを炉端の石に叩きつけて粉々に砕いたのだ。

サンゴのかけら、ケーキの砂糖製のバラの花のような、小さなピンクのかたまりが、マットの上を転がった。なんと小さい、ずっとこんなに小さかったのか！ 背後では息を吐く音と叩く鈍い音がして、かれも足首に強烈な蹴りをくらい、ほとんどバランスを崩して倒れそうになった。男の一人がジュリアのみぞおちに拳を叩き込んだのだ。彼女はなんとか息をしようと苦闘し、床の上でもがいていた。一ミリたりとも頭をまわそうとは思わなかったが、ときどき鉛色にあえぐ彼女の顔が視界の角度に入ってきた。これほど怯えきっているのに、彼女の苦痛が我が身のここのように感じられた。その死ぬほどの苦痛は、それでも息を取り戻そうとする彼女の苦闘よりは緊急性が低かったのだが。それがどんなものかは知っていた。ひどい苦悶に満ちた痛みはずっとそこにあっても、そちらを苦しむわけにはいかないのだ。何よりも先にまず息ができなければならないからだ。そして男たちが二人、彼女の膝と肩を持って抱え上げ、袋のように部屋から運び出した。彼女の顔がちらりと見た。逆さまで、土気色で歪み、目は閉じられ、相変わらずどちらの頬にも頬紅の染みがついたままだ。そして、彼女を見たのはそれっきりとなった。彼は死んだように硬直して立ち続けた。だれにもまだ殴られていない。勝手に頭に浮かぶが、まったくおもしろくもない考えが脳内を駆け巡り始めた。チャリントンさんも捕まっただろうか？ 裏庭の女性はどんな目にあわされただろうか？ ひどく小便がしたいのに気がついて、ちょっと驚きをおぼえた。というのもほんの二、三時間前に用を足したばかりだったからだ。マントルピースの時計は九時をさして、つまり 21 時ということだ。だが外が明るすぎるようだった。八月の晩なら 21 時には暗くなっているはずでは？ 結局のところ自分とジュリアは時間をまちがえたのかも、と思った——時計が一周するほど眠りこけ、20 時 30 だと思ったのが、じつはゼロ 8 時 30 だったのだろうか。だがそんなことをそれ以上考えるのはやめた。おもしろくもないからだ。

通路にもっと軽い別の足音がした。チャリントンさんが部屋に入ってきた。黒制服の男たちの態度がいきなりかしこまったものになった。チャリントンさんの外観も何か変わっていた。その目がガラス文鎮の破片をとらえた。「このかけらを拾いたまえ」かれは鋭く言った。

男がそれに従おうと身をかがめた。コックニー訛りは消えた。ウィンストンはいきなり、テレスクリーンで数瞬前に聞いた声がだれのものだったか気がついた。チャリントンさんはまだ古いピロードの上着を着ていたが、かつてはほとんど真っ白だったその髪が、黒くなっていた。またメガネはかけていなかった。彼はウィンストンに鋭い一瞥をくれて、だれだか確認したようだったが、その後はまったくかれに注意を払わなかった。面影こそあれ、もうかつてと同じ人物ではなかった。背筋はのび、大きくなったかのように思えた。顔は細かい変化をただけだが、それでまったくの別人となっていた。黒い眉毛はかつてほどボサボサではなく、シワは消え、顔の輪郭そのものが変わったようだった。鼻さえも短くなったようだった。三十五歳ほどの男の冷徹な顔だ。人生で初めて、思考警察の一員を、それとわかって見ているのだ、とウィンストンは思い当たった。

第 III 部

第1章

どこにいるかわからなかった。たぶん愛情省にいるのだろうが、確認しようがなかった。天井の高い窓のない監房にいて、壁は白い輝く陶製だった。隠された電灯が独房を冷たい光で見たし、低い安定したハム音が聞こえたが、たぶん空調と関係しているのだろうと思った。壁に沿ってぐるりと、ちょうど座れるだけの幅を持ったベンチか柵がついており、ドアのところだけそれが途切れている。そしてドアの反対側の端には、木製便座のない便器があった。それぞれの壁に一つずつ、四つのテレスクリーンがある。

腹に鈍い痛みが感じられた。閉ざされたバンに閉じ込められて連れ去って以来、ずっと感じていた痛みだ。だが腹も減っていた。蝕むような不健全な空腹だった。最後に食べてから24時間たったかもしれず、36時間かもしれない。逮捕されたときに朝だったのか晩だったのか、いまだにわからないし、たぶん知ることもないのだろう。逮捕されてから食事はなかった。

狭いベンチになるべくじっとすわり、手を膝の上で組んだ。すでにじっとすわるよう学んだ。予想外の動きをすると、テレスクリーンから怒鳴られる。だが食べ物への渴望に襲われてきた。何よりも渴望したのはパンだ。オーバーオールポケットにパン屑が少しあるのではと思いついた。かなりの大きさのパンの耳がある可能性さえある——そう思ったのは、ときどき何かか脚をくすぐるようだったからだ。最終的に、それを確かめようという誘惑が恐怖に打ち勝った。彼はポケットに手をつこんだ。

テレスクリーンからの声が怒鳴った。「スミス！ 6079 スミス・W！ 独房ではポケットに手を入れるな！」

またじっと座り、手を膝の上で組んだ。ここに連れてこられる前に、別の場所に運ばれた。そこは通常の監獄か、パトロールが使う一時的な拘置所だったのだろう。そこにどのくらいいたか、わからなかった。何にせよ数時間だ。時計も日光もなく、時間の見当をつけるのがむずかしい。騒々しい、ひどい匂いの場所だった。いまいるのと似たような監房に入れられたが、すさまじい汚さで、常に十人から十五人でごった返していた。その大半は普通の犯罪者だったが、中には少数の政治犯もいた。かれは静かに壁際にすわり、汚い身体に小突かれ続けたが、恐怖と腹の痛みばかり気になって、あまりまわりに注意を向けられなかった。それでも党の囚人とそれ以外の囚人の中には驚くほど物腰の差があることには気がついた。党の囚人は常に黙って怯えていたが、一般犯罪者は他の誰についても何も気にしないようだった。大声で看守を侮辱し、所持品が押収されたら激しく暴れ、床に卑猥な言葉を書き、服の謎めいた隠し場所から取り出した、秘かに持ち込んだ食べ物を食べ、テレスクリーンが秩序回復を試みると怒鳴り返しさえするのだった。一方で、中には看守と仲良しらしい者もいて、あだ名で呼び、ドアののぞき穴から紙巻きタバコをねだろうとする。看守のほうも、一般犯罪者はかなり荒っぽい扱いをするときですら、ある種の

寛容さをもって扱っていた。ほとんどの囚人は、強制労働キャンプに送られるものと覚悟しており、そこについていろいろ話があった。キャンプでは、いいコネがありツボさえ心得ていれば「大丈夫」らしかった。わいろやえこひいき、各種の強請があり、同性愛と売春もあり、ジャガイモから蒸留した密造アルコールさえあった。そうした信頼の地位が与えられるのは、一般犯罪者だけ、中でも特にギャングや殺人者で、この連中は一種の貴族を形成していた。汚れ仕事はすべて政治犯どもがやらされた。

あらゆる種類の囚人が絶え間なく行ったり来たりしていた。麻薬密売人、泥棒、盗賊、闇商人、飲んだくれ、売春婦。一部の飲んだくれはあまりに暴れるので、他の囚人たちが力を合わせて押さえつけねばならなかった。巨大でひどい様子の女性、60歳くらいで、すさまじい転がるような乳房と、暴れるうちに転がり落ちてきた、分厚く巻かれた白髪を持つ女性が、看守四人に四肢をそれぞれ抱えられつつ、蹴飛ばして怒鳴りながら運び込まれてきた。四人は、蹴飛ばそうとし続けていた脚からブーツをむしり取り、女をウィンストンの膝に投げ出したので、大腿骨が折れそうになった。女は身を起こし、看守たちの背後から「クソつたれのろくでなしども！」と怒鳴った。それから、何か不均等なものの上に座っているのに気がついて、ウィンストンのひざからベンチにすべり降りた。

「ごめんなさいねえ、旦那。あんたの上に座る気なんかなかったんだけど、あのクソどもがそこに置いたもんでね。レディの扱いってもんがわかってないんだよ、ねえ？」と彼女は間をおき、胸を叩いてゲップをした。「失礼、ちょっとあたしも本調子じゃなくて」

彼女は身を乗り出して、床に大量のゲロを吐いた。

「だーいぶマシになったよ」と彼女は目を閉じて後ろにもたれた。「我慢しちゃだめなんよ、いつも言うんだけどさ。腹んなかで新鮮なうちに出しまう、みたいな」

我に返ると、再びウィンストンを見て、すぐに何やら気に入ったらしい。肩にその巨大な腕をまわして引き寄せ、顔にビールとゲロの吐息を吐きかけた。

「名前、なんてえんだい？」

「スミス」とウィンストン。

「スミス、だってえ？ 奇遇だねえ。あたしもスミスってえんだよ。ひょっとして、あんたのおふくろかもよ！」

そうかもな。お母さんかもしれない。年齢も体つきもそのくらいだし、強制労働キャンプで二十年過ごせば、人は多少は変わるものだろう。

他にだれも話しかけてこなかった。一般犯罪者は驚くほど党の囚人たちを無視した。興味もないというような蔑視をこめて「せーじや」と呼ぶのだ。党の囚人たちは、怯えきってだれにも話しかけられず、何よりもお互いに話をしなかった。たった一度だけ、党员二人、どちらも女性がベンチで身を寄せ合っていたとき、喧噪の中でわずかに急いでささやかれた言葉が聞こえた。特に何か「いちまるいちごうしつ」なるものへの言及がきかれたが、何のことやらわからなかった。

ここに連れてこられたのは、二、三時間前だろうか。腹の鈍い痛みは決して消えず、一進一退を繰り返し、それに伴い考えも拡大収縮を繰り返した。痛みが悪化すれば痛みそのものと、食べ物への欲求のことしか考えなかった。マシになると、パニックに襲われた。自分に起こることが予見され、それがあまりにリアルだったので、動悸がして息が止まったほどだ。肘に叩きつけられる棍棒と、スネを蹴飛ばす鋸打ちブーツを感じた。自分が床で悶絶し、折れた歯を通して慈悲を求めて叫んでいる様子を見た。ジュリアのことはほとんど考えなかった。彼女のことに意識を集中できなかった。愛していたし裏切りはしな

い。だがそれは事実でしかなく、算数の規則を知っているのと同じように知っているだけだ。彼女に愛情は感じず、彼女に何が起きているかさえほとんど思案しなかった。オブライエンについて考えるほうが多かったし、そこにはかすかな希望があった。オブライエンなら自分が逮捕されたのがわかるかもしれない。友愛団は、決して団員を救ったりしないと言っていた。だがカミソリがある。可能ならカミソリの刃を送ってくれる。警備員が監房に駆け込むまでに、五秒あるだろうか。カミソリの刃は、燃えるような冷たさで肉に食い込み、それを持つ指ですら骨まで切られるだろう。すべては自分の病んだ肉体に戻ってきたが、それはごくわずかな痛みでも、震え上がり縮こまるのだった。チャンスがあっても、自分はカミソリを使えるだろうか。流されたまま存在を続け、十分ずつの追加の命を受け入れるほうが自然だった。その果てに拷問が確実に待っているともしも。

ときには、監房の壁にある瀬戸物のレンガの数を計算しようとした。簡単なはずなのに、必ずどこかで数がわからなくなるのだった。それ以上に、自分がどこにいて、いま何時なのかと思案した。あるときは、外が真昼だと確信し、次の瞬間は同じくらい外は漆黑だと確信した。この場にいと、決して消灯されないのは直感的にわかった。ここが暗闇のない場所なのだ。いまやなぜオブライエンが、このほのめかしを理解したらしいかわかった。愛情省に窓はない。監房は建物の中心にあるのかもしれない、外壁沿いにあるのかもしれない。地下十階かもしれない、地上三十階かもしれない。かれは頭の中であちこち自分を移動させ、身体で感覚で、自分が空高くにいるのか地下深くに埋められているかを突き止めようとした。

後進するブーツの音が外でした。鋼鉄のドアがガチャンと開いた。若い将校が、精悍な黒制服で、そこらじゅう輝く磨いたレザーを見せ、能面のような蒼白いまっすぐな顔立ちで、戸口からさっそうと入ってきた。そして外の看守たちに、連行してきた囚人を入れるよう身ぶりで示した。詩人アンブルフォースがヨロヨロと監房に入ってきた。ドアはまたガチャンと閉じられた。

アンブルフォースは、脇から脇へと自信なげな動きをして、まるで別のドアから出て行けるとでも思っているかのようであり、それから房内をうろうろ行き来しはじめた。まだウィンストンの存在に気づいていない。目がおかしくなっていて、ウィンストンの頭から一メートルほど上の壁を見つめているのだ。靴ははいていない。靴下の穴から、巨大な汚い親指が突き出している。数日ヒゲを剃っていないようだ。ぼさぼさのヒゲが、頬骨まで顔を覆っており、悪党めいた雰囲気になっていたが、それが巨大でひ弱な顔つきと心配そうな動きとまったくそぐわなかった。

ウィンストンは無気力状態から立ち直るよう自分に言い聞かせた。テレスクリーンに怒鳴られても、アンブルフォースに話をしなければ。アンブルフォースがカミソリの刃を持ってきた可能性さえある。

「アンブルフォース」

テレスクリーンからの怒鳴り声はなかった。アンブルフォースはちょっとびっくりして止まった。目はゆっくりとウィンストンに焦点を合わせた。

「スミス！ 君もか！」

「何でつかまった？」

「正直いって――」彼はぎくしゃくと、ウィンストンの向かいのベンチに腰掛けた。「罪状は一つしかない。そうだろう？」

「そして君はやったのか？」

「そうらしい」

かれは手を額に当てて、こめかみを一瞬押し、まるで何かを思い出そうとするようだった。

「ありがちなことなんだよ」とかれは漠然と始めた。「一つあったのを思い出す——可能性があることだ。まちがいなく軽率だった。キプリングの詩の決定版を作っていたんだ。ある行の最後に『神』という単語が残るのを見逃した。仕方なかったんだ！」とかれは、ほとんど決然と付け加え、顔を上げてウィンストンを見た。「その行を変えるのは不可能だった。『棒』と韻を踏まなきゃならなかったんだ。わかるか、『棒』と韻を踏む単語は英語には十二個しかないんだよ。何日も悩んだが、本当に他に韻を踏むものはないんだ」

かれの表情が変わった。苛立ちが消え去り、一瞬かれはほとんど喜ばしげだった。一種の知的な温かみ、何か役立たずな事実を見つけた知ったかぶりのよろこびが、汚れとボサボサ髪の間からあふれ出た。

「イギリスの詩の歴史はすべて、英語には韻がないという事実で決定づけられていたと知っていたかい？」

「いや、そんな考えはウィンストンの頭に浮かんだこともなかった。またこの状況では、それがさほど重要でもおもしろいとも思えなかった。」

「いま何時かわかるか？」

アンブルフォースは再び驚いたようだった。「そんなこと、ほとんど考えもしなかった。逮捕されたんだ——二日前か——三日前かも」。彼の目は壁をキョロキョロみまわし、どこかに窓があるのを半ば期待しているかのようなようだった。「ここでは夜と昼に何のちがいもない。何時か計算しようがないと思う」

数分にわたりとりとめのない話をしていると、明確な理由もなしに、テレスクリーンからの怒鳴り声が黙るように命じた。ウィンストンは静かに手を組んですわった。アンブルフォースは、せまいベンチにしっかり座るには大きすぎたので、脇から脇へともじもじして、ひょろ長い両手でまずは片膝を握り、それからもう片膝を覆った。テレスクリーンは、身動きするなとかれを怒鳴りつけた。時間が過ぎた。20分か、1時間か——なかなかかわらなかった。またもや外にブーツの音がした。ウィンストンの臓腑が縮みあがった。間もなく、きわめて間もなく、ヘタをするとあと五分、ひょっとして今すぐ、ブーツの足音は自分自身の順番がやってきたということなのだ。

ドアが開いた。あの冷たい顔の若い将校が、房室に入ってきた。片手をサッと動かしてアンブルフォースを示した。

「101号室」

アンブルフォースは、看守たちにはさまれて、ヨタヨタとそこを出た。その顔は漠然と狼狽していたが、わけがわからないようだった。

長い時間に思えるものが過ぎた。ウィンストンの腹部の痛みが復活した。精神は同じネタの堂々巡りを繰り返すばかりだった。まるで同じ一連のスロットにはまりこむボールのようなものだ。考えられることは六つしかなかった。腹痛、パン切れ、血と絶叫、オブライエン、ジュリア、カミソリの刃。また臓腑が激しく縮み上がった。重いブーツが近づいてくるのだ。ドアが開くと、それが生み出した空気の流れが強烈な冷や汗の匂いを運んできた。パーソンズが房室に入ってきた。カーキ色の半ズボンとスポーツシャツを着ている。

今度ばかりはウィンストンも驚いて我を忘れた。

「あんたがくるなんて！」

パーソンズはウィンストンを一瞥したが、興味も驚きも示さず、惨めさがあるだけだった。そわそわと部屋の中をうろつき、明らかにじっとしてられないようだ。毎回、そのぼちゃぼちゃした膝が伸びるたびに、それが震えているのは明らかだった。目は大きく見開かれて見つめるようで、まるで何か中景にあるものを見つめずにはられないとでもいうようだった。

「何でぶちこまれた？」とウィンストン。

「思考犯罪だよ！」とパーソンズは、ほとんど泣きそうな声で言った。その声の調子は、自分の罪を完全に認める一方で、そんな言葉が自分に適用されるとは信じられないという一種の恐怖を示していた。ウィンストンの前で足を止めると、熱心に訴え始めた。「射殺はされないよな、どう思うね、旦那？ 本当に何かしなければ射殺はないよな——考えだけなら、自分ではどうしようもないもんな？ こっちの言い分は公平に聞いてくれるはず。その点はお上を信頼してるんだよ。オレの記録は知ってるはずだしな、え？ あんたなら、オレがどんな野郎だったか知ってるよな。オレなりに、悪い奴じゃなかった。もちろん頭は悪かったが、気は利いた。党のために精一杯尽くそうとしたよな？ 懲役五年で放免だろ？ 十年くらうかな？ オレみたいな野郎は、労働キャンプでかなり役に立つだろうし。一度道を踏み外したくらいで、射殺はねえよな？」

「有罪なのか？」とウィンストン。

「有罪に決まってるだろ！」と叫びつつ、パーソンズはテレスクリーンに追従するような視線を向けた。「党が罪もない人間を逮捕するわけねえだろ？」そのカエルじみた顔は平静になり、かすかに殊勝な顔つきさえ見せた。そしてもったいぶってこう言った。「思考犯罪ってのはおっかねえもんだぜ、旦那。油断も隙もねえ。こっちの知らないうちに入り込んできやがる。オレにどうやって入り込んだかわかるか？ 寝ているときだよ！ そう、その通り。頑張ってるんで、自分なりに奉仕してたのに——心に悪いものが入り込んでるなんて、まるで知らなかった。そしたら寝言を言い始めたんだと。寝言で何を言ってるのを聞かれたと思う？」

かれは声を落とした。まるで医学的な理由で卑猥語を言わざるを得ない人物のようだった。

『打倒ビッグ・ブラザー！』うん、オレがそう言ったんだ。どうやら何度も何度も言ったらしいぜ。ここだけの話だがな、旦那、それ以上進む前に捕まえてもらって、ありがたいと思ってんだ。裁判に立たされたらオレが何と言うかわかるか？ 『ありがとうございます、手遅れになる前に救っていただいてありがとうございます』って言うんだ」

「だれに告発されたんだ？」とウィンストン。

「うちの娘なんだ」と言うパーソンズは、悲しげな誇りを示していた。「鍵穴ごしに聞き耳をたてていたんだ。オレが言ってることを聞いて、すぐ翌日にパトロールにタレこんだ。七歳のタレこみ屋にしちゃあ、かなり賢いよな、え？ 娘にそれで恨みはないんだぜ。むしろ誇らしいくらいだよ。とにかく正しい精神に育てたことはわかるもんな」

かれはさらに何度か、ヨタヨタと行ったり来たりしつつ、便器に渴望するような目を向けた。そしていきなり半ズボンを脱ぎ捨てた。

「悪いな、旦那。我慢できないんだ。待たされすぎた」

かれはその巨大な尻を便器に突っ込んだ。ウィンストンは両手で顔を覆った。

テレスクリーンからの声が怒鳴った。「スミス！ 6079 スミス・W！ 顔を見せろ。独房では顔を覆うな！」

ウィンストンは顔を手から話した。パーソンズは便所を、大音量でたっぷり使った。そして実は、その栓がこわれていたので、房室はその後何時間もものすごい臭さだった。

パーソンズは連れ去られた。不可解ながら囚人が次々に来ては去った。その一人、女性が「101号室」行きを指示され、その言葉を聞いた瞬間に縮こまって顔色が一変したようにウィンストンは思った。あるとき、ここに自分が連れてこられたのが朝ならば午後、連行が午後だったら深夜のはずの時がやってきた。監房には囚人が、男女入り混じって六人いた。みんなまったく身動きしなかった。ウィンストンの向かいの男は、アゴがなく、出っ歯で、まるで巨大で無害なネズミのようだった。その太ったまだらの頬は、下のほうがあまりに袋状に垂れていたから、そこにちょっと食べ物を隠し持っていないとは信じられないほどだった。その薄い緑の目は臆病そうに囚人たちの顔を次々と見ては、目があうとすばやく逸らすのだった。

ドアが開き、別の囚人が連行されたが、その外見を見てウィンストンは一瞬ゾツとした。どこにでもいそうな、不機嫌そうな男で、何かエンジニアか技士のような感じだ。だが驚かされたのは、顔の衰弱ぶりだった。骸骨同然だった。あまりに痩せているので、口と目が異様に大きく見栄、その目はだれか、あるいは何かに対する、殺人的な、満たされぬ憎悪で満たされているようだった。

男は、ウィンストンから少し離れたベンチにすわった。ウィンストンは二度とその男を見ようとしなかったが、その苦しめられた骸骨のような顔は、目の真ん前におかれたかのように、鮮明に心に残った。いきなり、何がおかしいかわかった。その男は飢え死にしかけているのだ。同じ考えが監房のほとんど全員に同時に浮かんだ。ベンチ全体に、きわめてかすかな動揺が走った。アゴなし男の目は絶えず、骸骨顔の男のほうをチラチラと見ては、後ろめたそうに逸らされ続け、それでもどうしようもなく惹きつけられるとでも言うように、また骸骨顔の男に向かうのだった。やがてかれは、すわったままもじもじし始めた。ついに立ち上がると、監房をヨタヨタと横切り、オーバーオールポケットに手を突っ込んで、きまり悪そうに薄汚れたパン切れを骸骨顔の男に差し出した。

テレスクリーンから、すさまじい耳をつんざくような轟音が聞こえた。アゴなし男はその場で飛び上がった。骸骨顔の男はすぐに両手を背後につっこみ、世界すべてに対して自分がその贈り物を拒否したことを示そうとするかのようだった。テレスクリーンは怒鳴った。「バーンステッド！ 2713 バーンステッド・J！ そのパンきれを落とせ！」

アゴなし男はパン切れを床に落とした。

「そこを動くな。ドアのほうを向け。一切動くな」

アゴなし男は従った。その巨大な垂れた頬が抑えようもなく震えている。ガシャンとドアが開いた。若い将校が入ってきて脇にどくと、その背後から背の低い無骨な看守があらわれた。すさまじい腕と肩をしている。アゴなし男の正面に立ち、将校からの合図で、体重を完全にのせたすさまじい一撃を、アゴなし男の口元に全開で放った。その威力で、男はほとんど床から放り出された。身体は房室を飛んで横切り、便座の根本に転がって止まった。一瞬かれは、卒倒したかのように横たわり、暗い血が口と鼻から流れていた。きわめてかすかなうめき声、キイキイ声が、どうやら無意識らしく、男から放たれた。それから転がると、よろよろと両手と膝で身体を起こした。血と唾に混じって、その口から入れ歯が二つに割れて落ちた。

囚人たちは身じろぎもせず、膝の上で手を組んでいた。アゴなし男はもとの場所によじ登った。顔の片側の肉が黒くなっている。口は不定形のピンク入りの塊へと腫れ上がり、

その真ん中に黒い穴が空いている。

ときどき、そのオーバーオールに胸にちょっと血が滴った。かれの灰色の目はまだ他の人々の顔から顔へとキョロキョロして、ますます後ろめたそうで、他のみんなが自分の屈辱を見てどれほど軽蔑しているかつき止めようとしているかのようだった。

ドアが開いた。わずかな身ぶりで、警官は骸骨顔の男を示した。

「101 号室」

ウィンストンの横であえぎ声と動揺が起きた。男は本当に床に飛び降りてひざまづき、両手を拝むように合わせた。

「同志！ 将校殿！ あそこに連れて行くには及びません！ もうすべてお話したでしょう！ 他に何をお知りになりたいというのですか！ 何でも白状します、何でも！ おっしゃってくれば即座に白状します。書いたらすぐ署名します——何でも！ 101 号室だけはやめて！」

「101 号室」と将校。

男の顔は、すでに蒼白だったのが、あり得るとさえ思わなかった色に変わった。絶対にまちがえようもなく、緑がかった色合いだった。

男は叫んだ。「好きなようにしてくれ！ もう何週間も飢えさせてきただろう。ケリをつけて殺してくれ。射殺でも。絞首刑でも。二十五年の懲役でも。だれか告発してほしいヤツはいるか？ 言ってくれば、何でもお望みの通り話すから。だれだろうと、そいつらに何をしようと構わん。妻と子ども三人がいる。長男はまだ六つにもならない。そいつら全員逮捕して、目の前で喉を掻ききってくれてもいい。黙って見てるから。でも 101 号室だけは勘弁してくれ！」

「101 号室」と将校。

男は必死で他の囚人を見回し、他の被害者を身代わりにしようと思いついたらしい。その目は、アゴなし男の潰れた顔に止まった。そして細い腕をサッと伸ばした。

「連行すべきはあいつだ、おれじゃない」とかれは叫んだ。「顔を潰されたときにあいつの言ったこと、聞いてなかっただろう。チャンスをくれ、一言残らず教えるから。あいつこそ党に逆らってるんだ。オレじゃない」。看守たちは進み出た。男の声は金切り声になって繰り返した。「あんたら、こいつのせりふが聞こえなかっただろう！ テレスクリーンの調子が悪かったんだ。あんたらが欲しいのはこいつだ。こいつを捕まえろよ、おれじゃない！」

頑強な看守二人が立ちはだかり、男の腕を取ろうとした。だがまさにその瞬間、男は官房の床ごしに身を翻して、ベンチを支える鉄の脚の一つをつかんだ。言葉にならない動物のような叫びを発した。看守たちはそれを掴んで引き離そうとしたが、男は驚くほどの強さでしがみついた。男は二十秒も引っ張られていただろうか。囚人たちは静かにすわり、手はひざの上で組まれ、まっすぐ正面を見続けていた。叫び声はとまった。男はもはや息を切らし、しがみつただけで精一杯だった。そのとき別種の叫びが生じた。看守の一人に蹴飛ばされて、男の片手の指が折れたのだ。看守たちは男を引きずり立たせた。

「101 号室」と将校。

男は連れ去られた。ヨロヨロと歩きつつ、頭を垂れ、潰された手をかばいつつ、戦う意志などすべて消えていた。

長い時間が過ぎた。あの骸骨顔の男が連れ去られたのが深夜だったなら、もう朝だろう。あれが朝なら、いまは午後だ。ウィンストンはたった一人で、それも何時間も一人き

りだった。狭いベンチにすわり続ける痛みがあまりに激しく、しばしば立ち上がってうろつきまわったが、テレスクリーンは何も言わなかった。パン切れは、あのアゴなし男の落としたままのところにあった。当初は、それを見ないようにするのにかなりの努力が必要だったが、やがて飢えよりもどの乾きのほうが強まった。口が粘つき、ひどい味がした。ハム音とまったく変わらない白い光が、何か気が遠くなるような効果をもたらし、頭の中が空っぽになるような気がした。骨の痛みがもはや絶えられなくなるから立ち上がり、めまいがして立ってられるかわからないので、ほぼ即座にすわるのだった。肉体的な感覚が少し抑えられると、恐怖が戻ってきた。ときには、薄れゆく希望とともに、オブライエンとカミソリの刃のことを考えた。カミソリの刃が食事に隠されてやってくる可能性はあったが、食事がくるのかもわからなかった。もっと漠然とジュリアのことを考えた。どこかで彼女は、ひょっとすると自分よりはるかにひどい苦しみを味わっているのかもしれない。まさにこの瞬間、苦痛で絶叫しているかもしれない。「自分の苦痛を倍にしてジュリアが救えるなら、そうするだろうか？ ああ、やるとも」とかれは思った。だがそれはただの知的な決断でしかなく、そうすべきだとわかっているからそう決断しただけの話だった。実感はしていなかったこの場所では、苦痛と苦痛の事前の知識以外は何も実感できない。さらに、実際に苦痛に苦しんでいるときには、どんな理由であれ自分の苦痛を増やせと願うなどあり得るだろうか？ だがその質問はまだ答えられるものではなかった。

ブーツがまた近づいてきた。ドアが開いた。オブライエンが入ってきた。

ウィンストンは思わず立ち上がった。その光景のショックで、あらゆる警戒を忘れてしまった。長年にわたり、初めてテレスクリーンの存在を忘れた。

「あなたも捕まったんですか！」

「とっくの昔に捕まっていたのだよ」とオブライエンは、穏やかでほとんど後悔するようなアイロニーをこめて言った。そして脇にどいた。背後からは胸の広い看守があらわれ、長い黒い棍棒を手にはしている。

「ウィンストン、わかっているだろう。自分をごまかすな。まちがいなくわかっていた——ずっと前からわかっていたはずだ」

そう、いまやわかった。ずっと前から知っていた。だがそんなことを考える暇はなかった。目は看守の手の棍棒に吸い寄せられていた。それがどこを殴るのだろうか。頭のとっぺん、耳の端、上腕、肘——

肘だ！ 彼はほとんど全身麻痺して膝をつき、動かない肘をもう片方の手で握りしめた。すべてが黄色い光へと爆発した。一撃だけでこんなに痛いとは、あり得ない、あり得ない！ 光が消えると、他の二人が見下ろしていた。看守はこちらの身もだえに笑っていた。いずれにせよ、一つ疑問が解消した。この世にどんな理由があろうとも、苦痛を増すなど願えない。苦痛について、願えるのは一つだけ。止まれということだ。肉体的な痛みほどこの世でひどいものはない。苦痛に直円したら、英雄などない、英雄などない、と床の上で身もだえしつつ、彼は何度も考えつつ、動かない左腕を空しくつかみ続けた。

第2章

キャンプベッドのような感じのものに横たわっていたが、地面からもっと高く、さらに身動きできないように何か固定されていた。いつもより強く感じられる光が顔を照らしていた。オブライエンが脇に立ち、じっと見下ろしていた。その反対側には白衣の男が、注射器を持って立っていた。

目を開けたあとでも、周辺を一気には認識しないようにした。何かまったくちがう世界から、この部屋に浮上してきたような印象があった。何かそのはるか下にある水中世界のようなものから上がってきたのだ。その水中世界にどれだけいたかはわからなかった。逮捕された瞬間から、闇も日の光も見たことがなかった。さらに記憶も断続的にしかない。意識が、眠っているときにすら持っている意識ですら、完全に途切れて、空白のすきまの後で再開していた。だがそのすきまが数日か、数週間か、たった数秒なのかは、知りようがなかった。

あの肘への最初の一撃から悪夢が始まった。後にかれは、その後に起きたことなどただの前哨、ほぼあらゆる囚人が受ける型どおりの尋問でしかないのに気がつくことになった。実に幅広い犯罪——謀報、妨害工作といったもの——は、みんなが当たり前のように自白しなければならなかった。自白はただの形式だが、拷問は本物だった。何度殴られたか、どれほど殴打が続いたかは思い出せなかった。いつも黒い制服の男が五、六人、同時に対面していた。ときには拳で、ときには棍棒で、ときには鉄棒で、ときにはブーツでだった。蹴りを避けようという、果てしなく絶望的な試みであれやこれやと身もだえし、動物のように恥を忘れて床をころげまわり、結果としてますます多くの蹴りを、あばらに、腹に、肘に、スネに、下腹部に、睾丸も。尾てい骨にくらったこともあった。ときにはそれがいつまでも続いたので、残虐で邪悪で許しがたいのは、自分を殴り続ける看守たちではなく、自分が失神するよう自分を無理強いできないことだと思えてきたときもあった。ときには正気が完全に失われ、殴打が始まる前から許しを請うて叫び始めたこともあった。拳が振り上げられただけで、本物の犯罪も空想上の犯罪も自白をいくらでも吐露してしまうこともあった。また何も自白しないぞと決意して始め、あらゆる発言は苦痛のあえぎの中で無理矢理絞り出されねばならないこともあった。またときには弱々しく妥協を試み、自分にこう言い聞かせたこともあった。「自白はするがすぐにはしない。痛みが耐えがなくなるまで我慢しよう。あと蹴りが三回、蹴りが二回、そうしたら求めることを話そう」。ときには、立ってもいられないほど殴られ、それから監房の石の床にジャガイモ袋のように投げ出され、数時間回復のため放置され、それからまた連れ出されて殴られた。また回復期間がもっと長いこともあった。漠然としか覚えていない。そうした期間は眠るか昏睡状態がほとんどだったからだ。覚えている監房は板寝台と、壁から柵のようなものが突き出しているのと、ブリキの洗面台、熱いスープとパンの食事、ときどきコー

ヒーだった。仏頂ゾラの床屋がきてアゴを剃って髪を切ったのと、素っ気ない淡々とした白衣の男たちがやってきて、脈を調べ、叩いて反射を調べ、まぶたを開け、固い指を走らせて骨折を探し、腕に針を刺して眠らせたりしたのも覚えていた。

殴打は次第に頻度が下がり、単なる脅しになった。不満な答えをした瞬間、いつでも送り返されかねない恐怖になったのだ。尋問者はいまや黒制服のゴロツキではなく、党の知識人となった。動きがすばやくメガネを光らせた、丸々太った小男たちで、一度に 10 時間から 12 時間ほど——と彼は思ったが確信はできない——の時間にわたりリレー式に尋問を行った。この新たな尋問官たちは、彼が常に少し苦痛にさらされるように手配したが、かれらが主に頼ったのは苦痛ではなかった。顔を平手打ちし、耳をひっぱり、髪を引っ張り、片足で立たせ、小便にいかせず、目からポロポロ涙が出るまでまばゆい光で顔を照らした。だがこの狙いは単に、侮辱して議論と理性の力を破壊することだった。本当の武器は、延々と何時間も続く容赦ない尋問で、ひっかけようとし、あちこち罨をしかかけ、言ったことをすべてねじ曲げ、一步毎のウソや自己矛盾を責め立てて、やがて神経の疲れと同じく恥ずかしさのあまり、かれは泣き出してしまふのだ。ときには尋問一回ごとに半ダースも泣いたりした。ほとんどの場合、罵倒を投げつけて、ためらうたびに、また看守たちの手に渡すぞと脅すのだった。だがときには急に声色を変え、かれを同士と呼び、^{イソグソック}英社主義とビッグ・ブラザーの名において訴えかけ、自分のやった邪悪を取り消したいと願うくらいの、党への忠誠が今もまだ多少は残っていないのかと悲しげに尋ねるのだった。長時間の尋問で神経がズタズタになっているときには、こんな訴えですらポロポロ涙が出てしまうのだ。最終的には、責め立てる声のほうが、看守たちのブーツや拳よりも完全にかれを潰した。かれはただの、求められたどんなことでも口走る口、署名する手になっていた。唯一の関心は、何を自白してほしいかつきとめて、新たないじめが始まる前にそれをさっさと自白することだった。有力な党員の暗殺を自白し、扇情的なパンフレットを配布し、公金を着服し、軍事機密を売りわたし、ありとあらゆる妨害工作をしたと自白した。はるか昔の 1968 年からイスタシア政府に飼われたスパイだったと自白した。宗教的な信仰を持ち、資本主義を崇拝し、性的倒錯者だと自白した。妻を殺したと自白したが、妻がまだ生きていることは自分でもわかっていたし、尋問官たちも知っていたはずだ。長年にわたりゴールドスタインと個人的に接触しており、ほとんどあらゆる知り合いを含む地下組織の一員だったと自白した。すべてを自白しみんなを売り渡すほうが簡単だった。それに、ある意味でそれはみんな本當なのだ。自分が党の敵だったのは事実で、党の目からすれば、考えと行為との間には何の区別もない。

他の種類の記憶もあった。断続的に精神内に屹立しており、まるでまわりを黒で囲まれた写真のようだった。

監房にいたが、そこが暗いか明るいかわからなかった。なぜなら見えるのは一対の目だけだったからだ。手近な場所で何か計器が、ゆっくり一定速度でカチカチ言っていた。その目はますます大きく明るくなった。いきなりかれは自分の席から漂い上がり、その目に飛び込んで飲み込まれた。

まぶしい照明の下で、ダイヤルに囲まれた椅子に縛られていた。白衣の男がダイヤルを読んでいる。外で重いブーツの足音がした。ドアがガシャンと開いた。ロウのような顔の将校が行進して入ってきて、後ろに看守二人が従っている。

「101 号室」と将校。

白衣の男は振り返らなかった。ウィンストンのほうも見なかった。ダイヤルしか見てい

なかった。

彼は巨大な廊下を闊歩していた。幅一キロ、華やかな黄金の照明だらけで、かれは馬鹿笑いしつつ、自白を絶叫していた。何もかも自白し、拷問の下では隠しおおせていたことまで白状した。自分の全人生の物語を、すでにそんなことは承知している聴衆に語っていた。看守たち、他の尋問官たち、白衣の男たち、オブライエン、ジュリア、チャリントンさんもいて、みんなその廊下をいっしょに闊歩しつつ、笑いながら叫んでいた。未来に埋め込まれて待ち構えていた、何か恐ろしいものが、なぜか飛ばされて、起こらなくなった。万事が快調で、もう苦痛もなく、自分の人生の最後の細部までむきだしになり、理解され、許されたのだ。

オブライエンの声を聞いたと半ば確信して、板寝台から身を起こそうとした。尋問の間ずっと、一度も姿は見なかったが、オブライエンが肘のところ、視界のすぐ外にいるという気がした。すべてを指示しているのはオブライエンなのだ。看守たちをウィンストンにけしかけつつ、殺さないようにさせたのはオブライエンだ。ウィンストンがいつ苦痛に絶叫し、いつ休み、いつ食事を与え、いつ寝て、いつ薬を腕に注射すべきかを決めたのもオブライエンだ。質問を尋ね、答を示唆したのはオブライエンだ。彼は苛む者であり、保護する者であり、審問官であり、友人なのだ。そしてあるとき——ウィンストンはそれが薬による眠りの中でのことか、通常の睡眠中か、あるいは目覚めているときだったのかも思い出せなかった——ある声が耳元でつぶやいたのだった。「ウィンストン、心配するな。君は私の保護下にあるんだから。七年にわたり、君を見張ってきたのだよ。いまや転回点がやってきたのだ。君を救ってあげよう。君を完璧にしてあげよう」。それがオブライエンの声か確信はもてなかった。だが七年前のあの別の夢で「暗闇のない場所で会おう」と語りかけたのと同じ声ではあった。

尋問の終わりはまったく覚えていなかった。暗黒の時期があり、それからいまいる監房、あるいは部屋が、次第にまわりで物質化し始めた。ほとんど仰向けで、動けなかった。身体はあらゆる要所で押さえつけられていた。後頭部ですら何らかの形で固定されていた。オブライエンが深刻な様子で、いささか悲しげに見下ろしていた。その顔は、下から見ると、粗野で疲れており、目の下には袋ができて、鼻からあごに疲れた皺が走っていた。ウィンストンが思っていたよりも高齢だ。四十八歳か、あるいは五十歳だろうか。その手の下には、てっぺんにレバーのついたダイヤルがあり、その盤面にはぐるりと数字が表示されている。

「次に会うならここだと言ったね」とオブライエン。

「はい」とウィンストン。

オブライエンの手のかすかな動きだけで、苦痛の波が身体を覆った。恐ろしい痛みだった。何が起きているか見えず、何か自分に死ぬほどの傷害が加えられているような気がしたからだ。それが実際に起きているのか、それとも電氣的にその効果が生み出されているのかはわからなかった。だが身体は形をとどめないほど歪められ、関節がゆっくり引き裂かれていた。苦痛は額に汗をもたらししたが、最悪だったのは背骨が折れるのではという恐怖だった。歯を食いしばり、鼻を通して激しく息をして、できる限り何も言わないようにした。

オブライエンはウィンストンの顔を見ながらいった。「恐れているね。あと一瞬で何か折れると思っているんだろう。君が特に恐れているのは、その折れるのが背骨ではということだな。脊椎がへし折れて、髄液がそこからしたり落ちるといふ、赤裸々な想像を

しているな。いま考えているのがそれだろう、ちがうかね、ウィンストン？」

ウィンストンは答えなかった。オブライエンはダイヤルのレバーを戻した。苦痛の波は、到来と同じくらいすぐに収まった。

「いまのが40だ。このダイヤルの数字が100まであるのが見えるね。私たちの会話を通じて、いつどの瞬間でも、どんな度合いでも、君に苦痛を与える力を持っているのを是非ともお忘れなく。何かウソをついたり、どんな形でもごまかそうとしたり、いつもの知性水準より低下しただけでも、君は即座に苦痛で絶叫することになる。わかったかね？」

「はい」とウィンストン。

オブライエンの態度が少し和らいだ。思慮深げにメガネをなおすと、一、二回行ったり来たりした。口を開いたとき、その声は優しく辛抱強かった。医者、教師、牧師の雰囲気さえもっていて、処罰するよりは説明して説得したいと思っているようだった。

「ウィンストン、君に手間を掛けているのは、それだけの価値があるからだ。自分のどこがいけないのか、君自身も十分に承知している。もうとっくの昔に知っていたのに、その知識に抗おうとしてきた。精神的に錯乱しているね。記憶の欠陥に苦しんでいる。現実のできごとを記憶できずに、起こりもしなかった他のできごとを記憶しているのだと自分を納得させている。幸運なことに、これは治療可能だ。自分でそれを治療しなかったのは、治療しない道を自ら選んだからだ。ほんのわずかな意志の努力を、君はやりたがらなかった。いまだに君が、自分の病気にしがみついて、それが何やら美徳だと思い込んでいるのはお見通しなんだよ。ここで例を挙げようか。いまこの瞬間、オセアニアはどの列強と戦争しているのかな？」

「逮捕されたとき、オセアニアはイースタシアと戦争をしていました」

「イースタシアとな。よろしい。そしてオセアニアは常にイースタシアと戦争していた、そうだな？」

ウィンストンは息を吸い込んだ。そしてしゃべろうと口を開いたが、しゃべらなかった。目をダイヤルから離せなかった。

「真実を頼むぞ、ウィンストン。君の真実だ。自分が覚えていると思うものを教えてくれ」

「逮捕されるたった一週間前までは、イースタシアなんかとは全然戦争していなかったのを覚えています。同盟関係にありました。戦争はユーラシアに対してのものでした。それが四年続いていました。その前は――」

オブライエンは手でそれを制した。

「別の例を。数年前に、君はかなり深刻な妄想を抱いていたね。三人の男、かつて党員だったジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードという三人――あり得る限り最も全面的な自白をして、裏切りと妨害工作で処刑された連中――が実はその咎められた罪状では無罪だったと信じていた。彼らの自白がウソだと証明する、紛う方なき文書証拠を見たと思っていただろう。何やら写真について幻覚を抱いていた。それを実際に手に持ったと信じていたな。何かこんな写真だったはずだ」

オブライエンの指の間に細長い新聞の切り抜きが登場した。五秒ほどだったか、それはウィンストンの視界の中にあつた。写真で、それが何の写真かは疑問の余地がなかった。あの写真だ。ジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードがニューヨークの党会議にいる写真で、かれが十一年前にたまたま手にしてすぐに破壊したものだった。一瞬だけとはいえ目の前にあり、それから視界から再び消えた。だが自分はそれを見た、疑問の余地なく見

た！彼は上半身を振りほどこうと、絶望的で苦悶に満ちた努力をした。どの方向にも一センチたりとも動けなかった。一瞬かれはダイヤルのことさえ忘れた。ただその写真を再び指に持つか、少なくとも見ただけだった。

「存在するんだ！」とかれは叫んだ。

「しない」とオブライエン。

彼は部屋を横切った。反対側の壁には記憶穴があった。オブライエンは格子を上げた。見えないところで、その弱々しい紙切れは、温かい空気の流れにのって漂い去っていった。炎一閃で消えうせようとしていた。オブライエンは壁から向き直った。

「灰。それとわかる灰ですらない。存在などしていない。存在したこともない」

「でも存在している！本当に存在する！記憶の中にある。私は覚えている。あなたも覚えている」

「私は覚えていないな」とオブライエン。

ウィンストンの心は沈んだ。あれは二重思考だ。死ぬほどの無力感をおぼえた。オブライエンがウソをついているのを確信できるなら、どうでも良かっただろう。だがオブライエンが本当に写真を忘れたことも充分にあり得た。そしてもしそうなら、それを覚えていたことを否定したのもすでに忘れてはいるはずで、忘れた行為も忘れただろう。それが単なる詐術だとうやうや確信できようか？キチガイじみた内心の断絶は本当に起こるのかもしれない。その考えにウィンストンは打ち負かされた。

オブライエンは思索するようにかれを見下ろしていた。いつになく、頑固ながらも有望な子どもに苦勞する教師の雰囲気をつたえていた。

「過去の支配について述べていた党のスローガンがあったな。繰り返していただけませんかね」

「過去を支配する者は未来を支配する。現在を支配する者が過去を支配する」とウィンストンは従順に暗唱した。

「現在を支配する者が過去を支配する」とオブライエンは、ゆっくりと承認するようにならずいた。「君の意見では、過去は本当の実在性があるものかね？」

またもや、無力感がウィンストンを襲った。目はチラチラとダイヤルを見た。苦痛から救ってくれる答が、「イエス」か「ノー」かわからなかった。自分がどっちの答を本当だと思っているかすらわからなかった。

オブライエンはかすかに微笑した。「ウィンストン、君は形而上学者ではない。この瞬間まで、存在とはどういう意味か考えたこともなかっただろう。もっと厳密に言おうか。過去は具体的に空間の中に存在するのかな？過去がまだ起きている、どこか別の場所、具体的な物体の世界があるのかな？」

「いいえ」

「では過去などあるなら、どこにあるんだね？」

「記録に。書かれています」

「記録か。それと――？」

「精神に。人間の記憶に」

「記憶と。なるほどね。我々党は、あらゆる記録を支配し、あらゆる記憶を支配する。では我々は過去を支配していることになる。ちがうかな？」

ウィンストンはまたもや、一瞬ダイヤルのことを忘れて叫んだ。「でも、人がものを記憶するのは止めようがないでしょう！非自発的に起こることです。自分の外です。記憶を

どう支配できるんですか？ 私の記憶は支配できてないでしょう！」

オブライエンの態度が再び厳しくなった。そしてダイヤルに手をかけた。

「話は逆で、それを支配できていないのは君なのだ。だからこそ君はここに来ることになった。君がここにいるのは、慎みと自己規律に失敗したからなのだよ。正気の代償である服従行為を行わなかった。狂人として、たった一人の少数派であるほうがいいと思った。現実を見ることができるのは、規律ある精神だけなのだよ、ウィンストン。君は現実が客観的で、外部にあり、それ自体として存在するものだと思っているね。また現実の性質は自明だと信じているな。自分をごまかして、何かを見ていると思ひ込んだら、他のみんなも自分と同じものを見ると想定している。だがウィンストン、教えてやるが、現実には外部にあるものではない。現実には人間の精神にあり、他のどこにもない。個人の精神ではないよ、個人はまちがいをするし、どのみちすぐに消え去るからな。党の精神だけにあるのだ。それは集合的で不滅だからだ。党が真実だとするものは、なんであれ真実なのだ。現実を見るには、党の目を通して見る以外は不可能なのだ。君が改めて学ばねばならない事実はそれなのだよ、ウィンストン。それには自己破壊行為、意志の努力が必要となる。正気になれるためには、謙虚にならねば」

かれはしばし間をおき、自分の発言が腹に落ちるのを待っているようだった。そして続けた。

「日記に、『自由とは、二足す二が四になると言う自由である』と書いたのを覚えているかな？」

「はい」とウィンストン。

オブライエンは左手を挙げ、手の甲をウィンストンに向けて、親指をかくし、残り四本の指を伸ばした。

「指は何本挙げているかな、ウィンストン？」

「四本」

「そして党が、四本ではなく五本だと言ったら——そうしたら何本だね？」

「四本」

その一言は苦痛のあえぎで終わった。ダイヤルの針が55に跳ね上がっていた。ウィンストンの全身から汗が噴き出た。空気が肺に爆発的に入り込み、深いうめき声となってまた吐かれ、歯を食いしばってもそれを止められなかった。オブライエンはそれを見ながら、四本の指をまだのぼし続けた。そしてレバーを戻した。今回は、苦痛はほんの少し軽減しただけだった。

「指は何本だね、ウィンストン？」

「四本」

針は60に上がった。

「指は何本だね、ウィンストン？」

「四！ 四！ 他にどう言えと？ 四本！」

針はまた上がったはずだが、目に入らなかった。重厚で謹厳な顔と四本の指が視界を満たした。指は柱のように目の前に屹立し、巨大でぼやけ、震えるようだったが、まちがいはなく四本だった。

「指は何本だね、ウィンストン？」

「四！ やめて、やめて！ ひどすぎる！ 四本！」

「指は何本だね、ウィンストン？」

「五本！五本！五本！」

「いや、ウィンストン。それではダメだ。ウソをついているね。まだ四本だと思っているだろう。さて、指は何本でしょうか？」

「四！　五！　四！なんでも好きなとおりに。とにかくやめて、痛いをやめて！」

いきなりかれは、身を起こして、オブライエンの腕が肩にまわされていた。数秒ほど意識を失ったのだろうか。身体をおさえつけていた拘束が緩められた。とても寒く、抑えようもなく震え、歯はカチカチ鳴り、涙が頬をつたい落ちていた。一瞬、オブライエンに赤ん坊のようにしがみついてしまった。肩にまわされた重い腕に不思議と慰められたのだ。オブライエンが自分の保護者であり、苦痛は何か外部から、別の源からきたもので、オブライエンは自分をそこから救ってくれたのだという気がした。

「飲み込みの悪い奴だなあ」とオブライエンが優しく言った。

ウィンストンは泣き出した。「どうしようもないでしょう。目の前にあるものを見ずにはいられないんですから。二足す二は四だ」

「そういうこともあるな、ウィンストン。だが五のときもある。三のときもある。ときには同時にそのすべてだ。もっと頑張れ。正気になるのは簡単ではないのだよ」

かれはウィンストンをベッドに横たえた。手足の拘束がまた強まったが、苦痛はひいて、身体の震えもとまり、単に無力で寒いだけとなった。オブライエンは白衣の男に頭で合図した。その男はこれまでのやりとりの間ずっと、微動だにせず立っていたのだった。白衣の男はかがんでウィンストンの目を細かく見て、脈を取り、胸に耳を当て、あちこちを叩いてからオブライエンにうなずいた。

「やり直し」とオブライエン。

苦痛がウィンストンの身体に流れ込んだ。針は70、75だろうか。今度は目を閉じていた。指がまだそこにあり、まだ四本だと知っていた。唯一大切なのは、けいれんが終わるまでなんとか生き延びることだ。自分が絶叫しているかどうかもわからなくなった。苦痛が再びひいた。目をあけた。オブライエンはレバーを戻して言った。

「指は何本だね、ウィンストン？」

「四本。四本あると思います。できれば五本みたい。五本見ようとしてるんです」

「五本見ていると私を説得したいのかね、それとも本当に五本見たいのか、どっちだい？」

「本当に見たいんです」

「やり直し」とオブライエン。

針は80だったか――90かも。ウィンストンはときどき、なぜこの苦痛が起きているかわからなくなった。イカれたまぶたの背後では、指の森が何やら踊りを展開し、折り重なって出たり入ったりして、お互いの後ろに隠れては再び現れた。それを数えようとしたが、理由は思い出せなかった。それを数えるのが不可能であり、それがなぜか、不思議なことに五と四が同じせいなのだ、ということだけわかっていた。苦痛はまたおさまった。目を再び開けると、また同じものが見えていた。無数の指が、動く木のように、いまだに四方八方へと流れており、交差してはまた重なり合う。ウィンストンは再び目を閉じた。

「指を何本挙げているかな、ウィンストン？」

「わかりません、わかりません。あれをまたやられたら死んでしまいます。四、五、六――ホント正直、わかんないんです」

「まあまあかな」とオブライエン。

針がウィンストンの腕に差し込まれた。ほとんどその瞬間に、至福のような、癒しのぬ

くもりが全身に広がった。苦痛はすでに忘れられかけた。目をあけて、感謝をこめてオブライエンを見た。重厚で皺だらけの顔、実に醜く実に知的なその顔を見て、心が躍るようだった。動けるものなら、手を差し伸べてオブライエンの腕に置いただろう。この瞬間ほどかれを深く愛したことはなかったし、それも単に苦痛を止めてくれたからだけではない。かつての気持、根底のところではオブライエンが敵か味方かはどうでもいいという気持が戻ってきた。オブライエンは話ができる相手なのだ。人は、愛されるよりもむしろ理解されたいのかもしれない。オブライエンは発狂寸前まで自分を拷問し、間もなくほぼ確実に、自分を殺すように命じる。それでも何も変わらない。友情よりもはるかに深いある意味で、二人は受刑者仲間なのだ。どこかしら、実際の言葉は決して交わされることがなくても、二人が会って話せる場所がある。オブライエンは、内心同じ思いかも知れないと示唆するような表情で見下ろしていた。そして口を開いたときにも、気安い会話調だった。

「ウィンストン、自分がどこにいるかわかるかい？」

「わかりません。見当はつきません。愛情省です」

「どのくらいここにいたかわかるかい？」

「わかりません。数日、数週間、数ヶ月——数ヶ月だと思います」

「そして、なぜ我々がみんなをここに連れてくると思慮するね？」

「自白させるためです」

「いいや、そんな理由じゃないよ。やり直し」

「処罰するため」

「ちがう！」とオブライエンは叫んだ。その声がすさまじく変わり、顔はいきなり謹厳でありながら生き活きとした。「ちがうぞ！単に自白を引き出すためなどではない、処罰するためでもない。なぜ君をここに連れてきたか教えてあげようか？君を治療するためだよ！正気にしてやるためだよ！わかるかウィンストン、この場所につれてきた人間は、だれ一人として治療されずに我々の手を逃れることなどない。君の犯したバカげた犯罪などに興味はない。党は明示的な行動などに興味はないのだよ。我々が気にするのは唯一、思考だ。我々は単に敵を破壊するだけではない。敵を変えるのだ。私の言っている意味が理解できるか？」

かれはウィンストンの上にかがみ込んでいた。その顔は間近なので巨大で、下から見上げると忌まわしいほど醜かった。それ以上に、その顔は一種の高揚感、狂気の力強さに満ちていた。またもやウィンストンの精神は縮み上がった。できることなら、寝台にさらに深く潜り込んだらう。オブライエンがただの悪意でダイヤルをひねるのだと確信した。だがこの瞬間、オブライエンは顔をそむけた。何度か行ったり来たりした。そして、熾烈さを少し弱めて続けた。

「まっ先に理解すべきなのは、ここには殉教者などいないということだ。過去の宗教迫害のことは読んだだろう。忠誠には異端審問があった。失敗だった。邪説を根絶やしにしようとしたが、かえってそれを永続させてしまった。火あぶりにした異端者一人ごとに、何千人もの異端者が湧き起こった。なぜだろうか？異端審問は敵を公開の場で殺し、まだ改悛しないうちに殺してしまったからだ。それどころか、改悛しないからこそ殺したんだ。人が死ぬのは、本当に信じているものを捨てないからだった。当然ながら、あらゆる栄光は被害者のものとなり、火あぶりにかけた側の異端審問官はすべての恥を受けた。後の二十世紀には全体主義者と呼ばれる連中がいた。ドイツのナチスやロシアの共産主義者だ。ロシア人たちは、異端者を異端審問よりも残虐に訴追した。そして、過去のまがい

から学んだつもりでいた。少なくとも、殉教者を作ってはいけないのは理解していた。被害者を公開裁判でさらしものにする前に、意図的にその尊厳を破壊しようとした。拷問と孤立により疲弊させ、やがて忌まわしい目を背けたくなるほどの惨めな存在にして、言われたとおりのことを何でも自白するようにしむけ、自分が権力を濫用し、責任をなすりつけては隠れようとし、慈悲を求めて哀願させた。それでもほんの数分たつと、同じ事がまた繰り返された。死人たちは殉教者となり、その失墜は忘れ去られた。またもや、なぜそうなったのだろうか？ そもそも、かれらの行った自白は脅されてのことで真実ではないのが明らかだったからだ。我々はその手のまがいはいはしない。ここで行われるあらゆる自白は本物なのだ。我々がそれを本物にする。そして何よりも、死者たちが我々に対して蜂起するなど許さない。後世が君の正しさを証明するなど想像するのは止めることだな、ウィンストン。後世は君のことなど決して知ることはない。君は歴史の流れからきれいさっぱり取りのぞかれる。気体にして成層圏に注ぎ込んでやる。何一つとして残らない。何か登録簿の名前としても、生きて脳みその記憶としてもね。過去においても未来においても同様に殲滅される。君は存在しなかったことになるのだ」

だったらなぜわざわざ拷問なんかするんだろう、とウィンストンは一瞬恨みがましく思った。オブライエンは、まるでウィンストンがその考えを口に出したかのように、歩き回るのを止めた。その巨大な醜い顔が接近し、目が少し細められた。

「こう思ってるんだろう。自分を完全に破壊し、言うこともやることも、これっぽっちのちがいですら生み出さないようにするつもりなら——なんだって我々は、まず君を尋問するような手間をかけるんだろうか、と。そう思っていたらどう。ちがうか？」

「そうです」とウィンストン。

オブライエンはかすかに微笑した。「君はパターンの中の欠陥なのだよ、ウィンストン。拭い去らねばならない染みだ。たった今、我々がかつての糾弾者たちとはちがうのだと話さなかったかな？ 我々は、嫌々ながらの服従だの、極度に卑屈な従属ですら満足できないのだ。君がついに我々に降伏するときには、自由意志でそうしてもらわねばならない。異端者を破壊するのは、抵抗するからではない。抵抗する限り、決して破壊はしない。転向させ、奥底の精神を捉え、たたき直すのだ。あらゆる邪悪と幻想を焼き払ってやる。我々の側に転向させる。それも形ばかりではなく、本当に、身も精神の本気で転向してもらうのだ。我々の一員にしてから殺すのだよ。この世のどこであれ、まちがった思考が存在することが、我々には耐えられないのだ。それがいかに秘密で無力であろうともね。死の瞬間でさえ、我々は一切逸脱は許容できない。かつての時代には、異端者ははりつけになるときですら、まだ異端者のままであり、その異端を宣言して勝ち誇ることができた。ロシア粛清の被害者たちですら、銃殺を待ちながら通路を歩きつつ、頭の中に反乱を秘蔵しておけた。だが我々は、頭をぶちぬく前にそれを完璧にするのだ。古くさい専制主義の命令は『汝、これをしてはならぬ』だった。全体主義者の命令は『汝、これをすべし』だ。我々の命令は『汝、こうであれ』なのだよ。

ここに連れてくる者は、決して我々にその後逆らうことはない、みんなきれいに洗われる。かつて無罪だと君が信じていた、哀れな裏切り者三人——ジョーンズ、アーロンソン、ラザフォード——最終的にはあいつらも打ち負かしてやった。あいつらの尋問にはこの私自身も参加したのだよ。彼らが次第に疲れ果て、泣き言をいい、這いずり、泣き——そして最後にはそれも苦痛や恐怖ではなく、罪を悔いて泣くようになっていた。やりきったときには、すでに抜け殻でしかなかった。自分たちのやったことに対する悲しみと、ピッ

グ・ブラザーへの愛以外は何も残っていなかった。その愛を見ると感動したものだよ。急いで射殺してくれ、精神がまだきれいなうちに死にたいから、と懇願したよ」

その声はほとんど夢見るようになった。高揚感、狂気の力強さがまだその顔には残っていた。これはお芝居ではない。かれは偽善者じゃない。自分の台詞を一言残らず信じてるんだ、とウィンストンは思った。最も苛まれるのは、自分自身の知的な劣等性だった。その重たいのに優雅な姿が行ったり来たり歩き回るのをながめ、視界を出たり入ったりするのを見た。オブライエンはあらゆる面で自分より大きな存在だった。自分の抱いた考え、抱ける考えで、オブライエンがしばらく前に知り、検討し、却下していないものなどないのだ。オブライエンの精神は、ウィンストンの精神を**包含している**のだ。だがもしそうなら、オブライエンが狂っているはずがあるだろうか？ 狂っているのは自分、ウィンストンでなければならない。オブライエンは立ち止まり、こちらを見下ろした。声がまた厳しくなっている。

「ウィンストン、どれほど完全に我々に降伏しても、助かるなどとは思わないよ。道を誤ったものはだれひとりとして見逃されない。そして、自然な生涯を終えさせる道を選んだとしても、我々からは決して逃れられないぞ。ここで君に起こることは永遠なのだ。それはあらかじめ理解しておくことだ。君を徹底的に押し潰し、二度と戻ってこられないようにしてやる。千年生きたとしても回復できないようなことがこれから起こる。君は二度と普通の人間感情を持ってない。君の内面はすべて死ぬ。二度と愛や友情、喜び、生活、笑い、好奇心、勇気、誠実さなどは持ってない。虚ろになる。君を空っぽに絞り出し、そこに我々自身を満たすのだ」

かれは口を止めて白衣の男に合図した。ウィンストンは、何か頭の後ろに重たい装置が押しやられてくるのに気がついた。オブライエンはベッドの横にすわり、顔がウィンストンとほとんど並ぶようにした。

「三千」とかれはウィンストンの頭越しに、白衣の男に告げた。

柔らかいパッドが二つ、少し湿っている感じで、それがウィンストンのこめかみをはさんだ。彼はひるんだ。苦痛がやってくる。ちがう種類の苦痛だ。オブライエンはなだめるように、ほとんど優しく、こちらに手を重ねた。

「今回は痛くない。私の目から目をそらすなよ」

この瞬間、壮絶な爆発が起きた、というか爆発のように思えるものが生じたが、何か音がしたかどうかははっきりしなかった。まじがもなく、目もくらむ閃光はあった。苦痛は感じず、打ちのめされただけだった。それが起きたときにはすでに横たわっていたのに、自分が殴り倒されてその姿勢になったという奇妙な感覚があった。すさまじい無痛の一撃がウィンストンをしてしまったのだ。また頭の中でも何か起きた。目の焦点があってくると、自分がだれで、ここがどこかは思い出し、のぞき込んでいる顔の人物も見分けがついた。だがどこかしら、何か大きな空白があり、まるで脳の一部が取りのぞかれたような気分だった。

「すぐにおさまる。私の目を見ろ。オセアニアはどの国と戦争をしているのかな？」

ウィンストンは考えた。オセアニアの意味はわかり、自分がオセアニア市民なのも知っていた。またユーラシアとイースタシアというのも記憶にあった。だが、だれがだれと戦争しているのかは、知らなかった。それどころか、何か戦争が起きていることさえ知らなかった。

「わかりません」

「オセアニアはイースタシアと戦争している。思い出したか？」

「はい」

「オセアニアはずっとイースタシアと戦争をしていた。君が生まれたときから、党の始まりから、歴史の始まり以来、戦争は絶え間なく続き、常に同じ戦争だった。思い出したか？」

「はい」

「十一年前に、裏切りで死罪となった三人の男についてお話を作り上げたね。かれらの無罪を証明する紙切れを見たというふりをした。そんな紙切れは存在しなかった。君がそれをでっちあげ、後にそれを信じ込んでしまった。思い出したかな？」

「はい」

「ついさっき、手の指を掲げてみせたな。指が五本見えたな。覚えているか？」

「はい」

オブライエンは左手の指をあげ、親指だけ隠した。

「ほら、五本の指がある。指が五本見えるか？」

「はい」

そして確かに、ほんの一瞬、精神風景が変わる前にそれが見えた。指が五本見えたし、そこに何の歪みもなかった。そしてすべてが平常に戻り、かつての恐怖、憎悪、今作が再び押し寄せて戻ってきた。だがほんの一瞬——それがどのくらい続いたのか、せいぜい三十秒だろうか——まばゆいほどはっきりと、オブライエンが何かを示唆するたびに、それが空白の一角を埋めて、絶対的な真実となり、二足す二が必要とあらば五でも三にでもなれたのだった。その瞬間はオブライエンが手を下ろす前に薄れた。だが再びとらえることはできなくても、思い出すことはできた。人生のどこかの時点で、自分が実質的にちがう人間だったという鮮明な体験を思い出せるように。

「とにかくそれが可能だということは、いまやわかったね」とオブライエン。

「はい」とウィンストン。

オブライエンは満足げな様子で立ち上がった。左手で、白衣の男がアンプルを折り、注射器のプランジャーを引き上げるのが見えた。オブライエンはにっこりしてウィンストンに向き直った。ほとんど昔と同じやり方で、彼は鼻の上のメガネを調整した。

「覚えているかな、君は日記にこう書いただろう。私が味方でも敵でも関係ない、少なくとも私は君を理解する人間であり、話ができる、とね。その通りだ。君と話すのは楽しい。君の精神には惹かれる。私の精神に似ているよ。ただし君のほうは狂っているのだが。このセッションを終える前に、そうしたければいくつか質問をしてくれてもいいぞ」

「どんな質問でも？」

「何でも」そう言いつつかれは、ウィンストンの目がダイヤルを見ているのに気がついた。「切っただけ。最初の質問は？」

「ジュリアには何をしたんです？」

オブライエンはまたニッコリした。「君を裏切ったよ、ウィンストン。即座に——何のためらいもなく。あれほどすぐに寝返る人間にはめったにお目にかかれぬ。いま彼女を見ても、ほとんど彼女だとはわからないはずだ。あの反逆精神、欺瞞、愚行、淫らさ——すべてが焼き尽くされた。教科書的な完全な改修だった」

「拷問したんですか？」

オブライエンは答えなかった。「次の質問」

「ビッグ・ブラザーは存在するんですか？」

「もちろん存在する。党は存在する。ビッグ・ブラザーは党を体現しているのだ」

「私が存在するのと同じように存在するんですか？」

「君は存在していない」とオブライエン。

再び無力感に襲われた。自分の非存在を証明する議論はわかっていたか、少なくとも想像できた。だがそれはナンセンスでありことば遊びでしかない。「君は存在していない」という命題は論理的な馬鹿らしさを含んではいないだろうか？ だがそれを言ってどうなる？ 自分を粉碎するのにオブライエンが使う、答えようのないイカれた議論を考えると心が縮んだ。

ウィンストンは恐る恐る言った。「自分は存在していると思います。自分のアイデンティティが意識できる。生まれて、いずれ死ぬ。腕や脚がある。空間のある特定の点を占めている。他の固体は、同じ点を同時に占めることはできない。その意味でビッグ・ブラザーは存在するんですか？」

「どうでもいい話だ。存在する」

「ビッグ・ブラザーが死ぬことはありますか？」

「まさか。死ぬわけがないだろう？ 次の質問」

「友愛団は実在しますか？」

「ウィンストンくん、それは君には決してわからん。君の処置が終わって解放してやって、君がその後九十歳になっても、その質問の答がイエスかノーかは決してわからない。死ぬまでそれは君の頭の中で、未解決の謎になるのだよ」

ウィンストンは静かに横たわっていた。胸が少し早めに上がり下がりした。まっ先に頭に浮かんだ質問をまだ尋ねていなかった。絶対尋ねなくてはならないのに、舌はそれを発してくれないかのようなようだった。オブライエンの顔にかすかに面白がる様子が浮かんだ。そのメガネさえ皮肉な輝きを放つようだった。こいつは知ってるんだ、とウィンストンはいきなり思った。おれが何をきくか知ってるんだ！ そう思った瞬間、ことばが飛びだした。

「101号室には何があるんですか？」

オブライエンの表情は変わらなかった。彼は淡々と答えた。

「101号室に何があるか、君は知っているのだよ、ウィンストン。みんな101号室に何があるかは知っているんだ」

彼は白衣の男に指をあげた。どうやらこのセッションは終わりだった。ウィンストンの腕に針が突き刺さった。かれはほぼ即座に深い眠りに落ちた。

第3章

「君の再統合には三段階ある。学習、理解、受容だ。二段階目に入るときがきた」とオブライエン。

いつもながら、ウィンストンは仰向けに寝かされていた。だが最近では拘束が弱まっていた。まだ拘束はされていたが、ひざは少し動かせるし、頭も左右に動かせて、腕も肘から先は動かせた。ダイヤルも、以前ほど恐ろしくはなくなった。すばやく機転をきかせれば、その痛みは避けられた。オブライエンがレバーを引くのは、主に愚かさを示したときだった。ときにはセッション丸ごと、ダイヤルなしで切り抜けることもあった。セッションがこれまで何回あったか思い出せなかった。このプロセス全体が、長く果てしない時間にわたり——おそらく何週間——展開するようで、セッションの間の時間は数日かかもしれず、ときにはたった一、二時間だった。

オブライエンは言った。「そこに横になりつつ、君はしばしば不思議に思ったね——実際に私に尋ねたこともある——なぜ愛情省は自分にこれほどの手間暇をかけるのか、と。そして自由だったときにも、基本的には同じ疑問で首を傾げたな。自分の生きる社会の仕組みはわかるが、その根底にある動機がわからない、と。日記に書いたのを覚えているかね。『方法はわかる。理由がわからない』。君が己の正気を疑ったのは、その理由を考えたときのことだった。あの本、ゴールドスタインの本を読んだね、少なくともその一部は。すでに君が知らなかったことを一つでも教えてくれたか？」

「読んだんですか？」とウィンストン。

「私を書いたのだよ。というか、書くのを手伝った。どんな本も個人が生み出すものではない、ご存じの通り」

「あれは本当なんですか、あの中身は？」

「記述としては、本当だ。そこで述べられた計画はナンセンスだ。知識の秘密の蓄積——啓蒙のゆっくりとした拡大——最終的にはプロレタリア革命——党の打倒。そういう話が書かれているのは、君自身が予想したはずだな。すべてナンセンスだ。プロレタリアたちは決して反逆などしない。千年たとうが百万年たとうが。反逆できないのだ。理由は教えるまでもないだろう。すでに知っているはずだ。暴力的な蜂起の夢を少しでも抱いたことがあるなら、捨てて欲しい。党が打倒される方法はある得ない。党の支配は永遠なのだ。それを思考の出発点にしろなさい」

かれはベッドに近づいて繰り返した。「永遠だぞ！ さてそれでは、『方法』と『理由』の問題に戻ろうか。党が己の権力を維持する『方法』は君も十分に承知しているな。では我々が権力にしがみつくと『理由』をいってみなさい。我々の動機はなんだ？ なぜ権力などほしががる？ さあ、言ってごらん」と、黙っているウィンストンを見てかれは付け加えた。

それでもウィンストンは、まだしばらくは口を開けなかった。やるせなさに圧倒された

のだ。オブライエンの顔に、イカレたかすかな熱意の輝きが戻っていた。すでにオブライエンが何を言うかわかっていた。党は自分のために権力を追求するのではなく、多数派のためによかれと思っているだけなのだ、と。権力を求めるのは、大衆が弱く、臆病な生き物たちで、自由に耐えられず真実にも直面できないからだ。だからもっと強い者たちにより、支配されて系統的に騙されねばならないのだ。人類の選択は自由か幸福かということであり、人類の大半にとっては、幸福のほうがいいのだ。党は弱者の永遠の保護者であり、よいことが起こるように邪悪なことを行う献身的なセクトであり、己の幸福を他人たちのために犠牲にしているのだ。オブライエンはそう言うだろう。ひどいことだが、とウィンストンは思った。ひどいことだが、オブライエンがそう言ったら、自分はそれを信じるだろう。顔を見ればわかった。オブライエンはすべてを知っている。ウィンストンの千倍も世界の本当の姿を知っているし、人間の大半がどれほどひどい暮らしをしていて。どんなウソと蛮行により党が彼らをそこに押し込めているかも知っていた。かれはそのすべてを理解し、すべてをてんびんにかけ、それでも何のちがいもない。すべては最終目的により正当化される。自分より賢く、自分の議論をしっかりと聞いてくれたうえで、あっさりとした狂気にこだわる狂人相手に、何ができるというんだ？

彼は弱々しく言った。「あなた方は、私たち自身のために思って支配してくれているんです。あなたたちは、人間が自分を統治するだけの能力がないと思い、よって――」

彼はハッとしてほとんど泣き叫んだ。苦痛の衝撃が全身を貫いた。オブライエンがダイヤルのレバーを35まで押し上げたのだ。

「いまは愚かだったぞ、ウィンストン。愚かきわまる！ あんなことを言うとは呆れたものだ」

彼はレバーを戻して続けた。

「では自分の質問に対する答を教えてあげよう。次の通りだ。党は権力を完全にそれ自体のために追い求める。我々は他人のよしあしなどに興味はない。権力だけに興味があるのだ。富でもぜいたくでも長命でも幸福でもない。権力だけ、純粋な権力。純粋な権力がどういう意味かはすぐわかる。我々は過去の寡頭支配者たちすべてとはちがうのだよ、自分が何をしているかわかっているという点でね。他の連中、我々と似たところもあった連中ですら、臆病な偽善者どもだった。ドイツのナチスやロシアの共産主義者どもは、手法面では我々はかなり近いところまで来たが、自分の動機を認識するだけの勇氣はついで持ち得なかった。自分たちが権力を握ったのは、嫌々ながらであり、限られた期間だけのことであって、すぐそこには人類が自由で平等となる天国が待っているのだ、というふりをした。いや自分でも本気でそう信じていたかもしれない。我々はそんなのはちがう。権力を握る者で、それを手放すつもりがあるやつなどいないのは知っている。権力は手段ではない。目的なのだよ。独裁制を確立するのは、革命を安全に守るためではない。独裁制を確立するために革命を起こすのだ。訴追の目的は訴追だ。拷問の目的は拷問だ。権力の目的は権力だ。そろそろわかってきたか？」

ウィンストンは、以前と同じく、オブライエンの顔がくたびれているのにハッとした。力強く肉付きがよく荒々しく、知性と一種の統制された情熱を持ち、その前でウィンストンは無力に感じてしまう。だがくたびれていた。目の下はたるんでおり、頬骨からの皮膚が垂れ下がっている。オブライエンはかれの上に身を乗り出し、わざとくたびれた顔を近くに寄せた。

「私の顔が、老いてくたびれていると思っているんだろう。権力の話をするくせに、自

分自身の肉体の衰えを防ぐことさえできないかないか、と知っているな。わからんのか、ウィンストン。個人はただの細胞でしかないのだよ。細胞の衰えは組織の活力なのだ。君は爪を切ったら死ぬのか？」

彼はベッドに背を向けて、片手をポケットに突っ込んで、再び行ったり来たりを始めた。

「我々は権力の司祭なのだよ。神は権力である。だが現在では、権力というのは君についてのみ関係する言葉だ。そろそろ君も、権力とは何か少し考えをまとめたまえ。まっ先に認識すべきなのは、権力は集合的だということだ。個人が権力を持つのは、個人でなくなる限りにおいてだけだ。党のスローガン『自由は隷属』を知っているな？これがひっくり返せると気がついたことはあるか？隷属は自由なのだ。孤独——自由——なら人間は常に敗北する。これは必然なのだよ。というのもあらゆる人間は死ぬ運命にあり、死こそは最大の失敗だからだ。だが完全かつ全面的な従属ができれば、己のアイデンティティから逃れられたら、己を党に融合させ、自分がまさに党になれば、その者は全能で不死になる。二番目に認識すべきなのは、権力というのは人間に対する権力だということだ。肉体に対して——だが、何よりも精神に対して行使されるのだ。物質——君なら外的現実とも呼ぶかな——に対する力など、重要ではない。すでに我々の物質に対する支配は絶対的なものだから」

一瞬ウィンストンはダイヤルを無視した。激しく上半身を起こしてすわろうとしたが、痛々しく身体をよじるのに成功しただけだった。

「でも物質なんか支配できないでしょう！気候も重力の法則も支配できないのに。それに病気、苦痛、死も——」

オブライエンは手の一振りであれを黙らせた。「我々は精神を支配しているから、物質を支配している。現実には頭蓋骨の中にある。君もだんだんわかるだろう、ウィンストン。我々にできないことはない。透明、空中浮遊——なんでも。やりたければ、この床からシャボン玉のように浮かび上がれる。やりたいと思わないのは、党がそれを望まないからだ。自然法則についてのその19世紀的発想は捨てたまえ。自然法則を作るのは我々なのだ」

「何を言ってるんですか！この惑星の支配者ですらないのに。ユーラシアとイースタシアはどうなんですか？まだ征服していないでしょうに」

「どうでもいいことだ。気が向けば征服する。征服しなくても、それがどうした？彼らを存在から閉め出せる。オセアニアが世界なのだ」

「でも世界そのものだって、チリのひとかけらでしかないでしょう。そして人間は小さい——寄る辺ない！存在してからどれだけ経つというんですか。何百万年にもわたり、地球に人はいなかったでしょう」

「ばかばかしい。地球は我々と同じ古さで、それ以上ではない。それより古いはずがないだろう。人間意識を通じなければ何も存在できないのだ」

「でも岩は絶滅した動物の骨だらけじゃありませんか——マンモスやマストドンや巨大な爬虫類、人間など影も形もなかったはるか以前にここに暮らしていた動物が」

「ウィンストン、君はその骨を見たことがあるのか？あるわけがない。十九世紀の生物学者どもの捏造だ。人間以前には何もなかった。人間以後、といってももし人間が終わるとすればだが、何もなくなる。人間以外には何も無い」

「でも宇宙まるごと私たちの外にあるでしょう。星をご覧なさい！何百万光年も離れたものさえある。決して私たちの手には届かない」

オブライエンは興味を示さなかった。「星って何だね？ 数キロ先で燃えている火のかけらだ。その気になればどっつける。あるいは消し去れる。宇宙の中心は地球だ。太陽や星はそのまわりを回る」

ウィンストンはまたもけいれん状の動きをした。今回は何も言わなかった。オブライエンは、まるで口に出した反論があったかのように続けた。

「もちろん目的次第では、それは正しくない。航海のときや蝕を予測するときには、地球が太陽のまわりを周り、星々は何百万キロも離れていると想定するほうが便利な場合もある。だがそれがどうした？ 天文学の二重の体系を生み出すくらい、我々の手に負えないとでも思うのかね？ 星は我々の必要に応じて、近くも遠くもなる。うちの数学者たちにそれができないとでも？ 二重思考を忘れたか？」

ウィンストンはしゅんとなって、ベッドの上に戻った。何を言っても、すばやい答に棍棒のように潰される。だがそれでも、かれは知っていた。確信していた。自分のほうが正しいのだ。自分の精神の外には何も存在しないという信念——それがウソだと実証する方法が何かあるはずでは？ それを指す名前さえあったが、思い出せなかった。見下ろすオブライエンの口の端を、かすかな微笑が歪めた。

「言ったはずだがな、ウィンストン。君は形而上学向きではない。君が思い出そうとしている言葉は唯我論だ。だがまちがっているぞ。これは唯我論ではない。お望みなら、集合的唯我論でもいい。だがそれとは別物だ。というか正反対だ。だがこんなのはすべて余談だ」とかれは、まったく別の口調で付け加えた。「真の力、それを得るため日夜戦わねばならない力は、物に対する力ではなく、人間に対する力なのだ」。彼は口を止め、そして一瞬、有望な生徒に問題を出す学校教師の雰囲気を再び示した。「人間が別の人間に力を行使する方法は、ウィンストン？」

ウィンストンは考えた。「苦しめることです」

「その通り。苦しめるのだ。服従だけでは不十分。苦しんでいなければ、そいつがこちらの意志に服従しているのであって、自分の意志に従っているのではないと確信できない。力とは、苦痛と恥辱を押しつけるということだ。力とは人の精神を粉々にして、こちらの選ぶ新しい形にまとめなおすことだ。我々が創り出そうとしている世界がどんなものか、だんだんわかってきたか？ 古い改革者たちが想像した、バカげた快樂主義的なユートピアの正反対なのだ。恐怖と詐術と苦しみの世界、踏みにじり、踏みにじられる世界、洗練されるにつれて冷酷さが減るどころか**増す**世界。我々の世界における進歩は、より多くの苦痛に向けた進歩である。古い文明は、愛や正義に基づいていると主張した。我々の文明は憎悪に基づく。我々の世界では、恐怖、怒り、勝ち誇り、自己卑下以外の感情はない。その他すべてを我々は破壊する——すべてを。すでに我々は、革命前から生き残ってきた思考習慣を破壊しつつある。子どもと親の絆を断ち切り、男同志、男と女の絆も断ち切った。もはやだれも決して、妻も子どもも友人も信用しない。だが将来には、妻も友人もなくなる。子どもは生まれた瞬間に母親から取り上げられる。卵がニワトリから取り上げられるようなものだ。性本能は駆除される。再生産は配給カードの更新のような、年次の形式手順となる。オルガズムを廃止する。すでに神経学者がその作業を進めている。党への忠誠心以外の忠誠はなくなる。ビッグ・ブラザーへの愛以外に愛はなくなる。負かした敵に対する勝利の笑い以外の笑いもなくなる。芸術、文学、科学もなくなる。我々が全能になれば科学の必要はもはやなくなる。美醜の差はなくなる。好奇心、人生のプロセスの楽しみもなくなる。競合する喜びはすべて破壊される。だが常に——忘れるなよ、ウィン

トニー—常に権力の陶醉があり、耐えずそれが増え、耐えずそれが巧妙になる。常に、あらゆる瞬間に、勝利のスリルがあり、無力な敵を踏みこむ快感があるのだ。未来の様子がほしければ、人間の顔を踏みこむブーツを想像してごらん—しかも永遠に踏みこみ続けるのだ」

まるでウィンストンが何か言うのを期待したかのように、オブライエンはそこで口を止めた。ウィンストンは寝台の上にまた元通り縮こまろうとしていた。何も言えなかった。心は凍り付いたようだった。オブライエンは続けた。

「そして忘れるな、それは永遠に続く。いつだって踏みこまれる顔は存在し続ける。邪説者、社会の敵は常に存在し続ける。何度でも打倒され、屈辱を味わわせるためだ。我々の手中に落ちてから君が被ってきたものすべて—そのすべては続く。しかももっとひどい形で。スパイ、裏切り、逮捕、拷問、処刑、消失は決して終わらない。それは勝利の世界と同じくらい恐怖の世界となるのだ。党は強力になるほど、寛容ではなくなる。反対が弱まるほど、圧政は強まる。ゴールドスタインとその邪説信奉者は永遠に生きる。毎日、あらゆる瞬間に、彼らは打ち倒され、否定され、バカにされ、唾棄され、それでも常に生き延びる。私がこの七年をかけて君に仕掛けてきたドラマは、何度も何度も、世代ごとに展開されるが、ますますその形は巧妙となる。常に我々はここに邪説者を連れてきて手も足も出ない状態にさせ、苦痛で絶叫させ、打ちのめされ、浅ましい存在に変えさせる—そしてそいつは最後には完全に改悛し、自分自身から救われ、自分の意志で我々の足下に這いつくばる。これが我々の整えている世界なのだよ、ウィンストン。戦勝に次ぐ戦勝の世界、勝利に次ぐ勝利に次ぐ勝利。権力を果てしなく神経に強い、強い、強い続ける。その世界がどんなものになるか、君が気がつきはじめてるのがわかるぞ。だが最後には、理解するだけでは終わらない。それを受け入れ、歓迎し、その一部となるんだ」

ウィンストンは、しゃべれる程度には回復していた。「無理だ！」とかれは弱々しく言った。

「いまの台詞はどういう意味だ、ウィンストン？」

「いま表現されたような世界は作れない。そんなのは夢だ。不可能だ」

「なぜ？」

「恐怖と憎悪と残虐に基づいた文明なんか不可能だ。決して長続きしない」

「なぜ？」

「活力が持てない。解体してしまう。社会が自殺する」

「ばかばかしい。憎悪のほうが愛よりも疲れると思っているな。なぜだ？そしてそうだとすると、それで何が変わる？早めに衰弱する道を選んだとしよう。人生のテンポを速めて、三十歳で老衰するようにしたとしよう。だがそれでも、何が変わるというのだね？個人の死は死ではないのがわからんのか？党は不死なのだよ」

いつもながら、その声に打ちのめされ、ウィンストンは無力になった。さらに、この異論にこだわり続ければ、オブライエンはまたあのダイヤルをひねると思いゾツとした。だがそれでも、黙っていられなかった。弱々しく、理屈もなく、オブライエンが言ったことに対する、曰く言いがたい恐怖以外に何も裏付けを持たず、彼は攻撃に戻った。

「わからない—どうでもいい。とにかく倒れる。何かがあんたたちを倒す。生命があんたらを倒す」

「ウィンストン、あらゆる水準で生命を支配するのは我々だ。君は、我々のやることに怒って刃向かう、人間性なるものがあると空想しているな。だが人間性は我々が創り出

す。人間は果てしなく変化させられるのだよ。それとも、プロレタリアや奴隷が蜂起して我々を倒すという昔の考えに逆戻りしたのかな。そんな考えは追い払うことだ。あの連中はどうしようもなく、動物同然だ。人間性とは党なのだよ。それ以外は外部だ——無関係なのだ」

「知るもんか。最後にはかれらがあんたらを打ち負かす。遅かれ早かれ、あんたらの正体を見抜き、粉々に引き裂くんだ」

「それが起きているという証拠が少しでもあるのか？ あるいは起こるべき理由でも？」

「ない。そう信じてるんだ。あんたらが倒れるとわかるんだ。宇宙にある何か——なんだろう、精霊とか原理とか——あんたが絶対に克服できないものがある」

「神は信じるかね、ウィンストン」

「いいや」

「では何なんだ、その我々を倒すとかいう原理は」

「知らない。人間の精神」

「で、君は人間のつもりか？」

「そうだ」

「君が人間なら、最後の人間だよ、ウィンストン。お前のような連中は絶滅した。我々がその後継者だ。自分がたった一人なのを分かっているのか？ お前は歴史の外にいる。存在しないんだ」

その態度が変わって言い方も厳しくなった。

「そしてお前は、我々より道徳的に優れているつもりなんだな、我々のウソや残虐性よりも」

「ああ、自分のほうが優れているつもりだ」

オブライエンは何も言わなかった。別の声二つがしゃべっていた。しばらくしたウィンストンは、片方が自分だと気がついた。友愛団に志願した夜にオブライエンと行った会話の録音だった。自分がウソをつき、盗み、偽造し、殺し、ドラッグと売春を奨励し、性病を広め、子どもの顔に酸を投げつけると約束しているのが聞こえた。オブライエンはかすかに苛立つような身ぶりをした。おまえのポーズなど笑止とでも言うようだった。かれがスイッチを回すと声はとまった。

「寝床から立て」

拘束が弱められていた。ウィンストンは床に足を下ろして、ヨロヨロと立ち上がった。

「お前は最後の人間だ。お前は人間精神の守護者だ。お前はありのままの自分を見ることになる。服を脱げ」

ウィンストンは、オーバーオールを止めているひもの切れ端をほどいた。ジッパーはとっくの昔にむしり取られていたのだ。逮捕されてから、服をすべてまとめて脱いだことが一度でもあったか思い出せなかった。オーバーオールの下、身体には汚い黄ばんだぼろきれの輪がぶら下がり、それが下着の残骸だとうやくわかった。それを床にすべり落とすと、部屋の奥に三面鏡があるのが見えた。それに近づき、途中で足を止めた。思わず叫び声が漏れた。

「止まるな。左右の鏡の間に建つんだ。横姿も見られる」とオブライエン。

立ち止まったのは、恐かったからだ。背の曲がった、灰色の、骸骨のようなものがこちらに向かってきたのだ。その外見そのものが恐ろしく、単にそれが自分自身だとわかるからというだけではなかった。彼は鏡に近づいた。その生き物の顔は、背中が曲がっている

ために突き出して見えた。惨めな囚人の顔で、でかいおでこがハゲた頭皮へと続き、鼻はまがり、頬骨はポロポロで、その上の目は恐ろしげでキョロキョロしている。頬はしわだらけで、口は引っ込んだ感じだ。確かに自分の顔だが、内面の変化よりも変わり方がひどいように思えた。それが示す感情は、内面で感じているものとはちがう。ハゲかけていた。最初、自分が白髪まじりにもなったのかと思ったが、灰色なのは頭皮だけだった。手と顔の円周以外、全身が灰色で古いこびりついた汚物だらけだ。あちこち汚物の下には赤い傷痕があり、足首近くでは静脈瘤の腫瘍が炎症のかたまりとなり、肌のかげらがポロポロ剥がれている。だが本当に恐かったのは、身体の憔悴ぶりだった。あばら骨の周囲は骸骨のように狭かった。脚は縮んで膝が腿よりも太い。オブライエンが、横からの姿を見ると言った意味もわかった。背骨の曲がり具合は驚くほどだった。細い肩は前かがみになって、胸がへこみ、ガリガリの首は頭蓋骨の重みで曲がりそうだった。尋ねられたら、これは60歳の男の身体で、しかも悪性の病気にかかっていると言っただろう。

「ときどき、私の顔——党中心の一員の顔——が老いてくたびれていると思ったな。自分の顔をどう思う？」

かれはウィンストンの肩を掴んで回転させ、自分と対面させた。

「自分の状態を見るがいい！ この身体中の汚い垢を見ろ。足指の間の汚物を見ろ。脚のジクジクしたズツとする傷を見ろ。知ってるか、ヤギ並に臭いぞ。たぶんそんなことを気にもしなくなってるんだろう。自分のやつれっぷりを見ろ。わかるか？ この親指と人差し指でお前の上腕のまわりに輪っかを作れるだろう。お前の首なんかニンジンのように折れる。我々の手に渡ってから体重が二十五キロも減ったんだぞ。髪の毛だっごっそりぬけるぞ。ほら見ろ！」とウィンストンの頭を掴むと、髪の毛がその手に残った。

「口を開ける、歯は九、十、十一本しか残っていない。ここにきたときには何本あった？ それに残った数少ない歯も抜け落ちつつあるぞ。見ろ！」

かれはウィンストンの残った前歯を、強力な親指と人差し指でつまんだ。ウィンストンのあごに激痛が走った。オブライエンがぐらぐらの歯を根っこからむしり取ったのだった。それを監房の向こうに投げた。

「腐りかけているじゃないか。バラバラになりつつある。お前は何だ？ 汚物の塊だ。さあ振り向いて、また鏡を見てみる。向かいのそれが目に入るか？ それが最後の人間だ。お前が人間なら、それが人間性だ。さあ服を着ろ」

ウィンストンは、のろく硬直した動きで服を着始めた。いままで自分がいかに痩せて弱っているか気がつかなかっただけ。頭の中で蠢く考えは一つだけ。思ったよりここには長くいたらしい、ということだった。そしていきなり、惨めなぼろきれを身にまといつつ、ポロポロにされた身体へが可哀想でたまらなくなった。我知らず、彼はヘナヘナとベッド脇にあった小さなスツールにすわりこみ、泣き出した。自分の醜さ、みっともなさを思い知った。汚い下着に包まれた骨のかたまりが、きつい白光の中ですわって泣いている。だが抑えられなかった。オブライエンが、ほとんど優しく肩に手を置いた。

「いつまでもは続かんよ。自分の好きなききに逃れられる。すべては君自身次第だ」

ウィンストンはすすり泣いた。「あんたがやったんだ！ あんたがこんな状態に貶めたんだ」

「いやウィンストン。君自身が自分を貶めたんだ。己を党に刃向かわせたときに、君はこれを受け入れた。その最初の行動にすべて含まれていた。君が予見しなかったことは何も起きていない」

かれは口を切り、そして続けた。

「我々は君を負かしたんだ、ウィンストン。君を破壊してやった。自分の身体がどんな具合か見ただろう。精神も同じ状態だ。大したプライドが残る余地があるとは思えないがな。蹴られ、殴られ、侮辱され、苦痛に叫び、自分の血とゲロの中で床を転げ回った。慈悲を求めて哀れっぽく懇願した。あらゆる人、あらゆる者を裏切った。自分に起きていない墮落が一つでもあるかね？」

ウィンストンはすすり泣くのをやめたが、涙はまだ目から流れ続けていた。かれはオブライエンを見上げた。

「ジュリアは裏切っていない」

オブライエンは思慮深げに見下ろした。「そうだな。確かに。それはまったくそのとおり。君はジュリアを裏切っていない」

オブライエンに対する特異な畏敬、何物も破壊できないらしいあの感情が、再びウィンストンの頭を満たした。なんと知的、なんと知的なんだろう！オブライエンは一度たりとも、言われたことを理解できなかったことはない。この世の他のだれでも、おまえはジュリアを実は裏切っているぞと即座に答えたことだろう。というのも、やつらが拷問下で言わせていないことなど、何も無いではないか？彼女について知っていることすべて、そのクセ、人格、過去の生活をすでにしゃべっていた。逢瀬で起きた極度につまらない細部まで自白し、自分が彼女に言ったこと、彼女が自分に言ったこと、闇市場の食事、不倫、党に対する漠然とした陰謀も自白した——何もかも。だがそれでも、自分の意図したその言葉の意味においては、ウィンストンはジュリアを裏切っていなかった。愛するのをやめていなかった。彼女に対する気持は変わらなかった。オブライエンは説明するまでもなく、言いたいことを理解してくれた。

「教えて下さい。いつになったら射殺されるんですか？」

オブライエンは言った。「いつになるやら。君の症例は手強い。だが希望を捨てるな。みんな遅かれ早かれ治る。最終的には射殺してあげよう」

第4章

ずっとよくなった。毎日太り、力も戻ってきた。日というのが適切かどうかはわからなかったが。

白光とハム音は相変わらずだったが、監房はこれまで入れられたものより、少し快適になった。板寝床には枕とマットレスがあり、すわれるスツールもあった。風呂にも入れてくれて、ブリキの流し台でかなりしょっちゅう身体を洗うことも許された。洗うためのお湯さえくれた。新しい下着と、新しいオーバーオールもくれた。静脈瘤になにかスーッとする軟膏が塗られた。残った歯を抜いて、新しい入れ歯一式をくれた。

何週間、何ヵ月もたったはずだ。いまや定期的に食事が与えられているようなので、多少なりともそうしたければ、時間の経過を数えることもできただろう。どうやら二十四時間で三回食事が与えられているらしい。ときにはぼんやりと、食事が出るのは夜間か日中かと考えた。おどろくほど良質の食事で、三度に一度は肉が出る。あるときなど、タバコが一箱もらえた。マッチはなかったが、食事を持ってくる何も言わない看守が火をつけてくれる。最初に喫煙しようとしたら気分が悪くなったが、我慢して、その一箱をずいぶん長持ちさせた。食事ごとに、タバコ一本の半分を吸うのだ。

白い石板までくれた。角に鉛筆が縛ってある。最初は使いもしなかった。起きていても完全に不活発だったのだ。しばしば、食事から次の食事まで身動きさえせずに横たわり、時にはずっと寝て、ときには起きていてもいろいろ空想にふけり、目を開けるのも面倒だった。強い光が当たっている中で寝るのには、とっくに慣れていた。何のちがいないようだが、夢にもっと一貫性が出た。この期間にはやたらに夢を見て、それが常に幸福な夢だった。黄金の国にいたり、お母さん、ジュリア、オブライエンと、巨大で壮大で日に照らされた廃墟の中にすわっていたりする——何もせず、単に日差しの中にすわり、平和なことを話していた。起きているときの考えは、ほとんど自分の夢についてだった。苦痛の刺激がなくなっただけ、知的な努力の力を失ったようだった。退屈はせず、会話や気晴らしの欲求もなかった。ただ一人きりで、殴られも尋問もされず、充分食べられ、清潔でいられるだけで、完全に満足だった。

だんだん、眠る時間は減ったが、まだベッドから起き上がろうという気は起きなかった。ただ静かに横になり、身体に強さが戻ってくるのを感じたかった。自分の身体をあちこち触れ、筋肉がだんだんついてきて、肌の張りが戻ってきたのが幻覚ではないのを確認しようとした。ついに自分が太ってきたのは疑問の余地がなくなった。腿が明らかにひざよりも太くなっていた。その後、最初はいやいやながら、定期的に運動を始めた。しばらくすると、三キロ歩けるようになった。監房の中を行ったり来たりすることで距離を測ったのだ。そして曲がった方もだんだんまっすぐになってきた。もっと入念な運動を試してみたが、自分にできないことばかりで驚き、恥ずかしくなった。歩くのが精一杯で、腕を

伸ばしたままスツールを持って、片足で立とうとしても倒れてしまう。しゃがんでみて、腿とすねに悶絶するもどの痛みを伴えば、何とか立ち上がれるのがわかった。腹ばいになり、両腕で身体を持ち上げようとした。絶望的で、一センチも上がらない。だが数日たつと――食事を何回か経ると――その偉業すら達成できた。それを連続で六回もできるようになった。本気で自分の身体を誇りに思うようになり、自分の顔も元に戻りつつあるにちがないという、ときどき起こる信念も本気にするようになった。あの鏡からこちらを見返していた、シワだらけの荒れ果てた顔を思い出すのは、ときどきハゲた頭皮に手を置いたときだけだった。

精神も活発になった。板寝床にすわって壁に戻り、石板を膝にのせ、意図的に己を再教育する作業に乗り出した。

かれは降伏した。それは合意された。現実にはいまやわかる通り。かれは決断を下すはるか以前から降伏する用意ができていたのだ。愛情省に入った瞬間から――そして実は、テレスクリーンからの鉄の音が何をしろと命じる中、ジュリアといっしょにどうしようもなく立ち尽くしていたその数分間にすら――党の力に対して立ち向かおうという自分の試みの軽率さ、浅はかさは把握していた。いまや七年間にわたり、思考警察が自分を、虫眼鏡の下のカナブンのように観察していたのを知った。知られていない物理的行動、発言など一つもなく、かれらが推測できない思考の筋などもまったくない。日記の奉仕にかけた白っぽいほこりすら、慎重に元に戻されていた。録音をきかされたし、写真も見せられた。中にはジュリアといっしょのものもあった。そう、アレの最中のものも……もはや党に刃向かうことはできなかった。それに、党のほうが正しいのだ。そうでないわけがない。不滅の集合的な頭脳がまちがえるはずがあるか？ どんな外部基準に照らして党の判断をチェックするのか？ 正気は統計的だ。連中の考え方を学習するだけの話でしかない。ただし――！

指の間で鉛筆は太くごちなく感じられた。頭に浮かんだ思考を書き下しはじめた。まず大きく下手クソな大文字でこう書いた。

自由は隷属

そしてほぼ間伐を入れずにその真下にこう書いた。

二足す二は五

だがそこで何やらチェックが入った。精神は、まるで何かから尻込みするように、集中できないようだった。次に何がくるか自分が知っているのはわかっていたが、この瞬間には思い出せなかった。思い出せたのは、意識的にそれが何であるはずかを理由づけたおかげでしかなかった。一人では浮かんでこなかった。かれはこう書いた。

神は力

かれはすべてを受け入れた。過去は改変できる。過去は決して改変されていない。オセアニアはイースタシアと戦争中だ。オセアニアは常にイースタシアと戦争してきた。ジョーンズ、アーロンソン、ラザフォードは判決通りの犯罪を犯した。その罪状を否定するような写真は見たことがない。そんなものは存在しなかった。自分がでっちあげた。自分が反対のことを覚えていたのを覚えていたが、それは偽の記憶、自己欺瞞の産物だ。なんと簡単なことか！ 降伏するだけで、その他すべてがついてくる。潮流に逆らって泳ごう

として、どんなに頑張っても押し戻されていたのが、いきなり向きを変えて流れに逆らうより流れに沿って泳ぐようなものだ。変わったのは自分の態度だけ。どのみち、あらかじめ運命づけられていたものは起こるのだ。なぜ自分が反逆したのかも、ほとんどわからなかった。すべてが簡単だ、ただし——！

なんでも真実になれる。自然法則と称するものはデタラメだ。重力の法則はデタラメだ。「やりたければ、この床からシャボン玉のように浮かび上がれる」とオブライエンは言った。ウィンストンはそれを解明した。「もしオブライエンが、床から浮かび上がれると思えば、そしておれが同時にそうするオブライエンを見たと思えば、それは起きたことになるんだ」。いきなり、沈んだ瓦礫が水面を破るように、次の考えが頭になだれ込んだ。「本当にはおきていない。私たちが想像するだけだ。幻覚だ」。その考えを即座に押し殺した。誤謬は明らかだ。それはどこだか知らないが、自分の外に「現実」の世界があり「現実」のことが起こるというのを前提にしている。だがそんな世界があるはずがない。何かについて、自分自身の精神を通じて以外に、どんな知識があるというのか？ あらゆるできごとは精神内で起こる。万人の精神内で起こることはなんであれ、本当に起こるのだ。

彼は楽々と誤謬を棄却したし、それに陥る危険性はまったくなかった。それでも、そもそもそんな考えが浮かぶべきではなかったと気がついた。危険な思考があらわれたときには、精神は盲点を発達させるべきなのだ。そのプロセスは自動で本能的であるべきだ。ニュースピークで CRIMESTOP/罪阻止と呼ばれる。

かれは罪阻止の練習を始めた。まず各種の命題を上げてみた——「党は地球が平らだと言う」「党は氷が水より重いと言う」——そしてそれと矛盾する議論から目を背けるか理解しないよう自分を訓練した。容易なことではなかった。壮絶な屁理屈と即興が必要だった。たとえば「二足す二は五」といった命題が提起する算数上の問題は、彼の知的な理解を超えるものだった。また精神のある種のアクロバットも必要だ。一瞬は論理を最も繊細に使って見せ、次の瞬間には極度に粗雑な論理的誤りにも目を閉ざせる能力だ。知性と同じくらい愚かさが必要であり、そして愚かさを身につけるのも知性と同じくらいむずかしかった。

その間ずっと、頭のどこかで、いつになったら射殺してもらえるのかと思っていた。オブライエンは「すべては君次第だ」と言った。だがどんな意識的な行動をとっても、その瞬間が近づくことはないのもわかっていた。十分後かもしれず、十年後かもしれない。何年も独房に閉じ込めるかもしれず、労働キャンプに送るかもしれず、ときどきやるように、しばらく釈放するかもしれない。射殺される前に、逮捕と尋問のドラマがすべて再演される可能性も充分にあった。一つだけ確実なのは、死は決して予期した瞬間にはこないということだ。伝統——不文律だ。決して口に出されたのを聞いたことがないのに、なぜか知っている——は、後ろから撃たれるというものだ。監房から監房へと廊下を歩いているときに、必ず後頭部を予告なしに撃たれる。

いつの日だったか——だが「いつの日」は正しい表現ではない。真夜中だったかもしれない。いつだったか——奇妙な至福に満ちた空想に陥った。廊下を歩きながら銃弾を待ち受けていた。それが今にもくるのはわかっていた。すべては片付き、解決し、修復された。恐れはない。身体は健康で強かった。楽々と歩き、動く喜びと日差しの中を歩く感覚があった。もはや愛情省の狭く白い廊下にはおらず、巨大な太陽に照らされた通路にいて、その幅一キロメートルで、その中をドラッグが引き起こす譫妄状態で歩いているのだ。黄金の国にいて、ウサギが食べ尽くした草原の中の獣道をたどっていた。足の下に短いはず

むような芝生が感じられ、顔には優しい日差しが当たっている。草原の端にはあの榆の木立があり、かすかに風にそよぎ、その向こうのどこかには小川があって、デースが柳の下にある緑の淀みの中で寝ている。

いきなり彼は、恐ろしいショックとともに身を起こした。背骨に冷や汗が吹き出した。自分が大声でこう叫ぶのを聞いたのだ。

「ジュリア！ ジュリア！ ジュリア、愛しいジュリア！」

一瞬、彼女の存在の圧倒的な幻覚を見たのだ。まるで彼女が自分といっしょにいてだけでなく、自分の中にいるように感じた。まるで自分の肌合いにまで彼女が入り込んだようだった。その瞬間、二人がいっしょで自由だったときのいつにも増して、彼女をはるかに愛していた。そしてまた、どこかで彼女が生きていて助けを求めているのも悟った。

かれはベッドに横たわり、なんとか取り繕おうとした。なんてことをしてしまったんだ！ あの瞬間の弱さで、隷属が何年延びたことだろうか？

あと一瞬もすれば、外にブーツの足音が聞こえるだろう。あんな噴出を処罰せずにはすませられないはずだ。すでに知っていたかもしれないが、かれがあいつらと交わした約束を破っているのはこれでバレてしまう。党に服従していたが、まだ党を憎んでいたのだ。かつては、邪説精神を上辺の従属の下に隠していた。いまやさらに一歩後退していた。精神的に降伏したが、心の奥は不可侵に保とうとしたのだ。自分がまちがっているのは知っていたが、まちがっているほうを望んだ。それがわかってしまう——オプライエンならわかってしまう。あのたった一度の愚かな叫びで白状してしまったのだ。

またもや最初からやりなおさねば。何年かかるかわからない。新しい相貌に慣れようと、かれは顔に手を走らせた。頬には深い溝が刻まれ、頬骨はとがって感じられ、鼻は潰れていた。それに、最後に自分を鏡で見てから、まったく新しい総入れ歯ももらった。自分がどんな顔かわからないのに、とぼけて見せるのは容易ではない。いずれにしても、表情をコントロールするだけでは不十分だ。秘密を維持したいなら、それを自分自身からも隠さねばならないのだ、と彼ははじめて理解した。ずっとそれがそこにあることは承知しつつ、必要となるまではどんな形であれ、それとわかる形で意識に上がるのを許してはならない。今後は正しく考えるだけではだめだ。正しく感じ、正しく夢見なければならぬ。そしてその間ずっと、この憎悪を内部に封じ込めておかねばならない。自分の一部でありながら、他の部分とはつながっていない球体、ある種の繭のようなものとして。

いつの日か、あいつらは自分を射殺すると決める。いつ起こるかはわからないが、それが起こる数秒前には見当がつくはずだ。いつも廊下を歩いているときに背後からくる。十秒あれば充分。その間に、自分の中の世界がひっくり返る。そしていきなり、一言もなく、足取りが乱れることもなく、表情も微塵も変わらずに——いきなりカモフラージュが消え、自分の憎悪の砲列がバーン！ と鳴り響く。憎悪がすさまじい燃えさかる炎のように自分を満たす。そしてほぼそれと同時に、バーン！ と銃弾が鳴るが、遅すぎるか早すぎる。やりおなせる前に、かれの脳は粉々に吹き飛ばされる。邪説思想は処罰されず、改悛もせず、永遠にかれらの手の届かないところに行ってしまう。あいつらは自ら自分たちの完璧さに穴を開けてしまうことになる。連中を憎悪しながら死ぬこと、それが自由だ。

かれは目を閉じた。何か一つの知的な考え方を受け入れるよりむずかしかった。己を貶め、切り刻む話となる。汚物の中でも最も汚らしいものに飛び込まねばならない。とりわけ最もひどく、忌まわしいものは何だろうか？ かれはビッグ・ブラザーを思った。あの巨大な顔（絶えずポスターで見ていたので、いつもその顔が幅一メートルだという気がし

ていた)、その重たい黒い口ひげと、どこへいってもついてくる視線が、勝手に頭の中に漂ってくるようだった。ビッグ・ブラザーに対する本当の気持ちは何だろうか？

通路にブーツの重たい足音がした。鋼鉄のドアがガシャンと開いた。オブライエンが監房に入ってきた。その背後にはあの能面のような将校と、黒制服の看守たちがいた。

「立て。こっちにこい」とオブライエン。

ウィンストンはかれに向き合って立った。オブライエンはウィンストンの両肩を強い手でつかみ、かれをじっと見つめた。

「私を騙そうと考えたな。愚かだぞ。もっとまっすぐ立て。私の顔を見ろ」

かれは間をおいてから、もっと優しい口調で続けた。

「改善はしているんだがな。知的には、ダメなところはほとんどない。進歩を見せていないのは感情面だけだ。ウィンストン、教えてくれ——そして忘れるな、ウソはなしだぞ。ウソは必ず私にはわかるのは知ってるな——教えてくれ。ビッグ・ブラザーについて本当はどう思っているね？」

「憎んでいる」

「憎んでいるか。よろしい。では最後の一步を受けるときがきた。君はビッグ・ブラザーを愛さねばならない。服従するだけではダメだ。愛さなければ」

彼は看守たちのほうにウィンストンを軽く押しやった。

「101 号室だ」

第5章

収監の各段階で、窓なしの建物の中でどのあたりにいるのかはわかった、というかわかる気がした。気圧にちょっとした差があったのかもしれない。看守に殴られた監房はみな地下にあった。オブライエンに尋問された部屋は屋上近い高層階だ。今回の場所は何メートルも地下で、これ以上はないくらい深かった。

これまで入れられたほとんどの監房より大きかった。だがまわりのことなどほとんど目に入らなかった。目に入るのは真ん前の小さなテーブル二つだけだ。そのそれぞれが緑ベーズで覆われている。片方はほんの一、二メートル先で、もう一つはもっと遠くドアに近い。かれは椅子にまっすぐ身を起こして縛られており、あまりにきついので何も、頭さえも動かさなかった。何やらパッドが頭を背後から抑えており、まっすぐ前しか見られないようにしている。

しばらく一人きりだったが、ドアが開いてオブライエンが入ってきた。

「以前、101号室に何かがあるのか尋ねたな。その答はすでに知っているはずだと答えたね。だれでも知っている、と。101号室にあるのは世界最悪のものなのだ」

またドアが開いた。看守が入ってきて、針金でできた何かと、何やらかごを持ってきた。それを遠い方のテーブルに置いた。オブライエンの立ち位置におかげで、それがなんだか見えなかった。

「世界最悪のものというのは、人それぞれちがっている。生き埋めにされることだったり、火あぶりだったり、溺死だったり、窒息死だったり、その他五十種類もの死に方があ

る。また場合によってはかなりつまらないもので、致命的ですらないものだったりもする」
彼は少し脇に動いたので、ウィンストンはテーブル上のものが前より見えるようになった。細長い針金のかごで、そのてっぺんに運ぶための取っ手がついている。その正面に固定されているのはフェンシングのマスクのようなもので、くぼんだ面が外側に向いている。三、四メートル離れてはいたが、そのかごが長手方向に二分割されていて、それぞれに何やら生き物が入っているのは見えた。ネズミだ。

「君の場合、世界最悪のものというのは、ネズミだ」

かごを一瞥したとたん、一種の前兆のような身震い、何ともわからない恐怖がウィンストンの全身を貫いていた。だがこの瞬間に、その正面にあるマスク状のアタッチメントの意味がいきなり腹に落ちた。内臓が水になったようだった。

「やめてくれ、よせ、よせ、絶対無理です！」かれは甲高い割れた声で叫んだ。

オブライエンは言った。「かつて夢の中で起こったパニックの瞬間があっただろう。目の前に黒い壁があり、耳には轟音が聞こえていたな。壁の向こうには何か恐ろしいものがあった。それが何か自分で分かっているのは承知していたのに、それを決して白日のもとに曝そうとはしなかったな。壁の向こう側にいたのはこのネズミたちだったのだよ」

ウィンストンは、何とか声を抑えようとした。「オブライエン！ こんなのが不要なのはご存じでしょう。私に何をしてほしいんですか？」

オブライエンは直接は答えなかった。口を開いたときの口調は、ときどきやってみせる、あの学校の先生じみたものだった。思慮深げに遠くをみつめて、まるでウィンストンの背中の向こうにいる聴衆に語りかけるようだった。

「苦痛は、それだけでは必ずしも充分ではない。人間が苦痛に立ち向かうときもあり、死をも辞さないことさえある。だがだれしも、何か耐えられないものがあるものだ——絶対に考えたくもないものだ。勇気も臆病さも関係ない。高いところから落ちるとき、綱をつかむのは臆病ではない。深い水から上がってきたら、肺を空気で満たすのは臆病ではない。単なる破壊できない本能にすぎない。ネズミも同じことなのだよ。君にとっては耐えがたいものだ。君がどれほど願っても耐えられない圧力形態ということだ。君は要求されたことをする」

「しかし、それは何なのですか？ 何なのですか？ それが何か知らなければ、やりようがないでしょう」

オブライエンはかごを手に取り、それを近いほうのテーブルに持ってきた。そして慎重にベーズの布の上に置いた。ウィンストンは耳の中で沸き立つ血の音が聞こえた。完全にひとりぼっちですわっている感覚だった。いるのは巨大で空っぽの平原、日光あふれる平らな砂漠で、それを横切って各種の音はるか遠くからやってくる。だがネズミのかごは、二メートルに満たない距離にある。巨大なネズミだった。ネズミの鼻面が鈍く恐ろしくなり、毛が灰色から茶色に変わる年齢だった。

オブライエンは、相変わらず、目に見えない聴衆に向かって続けた。「ネズミは、齧歯類ながら肉食なのだ。それはご存じだろう。この町の貧困地区で何が起るか聞いているはずだ。そういう通りでは、お母さんは赤ん坊を五分と放っておけないそうだよ。まちがいなくネズミに襲われる。ごく短時間で骨だけになってしまう。また病人や瀕死の人も襲うそうだ。人間が無力なのを見分けるだけの、驚くほどの知性を示すのだよ」

かごからは、爆発するようなキイキイ声が聞こえた。はるか彼方からウィンストンのところに聞こえてくるようだった。ネズミたちは争っていた。区切り越しにお互いに飛びかかろうとしていたのだ。また深い絶望のうめき声も聞こえた。こちらも自分の外からきているようだった。

オブライエンはかごを手に取り、途中で中の何かを押した。カチリと鋭い音がした。ウィンストンは、椅子から逃れようと狂ったように暴れた。絶望的だった。身体のあるゆる部分、頭ですら、動かないよう拘束されていた。オブライエンはかごを近づけた。ウィンストンの顔から一メートルもない。

「最初のレバーを押したぞ。このかごの作りはわかるな。マスクが君の頭にかぶせられ、出口はない。このもう一つのレバーを押すと、かごの戸が上がる。この飢えた獣たちは、弾丸のように飛びだしてくる。ネズミが宙を跳ぶのを見たことがあるか？ 君の顔にとびついて、まっすぐ食い尽くすぞ。ときには目をまっ先に狙うこともある。時には頬を食い破って舌をむさぼるんだ」

かごが近づく。迫ってくる。甲高い鳴き声が続けて起こるのを聞いた。頭上の空中から聞こえてくるようだ。だが必死で自分のパニックに抗った。考えろ、考えろ、あと一瞬しか残ってなくても——考えることだけが希望だ。いきなり、獣どものいやなすえた匂いが鼻孔を打った。体内にすさまじい吐き気の発作が生じ、かれはほとんど気絶しそうに

なった。すべてが暗くなった。一瞬正気を失い、絶叫する動物となった。だがその間の中
からかれは、あるアイデアを握りしめて戻ってきた。自分を救うための方法が一つ、たっ
た一つだけある。自分とネズミとの間に、別の人間、別の人間の身体を挿入するのだ。

いまやマスクの輪が広がって、他のあらゆるものが見えなくなっていた。金網のドア
は、手のひら二つ分くらいの距離だ。いまやネズミたちも、何がくるかわかった。一匹は
ぴょんぴょん跳ね、もう片方は、老いぼれた汚らしい下水道の爺さんネズミだが、後ろ足
で立ってピンクの手を金網にかけ、激しく空中を嗅いでいる。ヒゲと黄色い歯が見えた。
またもや暗黒のパニックに襲われた。何も見えず、寄る辺なく、何も考えられなかった。

「帝政中国では一般的な刑罰とされていたのだ」とオブライエンはいつになく学者ぶっ
て言った。

マスクが顔に迫っていた。ワイヤーが頬に触れた。だがそのとき——いや救いではな
い、希望、それもわずかな希望のかけら。手遅れ、もう手遅れかもしれない。だがいきな
りこの世のすべてで、この刑罰をなすりつけられる人物が**たった一人**いるのをウィンスト
ンは理解した——自分とネズミとの間に挿入できる身体が**たった一つ**。そしてかれは狂っ
たように、何度も何度も叫んだ。

「ジュリアにやってくれ！ ジュリアにやってくれ！ おれじゃない！ ジュリアだ！ 彼女
に何してもかまわない。顔を引き裂いても、骨までむしっても。おれじゃなくて、ジュリ
アに！ おれじゃない！」

かれは後ろ、すさまじい深みに倒れ込んでネズミから逃れた。まだ椅子に縛られていた
が、床を通り抜けて落ち、建物の壁をぬけ、大地をぬけ、海をぬけ、大気をぬけ、外宇宙
の中へ、星々の間の谷間へとぬけた——常に遠く、遠く、ネズミから離れて。何光年も離
れたのに、オブライエンが相変わらず脇に立っていた。頬にはまだワイヤーの冷たい感触
があった。だが自分を包む暗闇を通して、別のカチリという金属音が聞こえた。かごの扉
がカチリと閉まったのであり、開いたのではないとわかった。

第6章

栗の木酒場はほとんど無人だった。窓から入ってくる西日が、ほこりっぽいテーブル上に落ちかかった。人気のない、15時という時間だ。テレスクリーンからは、キンキンした音楽が流れている。

ウィンストンはいつもの隅っこにすわり、空のグラスをのぞきこんでいた。ときどき目を挙げて、向かいの壁からこちらを見る巨大な顔を見上げた。ビッグ・ブラザーは「見て」とポスター下の標語に書かれている。呼ばれもしないのに給仕がきて、グラスを勝利ジンで満たし、そこに別のびんから、コルクに刺した管で数滴振り落とした。丁子で味付けしたサッカリンで、この酒場の名物なのだ。ウィンストンはテレスクリーンを聞いていた。いまは音楽しかかかっていないが、いつ何時、平和省からの速報がないとも限らない。アフリカ戦線からのニュースは、極度に心乱れるものだった。一日中、断続的にそれが心配でたまらなかった。ユーラシア軍（オセアニアはユーラシアと戦争していた。オセアニアは昔からずっとユーラシアと戦争していたのだ）は恐ろしい速度で南進していた。昼の速報は、はっきりした地域には何も言及していなかったが、すでにコンゴの入り口が戦場になっている可能性もあった。ブラザヴィルとレオポルドヴィルが危険にさらされている。地図を見るまでもなく、それが何を意味するかはわかった。中央アフリカを失うだけの話ではない。この戦争全体で初めて、オセアニアそのものの領土が脅かされているのだ。爆発的な感情、必ずしも恐怖ではないが、何か入り混じったような興奮が身中に燃え上がり、そしてまた薄れていった。

戦争のことを考えるのはやめた。最近では、何か一つのことには数瞬くらいしか集中できないのだ。グラスを手に取り、一息に飲み干した。いつもながら、そのジンを飲むと身震いして、かすかに吐き気さえする。ひどい代物だった。丁子とサッカリンは、それ自体がそのいまわしいやり方で耐えがたいものであり、ジンの平板でオイルめいた匂いを隠しきれなかった。そして最悪なのは、昼夜問わず彼につきまとうジンの匂いが、どうしようもなく頭の中であの匂いと混じり合い――

何の匂いかは決して言わず、思い浮かべることすらなく、できるかぎりその姿を考えもしなかった。何か半ば気がついていて、顔の近くを漂っている。鼻孔にしみついている匂いなのだ。ジンが上がってくると、紫の唇ごしにゲップをした。釈放されてから太り、昔の顔色も取り戻した――いや取り戻す以上だった。顔の肉付きが増し、鼻と頬骨の皮膚が粗野な赤となり、ハゲた頭皮ですらあまりに深いピンクだった。給仕が、また呼ばれもしないのに、チェス盤と『タイムズ』最新号を持ってきた。チェス問題のページが開けてある。そして、ウィンストンのグラスが空なのを見て、ジンのボトルを持ってきて満杯にした。注文するまでもなかった。彼の習慣を知っているのだ。チェス盤はいつも彼を待っており、この隅のテーブルはいつも予約済だった。満員でも、このテーブルは独占で

きた。だれもあまり近くにすわろうとはしないのだ。自分が何杯飲んだか数えようとさえしなかった。不定期に何か汚い紙切れが示されて、勘定書きだと言われたが、いつも金額が少なすぎるような気がした。高すぎても別にかまわなかったのだが。最近ではいつもお金はたくさんあった。仕事さえあり、閑職で、以前の仕事よりも高給だった。

テレスクリーンの音楽が止まり、声が流れた。ウィンストンは顔をあげて耳を傾けた。だが前線からの速報ではなかった。単なる豊富省からの短い発表だ。どうやら先の四半期では、第十次三カ年計画におけるブーツひもの生産が、割り当て量を98パーセントも超過したという。

チェス問題を眺めて駒を並べた。ひねった終盤戦で、ナイト二つが関与していた。「白が先手で、二手で詰むこと」という問題だ。ウィンストンはビッグ・ブラザーの肖像を見上げた。白が常に詰む、と彼はぼんやりした神秘主義をこめて考えた。いつも、例外なく、そのように手配されている。世界の始まり以来、どんなチェス問題でも黒が勝ったことはない。これは永遠の、不変の、邪悪に対する善の勝利を象徴しているのではなからうか？ 巨大な顔は落ち着いた力に満ちて、かれを見つめ返した。白が常に詰む。

テレスクリーンからの声が止まり、別のずっと深刻そうな口調が追加された。「15 = 30の重要な発表に備えて待つよう警告いたします。1530！ 極度に重要なニュースです。決して聞き逃さないようご注意ください。1530！」チャラチャラした音楽がまたかかった。

ウィンストンの心が乱れた。それが前線からの速報だ。直感的に、悪いニュースがくると思った。一日中、興奮のかすかな噴出と共に、アフリカでの大敗北という考えが頭を出たり入ったりしていた。本当にユーラシア陸軍が、決して破られたことのない前線を横切って群れをなし、アフリカの突端にアリの列のようになだれこむ様子が目に浮かぶようだった。なぜやつらをどうにかして回り込めなかったのか？ 西アフリカ沿岸の外形線が頭に鮮明に浮かんだ。かれは白ナイトを手に取り、盤上を動かした。これこそが適切な場所だ。黒の大軍が南に突進するのを眺めつつ、別の軍勢が、謎のように集結して、いきなりその背後に現れ、彼らの陸と海の通信を切断するのが目に浮かんだ。それを願うことで、その別の軍勢を本当に生じさせることができると感じたのだった。だがすばやく動かねば。あいつらがアフリカ全土を制圧したら、ケープタウンに飛行場や潜水艦基地を獲得したら、オセアニアは二つに分断されてしまう。そうしたら何でもあり得る。敗北、崩壊、世界の再分割、党の破壊！ 彼は深く息をのんだ。驚異的な気持のメドレー——だが厳密にはメドレーではなかった。むしろ次々にあらわれる気持の層で、どの層がいちばん底にあるのかはわからない——それが彼の内面で争っていた。

けいれんは過ぎた。かれは白のナイトをもとの場所に戻したが、その時点ではチェス問題に本気で取り組めなかった。思いは再びさまよった。ほとんど無意識に、テーブルのほりの中指で次のようになぞった。

$$2 + 2 = 5$$

「内面には入れないよ」と彼女は行った。だが、やつらは内面に入れた。「ここで君に起こることは永遠なのだ」とオブライエンは言った。それは真言だった。決して立ち直れないもの、自分自身の行動がある。胸の中で何かが殺される。燃え尽き、焼き切られるのだ。

彼女には会った。話さえした。何も危険はなかった。まるで直感的に、あいつらがいまや自分の行動にほとんど何の興味も示さないと知っていた。どちらかが希望すれば、もう一度彼女に会うよう手配もできた。実は、二人が会ったのは偶然だった。公園で、三月の

天気の良い一日で、地面は鉄で草はすべて枯れ、花などどこにもなく、ただクロッカスが何本か地面を突き破って出てきていたが、それも風により引きちぎられる運命にあるようだった。凍える手と涙の出る目を抱えて急いでいたところで、ほんの十メートル先にいる彼女が目に入った。即座に、彼女が何か曰く言い難い形で変わったのが感じ取れた。二人はほとんど何事もなくすれちがうところだったが、そこでかれは向きを変えて後を追ったが、それほど熱心ではなかった。何も危険はなく、だれも興味を示さないのはわかっていた。彼女は口をきかなかった。草地を斜めに横切って、まるでこちらを追い払おうとしているようだったが、やがて諦めて並んで歩くのを許したようだった。間もなく二人は、荒れた葉のない茂みの中にいた。身を隠すにも風を遮るにも役立たずだ。二人は立ち止まった。恐ろしいほど寒かった。風が小枝の間を吹き抜け、点在する汚いクロッカスを揺らした。ウィンストンは彼女の腰に腕を回した。

テレスクリーンはなかったが、隠しマイクはあるはずだ。それに、まわりからも見える。でも構わなかった。すべてどうでもよかった。やりたければ地面に横たわり、アレをやってもよかった。それを考えるだけで、身体が恐怖に凍り付いた。腕を回されても彼女は一切反応しなかった。身をもぎ離そうとさえしなかった。いまや彼女のどこが変わったかわかった。顔は前より黄ばみ、髪で部分的に隠れてはいるが、長い傷が額とこめかみにできていた。だが変化はそれではなかった。彼女は太り、そして意外な形で固くなっていたのだ。かつてロケット爆弾の爆発後に、瓦礫から死体を運び出す手回しをしたことがあった。そしてその死体のすさまじい重さだけでなく、その硬直ぶりと扱いにくさに驚いたものだった。まるで肉ではなく石のようだった。彼女の身体もそんな感じだった。たぶん肌のきめも、以前とはまったくちがっているはずだと思い当たった。

彼女にキスしようとはしなかったし、どちらも口をきかなかった。二人が草を横切って戻るとき、初めて彼女がまっすぐにこちらを見た。一瞬の視線で、軽蔑と嫌悪に満ちていた。過去のことだけから生じた嫌悪なのか、それとも自分のふくれあがった顔と、風のせいで目からやたらに絞り出される水のせいもあるのだろうか。二人は鉄の椅子に並んですわったが、あまり近づきすぎないようにした。彼女が口を開こうとしているのがわかった。彼女はその不格好な靴を数センチほど動かし、意図的に小枝を踏み潰した。足の幅が広がったようだ、とウィンストンは気がついた。

「あなたを裏切った」と彼女はあからさまに言った。

「私も君を裏切った」

彼女は再び嫌悪をこめた一瞥をくれた。

「ときには、決して立ち向かえないもので脅すのよ、考えることさえできないもので。するところ言うの。『あたしにはやらないで、他のだれかにやって、だれそれにやって』。そして後になって、それはただのお芝居で、連中を止めさせるためにそう言っただけで、本気じゃなかったというふりをするかもしれない。でもそうじゃないの。それが起きたときには、本気で言ってるんだよね。そうやって自分が助かる気満々なの。本当に相手にそれが起きて欲しいと思ってる。向こうがどう苦しいかがどうでもいい。自分のことしか考えられない」

「自分のことしか考えられない」とかれは繰り返した。

「そしてその後では、もう相手に同じ気持ちを抱けなくなっているの」

「そうだ。同じ気持ちは抱けない」

それ以上言えることはないようだった。風が二人の身体に薄いオーバーオールを押しつ

けた。ほぼ即座に、だまってこうしてすわっているのが恥ずかしくなった。それに、じっとしているには寒すぎた。彼女は地下鉄に乗らないととか何とか言って、立ち去ろうとした。

「また会わないと」とウィンストン。

「そうね。また会わないと」

かれは腹を決めかねて、少し離れて、半歩ほど後に続いた。彼女は本当にウィンストンをまこうとはしなかったが、ぎりぎり追いついてこれないくらいの速度を維持した。かれは、地下鉄の駅まではついていくぞと決意していたが、いきなり寒い中を追いかけるプロセスが、無意味で耐えがたく思えた。ジュリアから離れたたいというよりむしろ、栗の木酒場に戻りたいという欲望に圧倒されたのだった。いまほどあの酒場が魅力的に思えたことはなかった。隅っこの自分のテーブル、新聞とチェス盤と果てしなく流れるジンについてノスタルジックな幻影を見た。次の瞬間、決して偶然だけではなく、かれは自分が彼女と小集団により隔てられるのを許した。追いつこうというふりだけはしたが、足をとめて向きを変え、反対方向に歩き始めた。五十メートル進んだところで振り返った。道は混雑していなかったが、すでに彼女の見分けがつかなくなっていた。足早に歩く一ダースほどのどれが彼女かもしれなかった。身体に肉がついて固くなり、後ろ姿もわからなくなっていたのかもしれない。

「それが起きたときには、本気で言ってるんだよね」と彼女。ウィンストンは本気だった。単に口先だけで言ったのではない。本気で願ったのだ。あれに差し出されるのが自分ではなく、彼女であってほしいと本気で願い――

テレスクリーンから流れる音楽が少し変わった。割れた耳触りな音、甲高い音が混じた。そして――本当には起きていないのかもしれない。記憶が音のふりをしているだけなのかもしれない――声がこう歌っていた。

大きな栗の木の下で
あなたとわたし
おたがい売り渡す――

涙が目にとまった。通りすがりの給仕が、グラスが空だと気がついて、ジンのボトルを持って戻ってきた。

グラスを持ち上げて嗅いだ。口にいっぱい含むたびに、ひどい味が薄まるどころかますますひどくなった。だがこれはかれが溺れる物質と化していた。それがかれの人生、死、復活なのだ。毎晩かれを昏睡に沈めるのはジンであり、毎朝の気付けもジンだった。目をさますのは1100前のことはめったになく、まぶたはべっとりくっつき、口は燃えるようで、背中が折れたかのようなようだったから、夜中ずっとベッド脇に置かれたボトルとティーカップがなければ、水平状態から起き上がることもさえない不可能だっただろう。日中はずっと、どんよりした顔でボトルを前にずっとすわり、テレスクリーンを聞いていた。15時から閉店時間までは栗の木酒場の常連だった。もはやだれも、かれのやることを気にせず、起こす笛の音もなく、叱責するテレスクリーンもない。ときどき、週に二回ほどだろうか、真実省のほこりっぽい、忘れられたようなオフィスにでかけて、ちょっと仕事をした、というか仕事と称するものをやった。小委員会の小委員会に使命され、それは『ニュースピーク辞典』第十一版の編纂で生じた細かい困難を扱う、無数の委員会から派生したものだった。その小委員会は、中間報告と称するものを作る作業をしていたが、何についての報告なの

か、ついぞはっきりつきとめたことはなかった。コンマはカッコの中に入れるべきか、外に出すべきかという問題と関係した話らしい。委員会には他に四人いて、みんな自分と似たり寄ったりだ。集まってもすぐに散会して、お互いに何もすることがないと正直に認める日もあった。だが全員が、ほとんど熱意を持って自分の仕事に取り組む日もあった。議事録を書いたり長いメモの草案を作ったりしたが、それが決して仕上がることはない——自分たちが議論しているはずのことについての議論が驚くほど入り組んだ難解なものになり、定義をめぐる細かいかけひき、すさまじい余談、口論——上のほうに裁可を求めろぞという脅しすら行われるのだ。だがそこで突然、みんな勢いを失い、テーブルを囲んですわり明かりの消えた目でお互いを見回すのだ。ニワトリの鳴き声とともにかき消える幽霊たちのように。

テレスクリーンはしばし沈黙した。ウィンストンはまた顔を上げた。速報か！ だがちがった。単に音楽の切れ目でしかない。まぶたの裏にアフリカの地図があった。軍の動きは図になっていた。黒い矢印が垂直に南へと引き裂き、白い矢印が東へ向かって黒矢印の尻尾を横切る。まるでその裏付けを求めるかのように、かれは肖像の沈着な顔を見上げた。二番目の矢印が存在すらしていない可能性があるのでは？

また興味が薄れた。またジンを口いっぱいを含み、白のナイトを手にして、仮の動きを試みた。チェック。だが明らかに正しい動きではなかったようだ。というのも——

呼ばれもしないのに、想い出が頭に浮かび上がった。ロウソクで照らされた部屋に、大きな白いかけぶとんがかかったベッドがあって、九歳か十歳の少年である自分が床にすわり、サイコロの箱を振り、はしゃいで笑っている。お母さんが向かいにすわって、やはり笑っている。

お母さんが消える一ヶ月ほど前だったはずだ。一瞬の和解で、責め立てる空腹感が忘れられ、かつてのお母さんへの愛情が一時的に復活したときだった。その日のことはよく覚えている。大雨のびしょ濡れの日で、水が窓を流れ落ちて、屋内の光は暗すぎて何か読むこともできなかった。暗く狭苦しい部屋にいる子ども二人の退屈は耐えがなくなった。ウィンストンは泣き言と不平をたれ、無駄に食べ物を要求し、部屋について文句を言っただけ、あらゆるものを引っ張ってむちゃくちゃにして、腰板を蹴飛ばし続けたのでご近所が壁を叩き始め、一方で幼い妹は断続的にわめきたてた。ついに母親はこう言った。「さあさあ、いい子にしてね。おもちゃを買ってあげるから。すてきなおもちゃよ——きっと気に入るわよ」そして雨の中をでかけ、まだときどき開いている近所の雑貨屋にでかけて、すぐろく遊び「へびとハシゴ」のセットが入った段ボールの箱を持って戻った。その湿った段ボールの匂いはいまも忘れられなかった。みすばらしいセットだった。ゲーム版は割れていて、小さい木製のサイコロはあまりに雑な作りなので、数字の面がなかなか上にならないほどだった。ウィンストンはそれをむっつりして眺め、興味を示さなかった。だがそこで母親がロウソクを灯し、みんな床にすわって遊び始めた。やがてウィンストンは大はしゃぎとなり、駒が期待しつつハシゴを登ったのに、それがへびをすべり下りて、ほとんどふりだしまで逆戻りするにつれて、笑いながら叫んだ。八試合やって、お母さんとウィンストンが四勝ずつだった。小さな妹も、この遊びがどんなものか理解するには幼すぎたが、長枕を背に起き上がって、他のみんなが笑っているので、自分も笑っていた。その午後ずっと、三人一緒に幸せだった。昔の子供時代のように。

その光景を頭から押しやった。偽の記憶だ。ときどき偽の記憶に悩まされる。偽物だとわかっていたら、別にかまわなかった。起きたこともあれば、起こらなかったこともある。

彼はチェス盤に向き直り、白ナイトを再び手にした。そしてほとんど同時に、それをカタンと盤上に落とした。針を刺されたかのように飛び上がった。

甲高いトランペットのファンファーレが空気を貫いた。速報だ！ 勝利だ！ ニュースの前にトランペットが響いたら、必ず勝利ということなのだ。一種の電気ドリルが酒場を走り抜けた。給仕たちですらそわそわして、耳をそばだてた。

トランペットのファンファーレは、すさまじい大騒音を引き起こした。すでに興奮した声がテレスクリーンからわめきたてていたが、それがほとんど始まりかけたばかりなのに、屋外からの歓声の轟音にほとんどかき消されてしまった。ニュースは街頭を魔法のように駆け巡っていた。テレスクリーンから発せられる声はぎりぎり、すべてが自分の予想通りに進んだとわかるだけのことを聞き取れた。莫大な海洋艦隊が、敵の背後にこっそり集結して奇襲をかけたのだ。白い矢印が黒い矢印の尻尾を切り裂いている。その轟音の合間に、勝ち誇った台詞の断片が伝わってくるのだった。「壮絶な戦略的動き——完璧な協調——全面敗走——捕虜五十万人——完全な土気崩壊——アフリカ全土の支配——もはや終戦に手が届くほど——勝利——人類史上最大の勝利——勝利、勝利、勝利！」

テーブルの下でウィンストンの足はけいれんするような動きをしていた。その席から身動きすらしていなかったが、頭の中では走っていた。しかも素早く。外の群集とともにあり、耳が潰れそうなほどの声で喝采していた。再びビッグ・ブラザーの肖像を見上げた。世界を牛耳る巨人！ アジアの群集どもが、無駄に突進して潰される岩！ 十分前に——そう、たった十分前——前線からのニュースが勝利か敗北かと思案した自分の精神の中には、まだ迷いがあった。ああ、滅びたのはユーラシアの一軍以上のものだった！ 愛情省の最初の日から、かれの中で実に多くのものが変化した。だが最後の、不可欠な、癒しとなる変化は、この瞬間までついぞ起こらなかったのだ。

テレスクリーンからの声は、いまだに捕虜たちや戦利品や虐殺の話垂れ流していたが、外の叫び声は少しおさまった。給仕たちは仕事に戻りつつあった。その一人がジンのボトルを持って近寄った。ウィンストンは至福の夢の中にすわっていたので、グラスが満たされてもまったく気に留めなかった。もう走ったり歓声をあげたりしていなかった。愛情省に戻り、すべては許され、魂は雪のように真っ白だった。公開裁判の被告席にいて、すべてを自白し、あらゆる人を共犯に仕立てていた。白いタイルの廊下を歩きつつ、日差しの中を歩く気分で、背後には武装した看守がいる。長く待ちわびた銃弾が脳に入るのだ。

かれはその巨大な顔を見上げた。その黒い口ひげの下にどんな微笑が隠されているかを学ぶのに、四十年かかった。ああ残酷で無用の誤解！ ああ、愛する胸からの、頑固で自ら求めた追放！ 鼻の両脇を、ジン臭い涙が流れ落ちた。だがもう大丈夫、すべては大丈夫。苦闘は終わった。自分に対する勝利を勝ち取ったのだ。かれはビッグ・ブラザーを愛していた。

完

補遺 ニュースピークの原理

ニュースピークはオセアニアの公式言語であった。これは英社主義^{イソソック}、またはイギリス社会主義のイデオロギー上のニーズを満たすために考案された。1984年には、ニュースピークを唯一の通信手段として使う人物は、発話でも文書でも、まだだれもいなかった。『タイムズ』の記事はニュースピークで書かれていたが、これは専門家にしか実行できないような力業なのだった。ニュースピークは、最終的にオールドスピーク（あるいは私たちなら普通の英語と呼ぶもの）を2050年頃に置きかえるものと期待されていた。一方で、それは着実に浸透した。あらゆる党員はニュースピーク用語やその文法的構築を、ますます日常会話で使うようになっていったからだ。1984年に使われていたバージョンで、『ニュースピーク辞典』第九版と十版に体现されていたものは暫定的なものであり、多くの無駄な単語や不自然な形態が多く含まれ、これらは後日抑圧されることとなる。私たちがここで扱うのは、辞典の第十一版に体现された、最終的な完成版である。

ニュースピークの目的は、英社主義^{イソソック}の献身者にとって適切な、世界観や精神的な習慣の表現媒体を提供することだけではなかった。むしろ、それ以外のあらゆる思考様式を不可能にするのが目的であった。ニュースピークが全面的に採用され、オールドスピークが忘れられたら、邪説的な思考——つまり英社主義^{イソソック}の原理から逸脱するような思考——は文字通り考えられなくなる、少なくともその思考が言葉に依存している限りは不可能になることが意図されていた。その語彙は、党員が表現したいと適切に願うあらゆる意味に、厳密かつしばしばきわめて微妙な表現を与え、それ以外の意味をすべて排除し、さらに間接的なやり方でそうした意味に到達する可能性も排除するように構築されていた。これは部分的には新しい言葉の発明により行われたが、主な手法は望ましくない言葉を削除し、残った言葉からは非正統的な意味をはぎ取り、できる限りあらゆる二次的な意味をすべて排除するというものであった。一つ例を挙げよう。ニュースピークには「自由」という言葉はまだ存在していたが、「このイヌはシラミから自由だ」あるいは「この平原は雑草から自由だ」といった発言でしか使えない。「政治的に自由」「知的に自由」といった古い意味での使用はできない。というのも、政治的、知的な自由は概念としてすらもはや存在せず。したがって必然的に名前がないからだ。まちがいなく逸脱的な言葉の弾圧とはまったく別に、語彙の削減はそれ自体が目的と見なされており、排除できる言葉はすべて残存が許されなかった。ニュースピークは、思考の幅を広げるのではなく、削減するよう設計されており、この目的は言葉の選択を最低限に切り詰めることで間接的に支援されていた。

ニュースピークは現在の我々が知っているような形での英語に基づいていたが、多くのニュースピーク文は、新たに創られた言葉を含まない場合ですら、いま現在の英語の話者にはほとんど理解不可能であろう。ニュースピーク単語は三つの明確な区分に分類されていた。これはA語彙、B語彙（複合語とも呼ばれた）、C語彙で構成される。各分類を個別に論じるほうが容易ではあるが、この言語の文法的な特異性は、A語彙に当てられる部分で論じることができる。というのも同じルールがこの三つの区分すべてに当てはまったからである。

A 語彙

A語彙は、日常生活のやりとりに必要とされる単語で構成されていた——たとえば食べる、飲む、働く、着る、階段を上り下りする、車に乗る、造園する、料理する、といったものである。それはほとんどが、私たちがすでに持っている単語で構成されちていた。打

つ、走る、イヌ、木、砂糖、家、野原などである。だが今日の英語の語彙と比べると、その数はきわめて限られ、その意味ははるかに厳格に定義された。あらゆる曖昧さや意味合いの濃淡は、粛清されて排除された。この区分のニュースピーク語は、実現可能な限り、明確に理解される概念を一つだけあわす、単なるスタッカートの音だったのである。A語彙を文学目的や政治、哲学の議論に使うのは、まったく不可能であったはずである。A語彙は単純で、目的性を持つ思考の表現だけを意図したものであり、通常は具体的な物体や身体行動に関わるものだけを扱うものであった。

ニュースピークの文法は二つの突出した特異性を持っていた。

その最初のものは、発話のちがう部分がほとんど完全に入れ替え可能だったということである。言語のあらゆる単語（原理的には IF や WHEN などのきわめて抽象的な単語にすら適用できる）は、動詞、名詞、形容詞、副詞のどれとしても使える。動詞とその名詞形は、同じ語根を持つなら、まったくちがいが無い形となった。このルールだけでも、多くの古い形式の破壊をもたらした。たとえば「THOUGHT/思考」という言葉はニュースピークには存在しなかった。代わりに使われたのは「THINK/考」である。これは名詞と動詞の両方の役目を果たした。ここでは語源的な原則は一切準拠されなかった。場合によっては、残されたのは元の名詞であり、場合によっては動詞であった。似たような意味を持つ名詞と動詞があって、それらが語源的にはつながっていない場合でも、そのどちらかがしばしば抑圧された。したがって「CUT/切る」という単語はなかった。その意味は、名詞＝動詞である「KNIFE/刀」で十分にカバーされたからである。形容詞は名詞＝動詞に「-FUL/的」という接尾辞をつけて、副詞は「-WISE/様」をつけることで構築された。よって例えば「SPEEDFUL/速的」は「速い」という意味であり「SPEEDWISE/速様」は「速く」という意味になる。今日の形容詞、よい、強い、大きい、黒い、柔らかいなどは維持されたが、その総数はきわめて少なかった。そうしたものの必要性はきわめて小さかった。というのほとんどあらゆる形容詞的な意味は、名詞＝動詞に「-FUL/的」をつければ導けるからである。今日存在する副詞は、いますでに WISE で終わっているごく少数を除けばまったく維持されなかった。WISE 語尾は変える余地がなかった。たとえば「WELL/良好」という言葉は「GOODWISE/好様」で置きかえられる。

加えて、あらゆる単語——これもまた原理的には言語のあらゆる単語に適用される——は接頭辞「UN/不」をつければ否定化できるし、強調するには接頭辞「PLUS-/超」またはさらなる強調には「DOUBLEPLUS/超々」をつける。だから、たとえば「UNCOLD/不寒」は「温かい」の意味であり、「PLUSCOLD/超寒」と「DOUBLEPLUS/超々寒」はそれぞれ、「とても寒い」「ものすごく寒い」という意味になる。また今日の英語と同じく、ANTE、POST、UP、DOWN などの前置的な接頭辞により、ほぼあらゆる単語の意味を変えることができる。こうした手法により、語彙のすさまじい削減が可能であることがわかった。たとえば「GOOD/好」という単語があれば、「BAD/悪」という単語は要らない。必要な意味は「UNGOOD/不好」により同じくらい——いやもっとうまく——表現できるからである。二つの単語が自然な反対語を形成するあらゆる場合に必要なのは、どちらを抑圧するかを決めることだけであった。たとえば好み次第で、「DARK/暗」を「UNLIGHT/不明」で置きかえてもいいし、「LIGHT/明」を「UNDARK/不暗」で置きかえてもいい。

ニュースピーク文法の二番目の突出した特徴は、その規則性である。以下で述べる少数の例外を除けば、あらゆる語形変化は同じ規則に従う。したがって、あらゆる動詞の過去

形と過去完了形は同じであり、ED が最後につく。「STEAL/盗」の過去形は(現在の英語の「STOLE」ではなく)、「STEALED」となる。「THINK」の過去形は「THOUGHT」ではなく「THINKED」という具合に、言語すべてにこの規則が貫徹され、「SWAM」「GAVE」「BROUGHT」「SPOKE」「TAKEN」といったものは廃止された。あらゆる複数形は最後に S または ES をつけることで作られる。MAN、OX、LIFE の過去形は MANS, OXES, LIFES となった。形容詞の比較級や最上級は一貫して -ER, -EST をつけるものとなる (GOOD, GOODER, GOODEST)。不規則形や MORE, MOST をつけることによる比較級、最上級の表現は抑圧された。

相変わらず不規則な語形変化が許された単語の区分は、代名詞、関係詞、指示形容詞、助動詞だけである。これらすべては古代の用法に従ったが、Whom は不要として廃止され、shall、should の形は捨てられた。それらの利用は will、would でカバーされたからである。またすばやく簡便な発話のために登場する単語形成にもある種の不規則性があった。発音しにくい単語や、聞き間違いされやすい言葉は、まさにそのために悪い単語とされた。したがってときどき、語呂の良さのために追加の文字が単語に挿入されたり、古代の語形が維持されたりした。だがこの必要性は主に、B 語彙とのつながりで主に登場した。なぜ発音の容易さがそれほど重視されたかという理由については本論で後述する。

B 語彙

B 語彙は、意図的に政治目的のために構築された用語から成る。つまりは、あらゆる場合に政治的な意味があるだけでなく、それを使う人物に望ましい精神的態度を課すように意図されていたのであった。英社主義^{イングソック}の原理を総合的に理解していないと、これらの単語を正しく使うのは困難である。場合によってはそれをオールドスピークに翻訳することは可能だったし、また A 語彙からの言葉に代えることですら可能ではあったものの、これは通常は長い言い換えを必要としたし、常にある種の含みを喪失することになってしまった。B 用語はある種の言語的な簡略表現であり、しばしば広範な概念を数音節に押し込め、同時に一般言語よりも正確で力強いものとなったのである。

B 用語はあらゆるものが複合語である (「SPEAKWRITE/話筆機」といった複合語はもちろん A 語彙にもあったが、これは単なる簡便な短縮形であり、特にイデオロギー的な色合いはない)。複数の単語または単語の部分で構成され、それを発音しやすい形にくっつけたものであった。結果として生じる寄せ集めは常に名詞=動詞となり、すべて通常の規則変化に従う。一つ例を挙げよう。「GOODTHINK/好考」というのは、かなり大ざっぱに言えば「正統性」という意味であり、また動詞として捉えるのであれば、「正統的な形で考える」という意味であった。その変形は以下の通り:名詞=動詞としては「GOODTHINK/好考」、過去形および過去完了形「GOODTHINKED」、現在進行形「GOOD-THINKING」、形容詞「GOODTHINKFUL/好考的」、副詞「GOODTHINKWISE/好考様」、動詞的名詞「GOODTHINKER/好考者」。

B 用語は何か語源的な原則に基づいて構築されたものではなかった。それを作り上げたあらゆる単語は、発話のどんな部分でもかまわず、どんな順番でそれを並べ、どんな形で切り刻んでもいいので、発音しやすく、同時にそれがどこから派生したのかが示せればよかった。たとえば「CRIMETHINK/罪考」(思考犯罪)では、「THINK/考」は二番目にくるが、「THINKPOL/考察」(思考警察)ではそれが最初に来ており、さらに二

つ目の用語「POLICE/警察」は二音節目を失っている。語呂の良さを確保するのがきわめてむずかしいため、不規則変化は A 語彙より B 語彙のほうがよく見られた。たとえば「MINITRUE/真省」「MINIPAX/平省」「MINILUV/愛省」の形容詞形は、それぞれ「MINITRUTHFUL/真省的」「MINIPEACEFUL/平省的」「MINILOVELY/愛省的」となった。これは単に「-TRUEFUL」「-PAXFUL」「-LOVEFUL」がちょっと発音しにくいからというだけの理由であった。だが原則としてすべての B 用語は変形するし、その変形はすべて完全に同じ規則に従っていた。

B 用語の一部はきわめて微妙な意味を持っており、言語を全体として習得していない人物にはほとんど理解不能となっていた。たとえば『タイムズ』巻頭記事の「OLDTHINKERS UNBELLYFEEL INGSOC/旧考者、英社が腹落ちず」という文を考えよう。この一文をオールドスピークでできる限り手短かに書き直すなら「革命前に思想が形成された者たちはイギリス社会主義国の原理について完全な情動的理解はできない」となる。だがこれは正確な翻訳ではない。そもそも、いま引用したニュースピーク文の完全な意味を把握するには、「INGSOC/英社」が何を意味するかについて明確な考えがなくてはならない。さらに英社主義に完全に根差した人物でなければ、「BELLYFEEL/腹落ち」なる単語の全容を理解できない。この用語は、今日では想像しづらい、盲目的で熱烈な受け入れを意味したのである。あるいは「OLDTHINK/旧考」という単語は、邪悪さと大半の概念と分かちがたく結びついていて、その意味の全容も把握できない。だが一部のニュースピーク用語(OLDTHINK/旧考もその一つ)の特別な機能は、意味を表現するよりはむしろ、それを破壊することなのだ。こうした単語は、必然的に数は少ないが、その意味が極度に拡張され、やがてその中に山ほどの単語の意味が含められるようになる。それらが単一の包括的な用語で十分にカバーできるようになったら、元の言葉は捨て去って忘れてかまわないのだ。『ニュースピーク辞典』編纂者が直面する最大の困難は、新語を発明することではなく、発明した言葉が、確実にその意図した通りの意味を持つようにすることなのだ。つまり、その言葉の存在により、どの範囲の単語がキャンセルできたかを明確にするということだった。

すでに「FREE/自由」の例で見たように、かつては逸脱的な意味を持っていた単語も、ときには利便性のために温存されたが、そのときにも望ましからぬ意味は排出されねばならなかった。荣誉、正義、道德、国際主義、民主主義、科学、宗教といった言葉はあっさり存在しなくなった。少数の包括的なことばがそれらをカバーし、カバーすることでそうした言葉を排してしまっただけでなく、自由や平等の概念を中心にまとめられる単語はすべて、「CRIMETHINK/罪考」という単一の単語に含まれ、客観性は合理主義の概念を中心とした用語群は、「OLDTHINK/旧考」という一語に包含された。それ以上の厳密さは危険だっただろう。党员に必要とされたのは、古代ヘブライ人と同じような考え方だったのである。古代ヘブライ人は、自分以外のあらゆる民族が「偽の神」を崇拜しているのだと知っており、それ以外のことはほぼ何も知らなかった。そうした神々が、バール、オシリス、モロク、アスタロトなどと呼ばれていたことは知る必要がなかった。おそらく、そうしたものをなるべく知らないほうが、彼の正統性にとっては好都合だっただろう。エホバとエホバの十戒は知っていた。したがって、他の名前や他の属性を持つ神々はすべて偽神だということを知っていた。同様に、党员は何が正しい行動であるかを知っており、極度にあいまいな漠然とした用語で、そこからどのような逸脱があり得るかも知ってい

た。たとえば党員の性生活は、ニュースピーク語二つ、SEXCRIME/性罪 (性的不道徳) と GOODSEX/好性 (貞節) で完全に統制されていた。性罪は、なんであれあらゆる性的によからぬ行為をすべてカバーしている。姦淫、不倫、同性愛などの倒錯すべてがここに含まれ、さらには通常の性交でも性交自体のために行われるものはここに含まれた。それらを個別に羅列する必要はなかった。というのもすべて等しく有罪であり、原則としてすべて死罪だったからである。科学技術用語を構成する C 語彙では、特定の性的逸脱に専門的な名前を与える必要があったかもしれないが、一般市民はそんなものに用はなかった。かれは好性の意味を知っていた——これは男と妻の間の、子どもを作るためだけに行われる通常の性交であり、女性側に肉体的快樂はない。その他すべては性罪である。ニュースピークにおいては、それがまさに逸脱だという認識以上にその逸脱的な考えを進めることはほとんどできなかった。そこから先で必要な言葉は存在しなかった。

B 語彙の用語は一つとしてイデオロギー的に中立ではなかった。その多くは婉曲表現だった。たとえば「JOYCAMP/歓容所」(強制労働キャンプ)、「MINPAX/平省」(平和省つまりは戦争省) は、字面とはほぼ正反対の意味を持っていた。その一方で一部の用語は、オセアニア社会の実情について、率直かつ侮蔑的な理解を示していた。その一例が「PROLEFEED/プロ餌」である。これは党が大衆に施してやる、ゴミクズじみた娯楽とインチキなニュースを意味する。また一部の単語はどっちつかずであり、党に適用されたら「よい」という意味合いを持ち、敵に使われたら「悪い」という意味合いを持つ。だがそれに加えて、一見するとただの短縮形にしか見えない単語で、そのイデオロギー的な色彩は、その意味からではなく構造からもたらされるものが大量にあった。

どんなものであれ、政治的な意味を持つ、あるいは持ちかねないものはすべて、ねじこめる限り B 語彙に押し込まれた。あらゆる組織名や団体名、ドクトリン、国、機関、公共建築は、例外なくお馴染みの形に切り詰められた。つまり、最小限の音節で発音しやすく、派生元の単語を保った一語に変えられたのだ。たとえば真実省では、ウィンストン・スミスが働いていた記録部は「RECDEP/録部」、創作部は「FICDEP/創部」、テレビ番組部は「TELEDEP/テレ部」といった具合だった。これは単に時間節約のために行われたのではなかった。二十世紀の最初の数十年ですら、畳まれた用語やフレーズは、政治言語の特徴の一つではあった。そしてこの種の短縮形を使う傾向は、全体主義諸国や全体主義組織で最も顕著であることが指摘されていた。そうした例としては、ナチス、ゲシュタポ、コミンテルン、イプレコール、アジトプロブなどがある。当初このやり方は言わば直感的に採用されていたが、ニュースピークではこれは意識的な目的を持って使われていた。このように名前を短縮することで、そうしない場合にそれにつきまとう連想のほとんどが切り捨てられて、その意味がせばめられ、微妙に改編されるものと考えられた。たとえば共産主義インターナショナルという用語は、普遍的な人類の友愛、赤い旗、バリケード、カール・マルクス、パリ・コミューンといった複合的なイメージを想起させる。これに対して、コミンテルンという言葉は、単に緊密にまとまった組織と、明確に定義されたドクトリン体験を示唆するだけとなる。椅子やテーブルと同じくらいすぐに認識できて、目的も限られたものを指す用語となる。コミンテルンは、何も考えずに口走れる用語だが、共産主義インターナショナルという用語は、一瞬なりとも考えをめぐらさずにはいられないものなのである。同様に、「MINITRUE/真省」といった言葉が想起させる連想は、「MINISTRY of TRUTH/真実省」による想起よりも少ないし、統制しやすい。可能な限りすべてを短縮するという習慣だけでなく、あらゆる言葉を発音しやすくするため

に、極端とすら言えるほどの注意が払われたのは、これが理由なのであった。

ニュースピークでは語呂の良さが意味の厳密性以外のあらゆる配慮を上回るものとなっていた。必要とあらば文法の厳密性は常に語呂の良さの犠牲となった。そしてそれはきわめて正当なことだった。というのも、何より政治的な狙いに照らして必要とされたのは、誤解の余地のない意味を持つ、簡潔に切断された用語であり、すばやく発言できて、話者の心に最低限の反響しか残さないものだったからである。B 語彙の用語は、そのほとんどがきわめて似通っているという事実により、なおさら力を増した。—「GOODTHINK/好考」「MINIPAX/平省」、「PROLEFEED/プロ餌」、「SEXCRIME/性罪」、「JOYCAMP/歓容所」、「INGSOC/英社」、「BELLYFEEL/腹落ち」、「THINKPOL/考察」といった無数の用語—は二、三音節の単語であり、アクセントは最初の音節と最後の音節で同じとなっていた。これを使うことで、ギャアギャアした発話が奨励されることになり、スタッカートでありながら単調に聞こえる。そしてまさにそれが狙いなのだ。意図は発話、特にイデオロギー的でない主題についての発話を中立的にして、できる限り意識とは独立にすることなのであった。日常生活のためには、確かにときどきは発言する前に考えることが必要となったのはまちがいないが、政治的、倫理的な判断を求められた党员は、機関銃が銃弾をぶちまけるように、正しい意見を自動的にぶちまけられねばならなかった。そうするように訓練で仕向けられ、そして言語はほぼ失敗しようがない道具を提供し、英社主義の精神に従って激しい音とある種の意図的な醜さを持つ語呂の支援により、そのプロセスがさらに推し進められたのであった。

また、使える単語がきわめて少ないという事実もそれを支援した。私たちの英語に比べれば、ニュースピークの語彙はきわめてわずかであり、それを減らす新しい手法が絶えず考案されていた。実際、ニュースピークは語彙が毎年拡大するどころか縮小するという点で、他のほぼあらゆる言語とちがっていた。言葉が減るたびに一步前進となった。というのも選択の余地が狭まれば、それだけ考えようという誘惑も小さくなるからだ。最終的には、脳の高次中枢がまったく関与することなしに、声帯からきちんとした発話が行えるようにしたいというのが望みだった。この狙いはニュースピーク語「DUCKSPEAK/アヒル話」(アヒルのようにガアガア鳴くこと)で率直に認知されていた。B 語彙の他の各種用語と同様に、「DUCKSPEAK/アヒル話」の意味はどっちつかずであった。そこでガアガアと発せられる意見が正統なものであれば、これは文句なしの賞賛であり、『タイムズ』が党の演説家のだれかを「DOUBLEPLUSGOOD DUCKSPEAKER/超々好アヒル話者」と呼ぶときには、これは温かく重要な賛辞を述べていたのである。

C 語彙

C 語彙は他の二つに対する補助的なものであり、科学技術用語だけで構成されていた。これらは今日使われている科学用語に似ており、同じ語源から構築されていたが、それを硬直した形で定義し、望ましからぬ意味をはぎ取るための通常の配慮は行われていた。他の二種類の語彙で見られたのと同じ文法規則に従っていた。C 用語のうち、日常会話や政治発言で流通するものはほとんどなかった。どんな科学労働者でも技術者でも、必要な用語はすべて、自分の専門分野のために作られた用語表から見つけられたが、他の用語表に登場する用語など、ごくわずか以上に知っていることはほとんどなかった。すべての用語表に共通することばはきわめて少なく、どの分野であれ、科学の機能を心の習慣や思考様

式として表現する語彙はなかった。そもそも「科学」をあらわす用語はなかった。それが表現しそうな意味はすべて、「INGSOC/英社」という言葉で十分にカバーされていたからである。

これまでの記述から、ニュースピークでは逸脱意見の表明は、きわめて低次のものを越えたとほぼ不可能に近いことがわかるだろう。もちろんきわめて粗野な邪説を口走することはできた。一種の罵倒のようなものは可能だった。たとえば「ビッグ・ブラザーは非好だ」と言うことはできた。だがこの発言は、正統化された耳には単に自明の不条理としか聞こえないし、理性的な議論で裏付けられるものではなかった。なぜなら、それに必要な言葉がなかったからである。英社主義に敵対的な思想は、漠然とした言葉のない形で抱けるだけであり、それを表現するにはきわめて漠然とした用語しか使えない。そうした用語は逸脱思想の集合を大量にまとめて糾弾するものであり、しかもそれに際してそうした逸脱思想を定義はしなかったのである。それどころか、ニュースピークを非正統的な目的で使うためには、単語の一部を非正統的にオールドスピークに訳し戻すしかなかった。たとえば「あらゆる人は平等である」というのはニュースピークで可能な文ではあるが、それは単に「あらゆる人は赤毛である」というのがオールドスピークで、文としては可能だということと同じ意味においてでしかない。文法的なまちがいはないが、露骨な不真実を含んでいる——つまりあらゆる人は同じ身長、体重、強さだ、と言っていることになるのだった。政治的平等性の概念はもはや存在せず、それに伴いこの二次的な意味は、「平等」ということばから排出されてしまっていた。まだオールドスピークが通常のコミュニケーション手段であった1984年には、ニュースピーク用語を使うと元の意味を思い出しかねないという危険が理論的には存在した。実際には、二重思考をしっかりと身につけた人物であれば、そんなことは容易に回避できたが、一、二世代もすればそうした逆戻りなど、可能性さえも消え去っていたはずだ。ニュースピークを唯一の言語として育った人物は、平等というのが「政治的な平等性」という二次的な意味を持っていたことも、自由というのがかつては「知的自由」を意味したなどということも知らなかっただろう。それはチェスについて聞いたことがない人物が「クイーン」だの「ルーク」だのに伴う二次的な意味について知りようがないのと同じである。その人物が犯しようもない犯罪や誤りが大量に存在することになる。そもそもそうした犯罪などに名前が無く、したがってその人物にはそれが思いもよらないから、ということである。そして時間がたつにつれて、ニュースピークを特徴づける性質がますます強調されることが予想されていた——その単語がますます減り、その意味はますます硬直し、それを不適切な用途で使う可能性は常に減り続けるというわけなのだった。

ひとたびオールドスピークが全面的に克服されたら、過去との最後のつながりが断ち切られることになっただろう。歴史はすでに書き直されていたが、検閲が不完全なため、過去の文献の断片があちこちに生き残っており、オールドスピークの知識を保持していれば、それを読むことも可能だった。将来的にはそうした断片は、たまたま生き残ったとしても、理解不能で翻訳不能となる。何か技術プロセスやきわめて単純な日常行為や、もともと正統的な傾向を持つもの（ニュースピーク的に言えばGOODTHINKFUL/好学的）でもない限り、オールドスピークのどんな一節でもニュースピークに翻訳するのは不可能となる。現実的には、これはつまり1960年頃以前に書かれた本はすべて、全訳が不可能だったということである。革命前の文献は、イデオロギー的翻訳しかできない——つまり

言語だけでなく意味も変えねばならない。たとえばアメリカ独立宣言の、次の有名な一節を例にとろう。

われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられているということ。こうした権利を確保するために、人々の間に政府が樹立され、政府は統治される者の合意に基づいて正当な権力を得る。そして、いかなる形態の政府であれ、政府がこれらの目的に反するようになったときには、人民には政府を改造または廃止し、新たな政府を樹立し、人民の安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる原理をその基盤とし、人民の安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる形の権力を組織する権利を有するという、こと、である。

原文の意味を維持しつつこれをニュースピーク化するのはまったく不可能であっただろう。それに最も近いこととしてできるのは、この下りすべてを「CRIMETHINK/罪考」の一語に飲み込んでしまうことだ。この全訳はイデオロギー的翻訳しかあり得ず、そうなればジェファソンの言葉は絶対政府の賞賛に変えられてしまう。

過去の文学の相当部分は、実際にすでにこのような形で変換されつつあった。名声を考慮して、一部の歴史的人物の記憶を温存するのは望ましいこととされたが、同時にその業績は英社主義哲学と整合するものにする必要があった。シェイクスピア、ミルトン、スウィフト、バイロン、ディケンズといった人々は、このため翻訳が進んでいた。この作業が完了すれば、その原著作は、過去の文学で生き残った他のすべてと同様に破壊される。こうした翻訳は緩慢で困難な仕事であり、二十一世紀の最初の十年また二十年までは終わらないだろうと予想されていた。また同じ形で処理されるべき、単純で機能的な文献も大量にあった——不可欠な技術マニュアルなどだ。ニュースピークの最終的な採用が2050年という実に遅い時期に設定されたのは、こうした翻訳という準備作業の時間をとるためなのだった。

訳者あとがき

本書は George Orwell *Nineteen Eighty Four* (1948) の全訳である。翻訳にあたっては、書籍版、オンラインのフリー文書、その他そのとき手元にあった様々な版を適当に使っている。実際にこの本には、特に版ごとに顕著な異同があるわけではなく、イギリス版とアメリカ版とで、英語と米語の差に基づく細かい差がある程度らしい (オーウェル自身は、その差がえらくカンに障ったらしいが)。そうしたものは、翻訳ではどのみち表に出ないので、訳にことさら影響することはないはずだ。もちろん、何かゴソッとぬけている部分や、絶対ちがうという点に気がつかれたら、是非ご一報いただきたい。

本書の意義については、今さら言うべきにも非ず。全体主義監視社会の暗黒未来を描いた、傑作ディストピア小説だ。一応、著者のなんたるかと本書の位置づけについては、2003 年版にトマス・ピンチョンが書いた序文の冒頭部分をそのまま丸写ししておこう。

ジョージ・オーウェルは、1903 年 6 月 25 日にエリック・アーサー・ブレアとして、ネパール国境近くのベンガルにあり、きわめて生産的なアヘン地帯の真ん中の小さな町モティハリで生まれた。父親はそこで、イギリス阿片局の官吏として働いており、その育成者を逮捕するのではなく、その製品の品質管理を監督していた。この製品をイギリスは長きにわたり独占してきたのだ。一年後に若きエリックは、母親と妹と共にイギリスに戻り、1922 年まで生まれた地域には戻らなかった。そのときにはインド帝国警察の下士官としてビルマに赴いたのだった。この仕事は高報酬だったが、1927 年に休暇で故国に戻ると、父親が大いにがっかりしたことが、その仕事を投げ打つことにした。というのも彼が人生でやりたいのは作家になることだったからだ。そして、彼はそれを実現させた。1933 年に処女作『パリ・ロンドン放浪記』で、彼はジョージ・オーウェルという筆名を採用し、その後はこの名前で知られるようになる。オーウェルは、イギリスを放浪するときに彼が使った名前の一つで、サフオークにある同名の川からとったのかもしれない。

『1984 年』はオーウェルの最後の本だった——それが刊行された 1949 年までに、彼はすでに 12 冊を刊行しており、そこにはきわめて評価が高く人気のあった『動物農場』も含まれていた。1946 年の夏に書かれた「なぜ私は書くのか」というエッセイで彼はこう回想している。「『動物農場』は私が、完全に自分のやっていることを自覚しつつ、政治的な狙いと芸術的な狙いを一つの全体にまとめようとした最初の本だった。7 年にわたり私は長編小説を書いていないが、かなり近いうちに書くつもりだ。これは失敗作になるはずだ。あらゆる本は失敗作なのだが、自分が書きたいのがどんな本か、私はかなり明瞭にわかっているのだ」。その後間もなく、彼は『1984 年』に取りかかっていた。

オーウェルはもちろん、この作家デビュー頃からずっと、社会下層の苦しみに注目してきた人物であり、社会主義に深く傾倒した。そしてスペイン内戦にも参加したのだが、そこでスターリン配下の「正統」社会主義者たちが、トロツキー系の社会主義者たちを弾圧する様子をまのあたりにし、その後もスターリン社会主義の蛮行が次々にあらわになっても見て見ぬふりをするどころか、あれこれ擁護論の詭弁まで弄しつつ、一方で自国政府に対しては勇ましくふるまってみせる、西側の「社会主義者」(特にイギリス労働党)に対して激しい批判を続けている。有名な『動物農場』も、そして本書も、そうした反ソ・反スターリン的な意図は充分に持つ。同時に、もっと普遍的に、社会主義そのもの、ひいては当時/現代の全世界のあり方と将来に対する強い批判と懸念の書でもある。

いつか、これを商業出版したいという奇妙な出版社が登場すれば、本書が持つ現代的な意義についてはあれこれ書いてはみるけれど、ここではまあいいか。

翻訳について

さて本書は当然ながら既訳がある。古いものの中で、もっとも広く普及していたのは、早川書房から出ていた新庄哲夫訳だろう。ぼくが最初に読んだのもこれだった。ちょっと古くさいところがあるのは仕方ないし、ビッグ・ブラザーが「偉大なる兄弟」になっているのはまあ仕方ない。でも特に不満もなかったし、大きな問題があるとは思わない。

その後、ネットの普及とともにフリー版を出そうと思って手をつけていたが、やがて早川書房から、高橋和久の新訳版が出た。これは特に読まなかったが、新訳版なんだから、いろいろ改善されただろうと思っていただけだが……

高橋和久の翻訳の常として、漢字の多い(そしてルビの多い)、固い訳になっていて、雰囲気としては新庄訳より後退している印象さえ受けた。せっかく新訳するなら、もうちょっとなんとかしたいところ。また、著作権が切れたからだろうか、角川から田内志文の翻訳が2021年に出ている。フラットな翻訳ではあるが、あまりにフラットすぎて、プロレの訛りなどを完全に無視。やはり、それはちょっとオーウェルの意図を無視しすぎではないだろうか? 訛りを変な関西弁にしてみたりするのもアレではあるし、全部は出せないのだけれど(特に歌でHを発音しないコックニー訛りを表現するのは無理!)原文にある工夫の存在くらいは匂わせたいところ。

またいずれも、ジュリアちゃんの話し方が、完全な女性役割語のものすごく上品でいてねいなものになっていて、ウィンストンと会ったとき「ごきげんよう」とあいさつしないのが不思議なくらいになっている。かなり下品で粗野な話し方をすると文中で書いてあるのに。本書では、なるべく周辺の口の悪い知り合い女性の口の利き方を参考にしてみた。役割語がなくてだれの発言か少しわかりにくくなる部分もあるうえ、たぶんなじめない人もいるだろうね。だがフリー文書なので、そこを自分なりに直して別バージョンを作っていただくことも可能ではある。

さらに、ニュースピークとかの処理もいろいろある。が、個人的に特にこれまでの訳で気になったのは、悲しいところ、優しいところのちょっとしたヒントの処理なのだ。その代表が、何度か繰り返される以下の詩だ。

オレンジにレモン、とセントクレメントの鐘
お代は三ファージング、とセントマーチンズの鐘

お支払いはいつ、とオールドベイリーの鐘
 お金持ちになったら、とショーディッチの鐘

この二行目、「お代は三ファージング」の部分は、「You owe me three farthings」というのが原文で、これまでの翻訳はどれも「お前に3ファージングの貸しがある」というような訳になっている。だがそれだとなんだかいきなり借金取りが追いかけてきたような、おっかない感じだ。なんでオレンジやレモンがいきなり借金取りの話に？ 詩としても脈絡がない。

この詩自体は、マザーグース的なもので、必ずしもその意味がはっきりしているわけではない。最後の、頭を切り落とす話から、ずいぶん残酷な事件の比喻という説もある。だから、まあいきなり借金取りが来てもしけないという法はない。が、ここの部分のやりとりはもう少し優しいものと考えたほうがいいと思う。

実は「you owe me xxxx」というのは、買い物の常套句なのだ。スーパーマーケットでは出ないけれど、そこらのお店にいったら「xxxxになります」という代わりに「you owe me xxxx」と言われる。特に子どもがお使いで行くと、店のおじさんによく言われたものだ。「3ファージングちょうだいねー」くらいの感じだろうか。すると最初の一行は、オレンジとレモンくださいな、といった雰囲気になる可能性が高い。庶民が普通にオレンジやレモンを買って、それが手元不如意で、ああお金持ちになったらいいな、という空想につながり、それがロンドン中の鐘の音として響いているという、庶民の日常と生活のちょっとした苦しさや淡い希望の詩、と解釈できるのだ(その後、「それっていつ?」「わかりません」という太いやりとりにはなるのだけれど)。そしてそれが、ウィンストンの満たされぬ思いと淡い希望と絡み合う。だからこそ、それはウィンストンの心に響くのだ。

どうせ翻訳では、そこまでの雰囲気は出ないのだけれど、でもその心は多少は汲んであげたいと思う。そうでないと、なぜウィンストンがこの詩に惹かれるのかも感じ取りにくくなってしまふ。他のところも、こうしたちょっとした郷愁みたいなのはなるべく活かすようにしてみた。

というわけで、フリーの翻訳ではあるけれど、既訳よりはかなり改善されているとは思ふ。こうした部分以外にも、理論的な解説となるゴールドスタインの本『寡頭制集産主義の理論と実践』や、補遺のニュースピークの原理の部分も、既訳よりはかなりわかりやすくしたつもりではある。ところで、『寡頭制集産主義』はもっとたくさん書かれていたらしく、本書で使われた部分はそこから抜粋したような話も聞く。残りの部分はどっかに残っていないのだろうか？ オーウェルが考えていた、不平等を維持しなければならない根本的な動機とは何なんだろうか？ オブライエンは第3部でそれを、「権力の自己目的化」と述べるが、ぼくから見るとそれは「なぜ？」にはまともに答えていない。上層階級の自己保身、というそれまでの部分の説明のほうはずっと「なぜ？」に答えられているような気もする。さて本当に答はあるのだろうか？ (実はオーウェル自身も思いついておらず、なんか思わせぶりに終わっただけ、という気もするが……)

おまけ

この本は、書いた年(風刺の対象とした年)が1948年だったので最後の数字をひっくり返して『1984年』にしたのだ、という説をずっと昔にきかされて、特に疑うこともなくそ

れを信じていたが、どうもそうではないらしい。ペンギン版についたピーター・デヴィッドソンの説明によると、実際の草稿を検証すると、もともと『1980年』の予定で、病気のせいもありそれが長引いて『1982年』になって、仕上げたときに『1984年』にしたそうなの。

へえ、そうなんだと思う一方で、なぜ執筆に時間がかかると題名の年を先送りしなければいけないのかはよくわからない。刊行からXX年先に題名を設定したい、というふうに考えたということか？ まともな執筆開始は1946年だったとのこと。これで1980年だと34年先。キリが悪いなあ。1980年に意味はあったのかな？ ご存じの方がいれば教えてほしい。

さて冒頭で引用したトマス・ピンチョンの序文は、ハヤカワ文庫の新訳版に収録されている (Kindle版には含まれていないのでご注意ください！)*2。だがそれ自体は、シャープさに欠けて、さほどの慧眼は見られない。ただそこで唯一おもしろい指摘がある。本書は、完全に壊れたウィンストン・スミスとジュリアで終わる、このうえなく暗い話ではあるが、その後に「補遺：ニュースピークの原理」という論説がついている。なんだか不思議な、蛇足めいた印象さえある (出回っているフリーの本などでは、これがあることにさえ気がつかずに章をわけずそのまま続けてしまったり、ひどい場合にはこのところを削除してしまったりしたものさえある)。だがピンチョンは、この最後の論説が完全に過去形になっていることを指摘し、この後のどこかでオセアニアとビッグ・ブラザーの監視社会が滅び、ニュースピークは過去のものとなり、それについて自由に語れる社会が実現する、という希望がここにあるのでは、と述べる。

これはなかなか面白い指摘ではある。どうだろうか。もちろん、執筆当時の視点からオーウェルが俯瞰して書いているだけ、とも読める。が、小説の読み方は人それぞれなので、読む人が自分なりに様々な解釈をしてくれれば、訳者としては幸甚。ピンチョンの読みも可能にするために、この部分はちょっと過去形に気がついた訳にしている。それがどこまで成功しているかどうかは、仕上げをごろうじろ。では。

2023年11月 デン・ハーグにて
山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)

*2 おや、なぜかこんなところに翻訳があるようだ。 <https://cruel.hatenablog.com/entry/2023/11/14/043834> 不思議だなー。